（5） 東（ひがし） 山（やま） 遺 跡

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… 137
Ⅱ　調査の方法 …… 141
Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 142
　1　基本層位 …… 142
　2　竪穴住居跡 …… 143
　3　土器溜出土の遺物 …… 151
　4　堆積層出土の遺物 …… 161
Ⅳ　考　　察 …… 166
　1　土器の分類と年代 …… 166
　2　出土土器の年代と問題点 …… 169
　3　竪穴住居跡の年代と構造 …… 171
Ⅴ　まとめ …… 172

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵王町矢附字東山
遺 跡 記 号：ＨＹ（宮城県遺跡地名表登載番号：05039）
調 査 期 間：昭和45年8月25日～9月15日
調 査 面 積：約2,500㎡
発 掘 面 積：約594㎡
調　査　員：社会教育課
　　志間泰治　藤沼邦彦　白鳥良一
調査参加者：東北大学考古学研究室　福田友之　岡村道雄　岩渕康治　小林博明
　　宮城教育大学考古学研究会　鈴木惣之助　太田昭夫　土岐山武
　　東北学院大学　斎藤誠一

Ⅰ．位置と環境

１．自然的環境

東山遺跡は刈田郡蔵王町矢附字向山に所在する。町役場の東方約２㎞の地点である。

蔵王町は宮城県の南西部にあたり、標高 1841ｍの蔵王山の東麓に位置している。そのため、町は大半が山地や丘陵で占められており、低地は比較的せまい地域に限られる地勢のなかにある。

町の地形を概観すると、西部は蔵王山を中心とする奥羽山地帯が南北にのびており、中央部および北部は奥羽山地から派生する高館丘陵が張り出している。この丘陵はまた町の東縁において南に細長く突き出しており、通称愛宕山丘陵と呼ばれ隣接する村田町との境をなしている。

高館丘陵は町の南部を東流する松川や東部を南流する薮川によって開析され、その流域には沖積低地が形成されている。このうち松川流域は全体に細長く、いわゆる谷底低地となっているのに対し、一方の薮川流域では沖積化が著しく盆地状の地形になっている。この薮川流域は通称円田盆地と呼ばれている。

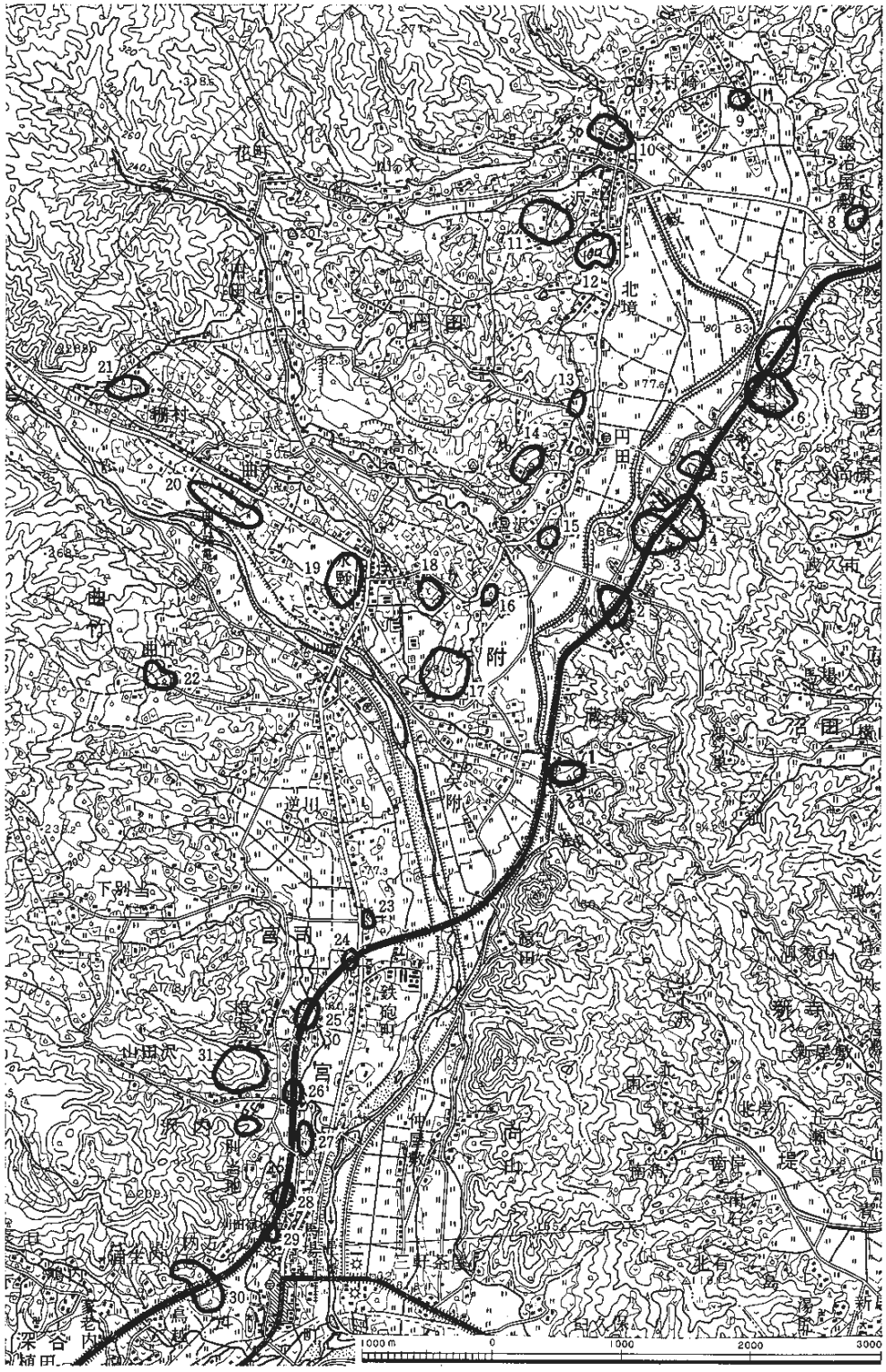
本遺跡は愛宕山丘陵より西に張り出した一小丘陵の南斜面からその下の円田盆地にかけての部分に立地している。円田盆地を中心にみるならば、盆地の出口付近に位置している。小丘陵は遺跡の背後の最高所で標高 89ｍとなっており、眼下にある沖積地との比高は約 15ｍである。

南斜面は 18～20°と比較的急角度で傾斜しており、本遺跡の地形的特徴をあらわしている。付近の地目は斜面の部分が果樹園、沖積地の部分は水田となっており、遺跡からは松川流域の沖積地をはさんで、古来「大刈田山」として人々の信仰をあつめた青麻山が眺望される（白石市：1979）。

２．歴史的環境

蔵王町では現在まで 170 ヶ所の遺跡が確認されている（宮城県教委：1981）。これらの遺跡の多くは松川流域や薮川流域の周辺に分布している。

町内で最古の遺跡は旧石器時代に遡る。ナイフ形石器を出土した持長地遺跡や二屋敷遺跡などのほか鉄砲町付近において彫刻刀形石器が発見された報告がある（白石市：1979）。縄文時代の遺跡には十文字遺跡、棚村遺跡、明神裏遺跡、鍛冶沢遺跡、二屋敷遺跡などがあり、このうち二屋敷遺跡からは竪穴住居跡や石組遺構が検出されている（林他：1971）。このような旧石器～縄文時代の遺跡は大半が松川の河岸段丘上に立地しており、比較的限定された分布状況を示している。



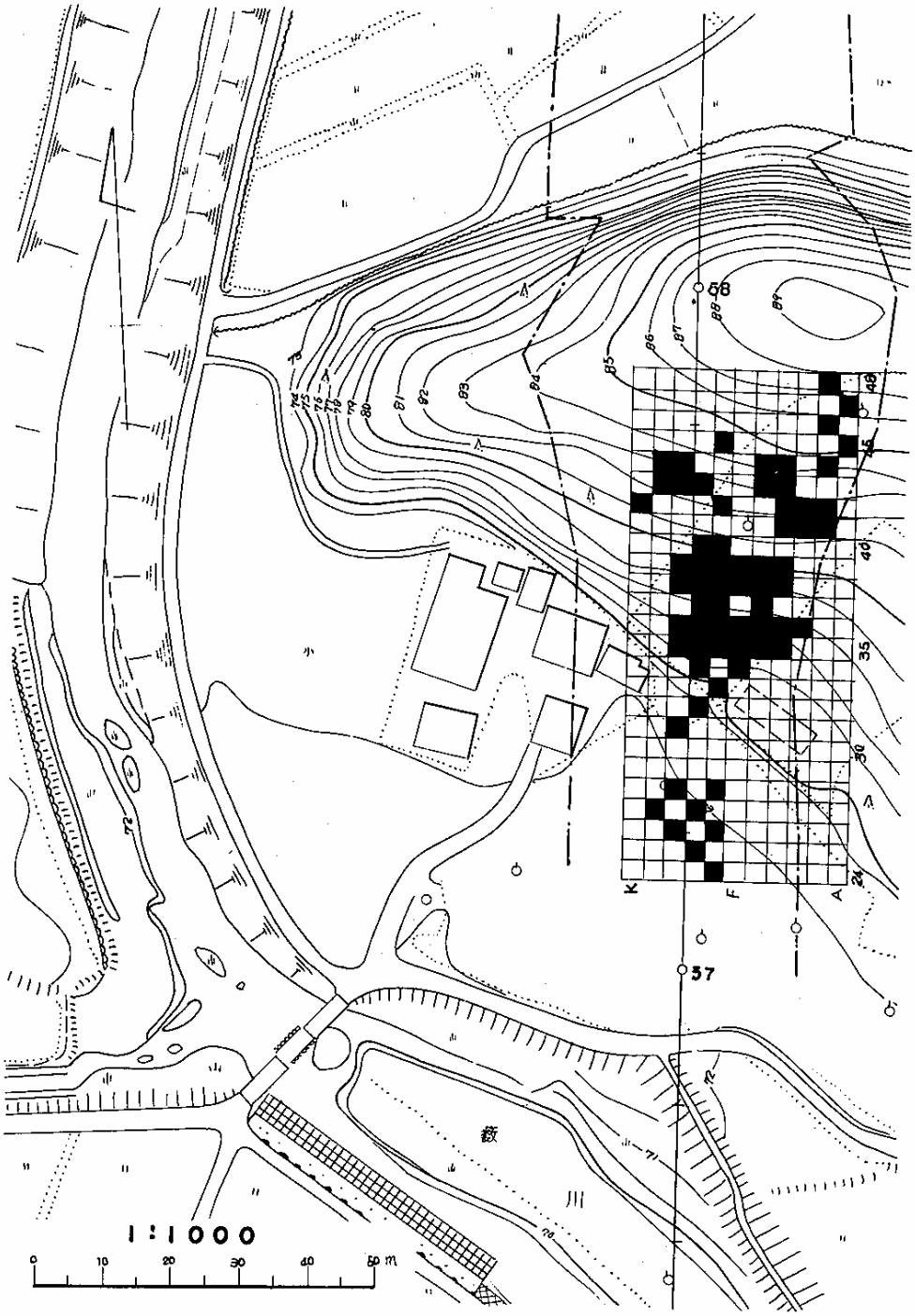
第１図　東山遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行1/5万「白石」を複製）

しかし弥生時代になると遺跡の立地は異ってくる。主な遺跡として「円田式」土器の標式遺跡である西裏遺跡のほか大山遺跡、天王遺跡、中沢遺跡、清水遺跡、蟹沢遺跡、赤鬼上遺跡などがあるが、これらは薮川に面した丘陵の裾部に立地しており、前時代とは対称的に薮川流域に限定されてくる。このような現象については農耕がすでに生産手段として取り入れられたとみられる弥生時代においては沖積化の著しい薮川流域が松川流域に比べ耕作に適した地域であったことによるものだろうと考えられる。このことは農耕がさらに定着化してくる次の古墳時代の遺跡の分布状況からもうかがえる。すなわち大橋遺跡、大山遺跡、塩沢北遺跡、伊原沢下遺跡のほか宋膳堂古墳、八幡山古墳などの墳墓が前時代と同じく薮川周辺の丘陵上に立地しているのである。この地域が当時の生産活動と密接な関係にあったためと理解されよう。なお大橋遺跡や塩沢北遺跡からは竪穴住居跡が検出され古墳時代の人々の生活の一端が明らかにされている（太田：1980、小川：1980）。

奈良～平安時代になると遺跡数は大幅に増加し、分布地域は薮川流域に加え松川流域にも広がる傾向をみせる。主なものとして松川流域周辺では二屋敷遺跡、馬場北遺跡、下原田遺跡などがあり、薮川流域周辺では赤鬼上遺跡、原遺跡、小高遺跡、都遺跡などがある。このように遺跡数が増加し、分布地域が拡大した点については薮川流域において弥生時代以来の生産活動が進展するのに加え、新たに松川流域にも開発が及んだことが原因の一つとして考えられるのではなかろうか。また、刈田郡内では平安時代にはすでに刈田嶺神社が存在しており、同社は「延喜式」において〝名神大社〟として格付けされている。このようなかなりの勢力をもつ神社が当地に存在した背景には必然的にその基盤となる大規模な集落の存在が予想されるのであるが、このことと前述した遺跡の増加拡大現象とはかなり密接な関係にあるものと考えられ興味深い。

中世の遺跡には矢付館跡、諏訪館跡、平沢館跡、山家館跡、宮城館跡などの城館跡が多く、これらは主に低地を望む小丘陵上に立地している。また低地では持長地遺跡があり、当時の有力者の屋敷跡が検出されている。集落跡については現在のところ発見例がなく不明な点が多いが、本来城館跡や屋敷跡とは密接な関係にあると考えられることから、付近に数多く存在することは十分に予想される。

1. 東山遺跡　2. 大山遺跡　3. 塩沢北遺跡　4. 伊原沢下遺跡　5. 中沢遺跡
6. 大橋遺跡　7. 赤鬼上遺跡　8. 都遺跡　9. 原遺跡　10. 平沢館跡
11. 諏訪館跡　12. 小高遺跡　13. 清水遺跡　14. 八幡山古墳　15. 宋膳堂古墳
16. 蟹沢遺跡　17. 矢付館跡　18. 天王遺跡　19. 西裏遺跡　20. 十文字遺跡
21. 棚村遺跡　22. 鍛冶沢遺跡　23. 上原田遺跡　24. 下原田遺跡　25. 二屋敷遺跡
26. 持長寺遺跡　27. 長峰遺跡　28. 明神裏遺跡　29. 馬場北遺跡　30. 宮城館跡
31. 山家館跡



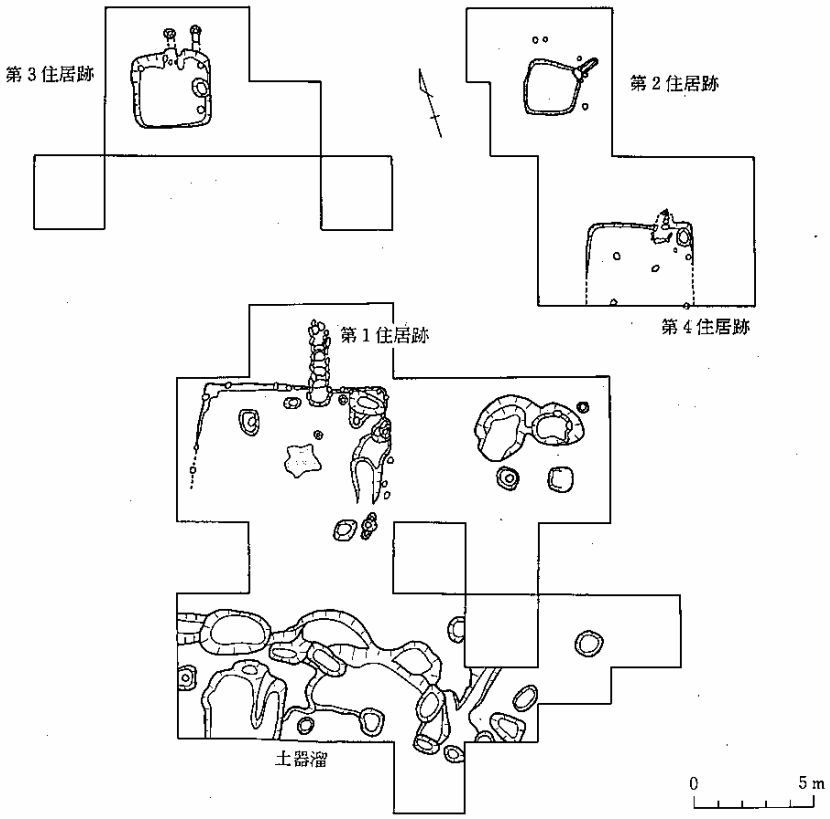
第２図　東山遺跡地形図

Ⅱ．調査の方法

東北自動車道の路線敷は本遺跡の立地する丘陵を横断しながら南北方向にのびている。調査は遺跡の線敷にかかる75×33mの部分を対象とし、そのうち594㎡を発掘した。調査期間は昭和45年8月25日～9月15日である。

調査区の設定は自動車道の中心杭を基準に行った。すなわちＳＴA57 とＳＴA58 を結ぶ線およびそれに直交する線を基準として３m単位のグリッドを設定した。グリッドは中心杭に沿った方向をアラビア数字で、直交する方向をアルファベットであらわし、その組み合せを名称とした。

発掘に際しては、３m単位のグリッドを随所に設定して遺構の存在を確認し、検出状況に応じて拡張を図った。遺構については精査終了後平板測量によって縮尺$^{1}/_{20}$の平面図を作成し、レベルを記入している。また調査区の基本層位を把握するために必要な部分では縮尺$^{1}/_{20}$の土層断面図を作成した。この他遺構の精査がほぼ終了した段階で写真撮影を行っている。



第３図　遺構配図

Ⅲ．発見された遺構と遺物

調査の結果、本遺跡では竪穴住居跡が４軒検出されており、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。

１．基本層位

調査区は丘陵の南斜面の部分と下の沖積地の部分に分かれており、堆積土はそれぞれが異っている。

斜面の部分では地表面から地山面までは 0.3～0.6mである。基本的に３枚の層からなっている。

第Ⅰ層（表土）は黒色土で、耕作等により著しく攪乱されている。層中からは縄文土器、土師器、須恵器が出土している。

第Ⅱ層は黒色土で、斜面のほぼ全域に堆積している。全体に砂っぽく部分的に褐色土が混入している。層中からは土師器、須恵器が出土している。

第Ⅲ層は黒褐色土で、住居跡が検出された部分を中心に堆積している。層中からは土師器、須恵器が出土している。

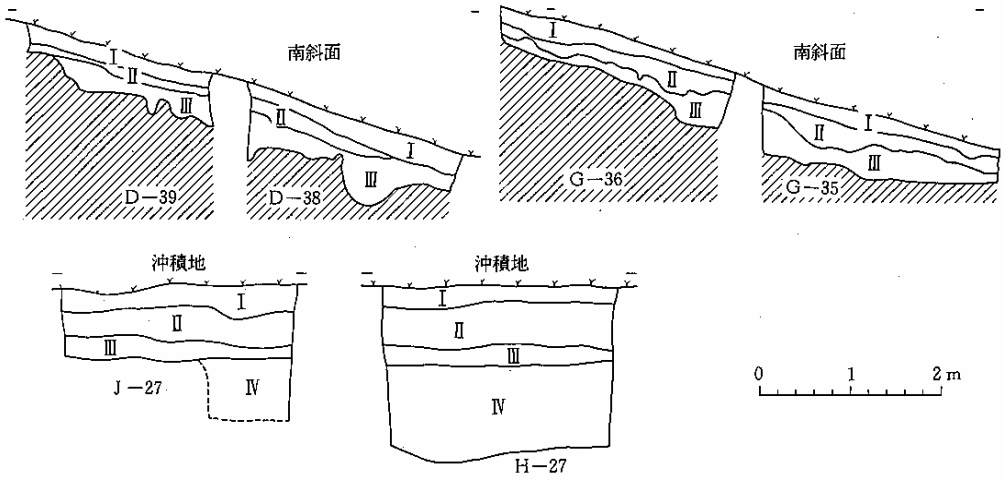
沖積地の部分では表土下約 2.0mの砂層まで掘り下げたが、その部分では基本的に４枚の層からなっている。４枚とも調査区のほぼ全域に分布する。

第Ⅰ層は褐色土で、水田耕作により攪乱されている。部分的に黄褐色土を含んでおり、層中からは土師器が少量出土している。

第Ⅱ層は黒色ないし黒褐色土である。遺物は含まない。

第Ⅲ層は黄褐色土でかなり砂っぽいが、かなり粘性を帯びる部分もある。遺物は含まない。

第Ⅳ層は灰色の砂層である。遺物は含まない。



第４図　基本層位

２．竪穴住居跡

第１住居跡

（位置・確認面）　Ｈ－39 区の地山面で確認された。

（平面形・規模）　住居の北半が残存したもので、残存形では方形を基調としている。規模は北辺で約 7.3ｍである。

（壁）　南辺および東辺・西辺の南半が不明である。壁高は最も高い北辺で約 40cm である。地山を壁としており、立ち上りは急角度である。

（床）　地山を床としている。床面の状況は中央部がかたくしまっているのに対し、周縁部ではやわらかくなっている。

（柱穴）　計 26 個のピットが検出されている。このうちピット１～13 は柱間隔が不規則であるが、壁に接しており、深さもほぼ一定していることから壁柱穴の可能性も考えられる。

（周溝）　北辺の西半から西辺の北端にかけて壁際をめぐる。幅は 15～20cm、深さは５～15cm である。

（カマド）　北壁中央のやや東寄りに付設されている。石組みのカマドで、燃焼部と煙道部からなっている。軸方向はＮ－20°－Ｅである。燃焼部は両側壁が長さ約 40cmの平たい河原石を立てて構築されており、規模は幅が約 80cm、奥行が約 60cmである。煙道部は幅約 70cm、長さ約 250cm の長方形の掘り方に、やはり長さ 30cm前後の平たい河原石を立て並べて構築されている。煙道部内面の幅は 20～30cmである。

（貯蔵穴状ピット）　住居跡の北東隅から検出されている。これはカマドの右脇に位置している。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が約 150cm、短軸が約 100cm、深さが約 45cm である。堆積土中に灰や木灰が含まれており、土師器や須恵器が出土している。

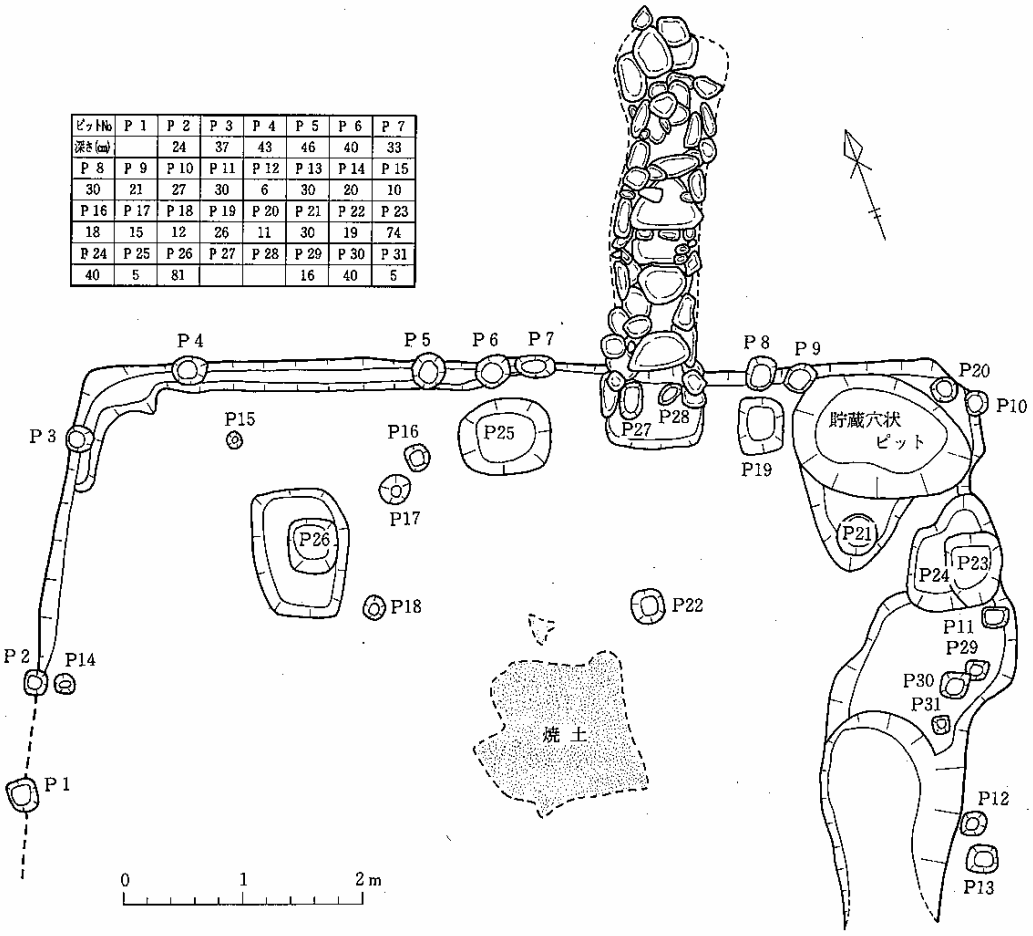
（出土遺物）　床面、貯蔵穴状ピット、住居跡堆積土から土師器や須恵器が出土している。このうち図示可能なのは以下の遺物である。

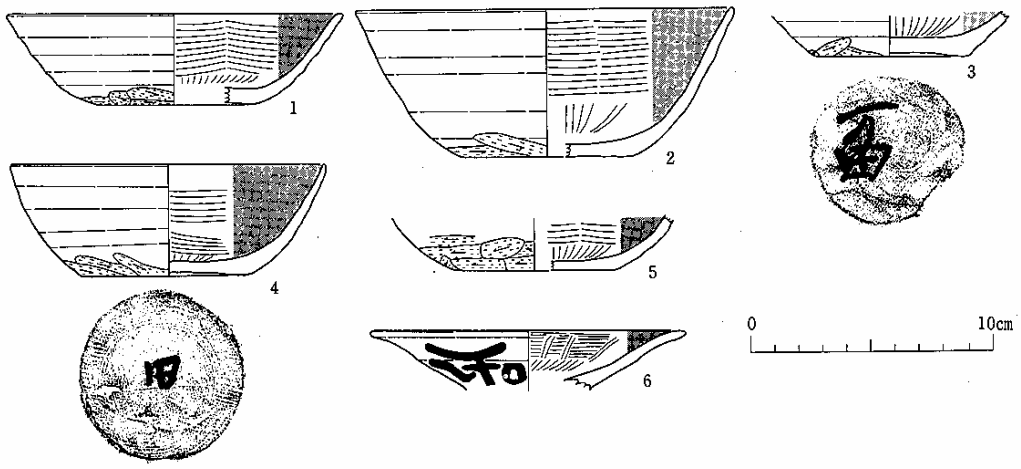
土師器

坏（第５図１～５）

製作に際しロクロを使用しているものである。いずれも手持ヘラケズリの再調整が施されるもので、それが１～３は体部下端から底部全面に、４は体部下端から底部周縁になされている。４は削り残された部分に回転糸切り痕が認められるが他は底部切り離し技法は不明である。器形はいずれも体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上っている。内面はヘラミガキ・黒色処理されており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横方向、底部は放射状になっている。３には「万田」、４には「田」、５には「万」の墨書がみられる。

ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
深さ(cm)		24	37	43	46	40	33
P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15
30	21	27	30	6	30	20	10
P 16	P 17	P 18	P 19	P 20	P 21	P 22	P 23
18	15	12	26	11	30	19	74
P 24	P 25	P 26	P 27	P 28	P 29	P 30	P 31
40	5	81			16	40	5





第５図　第１住居跡・出土遺物

高台付坏（第５図６）

底部から高台部にかけて欠損している。坏部は体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。なお体部には「坐」の墨書が倒位に記されている。

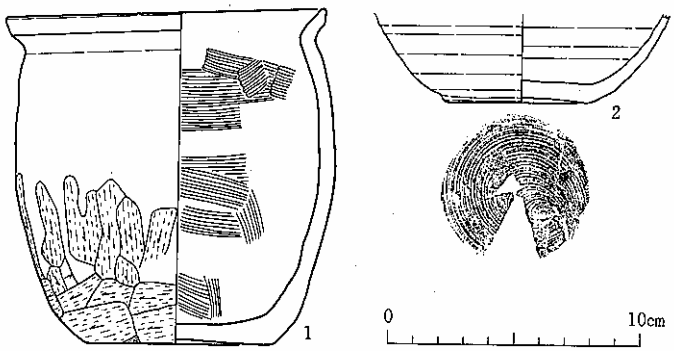
甕（第６図１）

製作に際しロクロを使用しているものである。小形の甕で体部はわずかにふくらみをもち頸部で屈曲し、口縁部は短く外傾する。最大径は体部にあるが、口径との差はわずかである。器面調整は口縁部が内外面ともロクロ調整されており、体部は外面が下半を中心にヘラケズリ、内面は上位が刷手目、下位がナデとなっている。

須恵器

坏（第６図２）

口縁部が欠損している。体部は丸味をもって立ち上るもので、底部に回転糸切り痕を残している。再調整は施されていない。色調は灰色を呈する。



番　号	器　種	出土地点	分類記号	登録番号
第5図1	土師器　坏	住居内堆積土	B Ⅰ	81
2	土師器　坏	床	B Ⅰ	79
3	土師器　坏	ピット内(No不明)	B Ⅰ	80
4	土師器　坏	ピット内(No不明)	B Ⅱ	76
5	土師器　坏	住居内堆積土	B Ⅰ	90
6	土師器高台付坏	ピット内(No不明)		93
第6図1	土師器　甕	床	B	104
2	須恵器　坏	住居内堆積土	D	148

第６図　第１住居跡出土遺物

第２住居跡

（位置・確認面）　Ｄ－43 区の地山面で確認された。

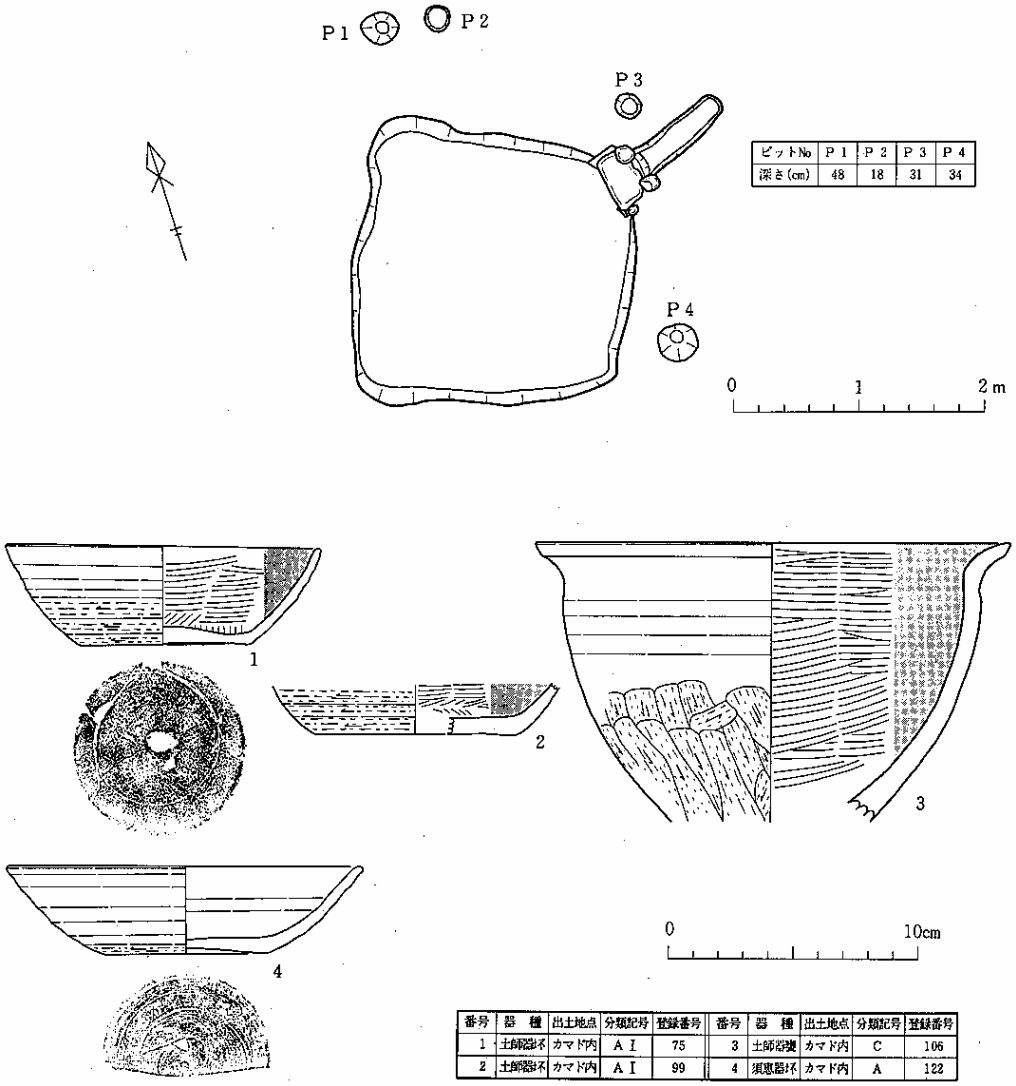
（平面形・規模）　やや不整な方形を呈する。規模は長軸が約 2.3m、短軸が 2.1mである。

（壁）　４辺とも残存しており、壁高は最も高い北壁で約 30cm である。地山を壁としており、立ち上りは急角度である。

（床）　地山を床としている。床面は全体にやわらかい。

（柱穴）　住居内からピットは検出されていない。住居外から４個のピットが検出されているが規則性がなく柱穴がどうか明らかでない。

（カマド）　住居跡の北東隅に付設されている。石組みのカマドで燃焼部と煙道部からなって



ピットNo	P1	P2	P3	P4
深さ(cm)	48	18	31	34

番号	器種	出土地点	分類記号	登録番号	番号	器種	出土地点	分類記号	登録番号
1	土師器杯	カマド内	A I	75	3	土師器甕	カマド内	C	106
2	土師器杯	カマド内	A I	99	4	須恵器杯	カマド内	A	122

第７図　第２住居跡・出土遺物

いる。軸方向はN－65°－Eで住居跡の辺とは約 45°の角度をなす。燃焼部は天井、側壁とも切り石で構築されており、規模は幅が約 50cm、奥行が約 35cmである。煙道部は石組みによるものではなく地山を掘り抜いたものである。燃焼部との境は高さ 18cmほどの段になっている。規模は長さが約 80cm、幅が約 25cmである。

（出土遺物）　床面や住居内堆積土から土師器や須恵器が少量出土している。このうち図化できたものは次の４点である。

土師器

坏（第７図１・２）

製作に際しロクロを使用しているものである。ともに体部下半から底部全面にかけて回転ヘラケズリの再調整が施されている。底部切り離し技法は不明である。器形は１が体部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上っている。２は体部上半が欠損しているため明らかではない。内面はヘラミガキ、黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけて横から斜め方向で底部では一定方向となっている。

甕（第７図３）

製作に際しロクロを使用しているものである。底部が欠損しているが鉢形を呈するものと思われる。体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部は短く外反する。外面はロクロ調整ののち体部下半にヘラケズリが施されており、内面はヘラミガキ、黒色処理がなされている。

須恵器

坏（第７図４）

体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上る。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリされており、底部の切り離し技法は不明である。色調は灰白色を呈する。

第３住居跡

（位置・確認面）　Ｊ－43 区の地山面で確認された。

（平面形・規模）　方形を呈する。規模は長軸が約 3.2m、短軸が約 3.0mである。

（壁）　４辺とも残存している。壁高は最も高い北壁で約 50㎝ である。地山を壁としており、立ち上りはゆるやかである。

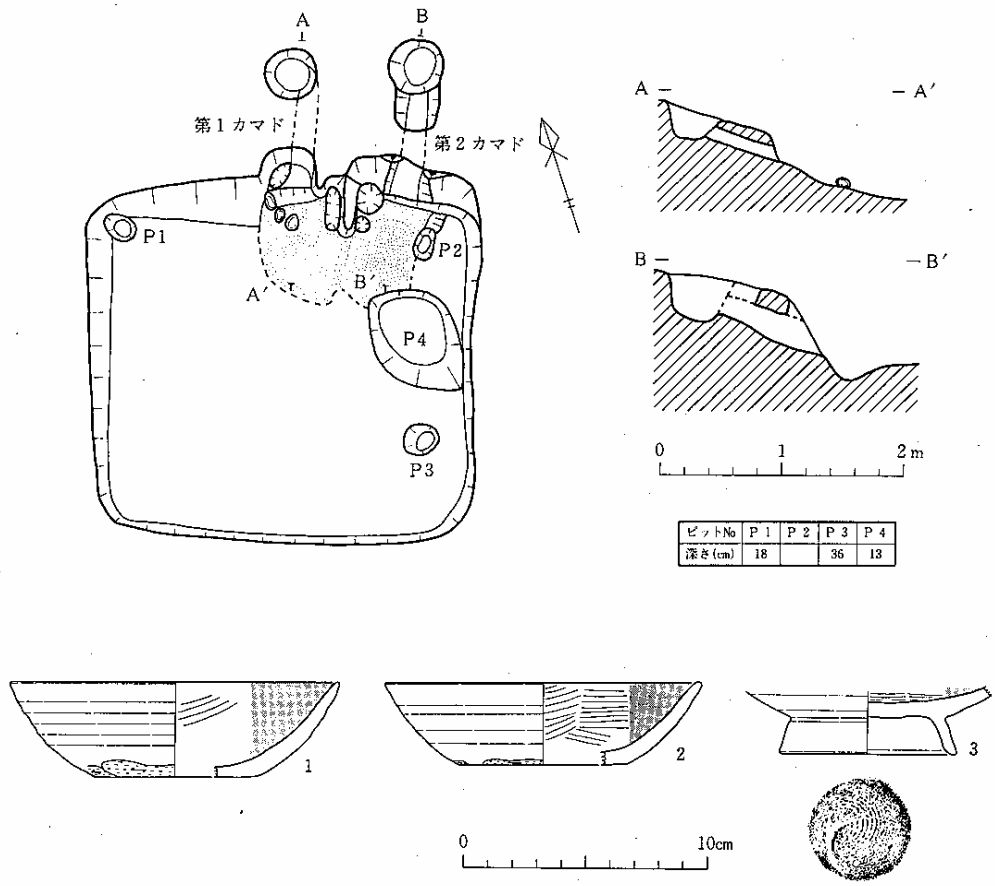
（床）　地山を床としており、床面は全体にやわらかである。

（柱穴）　住居内から４個のピットが検出されている。このうちピット１～３は住居跡の対角線上またはそれに近い位置にあることから主柱穴の可能性も考えられる。ただし南西隅に対応する柱穴は検出されていない。

（カマド）　北壁の中央および東寄りの位置にカマドが２基検出されている。以下前者を第１カマド、後者を第２カマドとして説明を行うことにする。

第１カマド－燃焼部と煙道部からなっており、軸方向はN－25°－Eである。燃焼部は壁を掘り込んで構築されているもので、規模は幅・奥行ともに約 50㎝である。

底面からは長さ約 15㎝ の河原石が３個検出されており、このことから側壁が石組みによるものであったかもしくは石が側壁の一部として使用された可能性が考えられる。煙道部は地山を掘り抜いたもので、やや上向きに先端へのびる。規模は幅が約 20㎝、長さが約 60㎝ である。煙



ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4
深さ(cm)	18		36	13

番号	器 種	出土地点	分類記号	登録番号					
1	土師器坏	第１カマド内	B	82	2	土師器 坏	第１カマド内	B	100
					3	土師器高台付坏	第１カマド内	A	83

第８図　第３住居跡・出土遺物

道部の先端には径約 40cm、深さ 25cm の煙出し穴が開いている。

第２カマド－燃焼部と煙道部からなっており、軸方向はN－25°－Eである。これは燃焼部の左側壁にあたると推定される部分に石の抜き取り痕が２個軸方向に並んで検出されたことから、石組みの側壁をもつものと考えられる。燃焼部の規模は右側壁が不明なため推定となるが、カマドの軸を基準とすると幅 40cm、奥行 30cm前後になるものと思われる。煙道部は地山掘り抜きのもので上向きに先端へのびる。規模は幅が約 20cm、長さが約 90cmで、先端には径約 45cm、深さ約 40cmの煙出し穴が開いている。

カマドの新旧については、第２カマドが側壁に使用されたと思われる石の抜き取り痕を有することから古い時期のものと考えられる。

（出土遺物）　カマド内、床面および住居内堆積土から土師器や須恵器が少量出土している。

このうち図化できたものは次の３点である。

土師器

坏（第８図１・２）

製作に際しロクロを使用しているものである。いずれも体部下端から底部にかけて手持ヘラケズリの再調整が施されている。ただし両者とも底部の大半が欠損しているため、再調整が全面に及ぶか否かは明らかでない。底部切り離し技法は不明である。器形は体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上る。内面はヘラミガキ・黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横または斜め方向である。底部は明瞭でない。

高台付坏（第８図３）

体部から口縁部にかけて欠損している。高台部はやや外方に張り出すものである。底部には中心に回転糸切り痕が認められ、周縁はナデ調整されている。坏部内面はヘラミガキ・黒色処理がなされている。

第４住居跡

（位置・確認面）　Ｃ－41 区の地山面で確認された。

（平面形・規模）　住居の南半が不明であるが、残存形から方形を基調とするものと思われる。規模は北辺で約 4.3mである。

（壁）　北辺および東辺・西辺の北半が残存している。壁高は最も高い北壁で約 50㎝ である。地山を壁としており、立ち上りは急角度である。

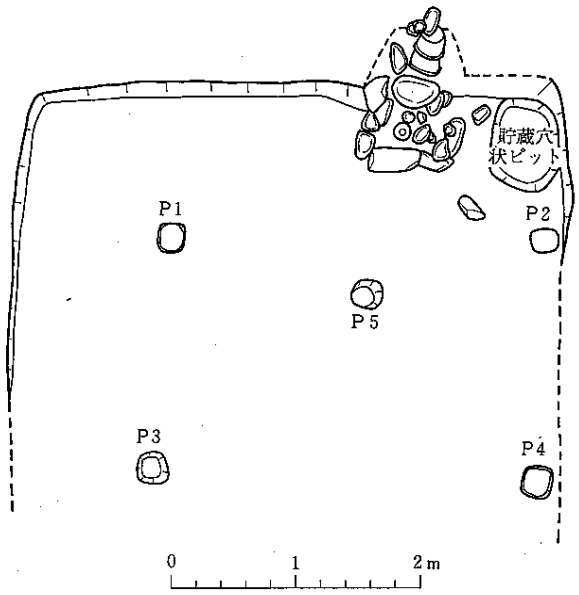
（床）　北半が残存しており、地山を床としている。

（柱穴）　住居内から５個のピットが検出されている。このうちピット１～４は配置に規則性があることから主柱穴と考えられる。

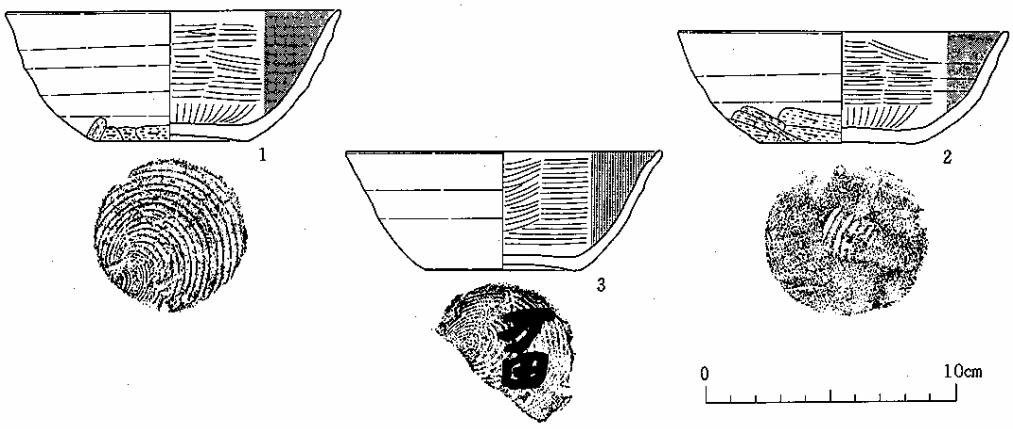
（カマド）　北辺の東寄りの部分に付設されている。燃焼部と煙道部からなっており、軸方向はＮ－25°－Ｅである。燃焼部は切り石と河原石を用いて構築されており、規模は幅が約 40㎝、奥行が約 60㎝である。底面は焼けており、ほぼ中央からは土師器坏が出土している。煙道部は底を抜いた土師器甕を２個つなぎ合わせて構築されている。その長さは約 40㎝、幅は約 20㎝になる。

（貯蔵穴状ピット）　カマドの東脇すなわち住居跡の北東隅で検出されている。楕円形を呈するもので規模は長軸が約 70㎝、短軸が約 50㎝、深さが約 30㎝ である。なかに焼土が堆積している。

（出土遺物）　カマド内および床面から土師器が出土している。このうち図示可能なものは次の３点である。



ピットNo	深さ(cm)
P 1	49
P 2	
P 3	45
P 4	76
P 5	



番号	器　種	出土地点	分類記号	登録番号					
1	土師器坏	カマド内	B Ⅱ	59	2	土師器坏	カマド内	B Ⅱ	60
					3	土師器坏	カマド内	C	61

第9図　第４住居跡・出土遺物

土師器

坏（第９図１～３）

いずれも製作に際しロクロを使用しているものである。再調整が施されているもの（１・２）と施されていないもの（３）とがある。前者は体部下端および体部下端から底部周縁にかけて手持ヘラケズリが施されているもので、ともに回転糸切り痕が認められる。器形は体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上る。内面はヘラミガキ・黒色処理されており、ヘラミガキの

方向は口縁部から体部にかけては横方向、底部は放射状になっている。後者は底部に回転糸切り痕を残し、再調整の施されないものである。器形は体部がやや丸味を持って立ち上り口縁部が外反ぎみになる。内面はヘラミガキ・黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけて横や斜め方向になっている。なお３の底部には「万田」の墨書が認められる。

３．土器溜出土の遺物

土器溜出土の遺物には土師器、須恵器・灰釉陶器がある。

土師器

坏（第10・11・12図、第13図１～11）

いずれも製作に際しロクロを使用しているものである。これらは再調整が施されているものと施されていないものとがある。再調整は回転ヘラケズリによるものと手持ヘラケズリによるものとがある。

第10図・１～10は回転ヘラケズリの再調整が施されるものである。これらは体部下端から底部全面に施されるもの（１～６）と体部下端から底部周縁に施されるもの（７～10）とがある。

後者の削り残された部分には回転糸切り痕が認められるが、前者は切り離し技法は不明である。なお前者のうち２は体部外面に粘土積み上げ痕が認められる。器形は前者が体部から口縁部にかけて直線的に立ち上るのに対し、後者はやや丸味をもって立ち上る。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけて横または斜め方向で、底部は一定方向と放射状との二者がある。また２・９・10の底部には「万田」の墨書がみられる。

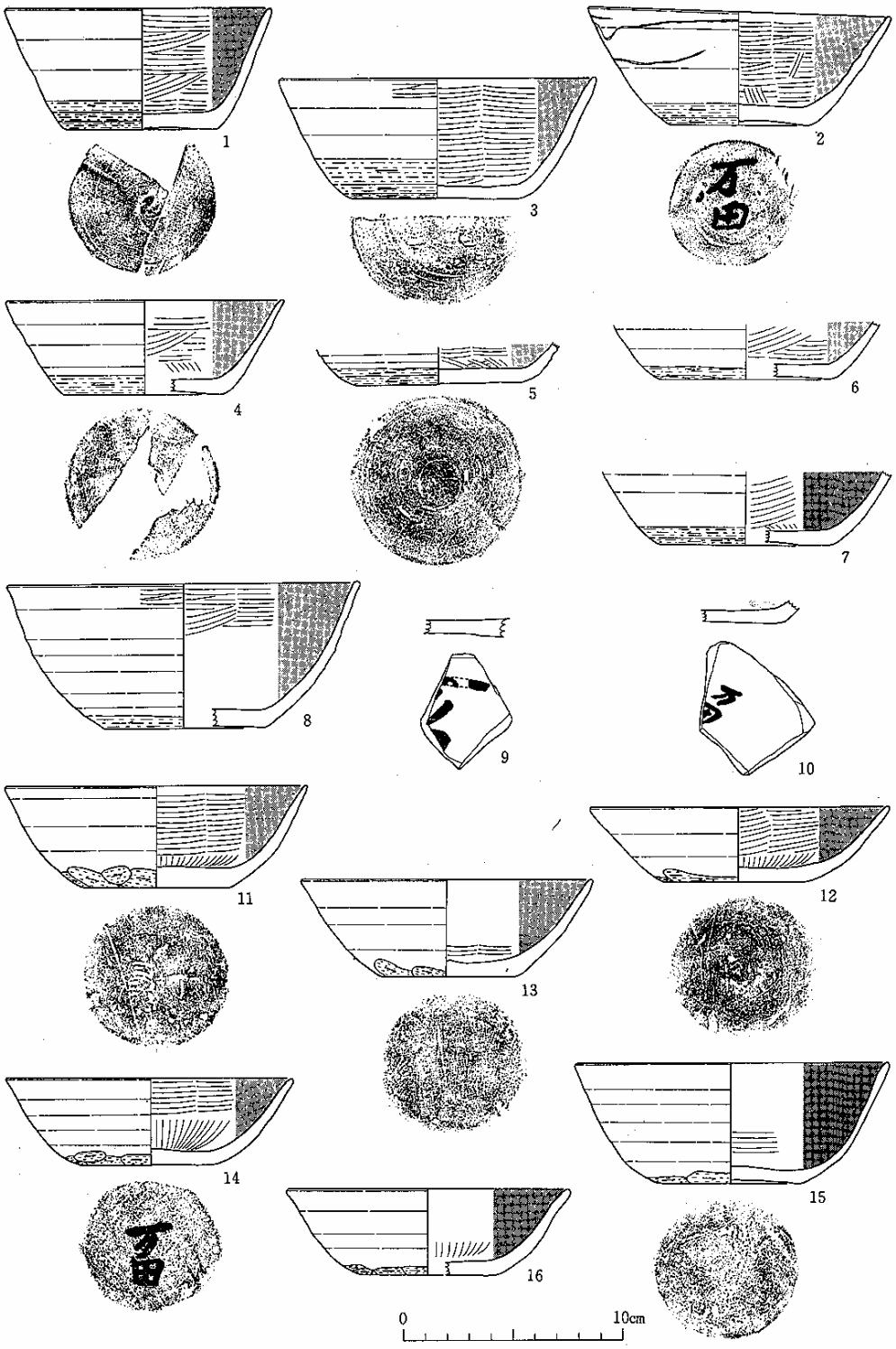
第10図11～16，第11・12図は手持ヘラケズリの再調整が施されるものである。これらは体部下端から底部全面に施されるもの（第10図11～16，第11図１～15，第12図２）、底部全面に施されるもの（第11図16・17，第12図１）、体部下端から底部の一部に施されるもの（第12図３～11）、底部の一部に施されるもの（第12図12・13）、体部下端に施されるもの（第12図14～17）がある。

これらのうち底部全面に施されるもの以外はすべて回転糸切り痕が認められるが、他は切り離し技法は不明である。器形は体部から口縁部にかけていずれも丸味をもって立ち上っている。

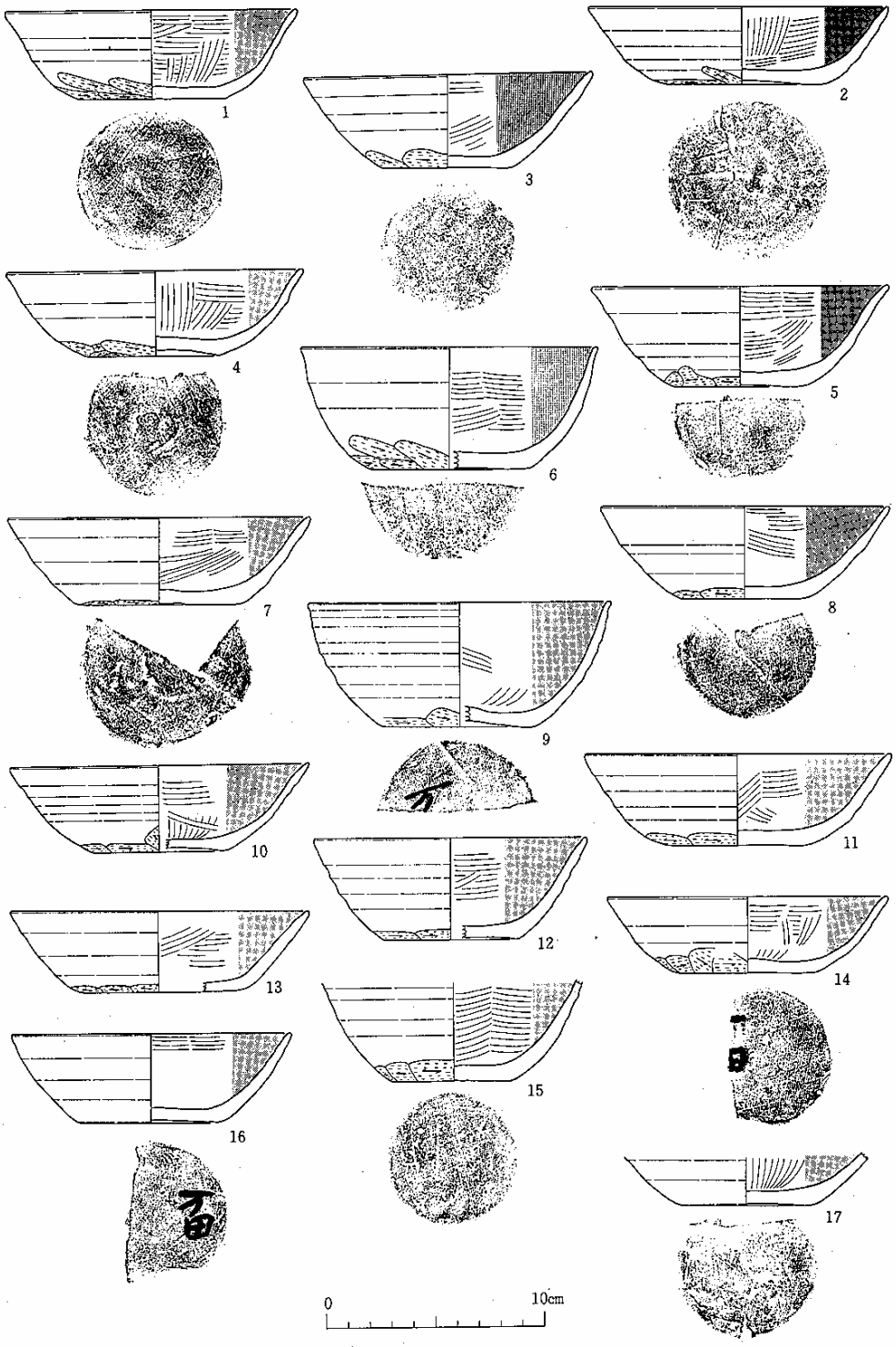
内面はすべてヘラミガキ・黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横から斜め方向で底部は放射状のものが多い。第10図14，第11図14・16，第12図２・５・９・11の底部には「万田」、第12図４の底部には「子田」、第11図９の底部には「万」の墨書がみられる。

第13図１～11は再調整の施されていないものである。底部には回転糸切り痕を残している。

器形は体部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上る。内面はいずれもヘラミガキ・黒



第10図　土器溜出土遺物（1）



第11図　土器溜出土遺物（2）

色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横または斜め方向で底部は放射状のものが多い。３・４・９・10 には「万田」、５には「田万」の墨書がみられる。その位置は４が体部で他はすべて底部である。

高台付坏（第13図12～14）

いずれも体部から口縁部が失われている。14 は底部の切り離し技法が回転糸切りのもので、高台部はやや外方に張り出す。12・13 は底部がロクロ調整されており、底部の切り離し技法が不明なものである。高台部は13・14 が外方に張り出すのに対し 12 は直立ぎみになっている。３点とも坏部内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。なお 12 の底部には「万田」の墨書がみられる。

双耳坏（第13図15）

双耳坏の耳部の破片である。耳部の表面はヘラケズリで成形されている。

高坏（第14図３・４）

３は坏部の破片である。脚部との接合部から直線的に外傾するものと思われる。外面はヘラミガキが施されている。４は脚部・柱状部の破片である。中央にややふくらみをもっている。外面はヘラミガキが施されており、内面にはシボリ目、ヨコナデが観察される。

壺（第14図５）

体部以下が欠損しているものである。頸部で屈曲し外傾するもので口縁端部はわずかに内弯ぎみになる。外面はヨコナデ、内面はわずかにナデが施されている。

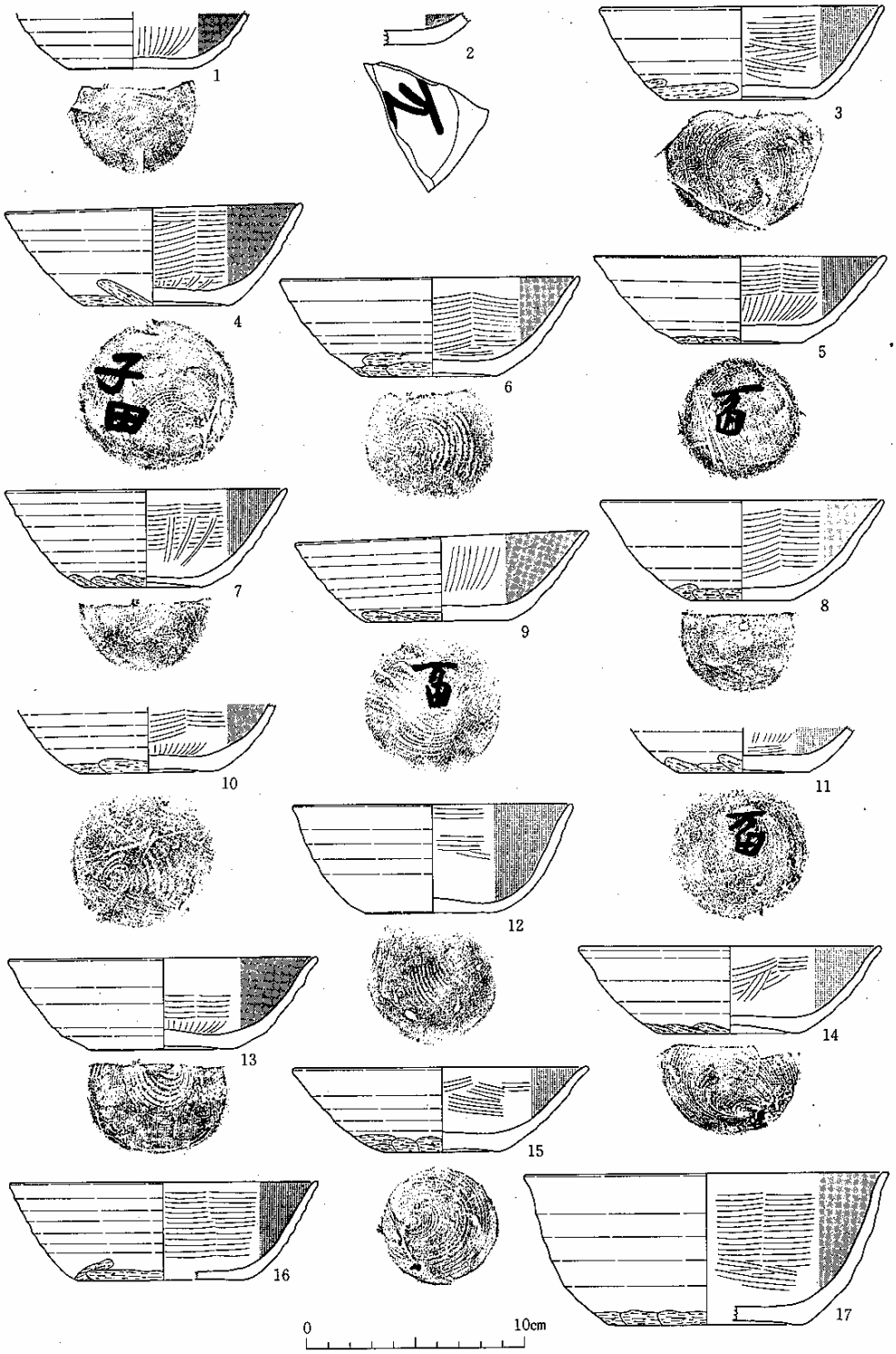
甕（第13図16～18，第14図１・２）

いずれも製作に際しロクロを使用するものである。このうち第 14 図１・２は体部にややふくらみをもち、口縁部は外傾するもので２では端部が上方に折れ曲る。最大径は口縁部にあり、長胴形を呈するものである。器面調整はいずれもロクロ調整ののち体部外面にヘラケズリが施されているが、１ではその前段階としてタテ方向のナデが施されている。第 13 図 16～18 は体部が丸味をもち口縁部は短く外傾する。最大径は口縁部にあるが、体部径との差はわずかである。18 では内外面に粘土積み上げ痕が認められる。器面調整は主にロクロ調整で、さらに外面には 17・18 がヘラケズリされており、内面には 16 がナデ、18 がロクロの回転を利用した刷毛目調整が施されている。

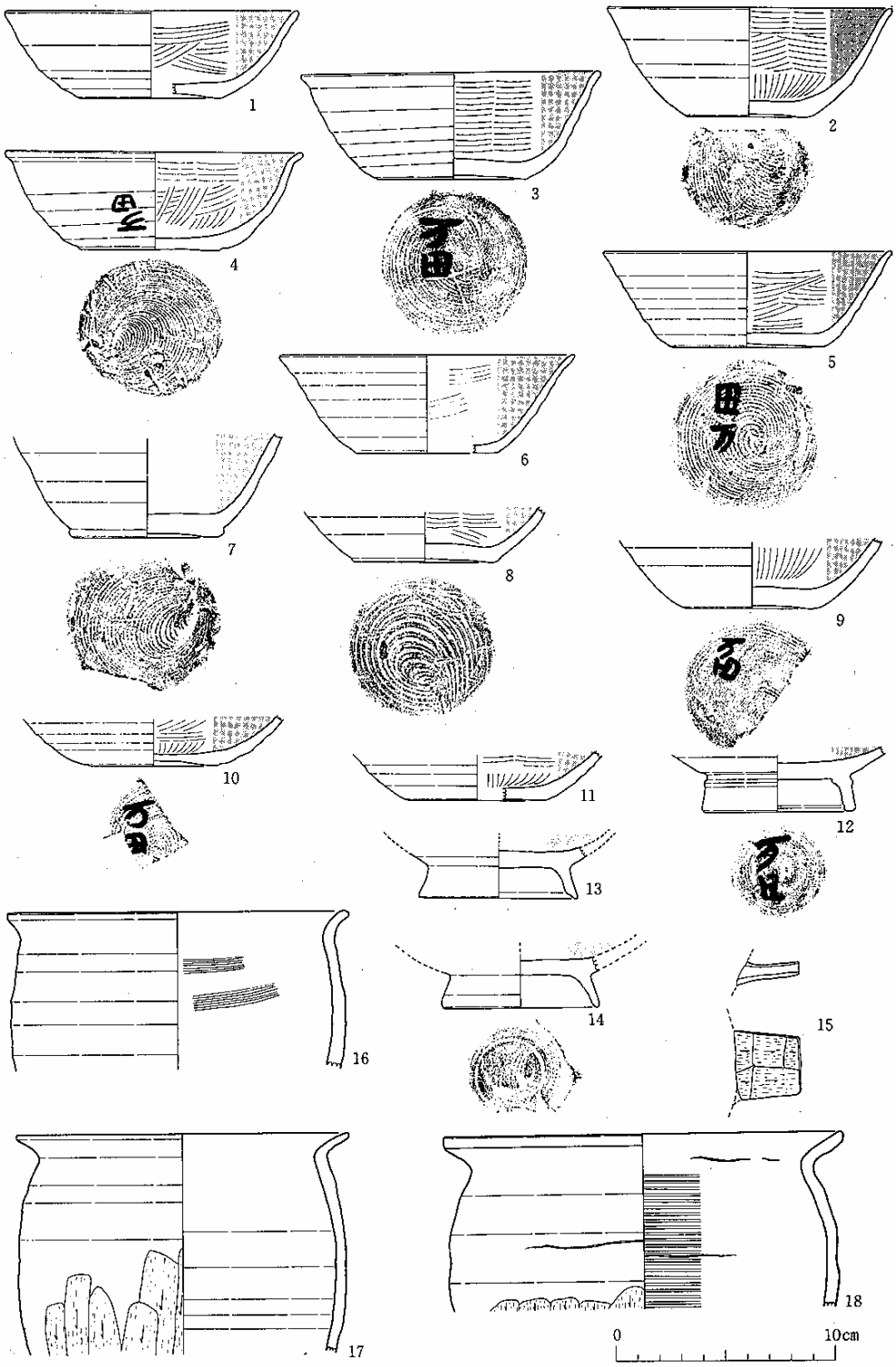
須恵器

坏（第14図６～15，第15図）

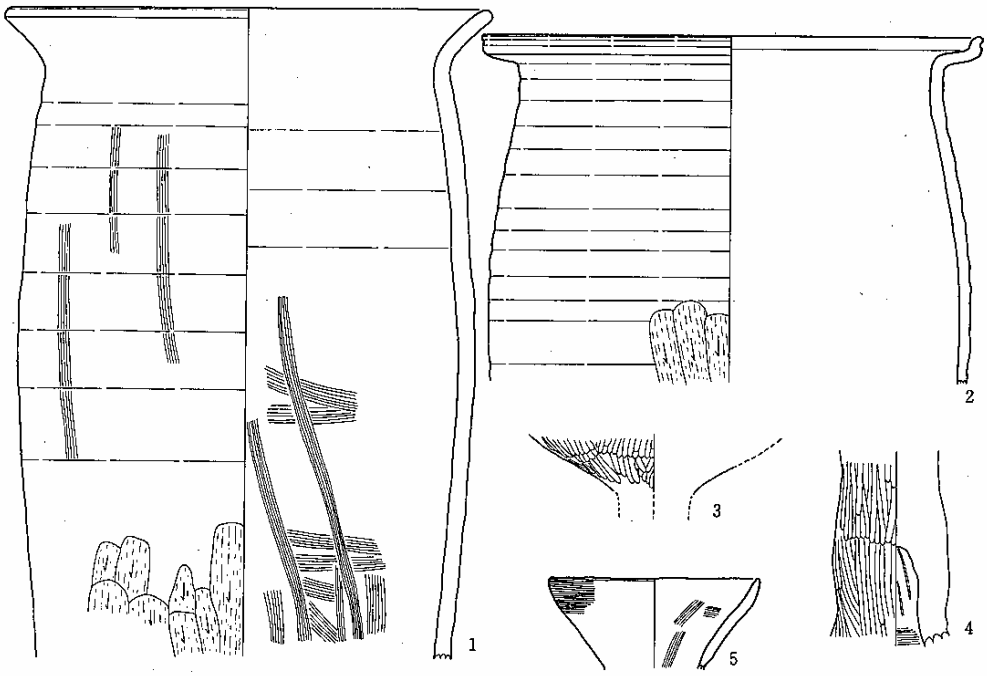
第 14 図６・７は回転ヘラケズリの再調整が施されているものである。６は体部下端から底部全面に７は底部全面に施されておりともに切り離し技法は不明である。体部から口縁部にかけてはともにやや丸味をもって立ち上る。色調はともに橙色を呈する。

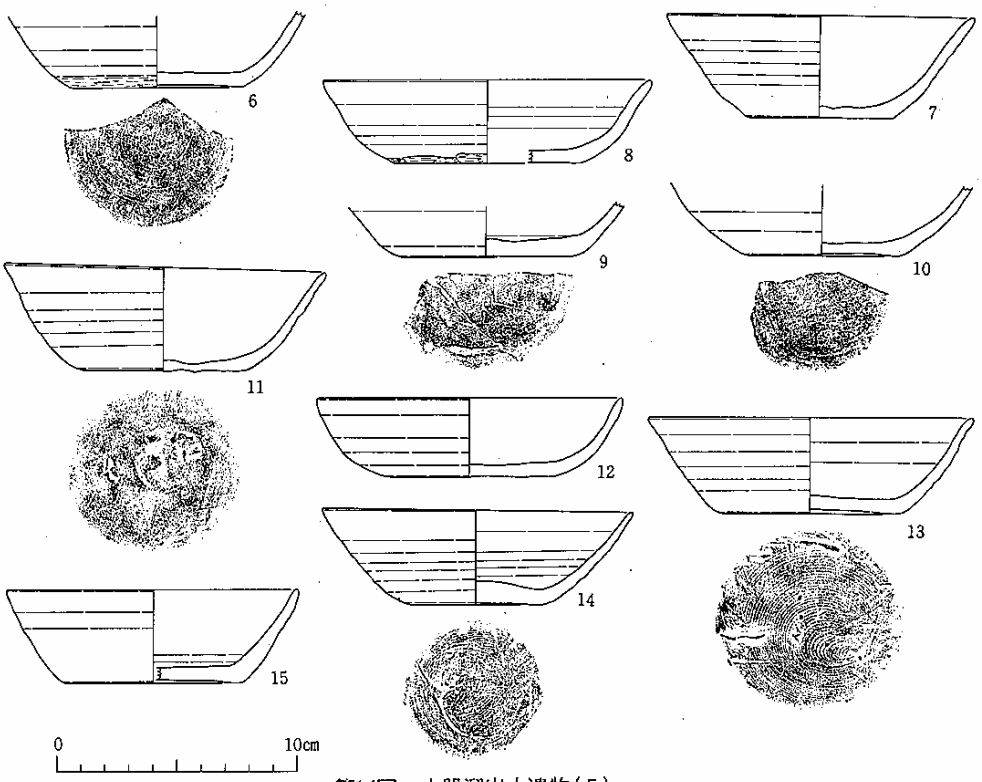


第12図　土器溜出土遺物（3）



第13図　土器溜出土遺物（4）





第14図　土器溜出土遺物（5）

第14図８～10は手持ヘラケズリの再調整が施されるものである。９・10は底部全面に、８は体部下端から底部周縁に施されており、このうち８・10は回転糸切り痕が認められるが、９は切り離し技法が明らかでない。器形は８・10が体部に丸味をもつのに対し、９は直線的に外傾する。色調は８・９が橙色、10は灰色を呈する。

第14図11・12・15は底部にヘラ切り痕を残すもので再調整は施されていない。器形は11・15が体部から口縁部にかけて直線的あるいはやや丸味をもつのに対し、12は内弯ぎみに立ち上る。

色調はいずれも灰色を呈する。

第14図13・14、第15図は底部に回転糸切り痕を残すもので再調整は施されていない。器形は大半が体部から口縁部にかけて直線的あるいはやや丸味をもって立ち上る。色調は大半が灰色を呈するが、なかに灰白色や褐色を呈するものも少量含まれている。

蓋〈転用硯〉（第16図１・２）

ともに硯として転用されているものである。１はつまみが接合部から取り除かれている。体部は直線的で口縁部は外反ぎみになり端部で内側に折れ曲る。天井部には回転ヘラケズリの再調整が施されている。内面は硯としての使用面で、残存するほぼ全面が摩滅している。また部分的に墨痕が認められる。２はリング状のつまみをもつものである。体部から口縁にかけて欠損している。つまみは周縁部の大部分が欠落しており、打ち欠かれたような状況から故意に取り除かれたとも考えられる。天井部は回転ヘラケズリの再調整が施されている。内面は硯の使用面で、天井部を中心に磨滅している。

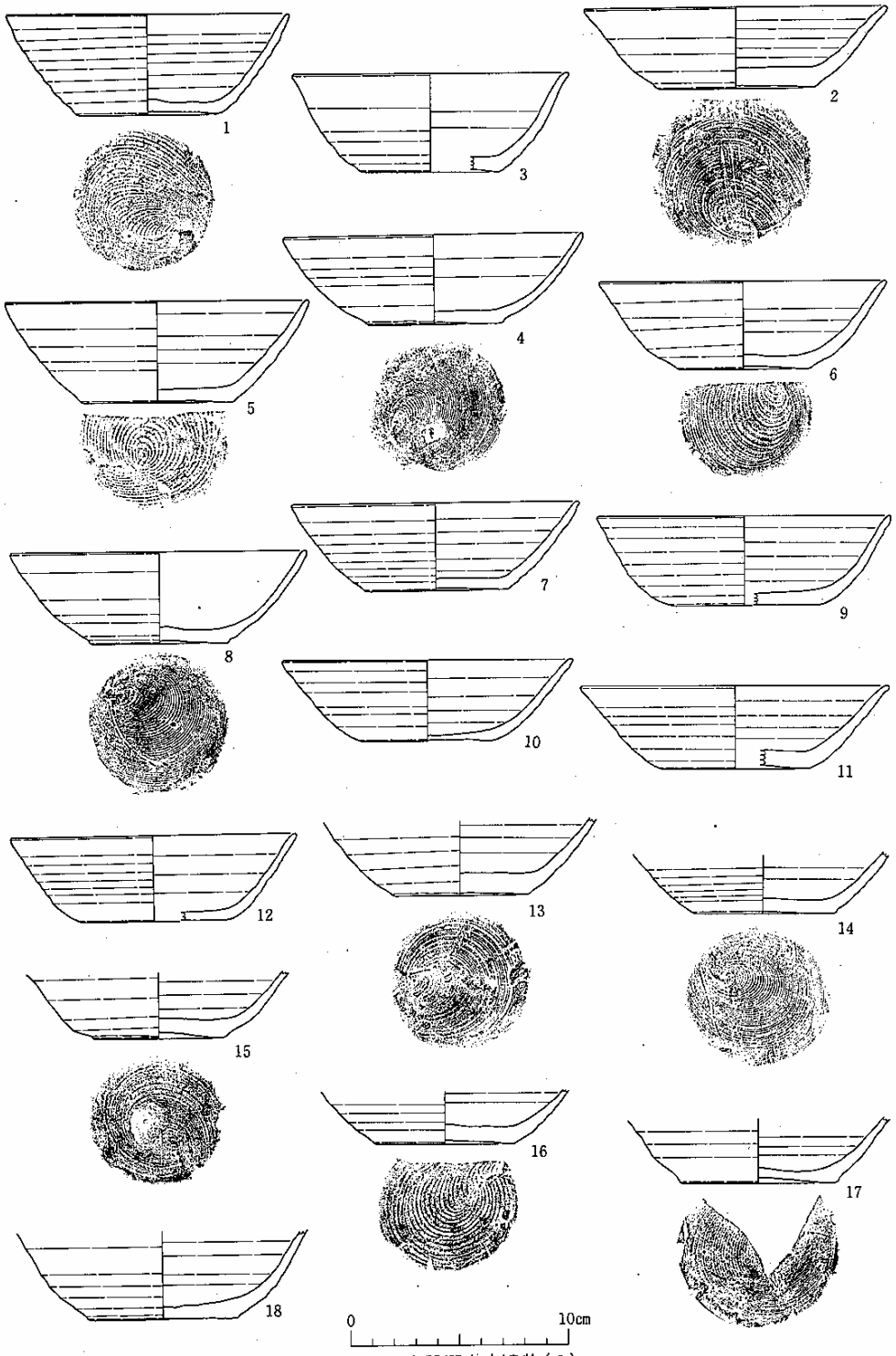
長頸壺（第16図３・４）

ともに口縁部から頸部にかけての破片である。３は頸部が直線的に立ち上るのに対し、４は外反ぎみに立ち上る。ともに内外面はロクロ調整されている。３の外面には灰黄色の自然釉が観察される。

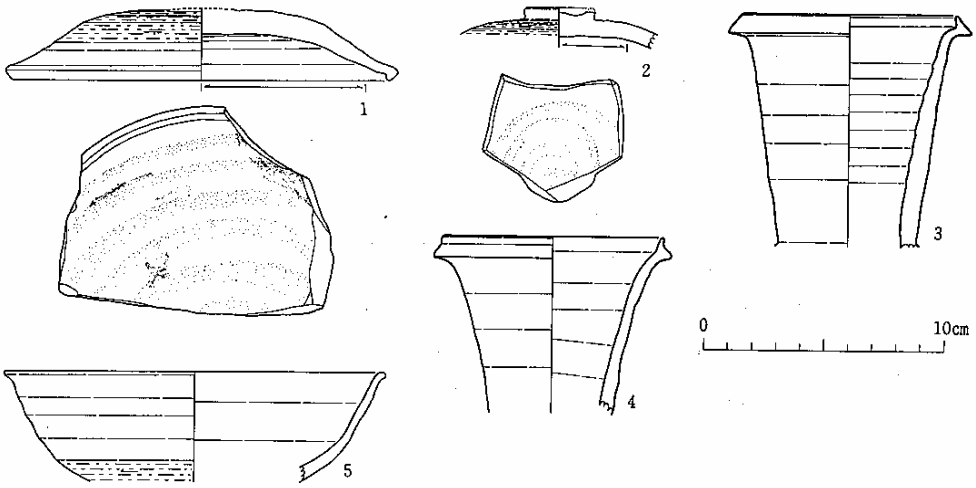
灰釉陶器

坏（第16図5）

底部が欠損している。体部は丸味をもって立ち上り、口縁端部が外反する。体部下端には回転ヘラケズリの再調整がなされている。色調は灰白色で、内面には灰黄白色の釉が施されている。



第15図　土器溜出土遺物（6）



番　号	器　　種	分類記号	登録番号	番　号	器　　種	分類記号	登録番号	番　号	器　　種	分類記号	登録番号
第10図1	土師器　坏	AⅠ	2	4	土師器　坏	BⅡ	8	5	土師器　甕		101
2	土師器　坏	AⅠ	14	5	土師器　坏	BⅡ	9	6	須恵器　坏	A	150
3	土師器　坏	AⅠ	62	6	土師器　坏	BⅡ	13	7	須恵器　坏	A	142
4	土師器　坏	AⅠ	38	7	土師器　坏	BⅡ	28	8	須恵器　坏	BⅡ	132
5	土師器　坏	AⅠ	54	8	土師器　坏	BⅡ	32	9	須恵器　坏	BⅠ	151
6	土師器　坏	AⅠ	53	9	土師器　坏	BⅡ	33	10	須恵器　坏	BⅡ	152
7	土師器　坏	AⅡ	47	10	土師器　坏	BⅡ	49	11	須恵器　坏	C	120
8	土師器　坏	AⅡ	25	11	土師器　坏	BⅡ	55	12	須恵器　坏	C	138
9	土師器　坏	AⅡ	97	12	土師器　坏	BⅡ	16	13	須恵器　坏	D	121
10	土師器　坏	AⅡ	95	13	土師器　坏	BⅡ	24	14	須恵器　坏	D	124
11	土師器　坏	BⅠ	10	14	土師器　坏	BⅡ	29	15	須恵器　坏	C	139
12	土師器　坏	BⅠ	3	15	土師器　坏	BⅡ	36	第15図1	須恵器　坏	D	123
13	土師器　坏	BⅠ	4	16	土師器　坏	BⅡ	27	2	須恵器　坏	D	126
14	土師器　坏	BⅠ	5	17	土師器　坏	BⅡ	42	3	須恵器　坏	D	125
15	土師器　坏	BⅠ	6	第13図1	土師器　坏	C	11	4	須恵器　坏	D	133
16	土師器　坏	BⅠ	1	2	土師器　坏	C	12	5	須恵器　坏	D	128
第11図1	土師器　坏	BⅠ	18	3	土師器　坏	C	15	6	須恵器　坏	D	129
2	土師器　坏	BⅠ	19	4	土師器　坏	C	17	7	須恵器　坏	D	127
3	土師器　坏	BⅠ	20	5	土師器　坏	C	22	8	須恵器　坏	D	134
4	土師器　坏	BⅠ	21	6	土師器　坏	C	44	9	須恵器　坏	D	135
5	土師器　坏	BⅠ	31	7	土師器　坏	C	45	10	須恵器　坏	D	136
6	土師器　坏	BⅠ	26	8	土師器　坏	C	50	11	須恵器　坏	D	141
7	土師器　坏	BⅠ	30	9	土師器　坏	C	48	12	須恵器　坏	D	140
8	土師器　坏	BⅠ	34	10	土師器　坏	C	88	13	須恵器　坏	D	143
9	土師器　坏	BⅠ	35	11	土師器　坏	C	91	14	須恵器　坏	D	145
10	土師器　坏	BⅠ	40	12	土師器高台付坏	B	57	15	須恵器　坏	D	144
11	土師器　坏	BⅠ	37	13	土師器高台付坏	B	58	16	須恵器　坏	D	147
12	土師器　坏	BⅠ	39	14	土師器高台付坏	A	56	17	須恵器　坏	D	149
13	土師器　坏	BⅠ	41	15	土師器　双耳坏		118	18	須恵器　坏	D	146
14	土師器　坏	BⅠ	43	16	土師器　甕	B	109	第16図1	須恵器　蓋		153
15	土師器　坏	BⅠ	46	17	土師器　甕	B	112	2	須恵器　蓋		154
16	土師器　坏	BⅠ	23	18	土師器　甕	B	108	3	須恵器　長頸壺		155
17	土師器　坏	BⅠ	52	第14図1	土師器　甕	A	111	4	須恵器　長頸壺		156
第12図1	土師器　坏	BⅠ	51	2	土師器　甕	A	105	5	灰釉陶器　坏		119
2	土師器　坏	BⅠ	94	3	土師器　高坏		102				
3	土師器　坏	BⅡ	7	4	土師器高坏(脚)		103				

第16図　土器溜出土遺物(7)

４．堆積層出土の遺物

堆積層出土の遺物には縄文土器、土師器、須恵器がある。

縄文土器（第17図１～９）

いずれも胎土に繊維を含む縄文土器の体部破片である。このうち１～４は内外面に、５・７は内面に条痕文が施されている。他は縄文が施されているものである。９はＬＲの斜行縄文であるが６・８については原体が不明である。条痕を有する土器については素山貝塚（伊東：1940）や山前遺跡（小牛田町教委：1976）などに出土例があり、素山Ⅱ式とされているものである。他の土器についても繊維を含むものであることからやはり同時期に属するものであろう。

土師器

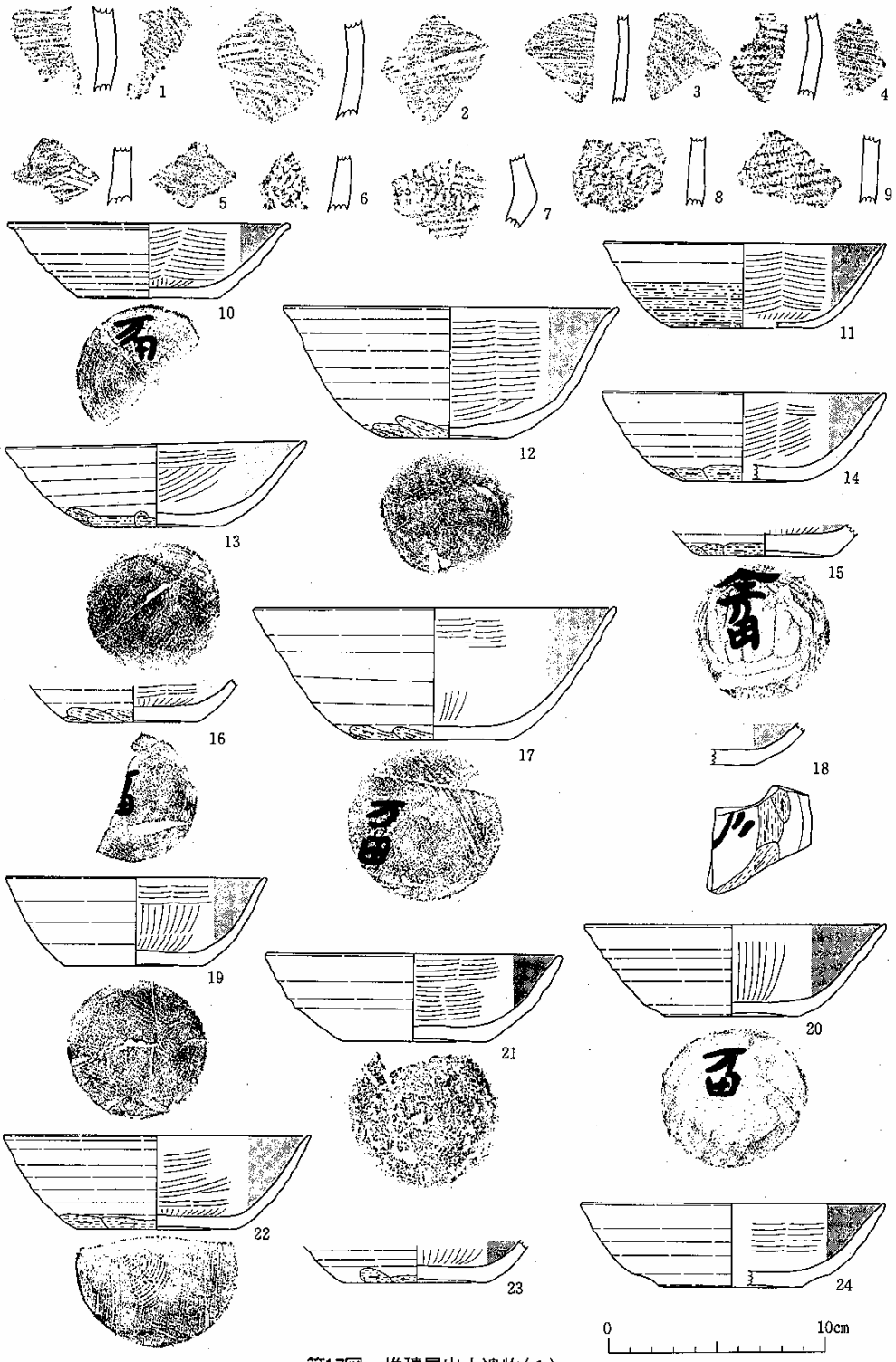
坏（第17図10～24、第18図１～５・７・８）

いずれも製作に際しロクロを使用している。これらは再調整が施されているものと施されていないものとがある。再調整には回転ヘラケズリの二者がある。

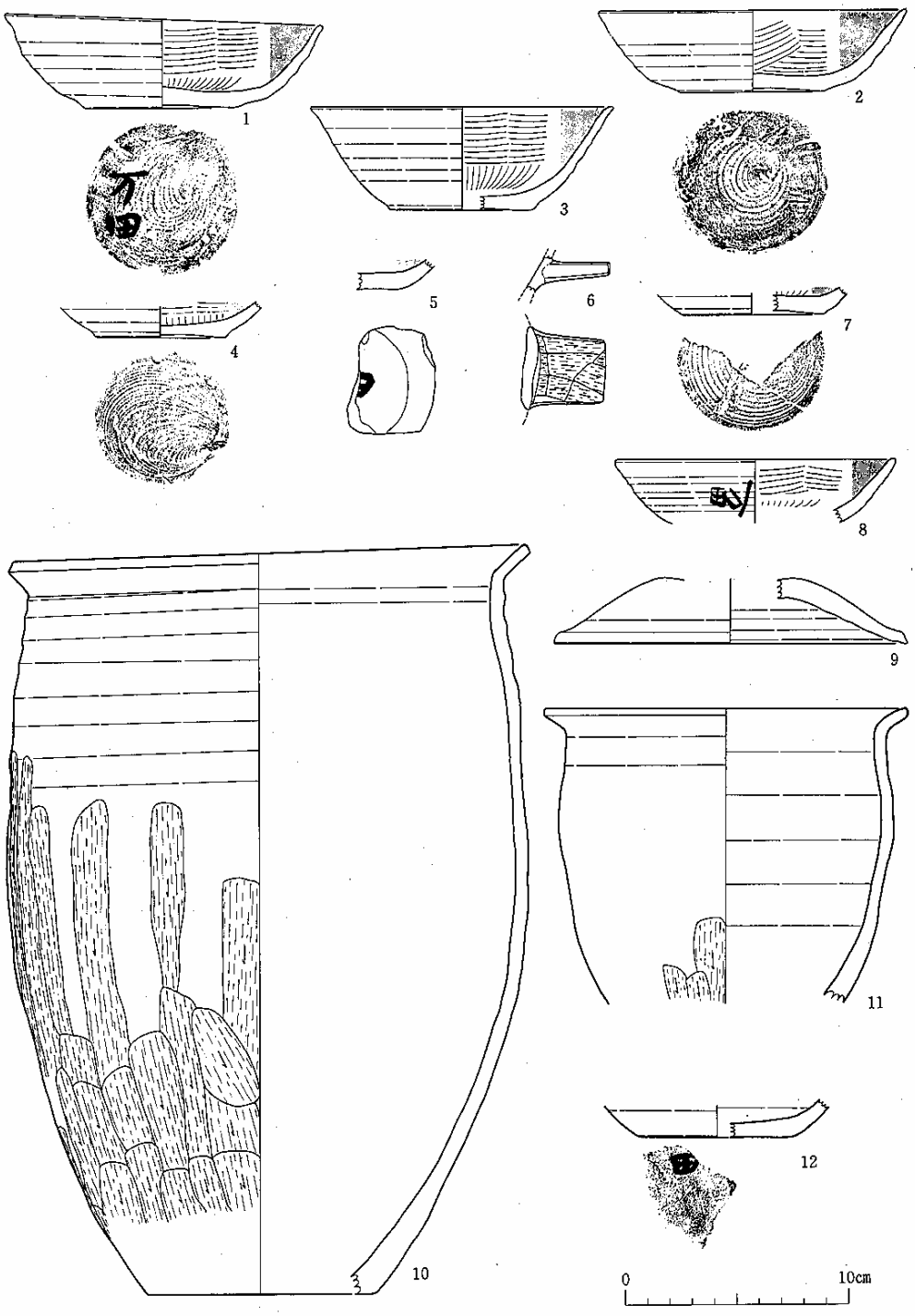
第17図10・11は回転ヘラケズリの再調整が施されるものである。10はそれが底部全面に施されており、11は体部下半から底部にかけて施されている。ただし11は底部中央が欠損しているため、それが全面に及ぶかどうか明らかでない。両者とも底部の切り離し技法は不明である。器形はともに体部から口縁部にかけてやや丸味を持って外傾しており、うち10の口縁端部は短く外反する。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横方向で底部は放射状になっている。なお10の底部には「万田」の墨書がみられる。

第17図12～24、第18図１・２は手持ヘラケズリの再調整が施されるものである。これらはそれが体部下端から底部全面に施されるもの（第17図12～19）、底部全面に施されるもの（第17図20・21）、体部下端から底部周縁に施されるもの（第17図22・23）、底部周縁に施されるもの（第17図24、第18図１・２）がある。前二者は底部の切り離し技法は不明であるが、他はすべて回転糸切り痕を残している。器形は全体に体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上る。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横または斜め方向、底部は放射状になっているものが多い。なお第17図16・17・20、第18図１の底部には「万田」、第17図15の底部には「今万田」、第17図18の底部には「三」の墨書がみられる。

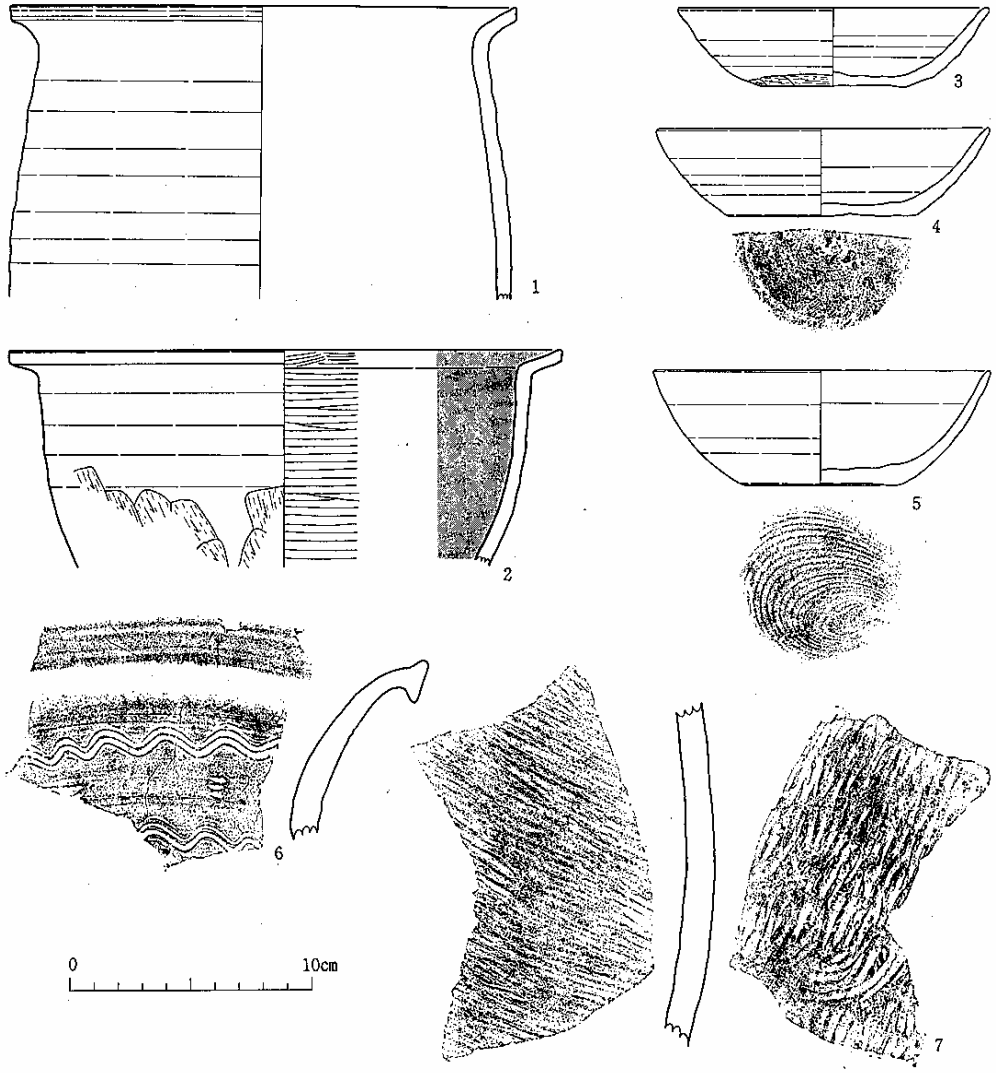
第18図３～５・７は回転糸切り痕を残し再調整の施されないものである。器形は大半が体部上半を欠いているため明らかでないものが多いが、保存のよい３は体部が丸味をもって立ち上り口縁部はわずかに外反する。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されており、ヘラミ



第17図　堆積層出土遺物（1）



第18図　堆積層出土遺物（2）



番　号	器　種	出土地点	分類記号	登録番号	番　号	器　種	出土地点	分類記号	登録番号	番　号	器　種	出土地点	分類記号	登録番号
第17図1	縄文土器	E－47－3		201	16	土師器坏	D－38－3	BⅠ	84	7	土師器坏	E－39－X	C	87
2	縄文土器	F－36－2		202	17	土師器坏	E－38－1	BⅠ	64	8	土師器坏	X－X－X		92
3	縄文土器	G－42－X		203	18	土師器坏	G－45－3	BⅠ	98	9	土師器蓋	G－45－1		116
4	縄文土器	I－44－X		204	19	土師器坏	G－39－3	BⅠ	65	10	土師器甕	X－X－X		114
5	縄文土器	G－42－X		205	20	土師器坏	G－37－2	BⅠ	67	11	土師器甕	E－38－2		113
6	縄文土器	I－43－X		206	21	土師器坏	G－36－2	BⅠ	70	12	土師器甕	C－36－1		115
7	縄文土器	G－40－X		207	22	土師器坏	X－X－X	BⅡ	71	第19図1	土師器甕	G－37－1		110
8	縄文土器	E－38－2		208	23	土師器坏	E－38－2	BⅡ	89	2	土師器坏	E－39－2		107
9	縄文土器	E－44－X		209	24	土師器坏	E－38－2	BⅡ	74	3	須恵器坏	H－34－X		131
10	土師器坏	I－43－X	AⅠ	73	第18図1	土師器坏	X－X－1	BⅡ	66	4	須恵器坏	E－39－1		130
11	土師器坏	E－38－X	AⅠ	77	2	土師器坏	D－38－2	BⅡ	69	5	須恵器坏	D－38－2		137
12	土師器坏	D－38－3	BⅠ	68	3	土師器坏	G－37－2	C	78	6	須恵器甕	X－X－X		157
13	土師器坏	E－38－2	BⅠ	63	4	土師器坏	C－37－2	C	85	7	須恵器甕			159
14	土師器坏	G－39－3	BⅠ	72	5	土師器坏	G－45－1	C	96					
15	土師器坏	D－38－3	BⅠ	86	6	土師器坏	H－38－1		117					

第19図　堆積層出土遺物（3）

ガキの方向は体部が横方向、底部は放射状になっている。５の底部には「田」の墨書がみられる。

第 18 図８は底部が欠損しているものである。体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上っている。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されており、外面には「万田」の墨書が横位に描かれている。

双耳坏（第18図6）

双耳坏の耳部の破片である。表面はヘラケズリによって成形されている。坏部の耳部接合部分がわずかに残存しており、その内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

蓋（第18図9）

つまみ部が欠損している。天井部はわずかに丸味をもち、端部はいく分外反する。内外面ともロクロ調整されている。

甕（第18図10〜12、第19図1・2）

いずれも製作に際しロクロを使用している。第18図10、第19図１は長胴形を呈するものである。体部にわずかなふくらみをもち、口縁部は短く外傾する。内外面ともロクロ調整で第18図10では体部下半にヘラケズリが施されている。第18図11は小形の甕で、体部はやや丸味をもち口縁部は短く外傾する。内外面ともロクロ調整で、体部外面の下半にはヘラケズリが施されている。第19図２は鉢形を呈するものである。体部はやや丸味をもって立ち上り口縁部は屈曲し外傾する。外面はロクロ調整ののち体部下半にヘラケズリが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理がなされている。なお第18図12は底部に「田」の墨書がみられる破片である。内外面ともロクロ調整され、底部はヘラケズリが施されている。

須恵器

坏（第19図3〜5）

器形はいずれも体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上るものである。３は底部に回転糸切り痕を残し、体部下端に手持ヘラケズリの再調整が施されている。色調は黄橙色を呈する。５は底部に回転糸切り痕を残し、再調整は施されていない。色調は橙色を呈する。４は底部にヘラ切り痕を残すもので再調整は施されていない。色調は明灰色である。

甕（第19図6・7）

６は口縁部の破片である。頸部から口縁にかけて外反し端部は上下にのびる。外面には３本の沈線による波状文が２段に描かれている。７は体部破片である。外面は平行叩き目、内面は平行状の押えがある。

Ⅳ．考　　察

１．土器の分類と年代

出土土器には縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器がある。このうち縄文土器については前節ですでに述べてあるので、ここでは土師器、須恵器、灰釉陶器を対象とする。

（1）分類

a．土師器

土師器には坏、高台付坏、双耳坏、蓋、高坏、壺、甕がある。このうち数量の関係から坏、高台付坏、甕の３者について分類を行うことにする。

坏

坏はすべて製作に際しロクロを使用しているものである。これらは再調整の有無・種類によってＡ・Ｂ・Ｃの３類に分類される。

Ａ類　回転ヘラケズリの再調整が施されるものである。本類は回転ヘラケズリが底部全面または体部下端から底部全面に及び底部の切り離し技法が不明のもの（ＡⅠ）と体部下端から底部の周縁に施され回転糸切り痕を残しているもの（ＡⅡ）とがある。器形はＡⅠ類が体部から口縁にかけて直線的に立ち上るのに対しＡⅡ類はやや丸味をもって立ち上る傾向がみられる。内面の調整はいずれもヘラミガキ・黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけては横または斜め方向、底部は放射状または一定方向になっている。

なお「万田」の墨書がＡⅠ・ＡⅡ類ともみられるものがいくつある。

Ｂ類　手持ヘラケズリの再調整が施されているものである。本類は手持ヘラケズリが底部全面または体部下端から底部全面に施され底部の切り離し技法が不明なもの（ＢⅠ）と底部の一部分や体部下端あるいは体部下端から底部の一部分に施され回転糸切り痕を残しているもの（ＢⅡ）とがある。器形は体部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上る。内面の調整はいずれもヘラミガキ・黒色処理がなされており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部にかけて横まは斜め方向、底部は放射状になっている。

なお両者とも「万田」の墨書がみられるものがいくつかある他、ＢⅠ類では「今万田」、ＢⅡ類では「子田」の墨書がそれぞれ１点ある。

第１表　土師器坏分類表

A	回転ヘラケズリの再調整	Ⅰ．切り離し不明
		Ⅱ．回転糸切り
B	手持ヘラケズリの再調整	Ⅰ．切り離し不明
		Ⅱ．回転糸切り
C	再調整なし	回転糸切り

C類　底部に回転糸切り痕を有し、再調整は施されていないものである。器形は体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上るもので、なかには口縁端部で外反ぎみになるものもある。内面の調整はB類と同様である。また本類では「万田」の墨書がみられるものがいくつかある他､「田万」の墨書も１点ある。

高台付坏

いずれも製作に際しロクロを使用している。完形のものはなく器形は明らかでない。これらは底部の切り離し技法が回転糸切りのもの（A）と不明なもの（B）とに分類される。A類は高台部がやや外方に張り出すもので底部周縁には高台部接合の際のナデ調整がみられる。B類は高台部がやや外方に張り出すものと直立ぎみのものとがある。底部はロクロ調整されている。両者とも坏部内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

なおB類には「万田」の墨書がみられるものが１点ある。

甕

甕はいずれも製作に際しロクロを使用している。これらは形態からA・B・Cの３類に分類される。

A類　長胴形を呈するものである。体部はややふくらみをもち口縁部は外傾しており、最大径は口縁部にある。器面調整は内外面ともロクロ調整でさらに外面にはヘラケズリ、内面にはナデ調整が施されている。なおこのなかにはロクロ調整の前段階として、体部外面に縦方向のナデ調整が施されているものもある。

B類　体部が倒卵形もしくは紡錘形を呈するものである。比較的小形のものが多い。口縁部はいずれも短く外傾しており、最大径は口縁部にあるが体部径との差はわずかである。器面調整は内外面ともロクロ調整されており、さらに体部外面にはヘラケズリ、内面にはナデや刷毛目のほかロクロの回転を利用した刷毛目などが施されている。

C類　鉢形を呈するものである。体部は丸味をもって外傾し、口縁部は外傾ないし外反する。器面調整は外面がロクロ調整ののち体部下半にヘラケズリが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理がなされている。

双耳坏

双耳坏の耳部の破片が２点出土している。いずれも表面はヘラケズリで成形されるものである。

第２表　土師器高台付坏分類表

A	回転糸切り
B	不明

第３表　土師器甕分類表

A	長胴形
B	紡錘形
C	鉢形

蓋

１点のみ出土している。つまみ部が欠損するもので、天井部はわずかに丸味をもち、端部はやや外反する。内外面ともロクロ調整である。

高坏

高坏は坏部の破片と脚部の破片がそれぞれ１点出土している。坏部の破片は体部が直線的に外傾するもので、外面はヘラミガキが施されている。内面は欠損しており不明である。脚部の破片は柱状部の中央にややふくらみをもつものである。外面はヘラミガキが施されており、内面はシボリ目、ヨコナデが観察される。

壺

１点のみ出土している。口縁部から頸部にかけての破片である。頸部が屈曲し外傾するもので口縁端部は内弯ぎみになる。外面はヨコナデ、内面はナデ調整が施されている。

ｂ．須恵器

須恵器には坏、蓋、長頸壺、甕がある。このうち数量の多い坏について分類を行うことにする。

坏

坏は再調整の有無および底部の切り離し技法からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４類に分類される。

Ａ類　回転ヘラケズリの再調整が施されているものである。これらは回転ヘラケズリが底部全面もしくは体部下端から底部全面に施されているため、底部の切り離し技法が不明なものである。器形は体部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上る。色調は明灰色のものと橙色のものとがある。

Ｂ類　手持ヘラケズリの再調整が施されているものである。これらは手持ヘラケズリが底部全面に施されているため底部の切り離し技法が不明なもの（ＢⅠ）と体部下端や底部の一部分などに施され回転糸切り痕を残しているもの（ＢⅡ）とがある。ＢⅠ類は体部が直線的に立ち上るもので、色調は橙色を呈する。ＢⅡ類は体部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上るもので、色調は灰色または橙色を呈する。

Ｃ類　底部にヘラ切り痕を有し、再調整が施されていないものである。器形は体部から口縁部にかけて直線的になるもの、やや丸味をもつもの、内弯ぎみになるものなどがある。色調は灰色を呈する。

第４表　須恵器坏分類表

A	回転ヘラケズリの再調整・切り離し不明	
B	手持ヘラケズリの再調整	Ⅰ．切り離し不明
		Ⅱ．回転糸切り
C	再調整なし・ヘラ切り	
D	再調整なし・回転糸切り	

Ｄ類　底部に回転糸切り痕を有し、再調整が施されていないものである。器形は体部から口縁部にかけて直線的になるもの、やや丸味をもつものなどがある。色調を灰色を呈するのが大半で他に橙色や褐色を呈するものが若干みられる。

蓋（転用硯）

２点出土している。完形のものはなく器形は明らかでない。なかにつまみが接合部から故意に取り除かれたものがある。いずれも内面には磨面や墨痕などが観察され、硯に転用されたものであることが明らかである。

長頸壺

２点出土している。いずれも口縁部から頸部にかけての破片で全体形は不明である。内外面ともロクロ調整で、外面に灰黄色の自然釉がみられるものもある。

甕

すべて破片で、器形の明らかなものはない。体部外面に平行叩きが施されているものや、頸部外面に波状文が施されているものなどがある。

ｃ．灰釉陶器

坏が１点出土している。底部は欠損しているもので、器形は体部が丸味をもって立ち上り口縁部で外反する。体部下端には回転ヘラケズリによる再調整がみられる。色調は灰白色で内面には灰黄白色の釉が施されている。

２．出土土器の年代と問題点

１．

前項で分類された土器についてここではまず共伴関係を基に年代を求めてゆくことにする。

本遺跡において共伴関係を指摘しうるのは住居跡に伴った土器および土器溜で一括される土器である。このうち住居跡においては第５表に示されるとおり土師器坏、高台器坏、甕が共伴しているが、器種、数量とも少く十分な土器組成とはいい難い。それに対し、土器溜出土の土器は土師器蓋を除く各器種各類があり、類別した土器のほとんどを含んでいる。これらの土器は土器溜が住居跡群にかなり近い位置にあり、また住居跡に伴った土器の各類の大半を含んでいることから、住居跡と密接に関連するものとみることができ、おそらく住居跡で不足した分を補いうるものと考えられる。これらの一群の土器の年代は土師器については製作にロクロを使用する坏の技法的特徴から表杉ノ入式に比定されるものである。また須恵器および灰釉陶器についても共伴関係から同時期に属するものとすることができる。この他上記の群に含まれないものとして土師器蓋があるが、ロクロ使用のものであることからやはり表杉ノ入式に属するものと思われる。なお土器溜出土の土器のなかに土師器高坏２点および土師器壺１点があり、

これらは形態的特徴から南小泉式に比定されるもので、上記の一群のなかにあって時期的に明らかに異るものである。おそらく付近に該期の遺構が存在するものと思われ、それに関連したものが何らかの原因で混入したのであろう。

2.

ところで本遺跡において主体をなす表杉ノ入式の土器については近年土師器坏を対象として製作技法の面から細分が試みられている（阿部：1968、桑原：1969）。それによれば再調整のあるものから再調整のないものへと変化することが指摘されており、このことはまたいくつかの遺跡の調査においても序々に裏付けられつつある。

県内における表杉ノ入式期の集落での土師器坏のあり方をみると大きく次のようなタイプに分けることができる。すなわち第１としてはすべて再調整のあるもので構成されているタイプで御所内遺跡（太田：1980）、西原遺跡（熊谷：1980）に類例をみることができる。第２としては再調整のあるものと再調整のないものが組み合っているタイプで青木遺跡（小川：1980）、手取、西手取遺跡（早坂、阿部：1980）などに類例がみられる。第３としては再調整のないもののみで構成されているタイプで安久東遺跡（土岐山：1980）などに類例がみられる。このうち第２と第３のタイプについては手取・西手取遺跡において前者が後者に先行することがほぼ明らかとなっている。しかし第１のタイプについては再調整のないものが全く含まれていないことから第２、第３のタイプより古い様相を示していると思われるのであるが、現在のところ確証がなく今後の調査が待たれるものである。

さて本遺跡の場合は前述したように回転ヘラケズリの再調整が施されるＡⅠ・ＡⅡ類、手持ちヘラケズリの再調整が施されるＢⅠ・ＢⅡ類と再調整の施されないＣ類からなっており、したがって再調整のあるものと再調整のないものが組み合う第２のタイプに属するものといえる。ただし数量的にみた場合、本遺跡では再調整の施されるＡ類およびＢ類の占める割合は住居跡と土器溜の坏71点中59点あり、83％と高い割合を示している。この点からすればかなり第１のタイプに近い様相を示すものとみることができよう。これらの絶対年代については土器溜から伴出した灰釉陶器が平城宮出土の９Ｃ中葉とされるＳＤ650Ａ様式土器に類似していることからほぼそれに近い年代のものと考えられる(註)。

註：灰釉陶の年代について平成京跡発掘調査部の巽淳一郎氏から御教示を得た。

第５表　土器の共伴関係

	土師器						須恵器				灰釉陶器
	坏	甕	高台付坏	双耳坏	高坏	壺	坏	甕	壺	蓋	
1　住	B Ⅰ(2)・B Ⅱ(1)	B(1)									
2　住	A Ⅰ(2)	C(1)									
3　住	B Ⅰ(1)・B(1)		A(1)								
4　住	B Ⅱ(2)・C(1)										
土器溜	A Ⅰ(6)・A Ⅱ(4)・B Ⅰ(25)・B Ⅱ(15)・C(1)	A(2)・B(3)	A(1)・B(2)	(1)	(2)	(1)	A(3)・B Ⅰ(1)・B Ⅱ(3)・C(4)・D(19)	(3)	(2)	(2)	(1)

（　）は数量を示す

３．

最後に墨書文字について若干ふれてみたい。本遺跡では土師器坏の体部や底部に「万田」・「子田」・「今万田」・「田万」などの墨書文字がみられる。坏の底部に書かれたものが多くまた「万田」が大半を占めている。

これらの墨書についてはこれまで県内における発見例はなく、また地名や人名の点からみても該当すると思われるものは見当たらず、現在のところその意味について明らかにすることはできない。ただし、これらはいずれも墨書の一字が「田」であり何らかの意味で「田」を示しているものと考えることができる。本遺跡の位置する環境が、第Ⅰ章で述べたように平安時代において急速に農耕生産が進展したとみられる沖積地に面していることを思えば土器の所有者が農耕生産に関係するものであった可能性が考えられる。

３．竪穴住居跡の年代と構造

本遺跡において竪穴住居跡が４軒検出されている。年代は出土遺物からいずれも平安時代に属するものである。

住居跡の平面形はすべて方形を基調としている。全体形が判明するものは第２・３住居跡でそれぞれ不整な方形、正方形を呈している。柱穴は第１住居跡で壁柱穴が 13 個、第３・４住居跡で主柱穴がそれぞれ３個検出されている。周溝は第１住居跡にのみ認められる。これは全周せず北西隅に部分的にめぐるものである。カマドは各住居跡にあり、燃焼部はいずれも切り石や河原石を使用した石組みのものである。煙道は第１住居跡が石組みによるもの、第２・３住居跡が地山掘り抜きのもので、第４住居跡は土師器甕の底部を抜いたものを利用している。貯蔵穴は第１・４住居跡においてみられる。ともに楕円形を呈するものでカマドの右脇に位置している。

以上が住居跡の構造についての主な特徴である。これによれば規模や細部の構造においてはかなり多様であり、規則性を指摘し難い面はあるが、そのなかではカマドがすべて石組みによって構築されている点が注目される。同様のカマドをもつものとしては二屋敷遺跡、御所内遺跡、赤鬼土遺跡に発見例があるが、これらは本遺跡に比較的近い位置、すなわち円田盆地周辺に立地していることから、カマドの構築についての一つの地域性がうかがえるのである。

Ⅴ．ま と め

１．本遺跡は丘陵の南斜面に立地している

２．調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が４軒発見された。これらはかなり急斜面に立地しておりいずれも石組みのカマドをもつことが特徴としてあげられる。

３．遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器等が出土しており、これらの大半は平安時代に属するもので、灰釉陶器から９Ｃ中葉の実年代が想定される。

引用・参考文献

阿部博志・黒川利司（1980）：「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ－赤鬼上遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集

阿部　義平（1968）：「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめくって」『帝塚山考古学』１

伊東　信雄（1940）：「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告書」『東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第２』

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

太田　昭夫（1980）：「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ－御所内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集

小川　淳一（1980）：「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ－青木遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集

桑原　滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯

熊谷　幹男（1980）：「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ－西原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第69集

小牛田町教委（1976）：「山前遺跡」『小牛田町文化財調査報告書』

白　石　市（1979）：「白石市史」

土岐山　武（1980）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ－安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集

奈良国立文化財研究所（1975）：「平城宮発掘調査報告Ⅵ」『奈良国立文化財研究所学報第23冊』

早坂春一・阿部恵（1980）：「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ－手取・西手取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集

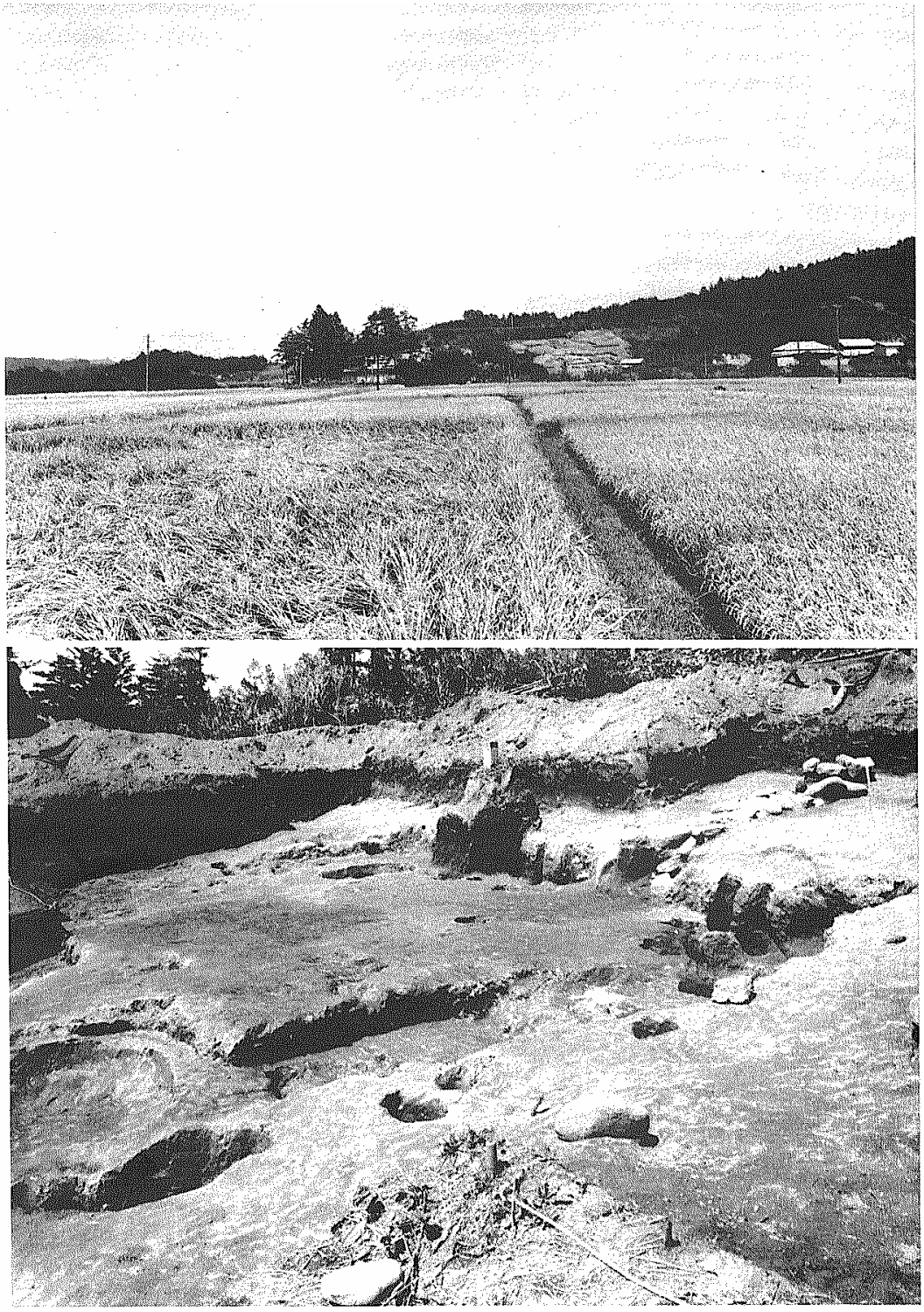
林謙作・藤沼邦彦他（1971）：「東北自動車道関係遺跡調査概報（刈田郡蔵王町地区）－二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集

藤沼邦彦・白鳥良一・高野芳宏（1971）：「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）－東山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集

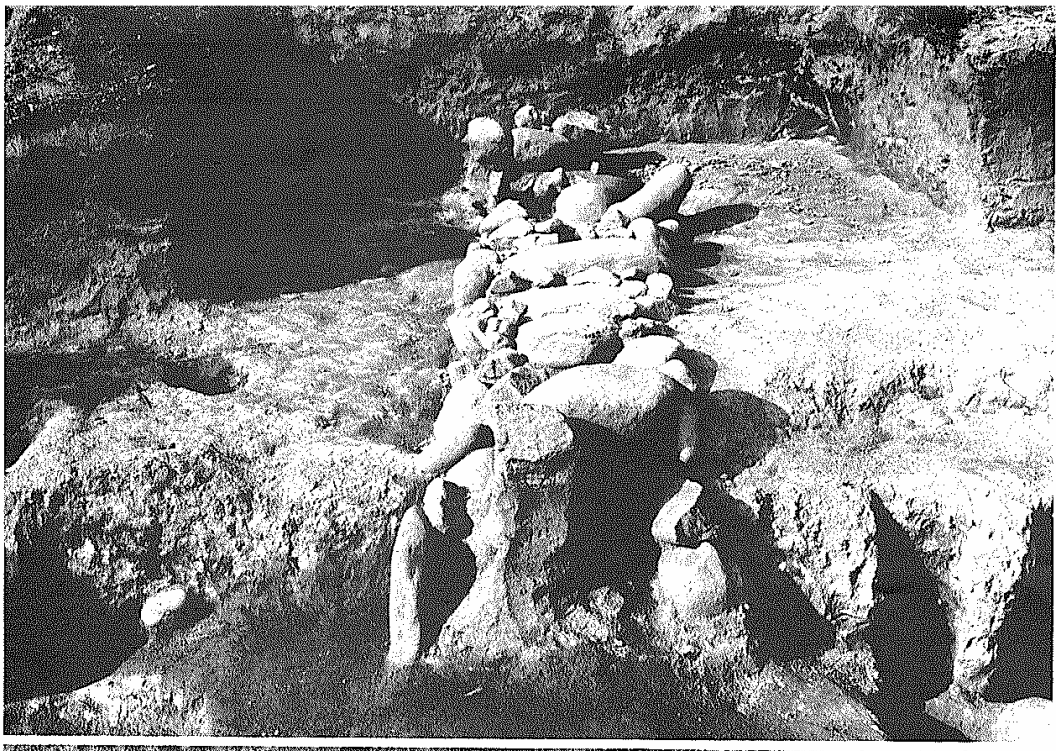
第６表　土器破片集計表

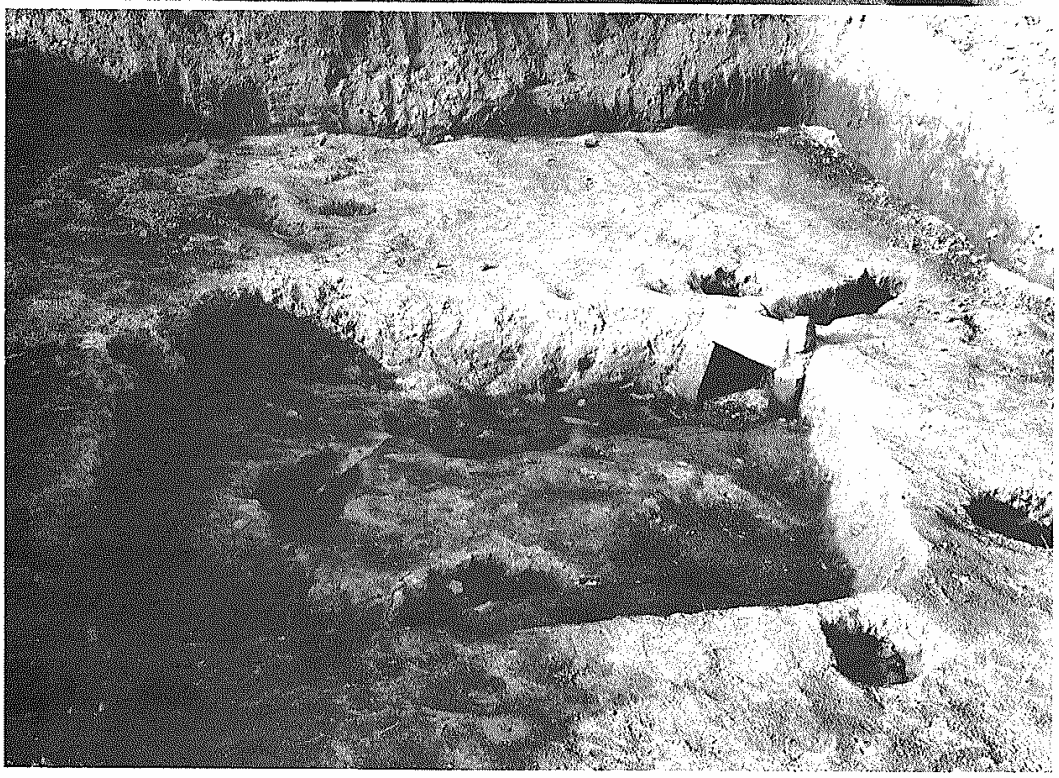
土器	器形	部位	器面調整 外面－内面	第１住居跡 床	第１住居跡 堆積層	第2住居跡 カマド	第３住居跡 床	第３住居跡 カマド	土器溜	堆積層	計
土師器	坏	口縁部	ロクロ－ミガキ(黒)	11	54	6	2	1	240	505	819
		体部	ロクロ－ミガキ(黒)	10	38			1	146	411	606
			手持ヘラケズリ－ミガキ(黒)		3					30	33
			回転ヘラケズリ－ミガキ(黒)							3	3
			不明－不明							8	8
		底部	回転糸切り	1	4				26	69	100
			回転糸切り＋回転ヘラケズリ						11		11
			回転糸切り＋手持ヘラケズリ	1	3			1	19	42	66
			回転ヘラケズリ						16		16
			手持ヘラケズリ	6	10		1		37	99	152
			台付		6					12	18
			不明		6				8	26	40
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ	1	4				7	23	35
			ロクロ－ロクロ	3	4				8	62	77
			ロクロ－ミガキ(黒)		1				12	13	26
			不明－ナデ							1	1
			不明－ロクロ							1	1
			不明－不明		1					5	6
		体部	刷毛目－刷毛目						3	9	12
			刷毛目－ナデ	2	1				9	3	15
			刷毛目－不明	1	1				2		4
			ケズリ－刷毛目	1	5				1	24	31
			ケズリ－ナデ		19		2		17	115	153
			ケズリ－ミガキ(黒)						5	18	23
			ケズリ－ロクロ		1					13	14
			ケズリ－不明	4	12				12	69	97
			ミガキ(黒)－－不明							3	3
			ナデ－刷毛目	1						1	2
			ナデ－ヘラナデ							2	2
			ナデ－ナデ	1	5				4	59	69
			ナデ－不明		3					16	19
			ロクロ－ロクロ	1	2				16	68	87
			ロクロ－刷毛目		2				1	13	16
			ロクロ－ナデ		7				11	20	38
			ロクロ－ミガキ(黒)		3				4	17	24
			ロクロ－不明	2	2				5	38	47
			平行タタキ－ナデ	1					3	2	6
			平行タタキ－不明						1		1
			不明－磨毛目	1					5	8	14
			不明－ヘラナデ		1					6	7
			不明－ナデ	1	22				13	146	182
			不明－ミガキ(黒)		1					10	11
			不明－ロクロ						1	11	12
			不明－不明	5	36				12	202	255
		底部	ムシロ状痕	1			1		3	5	10
			糸切り	1	2				3	5	11
			回転ヘラケズリ							1	1
			不明	1	3				7	32	43
	坏	口縁部		1	10				50	111	172
		体部		3	1				24	87	115
		底部	ヘラ切り	1					3	9	13
			回転糸切り		1				19	39	59
			回転糸切り＋手持ヘラケズリ							2	2
			回転ヘラケズリ							1	1
			不明						2	3	5
	甕	口縁部							2	13	15
		頸部	波状文		2					3	5
			無文						2	15	17
		体部	波状文－ナデ							1	1
			平行－青海波		2				2	19	23
			平行－オサエ	2	2				20	55	79
			平行－刷毛目						3		3
			平行－ナデ						2	6	8
			平行－不明							24	24
			格子－不明							2	2
			回転ヘラケズリ－ナデ							2	2
			ケズリ－オサエ						1	4	5
			ケズリ－ナデ	1					2	7	10
			ケズリ－ロクロ							2	2
			刷毛目－不明							1	1
			ロクロ－ロクロ	1					3	14	18
			ロクロ－ナデ	1	1						2
			不明－オサエ							9	9
			不明－刷毛目							1	1
			不明－ナデ						2	3	5
			不明－ロクロ						2	2	4
			不明－不明							15	15
	壺	体部							1	5	6
		底部							1	8	9
	蓋	口縁部								3	3
合計				67	281	6	5	3	809	2692	3863

写　真　図　版

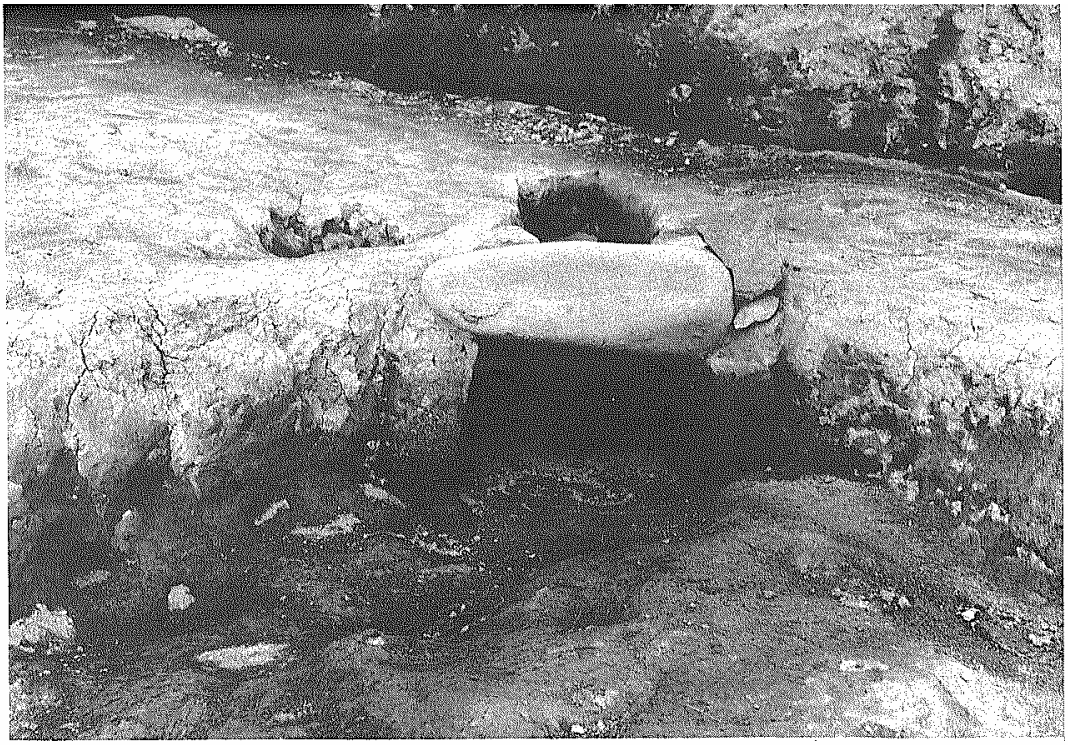


図版 1　上：遺跡遠景
下：第 1 住居跡

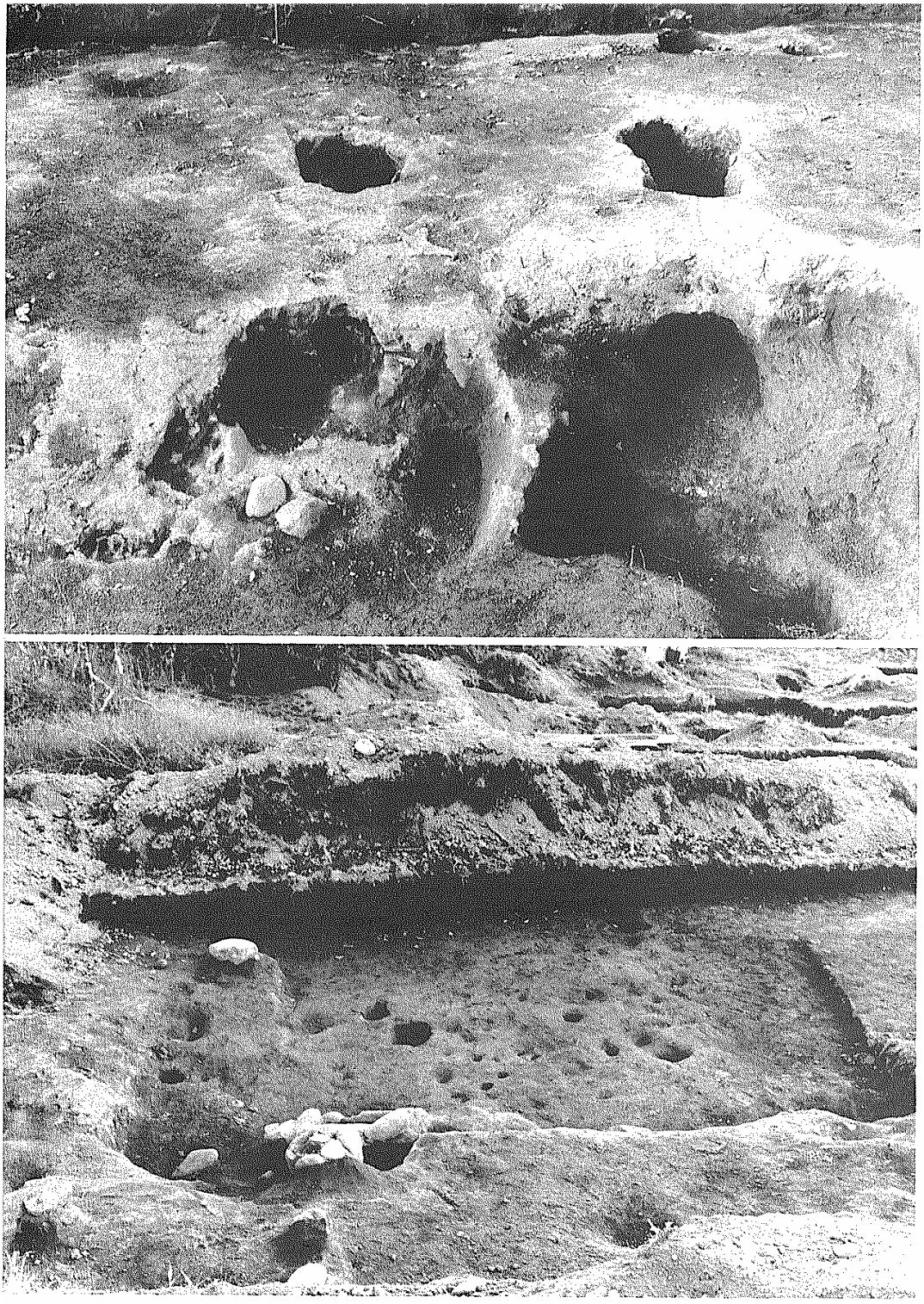




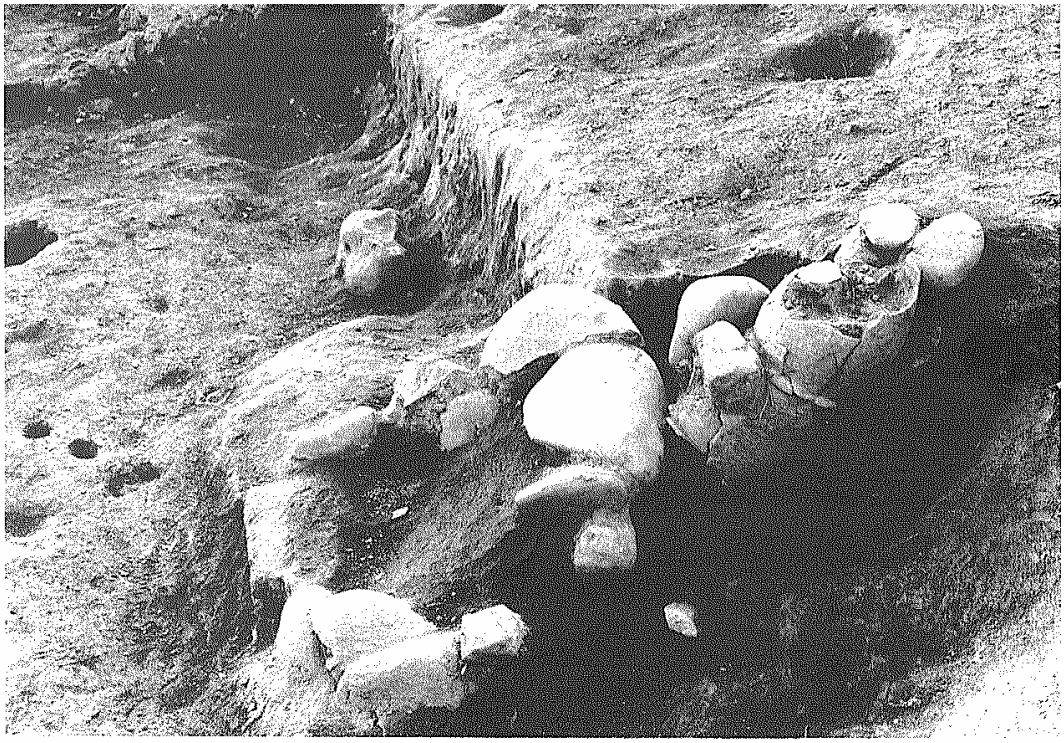
図版２　上：第１住居跡カマド
下：第２住居跡



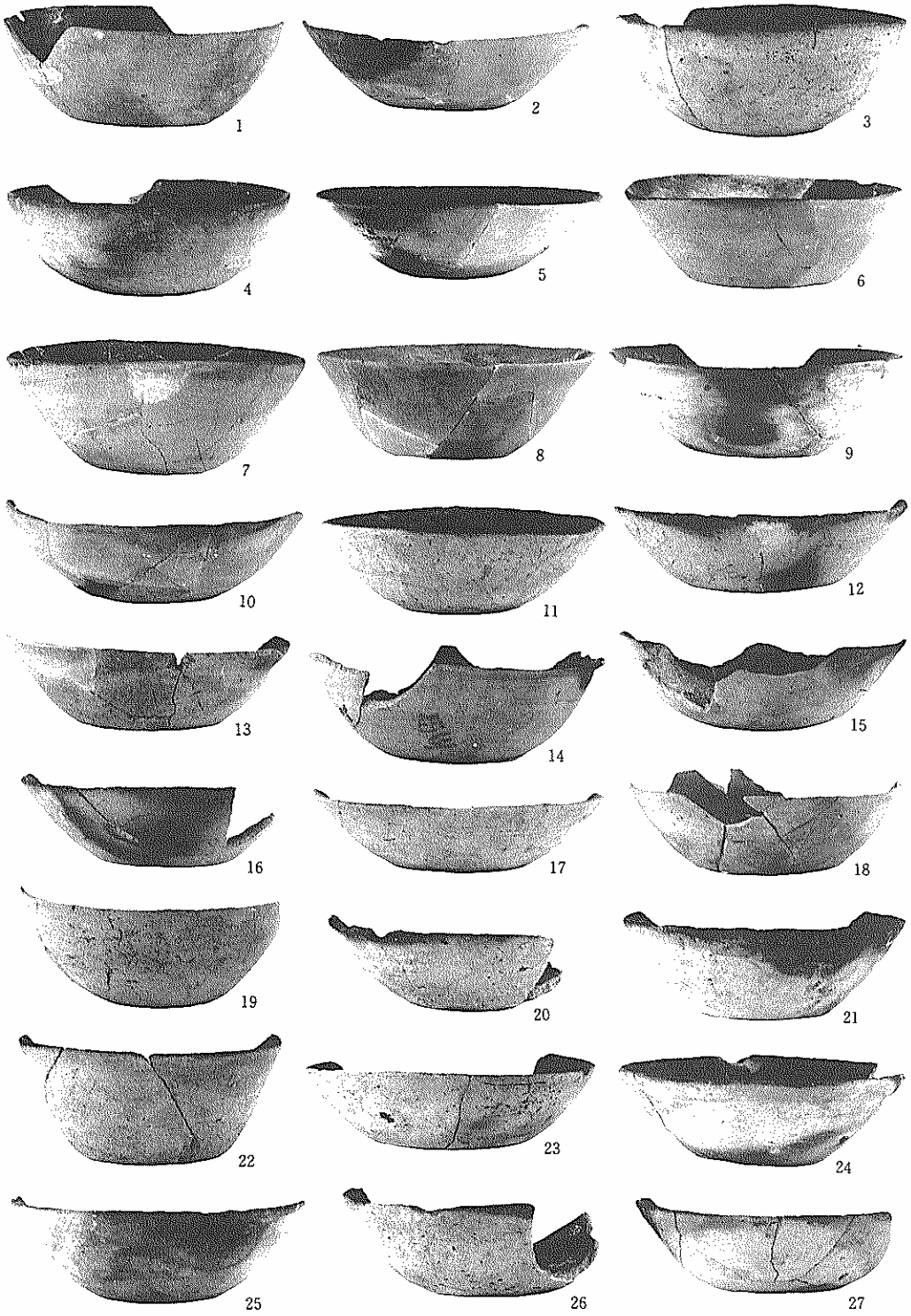
図版３　上：第２住居跡カマド
下：第３住居跡



図版４　上：第３住居跡カマド
下：第４住居跡

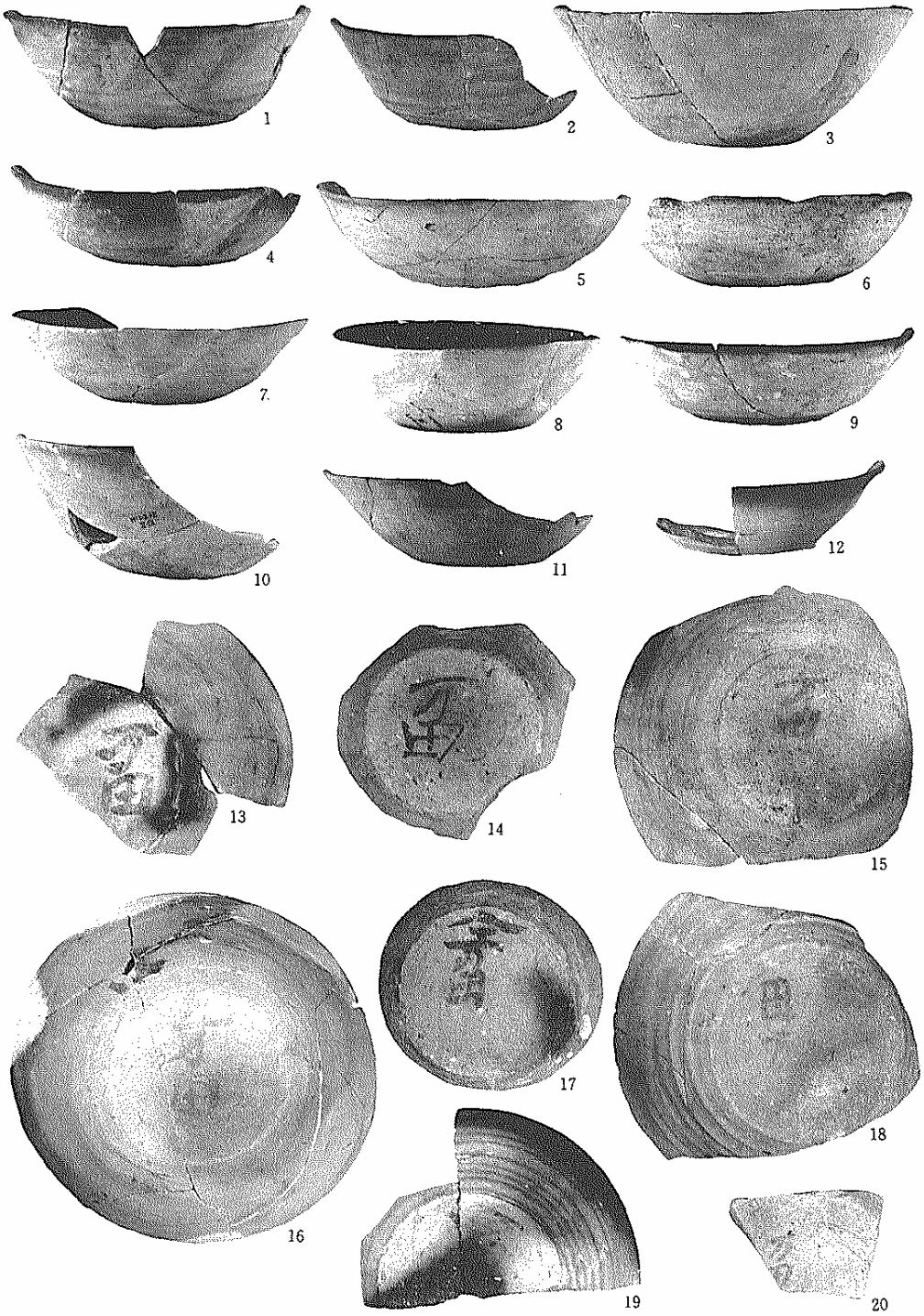


図版５　上：第４住居跡カマド
下：土器溜の土器出土状態



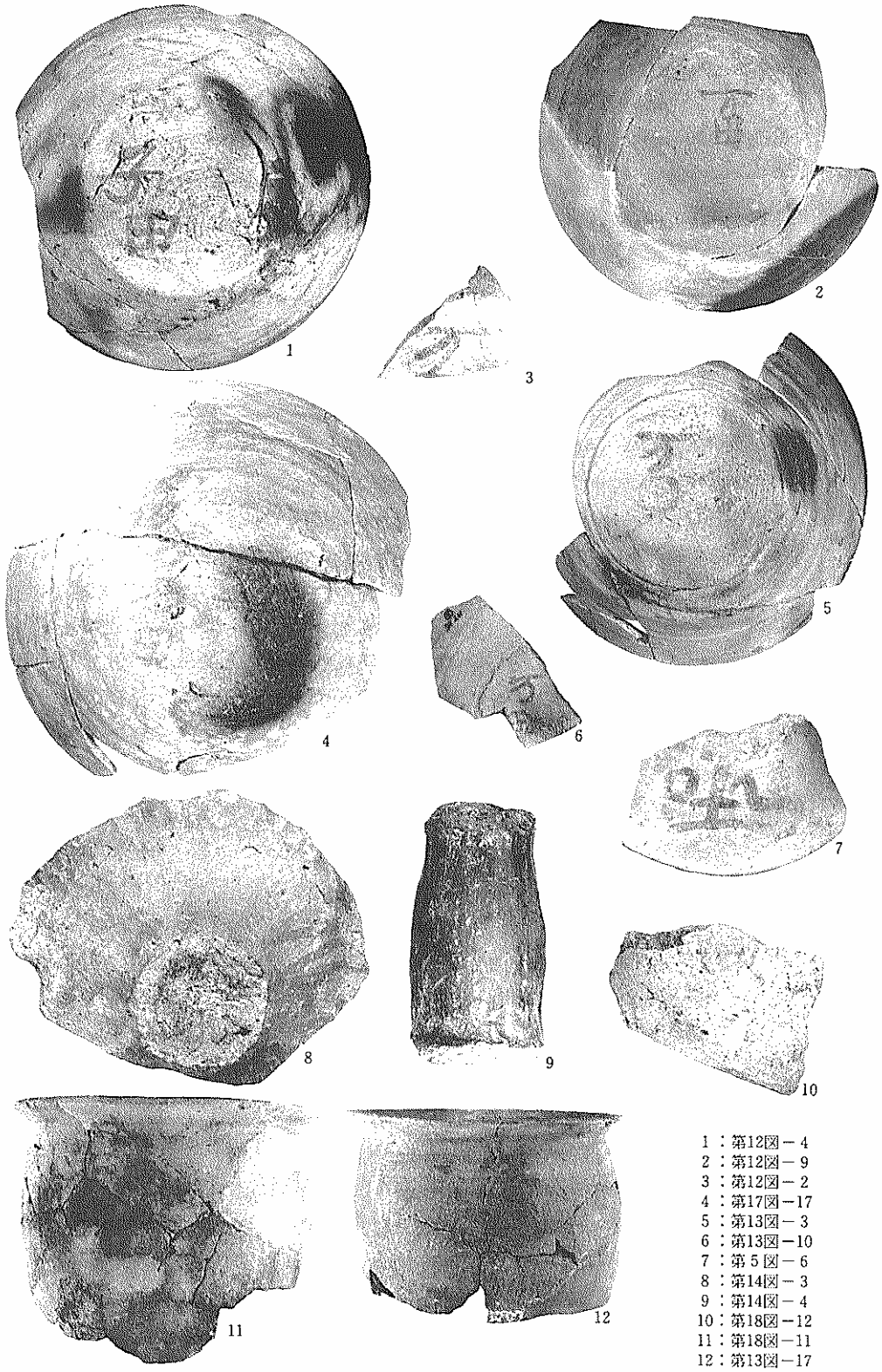
1：第5図－4　6：第10図－4　11：第12図－5　16：第11図－16　21：第10図－6　26：第10図－11
2：第7図－1　7：第10図－2　12：第11図－13　17：第10図－12　22：第10図－1　27：第11図－1
3：第9図－1　8：第13図－6　13：第10図－16　18：第11図－13　23：第11図－2
4：第9図－2　9：第12図－4　14：第13図－4　19：第11図－12　24：第11図－3
5：第12図－15　10：第12図－14　15：第10図－14　20：第10図－13　25：第11図－6

図版6　出土遺物(1)



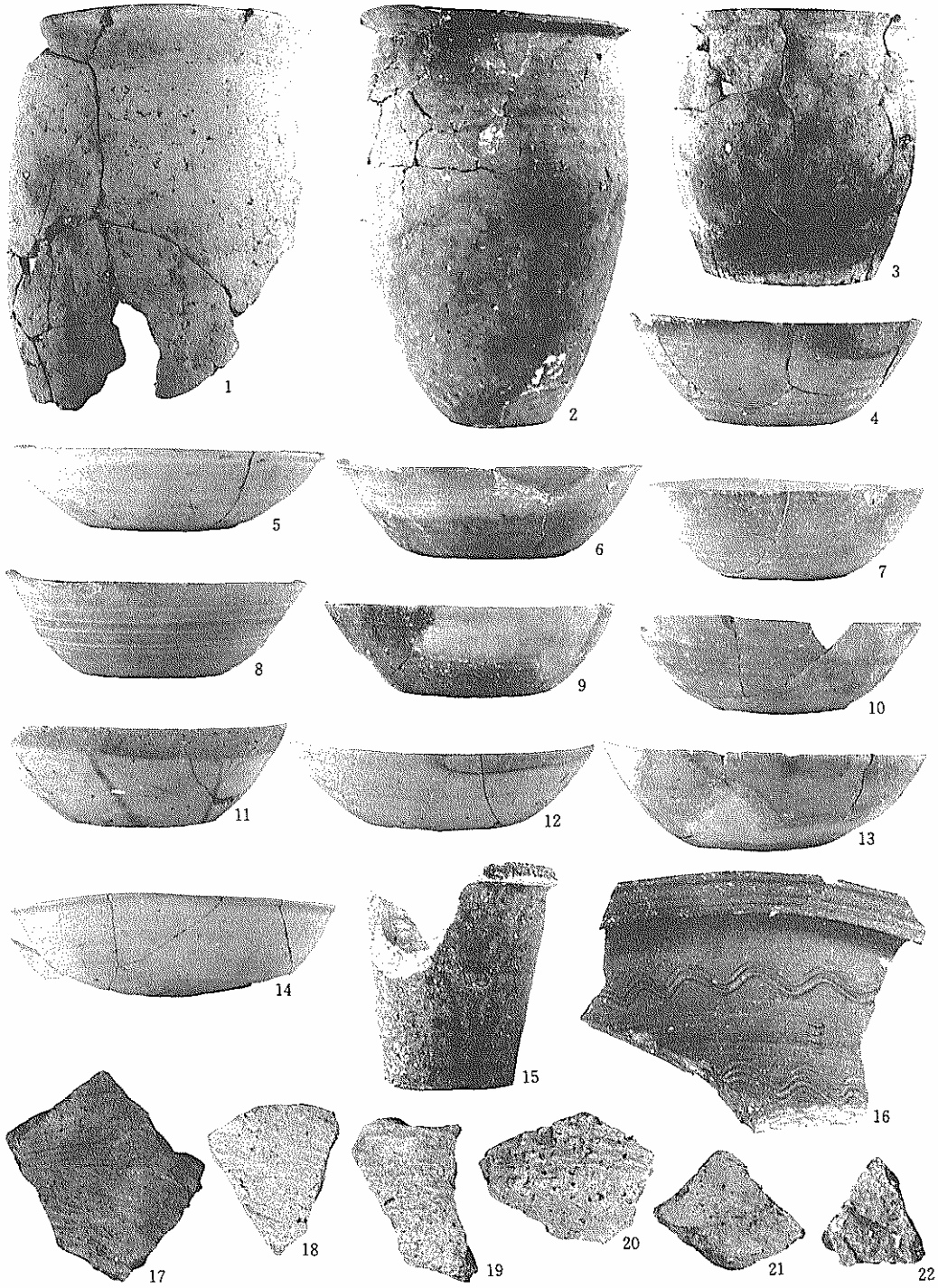
1：第13図－3　5：第18図－1　9：第17図－21　13：第9図－3　17：第17図－15
2：第13図－5　6：第17図－14　10：第17図－12　14：第5図－3　18：第13図－5
3：第17図－17　7：第17図－13　11：第17図－20　15：第17図－20　19：第17図－10
4：第18図－2　8：第17図－19　12：第17図－10　16：第10図－2　20：第10図－10

図版7　出土遺物(2)



1：第12図－4
2：第12図－9
3：第12図－2
4：第17図－17
5：第13図－3
6：第13図－10
7：第5図－6
8：第14図－3
9：第14図－4
10：第18図－12
11：第18図－11
12：第13図－17

図版８　出土遺物 (3)



1：第14図－1　6：第14図－13　11：第15図－5　16：第19図－6　21：第17図－5
2：第18図－10　7：第14図－14　12：第19図－4　17：第17図－2　22：第17図－6
3：第6図－1　8：第14図－11　13：第19図－5　18：第17図－3
4：第15図－1　9：第15図－12　14：第16図－5　19：第17図－1
5：第7図－4　10：第15図－6　15：第16図－3　20：第17図－7

図版9　出土遺物(4)

（6）東（ひがし）　足（あし）　立（だて）　遺　跡

目　　次

Ⅰ．位置と環境 …… 189
　１．遺跡の位置 …… 189
　２．周辺の遺跡 …… 189
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 192
　１．Ａ地点 …… 192
　２．Ｂ地点 …… 192
Ⅲ．調査の成果 …… 194
　Ａ．基本層序 …… 194
　Ｂ．発見された遺構とその伴出遺物 …… 194
　　１．竪穴住居跡とその伴出遺物 …… 194
　　２．炉跡 …… 203
　　３．埋設土器遺構 …… 205
　　４．ピット群 …… 206
　Ｃ．遺構に伴わない遺物 …… 207
　　１．縄文土器 …… 207
　　２．弥生土器 …… 227
　　３．土師器 …… 228
　　４．須恵器 …… 228
　　５．赤焼土器 …… 228
　　６．陶器 …… 228
　　７．土製品 …… 229
　　８．石器・石製品 …… 231
　　９．鉄製品 …… 255
　　10．古銭 …… 255
Ⅳ．考察 …… 257
　１．縄文時代後期後葉の土器 …… 257
　２．遺構の年代 …… 258
　３．遺跡について …… 259
Ⅴ．まとめ …… 260

調査要項

遺　跡　名：東足立遺跡（別称：乗越囲遺跡）

遺跡所在地：宮城県柴田郡村田町足立字乗越

遺 跡 記 号：HA（宮城県遺跡地名表登載番号：07022）

調 査 期 間：昭和46年4月6日～5月15日

調 査 面 積：約6,100 ㎡

発 掘 面 積：1,278 ㎡

調　査　員：社会教育課

志間泰治・氏家和典・藤沼邦彦・白鳥良一・佐々木安彦・加藤道男・岩渕康治

小井川和夫・佐藤庄一

調査補助員：七戸貞子

Ⅰ．位置と環境

１．遺跡の位置

東足立遺跡は宮城県柴田郡村田町足立字乗越に所在しており、村田町役場の北北東約３㎞の地点に位置している。

本遺跡の所在する柴田郡地方の地形は、奥羽山脈・高館丘陵・槻木低地から構成されている。すなわち、高館丘陵は奥羽山脈から派生して標高 200m前後のなだらかな丘陵地となって東方にのび、阿武隈川の河口から約７㎞のところまで追っている。この丘陵の南側を阿武隈川の支流である白石川が東流しており、その白石川に沿って東西方向に長く延びた扇状性低地が槻木低地である。さらに白石川の支流によって高館丘陵が開析されていくつかの山間盆地が形成されているが、そのなかで荒川と新川によって開析・形成されたのが村田盆地である。村田盆地は東西約２㎞、南北約８㎞で南北に長く、その北部で二方に分岐している。そのうちの一つが荒川の支流である一本松川によって形成されており、その上流の地域は谷底平野となって北東方向に細長くのびている。

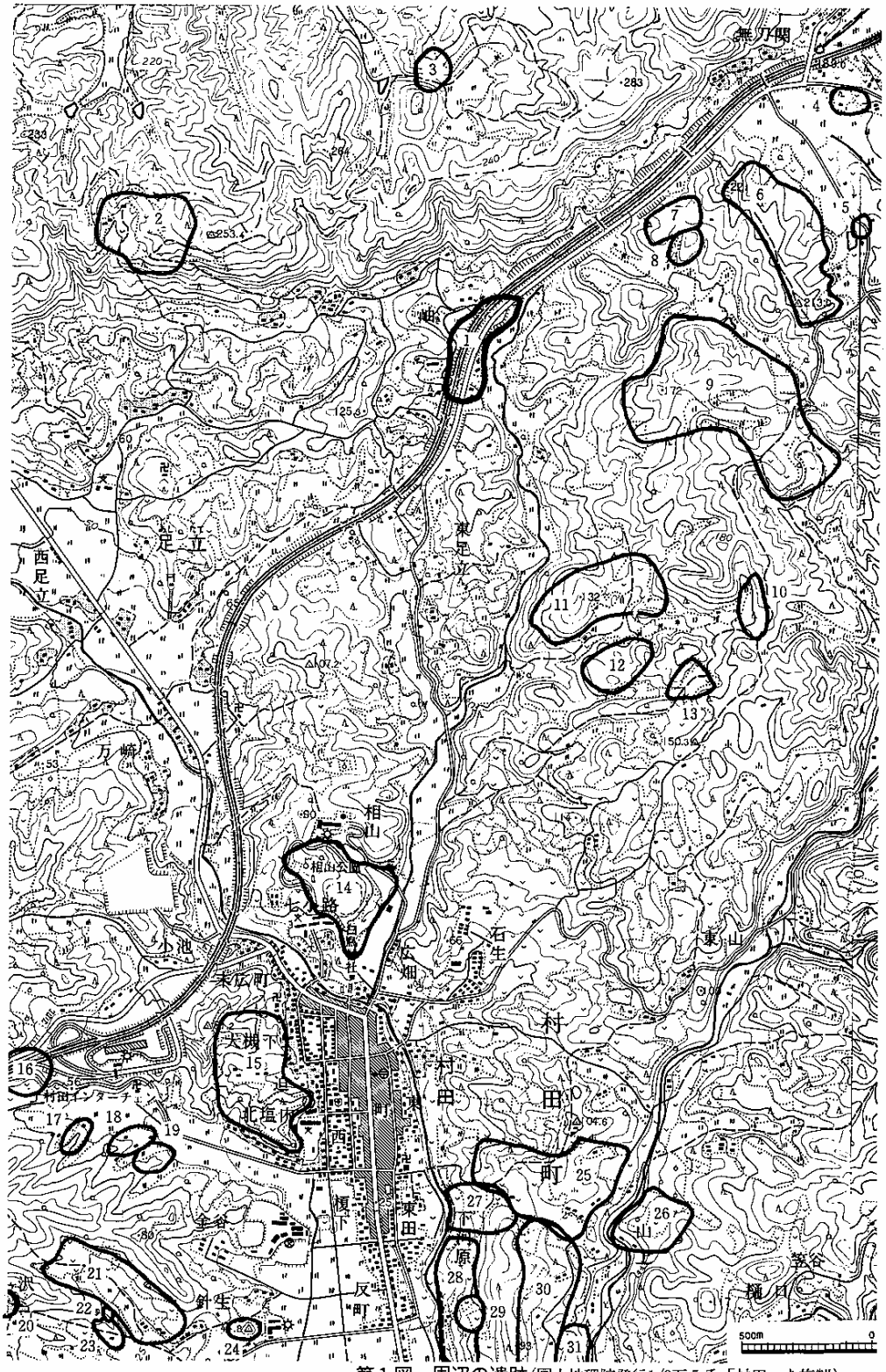
本遺跡はこの谷底平野に面して東に若干突き出た丘陵斜面に立地している。遺跡の中央部には東西に走る小さな開析谷が入り込んでおり、そのため丘陵は小半島状になって南北両側に分かれている。遺物はこの南北両側の丘陵に散布している。標高は85～95ｍであり、谷底平野との比高は５～10ｍである。

２．周辺の遺跡

村田盆地とその周辺の高館丘陵における遺跡分布状況を概観すると、村田盆地に面した丘陵裾部に濃密で、丘陵地帯内部には比較的稀薄である（宮城県教委：1981）。

本遺跡周辺の最古の遺跡は高寺下遺跡で、縄文時代早期の土器が発見されている。前期の遺跡としては大平山Ａ遺跡があげられる。中期になると遺跡数は増加し、相山遺跡(14)の他に本遺跡南側の丘陵地帯にも大成田遺跡(12)や姥ケ懐遺跡(９)などがみとめられる。後・晩期の遺跡は、本遺跡の他に大平山Ａ遺跡がある。縄文時代の遺跡はこの他に丘陵裾部にも、丘陵地帯内部にもみとめられるが、調査不充分のために時期不明のものが多い。

弥生時代の遺跡の分布状況については弥生時代研究会による詳細な遺跡地名表がある（弥生時代研究会：1979）。それによると、遺跡は村田盆地に面した丘陵裾部に集中し、特に蔵王町寄りの西側に多く確認されている。時期は円田式期の遺跡が大部分である。北沢遺跡(21)では発掘調査によって円田式期のまとまった遺物が出土している（宮城県教委：1978）。この他に、月



第１図　周辺の遺跡（国土地理院発行1/2万５千「村田」を複製）

本遺跡(27)では石鏃、山ノ入遺跡(25)ではアメリカ式石鏃がそれぞれ発見されている。

古墳時代の遺跡としては多くの古墳が確認されており、分布状況は弥生時代のそれとほぼ一致している。立地しているのは村田盆地に対して見晴しのよい丘陵頂の場合が多い。宮城県指定史跡の愛宕山古墳は主軸長約90mの前方後円墳で、陪塚を伴っている。下ノ内囲古墳(29)では円筒埴輪が出土している。本遺跡周辺の丘陵地帯には古墳や古墳時代の集落は現在のところ発見されていない。

奈良・平安時代になると丘陵裾部だけでなく丘陵地帯内部にも遺跡が確認されており、本遺跡周辺には釈山A遺跡(13)、無刀関A遺跡(６)があげられる。また、西原遺跡(16)、北沢遺跡(21)では竪穴住居跡が検出され、集落跡であったことが判明している（熊谷：1980、宮城県教委：1978)。

中世の遺跡としては、現在まで確認されているものの大部分が城館跡である。村田氏の居城と伝えられる村田城跡(15)のほか小泉城跡(31)、薄木城跡など、村田盆地を見下す丘陵突端に多いが、星野城跡、小館跡、花館跡などの遺跡が丘陵地帯内部にもみとめられている。これらの城館跡のほかに、経壇経塚が確認されている(藤沼：1975)。

このように、弥生時代、古墳時代の遺跡が丘陵裾部に偏在し、丘陵地帯内部は縄文時代、奈良・平安時代、中世の遺跡に限定されていることがわかるのであり、非常に特徴的であると言える。

遺 跡 地 名 表

番号	遺跡名	立地	時代	番号	遺跡名	立地	時代
1	東足立遺跡	丘陵斜面	縄文(後・晩)弥生、平安	17	塩内遺跡	丘陵麓	弥生(後)
2	上大平遺跡	丘陵中腹	縄文(?)	18	塩内窯跡	丘陵	近世
3	法領権現古墳	丘陵	古墳	19	塩内遺跡	丘陵麓	弥生(後)
4	三本檜窯跡	丘陵斜面	平安	20	上ヶ沢遺跡	丘陵中腹	弥生
5	菖蒲沢遺跡	丘陵麓	縄文	21	北沢遺跡	丘陵中腹	弥生(後)、奈良、平安
6	無刀関A遺跡	丘陵	縄文、奈良、平安	22	北沢塚跡	丘陵上	
7	稲荷山遺跡	丘陵中腹	縄文	23	稲崎遺跡	丘陵斜面	弥生、平安
8	無刀関遺跡	丘陵斜面		24	針生A古墳	丘陵端	古墳(後)
9	姥ヶ懐遺跡	丘陵	縄文(中)、古代	25	山ノ入遺跡	丘陵	弥生(後)、古墳
10	釈山B遺跡	丘陵斜面	縄文(?)、弥生	26	百々目木遺跡	丘陵中腹	縄文
11	大塚遺跡	丘陵	縄文	27	月本遺跡	丘陵斜面	縄文、弥生
12	大成田遺跡	丘陵中腹	縄文(中)	28	中ノ内遺跡	丘陵斜面	縄文、弥生(後、奈良、平安
13	釈山A遺跡	丘陵斜面	縄文(?)、弥生、奈良、平安	29	下ノ内囲古墳	丘陵中腹	古墳
14	相山遺跡	丘陵麓	縄文(中)、弥生(後)	30	丹野山囲遺跡	丘陵斜面	弥生
15	村田城跡	丘陵	中世	31	小泉城跡	丘陵	室町
16	西原遺跡	丘陵中腹	縄文、平安				

Ⅱ．調査の方法と経過

前述したように遺物の散布が二地点にみとめられたので、北側丘陵をＡ地点、南側丘陵をＢ地点として発掘調査を実施することにした。

１．Ａ地点

路線敷中心杭ＳＴＡ147＋60 を原点として、微地形を考慮しながら東西 54m、南北 99mの範囲に３ｍ単位のグリッドを設定した。南北の基準線の方位はN5°36′43″Wである。グリッドの名称は東西方向にアルファベット（Ｂ～Ｓ）、南北方向にアラビア数字（４～36）を付して、両者を組み合わせて表記することにした。

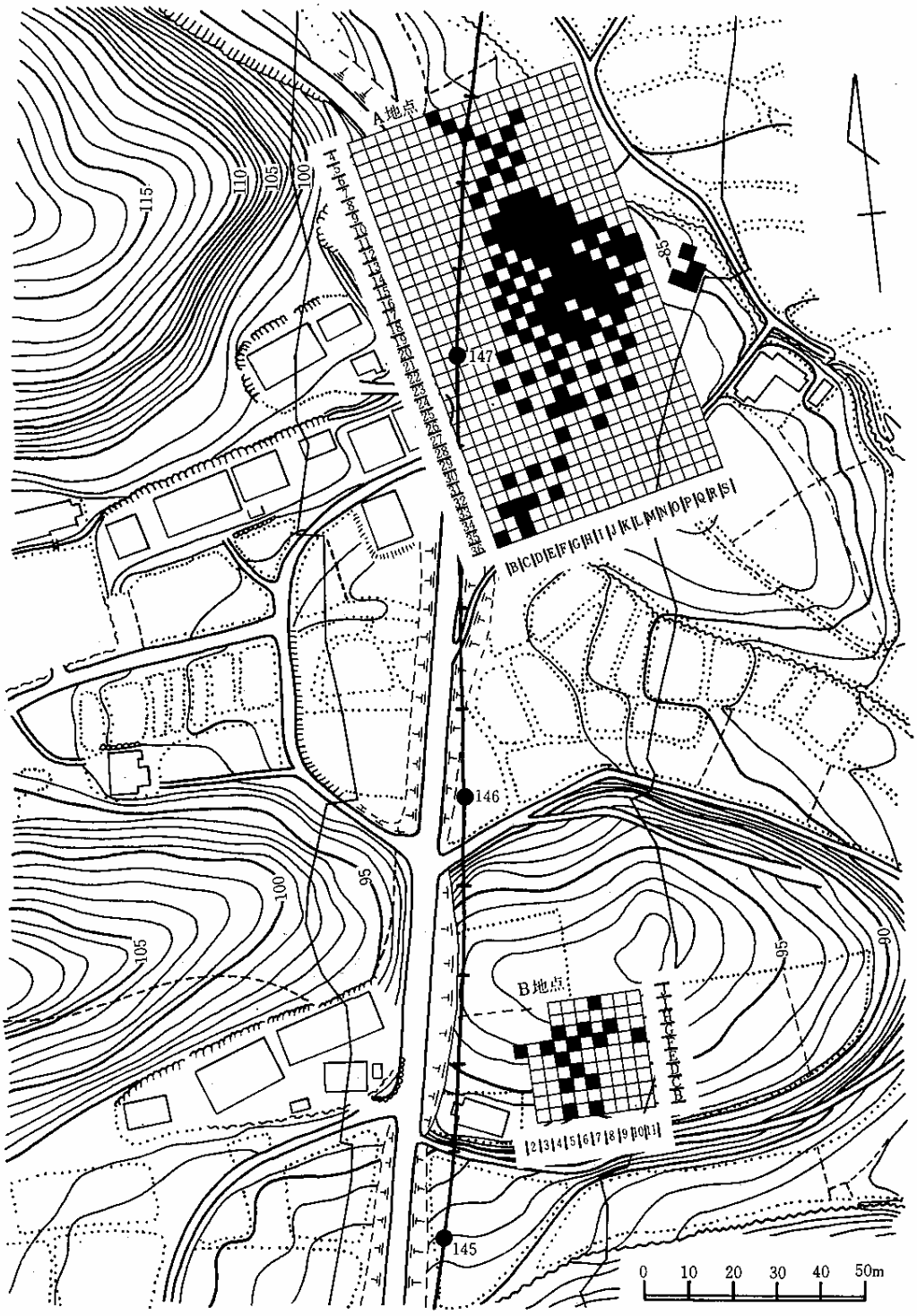
発掘調査は昭和 46 年４月６日から開始した。調査区の中央部にあたる丘陵平坦面北側から始まり順次市松状に南北両側へ発掘区をひろげていった。その結果、丘陵平坦面北側縁辺部から竪穴住居跡５軒、炉跡７基、埋設土器遺構１基、ピット群の遺構を確認し、また３枚の層から多量の遺物が出土した。しかし、丘陵南半部は表土の下がすぐ地山になっており、遺構は検出されなかった。遺構の広がりを確認するために調査区の東側に６×９ｍの新たな調査区をＶ区として設定して発掘したが、遺構は発見されなかった。

４月下旬には遺跡の概要がほぼ明らかになったので、４月 30 日に現地説明会を実施した。その後、遺構の精査を行ない、遣り方測量と平板測量とによって平面実測図を作成した。発掘調査が終了したのは５月 15 日で、発掘面積は 127 区 1,143 ㎡である。

２．Ｂ地点

遺物の散布がみとめられた丘陵南斜面に東西 30m、南北 27mの範囲で３ｍ単位のグリッドを設定した。グリッドの名称はＡ地点の場合と同様にアルファベット（Ｂ～Ｊ）とアラビア数字（２～11）で表記した。

発掘は昭和 46 年５月６日から開始した。遺構の発見はなく、２枚の層からの遺物の出土も少量であり、５月 15 日に調査を終了した。発掘面穫は 15 区 135 ㎡である。



第２図　グリッド配図

Ⅲ．調査の成果

A．基本層序

A地点の基本層序は次のとおりである。

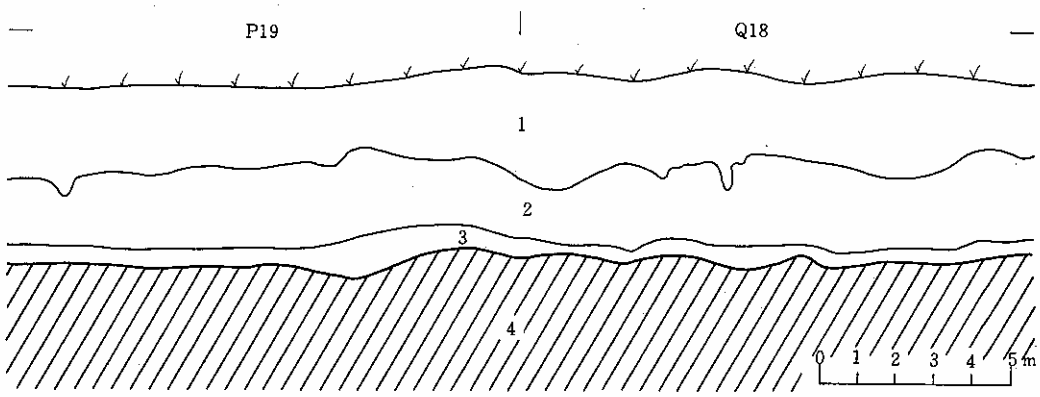
第１層　表土層である。層の厚さは約40cmである。

第２層　黒色土層である。調査区の中央部に分布している。全体的に攪乱を受けており、地山粒の混入が著しい。層の厚さは40～50cmである。最も多く遺物を含む層である。

第３層　暗褐色土層である。第２層とほぼ同じ分布範囲を示している。地山粒の混入が著しい。層の厚さは約10cmである。遺物をわずかに含む層である。

第４層　黄色粘土層で地山である。

なお、B地点では２枚の層がみとめられたが、記録の不備から図示し説明することができない。



第３図　Ｐ19区（東壁）・Q18区（西壁）断面図

B．発見された遺構とその伴出遺物

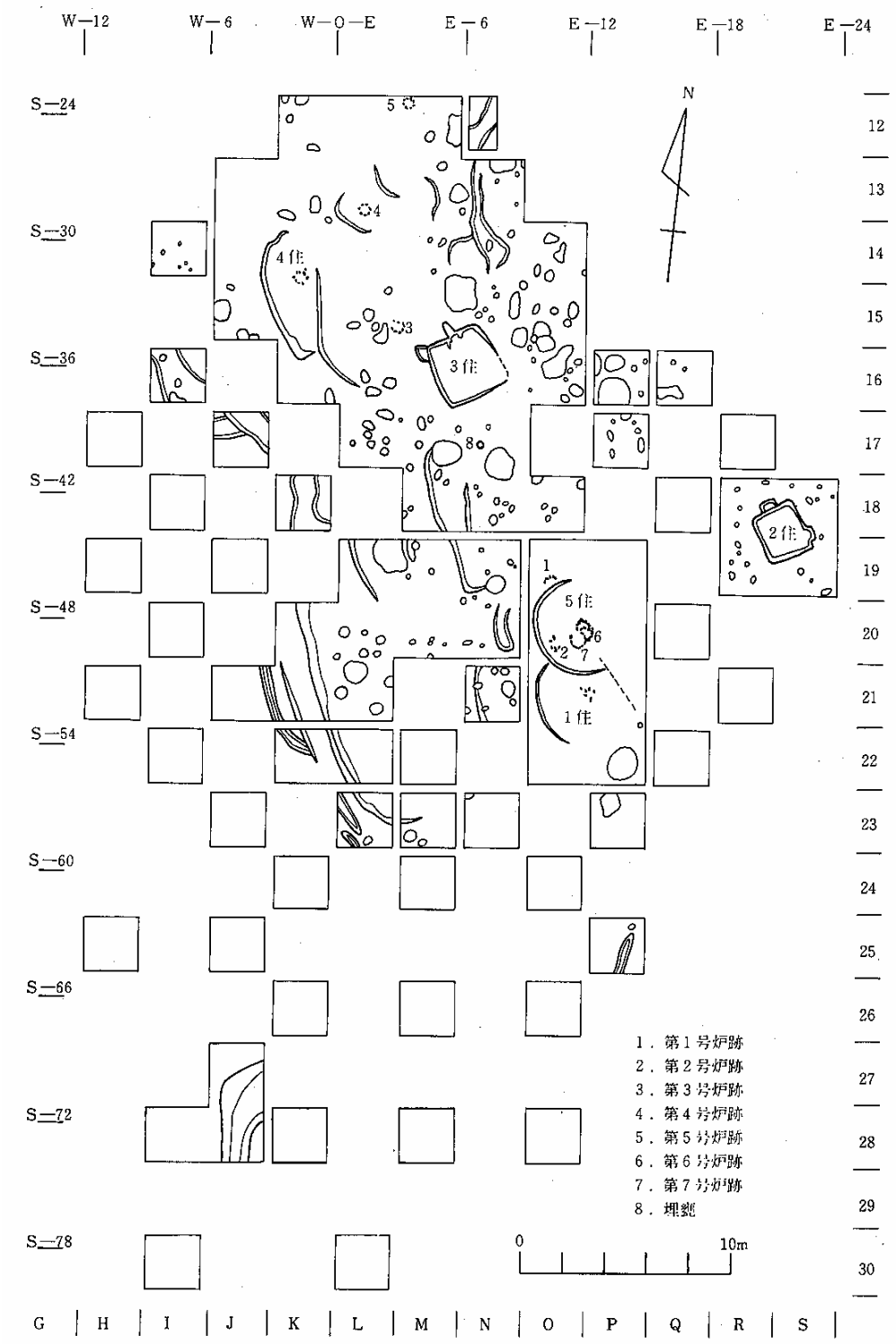
今回の調査では、遺構としてA地点から竪穴住居跡５軒、炉跡７基、埋設土器遺構１基、ピット群が発見された。

１．竪穴住居跡とその伴出遺物

第１号住居跡

〔確認・重複〕　O・P―21・22区の第３層で確認された。北側で第５号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。また東側が後世の溝によって切られている。南側は斜面のため削平されている。

〔平面形・規模〕　第５号住居跡と後世の溝によって切られているが、西側の残存している壁から推定して、直径約5.6mの円形の住居跡と思われる。


W－12
W－6
W－0－E
E－6
E－12
E－18
E－24
S－24
S－30
S－36
S－42
S－48
S－54
S－60
S－66
S－72
S－78
N
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
4住
3住
2住
5住
1住
1．第1号炉跡
2．第2号炉跡
3．第3号炉跡
4．第4号炉跡
5．第5号炉跡
6．第6号炉跡
7．第7号炉跡
8．埋甕
0
10m
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S

第4図　遺構配置図

〔壁〕　第３層と地山を壁としている。残存している西側の壁の壁高は約30cmで、その立ち上がりはゆるやかである。

〔床面〕　床面は黒色土を混入している黄色粘土である。平坦であるが、東側へ傾斜している。西側の床面と東側の床面との差は約25cmである。

〔柱穴〕　床面上から７個のピットが検出された。しかし、ピットの大きさや深さが一定せず、柱穴として組み合うものは不明である。

〔炉〕　住居跡中央部に厚さ約８cmで不整円形に焼土が堆積しており、その付近に火熱を受けて赤変した６個の円礫や板石が散乱している。本来は石囲炉であり、その規模は焼土の堆積範囲から考えて直径約60cmの円形であったものと推測される。掘り方は深さ約16cmの皿状になっている。

〔伴出遺物〕　住居に伴う遺物は床面やピットから出土した縄文土器・石器である。

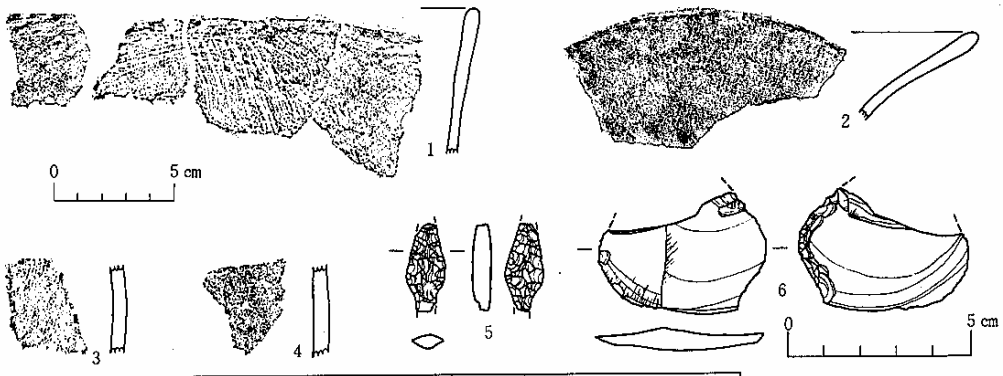
縄文土器（１～４）

図化できるものは１点もなくすべて破片である。１は口縁部が直立している単純深鉢である。内外面とも雑なミガキが加えられており、口縁部は幾分肥厚している。２は直線的に大きく開き、皿形に近い浅鉢形土器である。内外面とも丁寧なミガキが加えられ、口縁部はわずかに肥厚している。３、４はどちらも胴部被片で、３には櫛目状沈線が施され、４はミガキがなされている。これらの土器には文様を有するものがなく、時期を限定できない。

石器

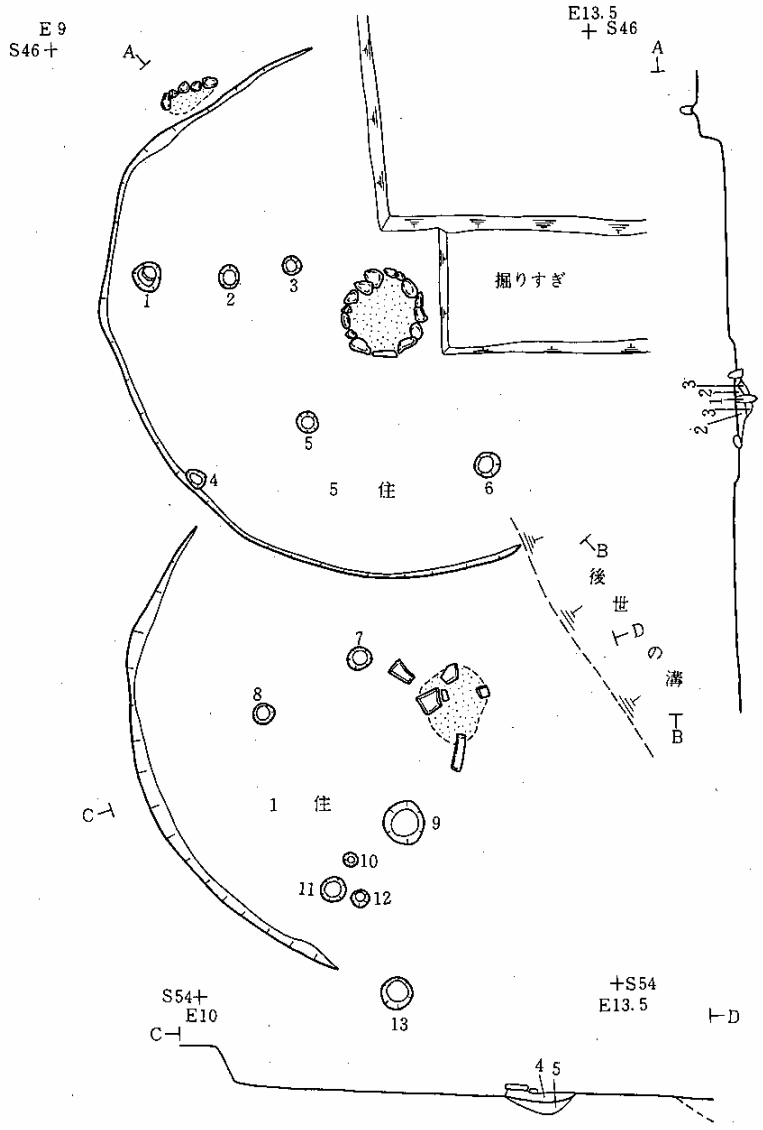
石鏃（５）　基部および尖頭部を欠損している有茎の石鏃である。基部には部分的に黒い物質がわずかに附着しており、膠着剤の痕跡と思われる。

不定形石器（６）　上半部を欠損している。主要剥離面側に片面加工の施された刃部を有している。蝶番（ちょうつがい）剥離の剥片を素材としている。



番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石　材
5	石　鏃	１住一床	(2.4)	1.0	0.5	(1.0)	玉ずい
6	不定形石器	〃	(3.3)	(4.6)	(0.7)	(12.4)	珪質頁岩

第５図　第１号住居跡伴出遺物



No	土　　性
1	攪乱
2	焼土混じりの暗褐色土、炉掘り方埋土
3	赤褐色土、炉掘り方埋土

No	土　　性
4	焼土
5	焼土、地山混じりの暗褐色土、炉掘り方埋土

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
深　さ(cm)	15	19	13	12	10	19	31	24	24	13	13	14	30

第6図　第1・5号住居跡

第５号住居跡

〔確認・重複〕　Ｏ・Ｐ―19～21 区の地山面で確認された。南側で第１号住居跡と重複している。第１号住居跡の床面を切っていることから、本住居跡の方が新しい。東側は後世の溝と掘りすぎのために確認できなかった。第１号炉跡が北西部の壁に隣接しているが、後述するように、本住居跡の方が新しいと考えられる。また、本住居跡の南西部の住居内堆積土中で第２号炉跡が、中央部の住居内堆積土中で第６・７号炉跡がそれぞれ発見されており、これらの炉跡は本住居跡よりも新しい。

〔平面形・規模〕　西側と南側の残存している壁の弯曲から推定して、直径約 4.4mの円形の住居跡と考えられる。

〔壁〕　地山を壁としており、その立ち上がりは比較的急角度である。残存壁高は最も保存の良い西側の壁で 34cm である。

〔床面〕　地山を床面としており、中央部は堅く壁の周辺はやわらかい。中央部が低く壁周辺が高い皿状になっており、その差は約 10cm である。

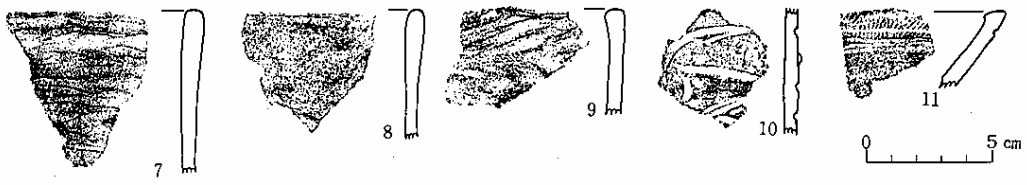
〔柱穴〕　床面から６個のピットが検出された。しかし、その配置に規則性はみとめられず、柱穴として組み合うかどうかは不明である。

〔炉〕　住居跡の中央部に検出された。15 個の円礫が円形に全周している直径約 70cm の石囲炉である。掘り方は深さ約 14cm の皿状になっている。

〔伴出遺物〕　住居に伴う遺物は床面から出土した縄文土器である。

縄文土器（７～11）

図化できるものはなく、すべて破片である。７・８・９は単純深鉢の口縁部で、いずれも口縁部は肥厚している。７・８は内外面ともミガキが施されているが、９は口唇部から 1.5cm の幅でミガキが加えられているが、それ以下には特徴的な器面調整がみとめられない。10 は体部破片で沈線により弧線連結文がえがかれており、低い瘤状小突起が貼付されている。文様外にはミガキが加えられているが、文様内にはミガキが施されていない。11 は底部から内弯気味に立ち上がる浅鉢形土器で、口縁部に刻目による平行線文が２条めぐっている。10・11 は文様上の特徴から金剛寺式(伊東：1957)に属すると考えられる。



第７図　第５号住居跡伴出遺物

第４号住居跡

〔確認・重複〕　Ｊ・Ｋ―14～16 区の第３層上面で確認された。東側が後世の溝状の落ち込みによって切られており、また北側の壁は削平されている。

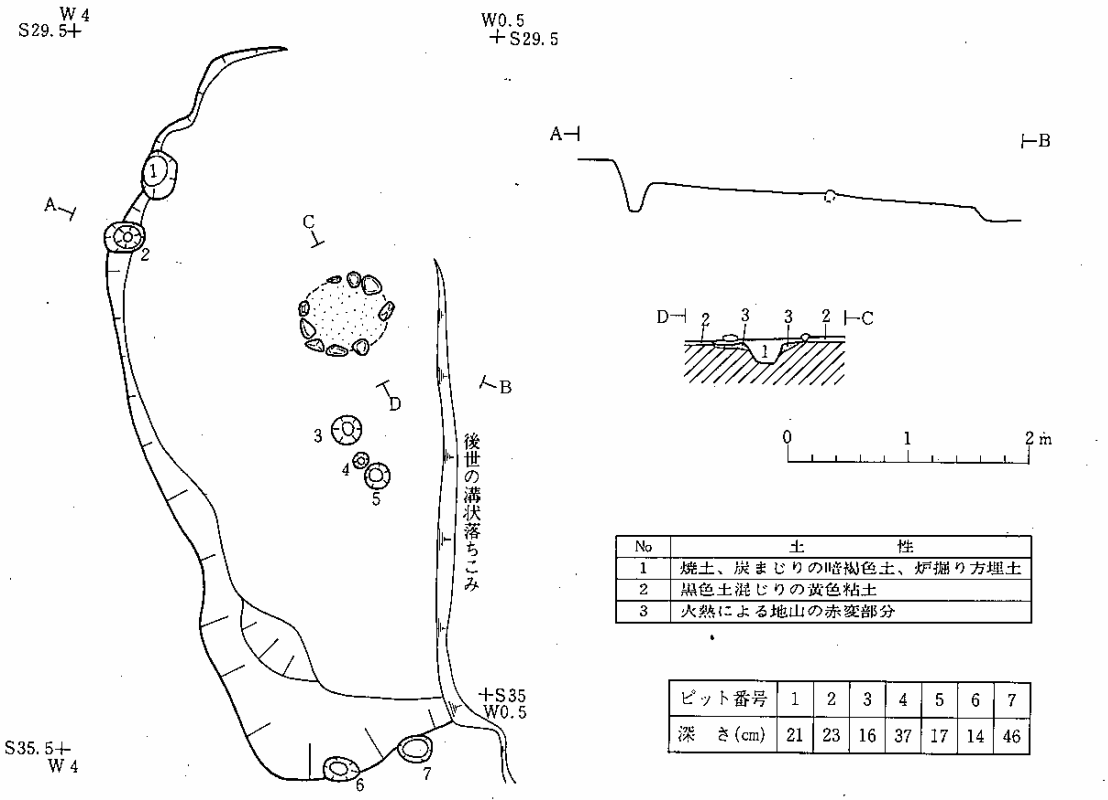
〔平面形・規模〕　西側の壁は円弧をなしているが、南側の壁は不整形になっており、これらのことから推定して、本来は直径が９ｍ前後の不整円形の住居跡と思われる。

〔壁〕　第３層と地山を壁としている。西側の壁高は約 20cm で、立ち上りは比較的急角度である。南側の壁高は約 30cm で、なだらかに傾斜している。

〔床面〕　床面は黒色土を混入している黄色粘土である。平坦であるが、北西方向から南東方向へ傾斜しており、その差は約 16cm である。また、中央部が堅く、壁の周辺はやわらかい。

〔柱穴〕　床面から３個、壁に接して４個の計７個のピットが検出された。しかし、これらが柱穴として組み合うかどうかは不明である。

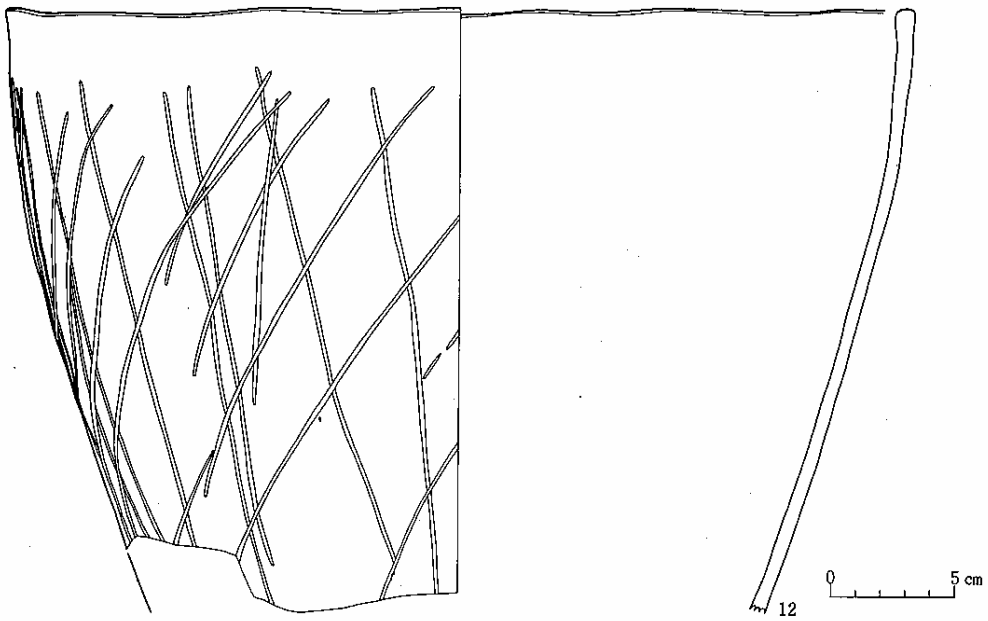
〔炉〕　住居跡中央部に検出された。直径約 70cm の円形の石囲炉である。９個の円礫がほぼ全周している。掘り方は中央部が深さ 20cm のピット状になっており、周辺部は深さ４cm の浅い皿状になっている。



No	土　　性
1	焼土、炭まじりの暗褐色土、炉掘り方埋土
2	黒色土混じりの黄色粘土
3	火熱による地山の赤変部分

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7
深　さ(cm)	21	23	16	37	17	14	46

第８図　第４号住居跡



第９図　第４号住居跡伴出土器

〔伴出遺物〕　住居に伴う遺物は、ピットから出土した縄文土器である。

縄文土器（12）

単純深鉢形土器で約４分の３残存している。口唇部から約３cm の幅でミガキが加えられているが、それ以下にはミガキが施されず、条線が縦位あるいは斜位に不規則に施されている。口縁部は肥厚している。このような土器は明確な時期を決することはできないが、後期後葉のものと思われる。

第２号住居跡

〔確認〕　Ｒ・Ｓ―18・19 区の第３層上面で確認された。

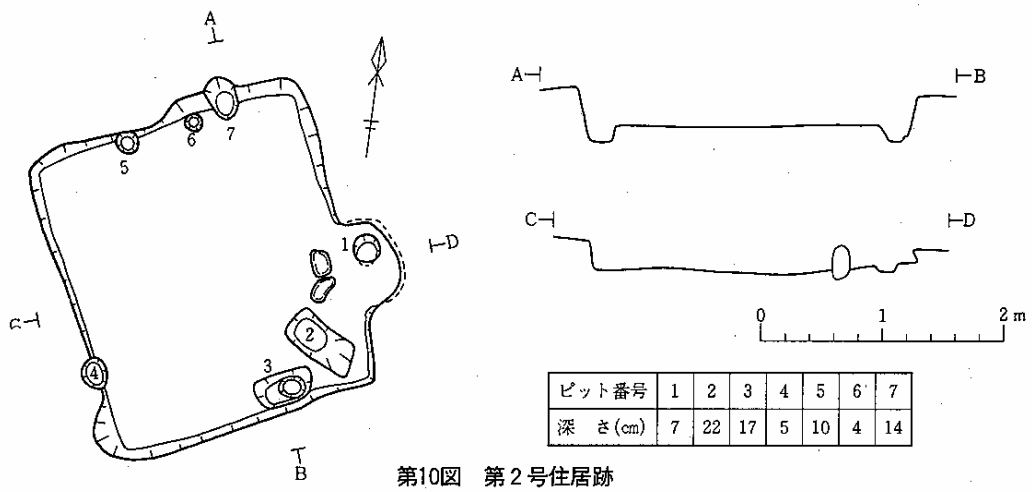
〔平面形・規模〕　東辺 2.4m、西辺 2.4m、南辺 2.1m、北辺 2.2mの方形の住居跡である。

〔壁〕　第３層と地山を壁としている。南西隅を除いて、立ち上がりは急角度である。残存壁高は東壁で 20cm、西壁で 42cm、南壁で 25cm、北壁で 31cm である。

〔床面〕　地山を床面としている。全体的に非常に堅い。ほぼ水平であるが、凹凸が著しい。

〔柱穴〕　床面から７個のピットが検出された。しかし、柱穴がどうかは不明である。

〔カマド〕　東壁南寄りに付設されている。煙道部は検出されなかった。カマド主軸線の方向はN-66°-Eである。燃焼部は壁から住居外側に構築されており、幅 74cm、奥行 40cmである。側壁はほぼ直立しているが、奥壁は約４cm袋状にえぐりこんでいる。燃焼部の中央に深さ７cmの浅いピットがみとめられる。燃焼部前面には柱状の河原石が２個直立しており、支脚として使



ピット番号	1	2	3	4	5	6	7
深　さ(cm)	7	22	17	5	10	4	14

第10図　第２号住居跡

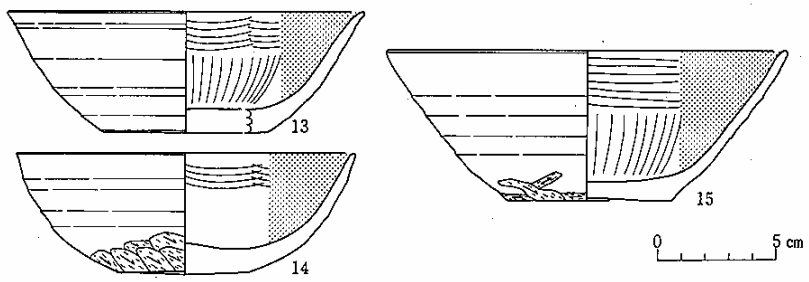
用された可能性がある。

〔貯蔵穴状ピット〕　カマド右脇の住居跡南東隅で検出されたＰ$_2$は 60×28cmの長方形を呈しており、深さ 22cmである。遺物は出土しなかったが、規模・位置などから貯蔵穴状ピットと思われる。

〔伴出遺物〕　住居に伴う遺物はカマドやピットから出土した土師器である。

土師器

坏(13～15)：いずれも製作に際してロクロを使用しており、底部の切り離し技法は再調整のため不明である。13 は底部全面に手持ちヘラケズリが施されており、内弯気味に立ち上がって口縁部でやや外反している。14・15 は体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが施されている。14 は内弯気味に立ち上がっており、15 は直線的に外傾している。これら３点の坏は内面がヘラミガキ、黒色処理されている。これらは、ロクロ使用という特徴から表杉ノ入式（氏家：1957）に比定することができる。



第11図　第２号住居跡伴出土器

第３号住居跡

〔確認・重複〕　M・N―15・16 区の第３層上面で確認された。東壁中央部が後世の掘り込みによって切られている。また東壁の南側が削平されている。

〔平面形・規模〕　東辺 2.9m、西辺 2.9m、南辺 2.6m、北辺 2.4mの方形の住居跡である。

〔壁〕　第３層と地山を壁としている。立ち上がりは比較的ゆるやかである。残存壁高は東壁で５㎝、西壁で 31㎝、南壁で６㎝、北壁で 20㎝ である。

〔床面〕　地山を床面としている。堅くはない。ほぼ平坦であるが西側から東側へ傾斜している。その差は 13㎝ である。

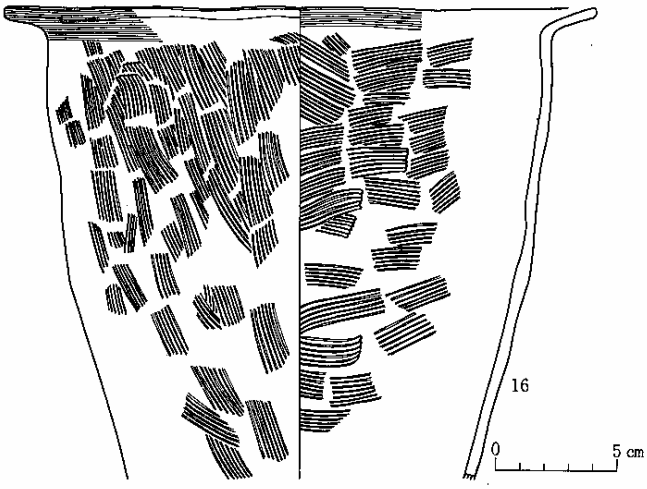
〔柱穴〕　床面から 11 個のピットが検出された。しかし、柱穴がどうかは不明である。

〔カマド〕　北壁中央部に付設されている。カマド主軸線の方向はN-31°-Wである。燃焼部の規模は幅 50㎝、奥行 60㎝である。側壁は粘土によって構築されており、右側壁が 30㎝、左側壁が 50㎝ほど張り出している。燃焼部の奥には深さ６㎝の浅いピットがみとめられる。燃焼部奥壁は住居の北壁を利用しており、急角度に立ち上がって煙道部に接続している。煙道部は焼土の堆積している底面だけが確認された。煙道部の長さは 90㎝、幅約 20㎝である。

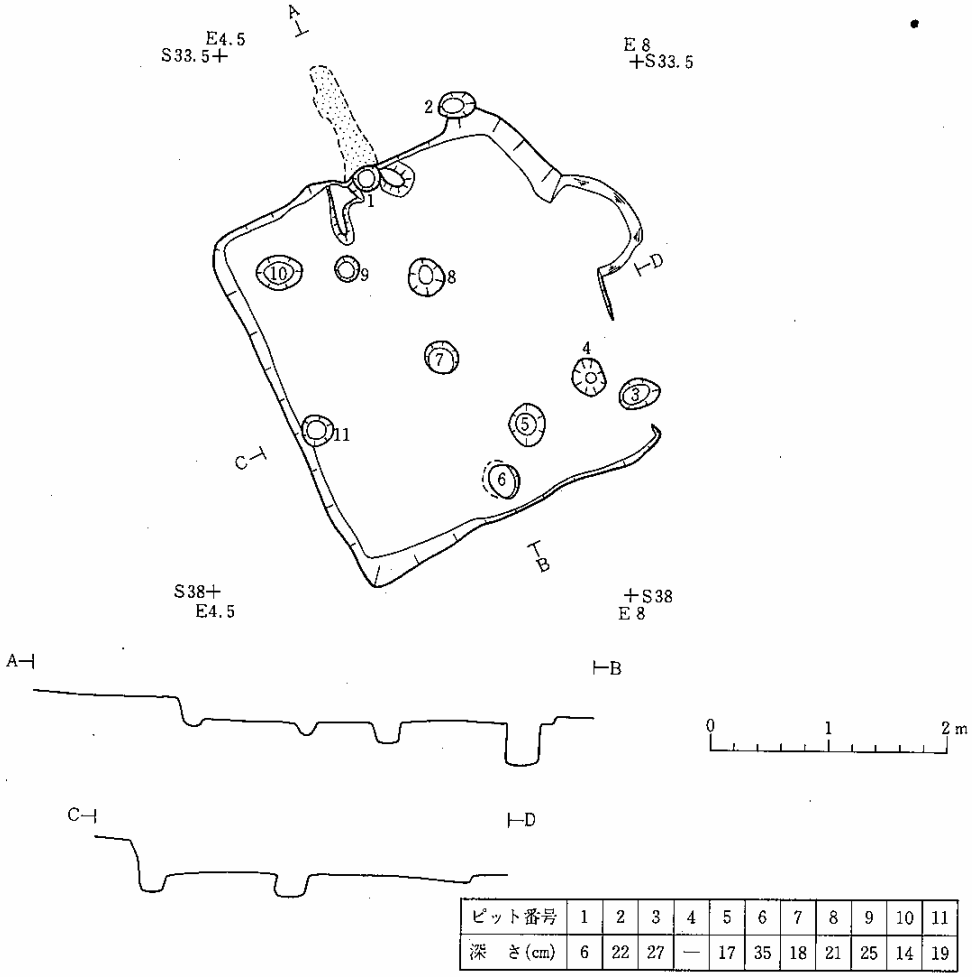
〔伴出遺物〕　住居に伴う遺物は、ピットから出土した土師器である。

土師器

甕(16)：製作に際してロクロを使用していないものである。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は横に大きく外折している。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ調整されており、体部外面は縦方向の刷毛目調整が、体部内面は横方向の刷毛目調整が施されている。このような特徴の土師器甕は時期を限定できない。



第12図　第３号住居跡伴出土器



ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深　さ(cm)	6	22	27	—	17	35	18	21	25	14	19

第13図　第３号住居跡

２．炉跡

すでに述べたように、今回の調査で炉跡が７基発見された。これらは住居に伴う炉跡なのか単独の炉跡であるのかは調査中に確認することができなかった。ここでは炉跡についてのみ記載することにする。

第１号炉跡

第５号住居跡の北西部に隣接してO19 区の地山面で確認された。５個の円礫が弧状に並んでおり、内部には焼土が堆積している。礫の配置状況から考えて、本来は直径１m位の円形の石囲炉であり、第５号住居跡によって切られてしまったものと思われる。掘り方の有無は不明である。本炉跡に伴う出土遺物はない。

第2号炉跡

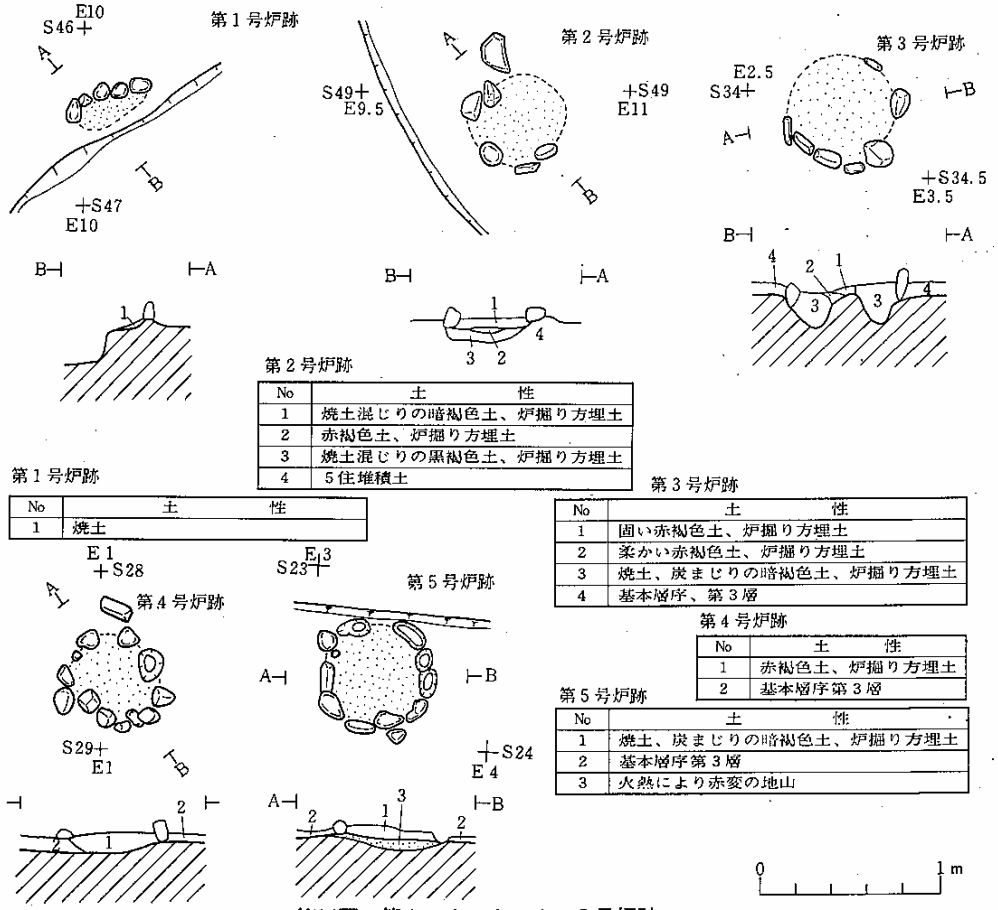
第５号住居跡南西部分の住居内堆積土中で確認された。６個の礫が不規則に並んでいるが、内部に堆積している焼土の分布範囲から考えて直径55cm位の石囲炉であったものと推測される。掘り方は深さ約15cmの皿状になっている。本炉跡に伴う出土遺物はない。

第3号炉跡

Ｌ15区とM15区とにまたがって第３層で確認された。直径約70cmの円形の石囲炉で、礫が炉の南側に半円状に並んでいる。本来は北側にも礫が並んでいたのかどうかは確認できなかった。掘り方は中央部を島状に残して深さ約20cmのドーナツ形になっている。本炉跡に伴う出土遺物はない。

第4号炉跡

Ｌ13区の第３層で確認された。直径約60cmの円形の石囲炉である。円礫がほぼ全周しているが、抜き取り痕と思われる浅いピットが１個みとめられる。掘り方は深さ５～10cmの浅い皿状になっている。本炉跡に伴う出土遺物はない。



第２号炉跡

No	土　　性
1	焼土混じりの暗褐色土、炉掘り方埋土
2	赤褐色土、炉掘り方埋土
3	焼土混じりの黒褐色土、炉掘り方埋土
4	５住堆積土

第１号炉跡

No	土　　性
1	焼土

第３号炉跡

No	土　　性
1	固い赤褐色土、炉掘り方埋土
2	柔かい赤褐色土、炉掘り方埋土
3	焼土、炭まじりの暗褐色土、炉掘り方埋土
4	基本層序、第３層

第４号炉跡

No	土　　性
1	赤褐色土、炉掘り方埋土
2	基本層序第３層

第５号炉跡

No	土　　性
1	焼土、炭まじりの暗褐色土、炉掘り方埋土
2	基本層序第３層
3	火熱により赤変の地山

第14図　第１・２・３・４・５号炉跡

第５号炉跡

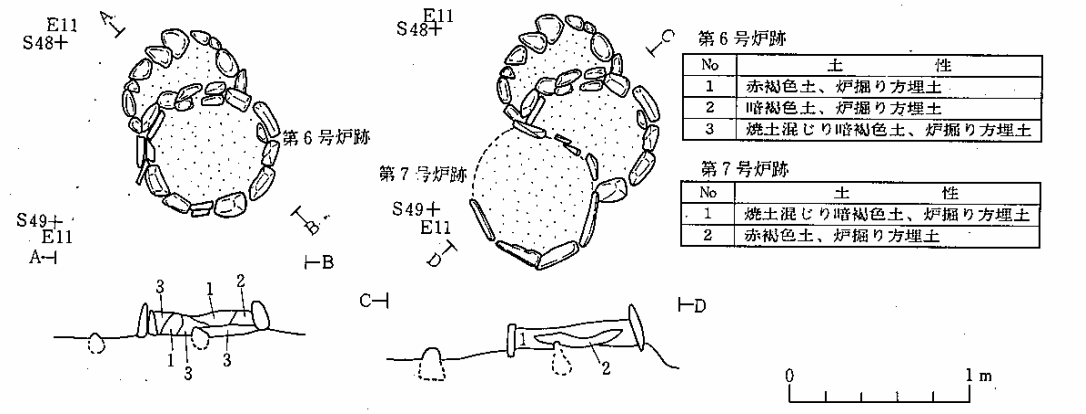
M12 区の北壁に接して第３層で確認された。直径約 65cm の円形の石囲炉である。西側に８個の礫が半円状に並んでおり、東側には抜き取り痕と思われる浅いピットが４個半円状に並んでいる。炉の掘り方は深さ約 10cm の浅い皿状になっている。炉直下の地山が約７cm の深さまで火熱を受けて赤変している。本炉跡に伴う出土遺物はない。

第６号炉跡

第７号炉跡の直下で確認され、第５号住居跡の炉跡の直上に位置している。直径約 80cm の円形の石囲炉であり、円礫および板状の礫が全周している。掘り方は深さ約 15cm の円筒形になっている。本炉跡に伴う出土遺物はない。

第７号炉跡

O20 区の第５号住居跡の堆積土中で確認された。第６号炉跡の直上に位置している。直径約 75cm の円形の石囲炉である。直立した８枚の板状の礫が４分の３周しているが北西側には礫がみとめられない。掘り方は深さ約 10～15cm の円筒形になっている。本炉跡に明確に伴う出土遺物はない。



第６号炉跡

No	土　　性
1	赤褐色土、炉掘り方埋土
2	暗褐色土、炉掘り方埋土
3	焼土混じり暗褐色土、炉掘り方埋土

第７号炉跡

No	土　　性
1	焼土混じり暗褐色土、炉掘り方埋土
2	赤褐色土、炉掘り方埋土

第15図　第６・７号炉跡

３．埋設土器遺構

N17 区の第３層で確認された。口縁部を欠損している深鉢形土器が正位の状態で埋設されていた。確認面から土器底部までの深さは 26cm である。土器内の堆積土は焼土と炭化物が混入している黒色土である。土器内からの出土遺物はない。掘り方は確認できなかった。

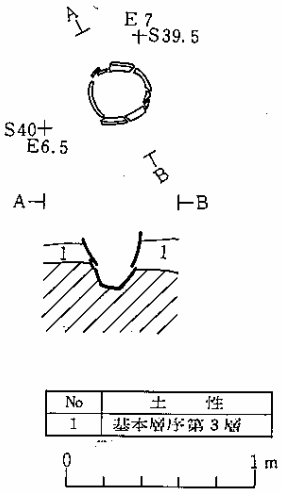
埋設土器（17）

体部が内弯気味に立ち上がっている単純深鉢形土器である。口縁部を欠損している。内外面ともミガキが施されている。底部は外縁がわずかに張り出している。残存高は30.3cm、底部径

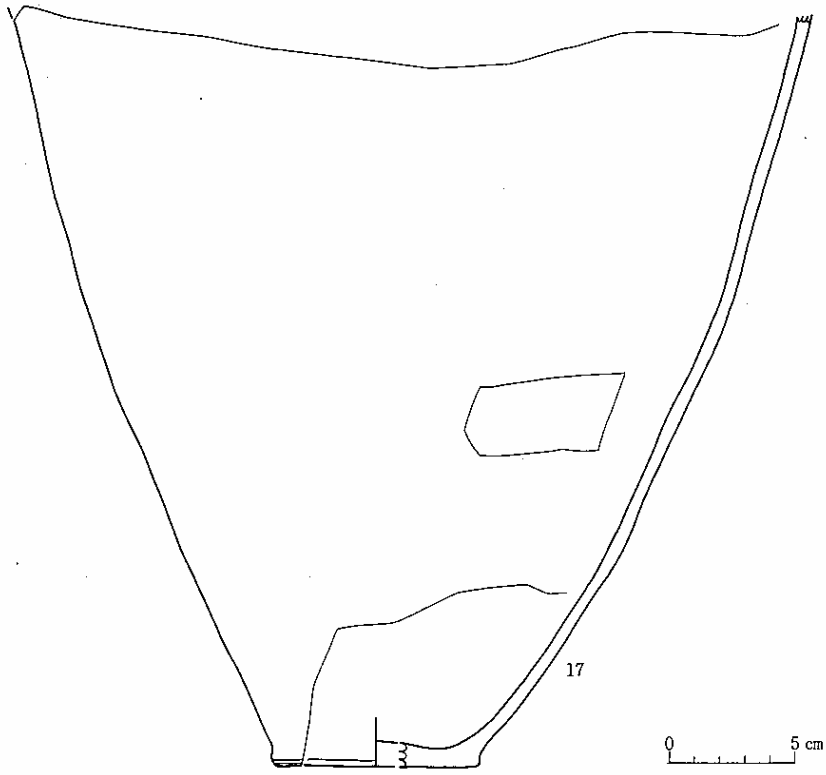
は8.2cmである。

４．ピット群

A地点の丘陵平坦部北半から約400個のピットが発見された。ピット群の大部分は地山面で確認されたが、発掘区の壁面で観察すると第１層から掘り込まれているものもみとめられる。平面形は円形を基調とするものが多く、大きさは直径約10～50cmのものが大部分である。これらのピット群の中で、住居跡や建物跡の柱穴として組み合うものはみとめられなかった。遺物を出土しているピットもあるが、ピットの時期を示すものかどうかは不明である。



第16図　埋設土器遺構



第17図　埋　設　土　器

Ｃ．遺構に伴わない遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、土製品、石器・石製品、鉄製品、古銭などで、その総量は平箱約 50 箱分である。これらの遺物はＡ、Ｂ両地点の各層および各遺構内の堆積土から出土したが、出土状況は層位的なまとまりを示さず混在していたので、以下で一括して述べることにする。なお、実測もしくは拓影可能な遺物は極力図示することにつとめたが、その他の遺物は末尾の集計表に一括した。

１．縄文土器

最も出土量が多く、遺物総量の約８割を占める。しかし、完形土器や大形破片が少なく文様構成の不明なものが多い。

〔早期の土器〕

18～20 は、いずれも数条の沈線によって区画された中に、アカガイあるいはサルボウ等の貝殻腹縁による刺突文が施されているものである。胎土に繊維の混入はみとめられない。これら３点の土器は高清水町大寺遺跡出土の土器を標式とする大寺式(伊東：1957)に属すると考えられる。

21～24 はいずれも内外面に貝殻条痕文が施されており、胎土には多量の繊維を混入している。22・23 は低い隆帯上に刺突が加えられている。これらの土器は小牛田町素山貝塚出土土器を標式とする素山２式(伊東：1957)に属するものと考えられる。

〔前期の土器〕

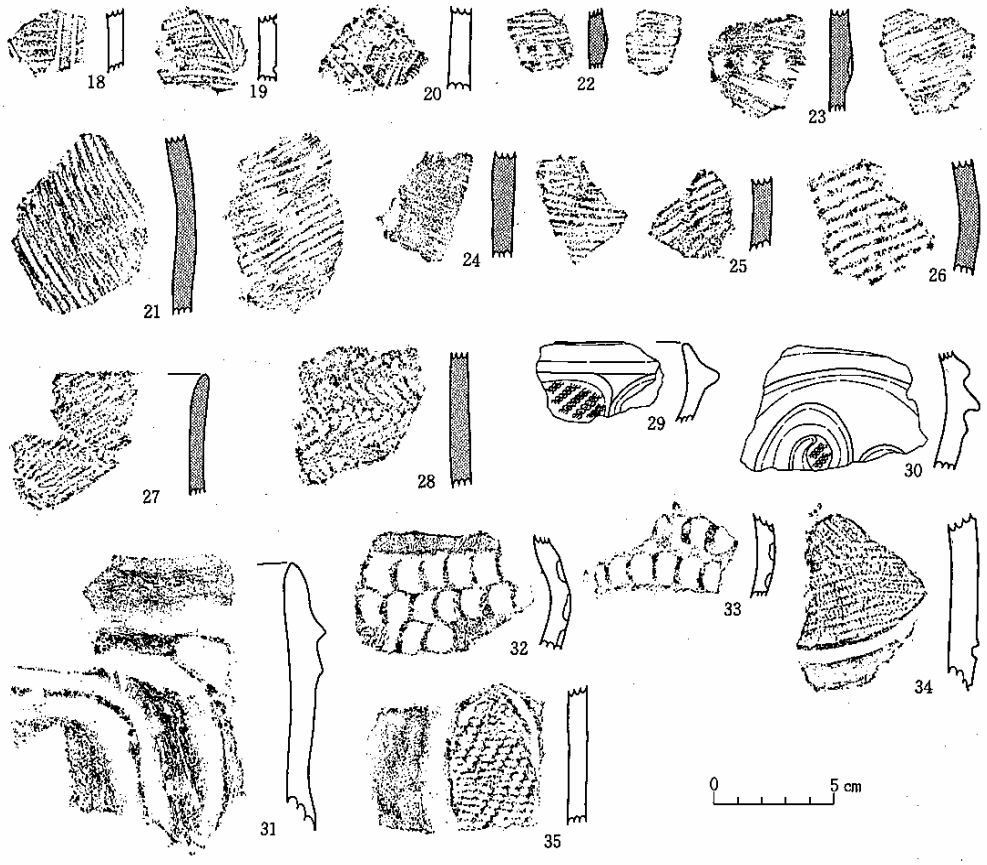
25・26 は０段多条の単節斜行縄文(ＬＲ)が、27 は結束第一種(山内：1979)の単節斜行縄文(ＬＲ×ＬＲ)がそれぞれ回転施文されている。28 は結束第一種の羽状縄文(ＲＬ×ＬＲ)が施されている。いずれも胎土に多量の繊維を含んでいる。このような特徴の地文のみの土器は上川名Ⅱ式から大木２式までの前期初頭に属するものと考えられる。

〔中期の土器〕

29・30 は隆起線と沈線とが結合した隆沈文によって渦巻文がえがかれている。地文はいずれもＲＬ縄文で縦位回転されている。このような特徴の土器は大衡村上深沢遺跡から出土しており、大木９式であるとされている(宮城県教委：1978)。

31 は断面形が略三角形の隆起線によって文様がえがかれている。どのような文様展開を示すのかは不明である。

32・33 は先端が幅広の棒状の施文具によって斜め方向からの刺突が器面全体に加えられ、刺突の方向と反対側が弧状に盛り上がっている土器である。色調や器壁の厚さなどが類似していることから両者は同一個体と考えられる。これらの土器は、白石市菅生田遺跡（七戸：1972、宮城県教委：1973)、柴田町向畑遺跡（芳賀：1974）出土の土器に類例があり、大木 10 式と考え



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
18	P21－2	19	X－X	20	P22－2	21	X－X	22	O21－2
23	R19－2	24	P22－2	25	N16－2	26	V3－2	27	V3－2
28	V3－2	29	N16－3	30	O21－3	31	R19－2	32	P22－ピット
33	P22－ピット	34	L22－2	35	O20－2				

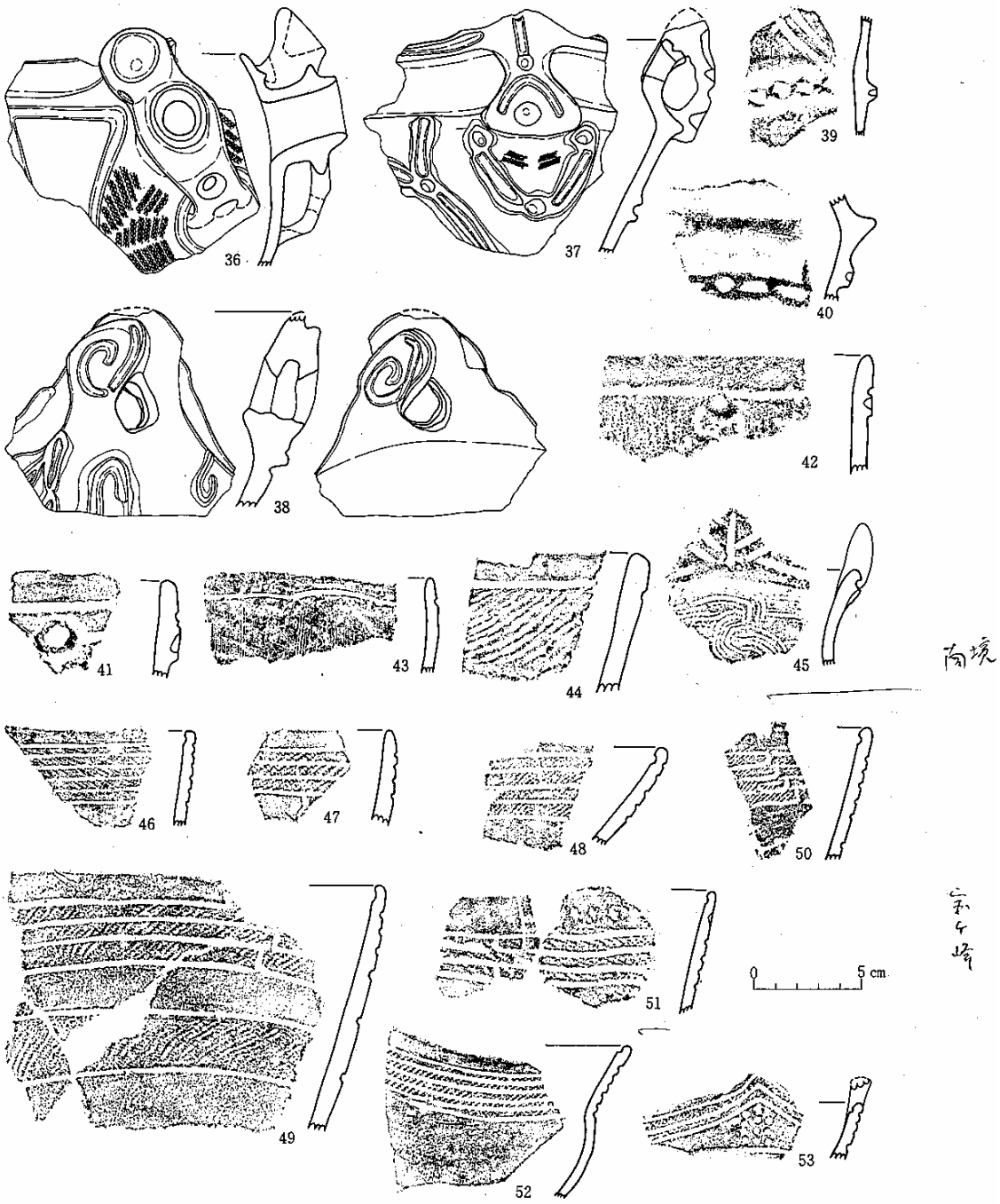
第18図　縄　文　土　器

られる。

34・35は磨消縄文手法による楕円文がえがかれている。地文はそれぞれＲＬＲ縄文、ＬＲ縄文で、どちらも縦位回転されている。このような特徴の土器は大木９式もしくは10式の中期末葉の土器である。

〔後期前葉～中葉の土器〕

36は斜位の橋状把手の中央部分に注口部が取り付けられた土器である。口縁部には１条の隆起線がめぐり、その下には把手を中心として磨消縄文手法による文様がえがかれている。37は口縁部に溝状に凹んでいる無文帯がめぐり、そこに縦位の橋状把手が取り付けられている。把手を中心としてボタン状の貼付文とその間を連結する２本の隆起線とによって文様がえがかれ

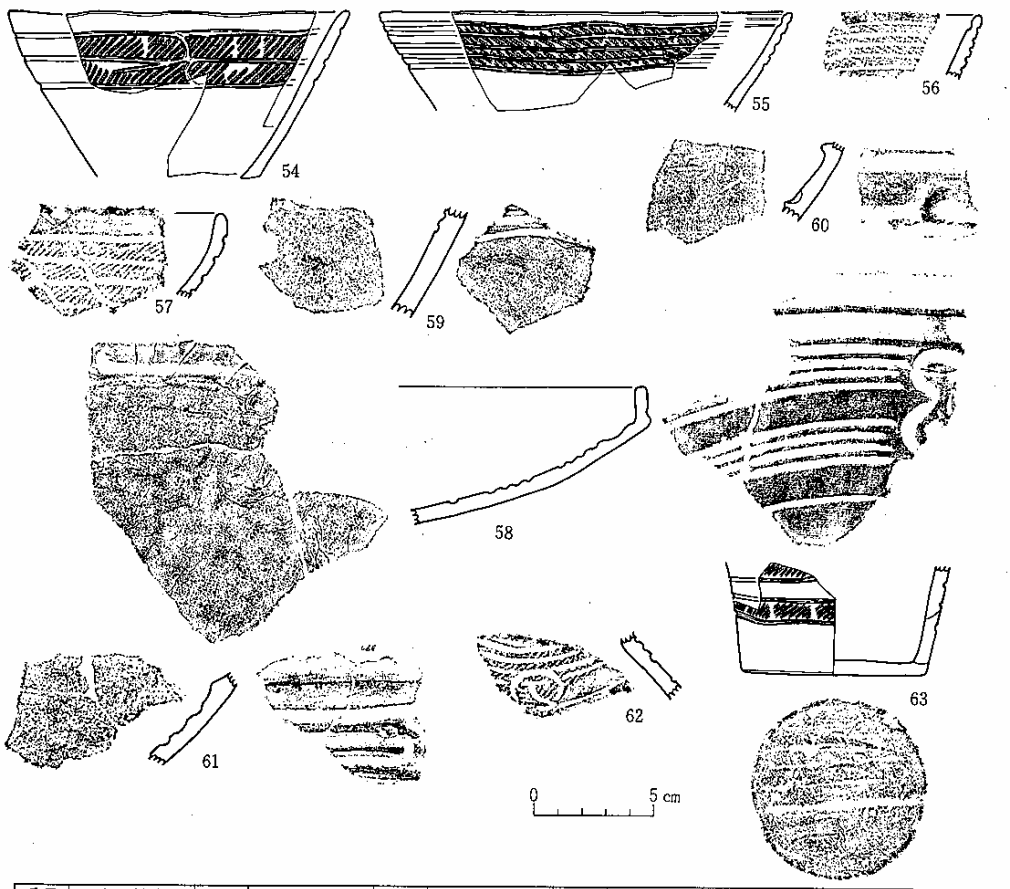


番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
36	5住堆	37	Q20―2	38	D36―4	39	O20―2	40	Q20―2
41	I12―2	42	P21―2	43	O19―2	44	L15―2	45	K14―2
46	X―X	47	L22―2	48	K14―2	49	D34―2	50	P21―1
51	D35―2	52	D34―2	53	D35―2				

第19図　縄　文　土　器

ている。把手で隠れた口縁部の無文帯部分には貫通孔がみとめられる。38 は外面側の突起と内面側の突起が重なり頂部で貼り合わされたような感じを与える突起をもつ土器である。突起中央にはダルマ形の透しがみとめられる。内外面には沈線による鉤状の文様がえがかれている。39・40 は連鎖状隆起線が施されているものであるが、このうち 39 は隆起線上に竹管による刺突を加えて連鎖状隆起線になっている。41～44 はいずれも口縁部に無文帯を有しており、頚部にめぐる１条の沈線によって区画されている。41・42 にはボタン状の貼付文と沈線による文様とがみとめられる。43・44 は地文のみがみとめられ、43 は櫛目状沈線、44 は無節のＬ縄文が施されている。45 は突起の部分に縦位の沈線と綾杉状の文様がえがかれており、口縁部には１条の沈線がめぐっている。頚部には４条単位の櫛目状沈線が不規則な曲線状に施されている。

これらの土器は、白石市青木遺跡(小川：1980)、大和町金取遺跡(宮城県教委：1980)出土の土器に類例があり、後期初頭の南境式(伊東：1957)に属すると考えられる。



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
54	Q22―２	55	P21―２	56	P22―２	57	D34―２	58	O21―２
59	X－X	60	R21―３	61	M－17ピット	62	D35―２	63	P22―２

第20図　縄　文　土　器

46～51 は口頸部に３～５条の磨消縄文帯がめぐる平縁の単純深鉢形土器である。このうち 49～51 は縄文帯を縦位の沈線によって区切っている。51 は縄文帯の上部に刺突が１条めぐっている。また 46・48～51 は口縁部内面に沈線が１条めぐっている。52 は体部が内弯しながら立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が開く波状口縁の深鉢形土器である。５条の磨消縄文帯が波状口縁の弯曲に沿ってめぐっている。53 も波状口縁の土器で２条の磨消縄文帯が弯曲に沿ってめぐっている。波項部は肥厚しており、突起がつくものと思われるが、欠損しており不明である。波頂部の下には３列にわたって円形の刺突が加えられている。54～57 も口頸部に数条の磨消縄文帯がめぐる浅鉢形土器である。このうち 54・57 は縄文帯を弧状の沈線や斜位の沈線で区切っている。なお、54 と 55 は沈線→ミガキ→縄文という施文順序になっている。58 は体部が大きく外傾し、頸部で屈曲して口縁がみじかく直立しており、皿形に近い浅鉢形土器である。内面には４条単位の平行沈線が２段にめぐり、その間を「８」の字形の沈線で連結している。口唇部には刻目が施されている。59～61 も 58 とほぼ同様の器形で、文様展開も類似したものであろうと思われる。62 は壺形土器の肩部破片で数条の磨消縄文帯が２段にめぐり、その間を磨消縄文手法によるＳ字状の文様で連結している。63 は底部に平行する圧痕がみとめられるが、その物質の種類は不明である。

以上述べた土器群のうち地文の判明するものをみると、ＬＲ縄文が過半数を占めるが、ＲＬ縄文も少なからずみとめられる。

このような特徴の土器は、角田市梁瀬浦遺跡出土の土器（角田市教委：1976）に類例があり、後期中葉の宝ケ峯式（伊東：1957）に属するものと考えられる。

〔後期後葉の土器〕

本遺跡出土の縄文土器の中で主体となる土器群である。

深鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器がみとめられるが、大部分のものが深鉢形土器である。

（復元資料・口縁部資料）

深鉢形土器

深鉢形土器には文様のあるものと文様のないものとの両者がある。

Ｉ：文様のあるもの

器形の違いから、口縁部が外反して頸部でしまり再び体部が張り出すもの（A）と口縁部が直立ないしは外傾しながら屈曲せずに単純に底部に至るもの（B）とがある。

A）口縁部が外反して頸部でしまり再び体部が張り出すもの

口縁部が波状口縁になるものと平縁のものとがあり、さらに突起との組み合わせから四類に類別できる。

Ａ１類　波状口縁のものであり、しかも数単位の大波状口縁である（64～69）。64 は櫛目状沈

番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出度地点	番号	出土地店
64	P21－2	65	N20－2	66	P21－2	67	P14－2	68	N20－2
69	R19－2	70	K13－2	71	L12－1	72	D36－4	73	P17－2
74	O16－ピット	75	O20－2	76	K17－2	77	P16－2	78	K14－2
79	K15－2	80	K13－2	81	O16－ピット	82	P16－ピット		

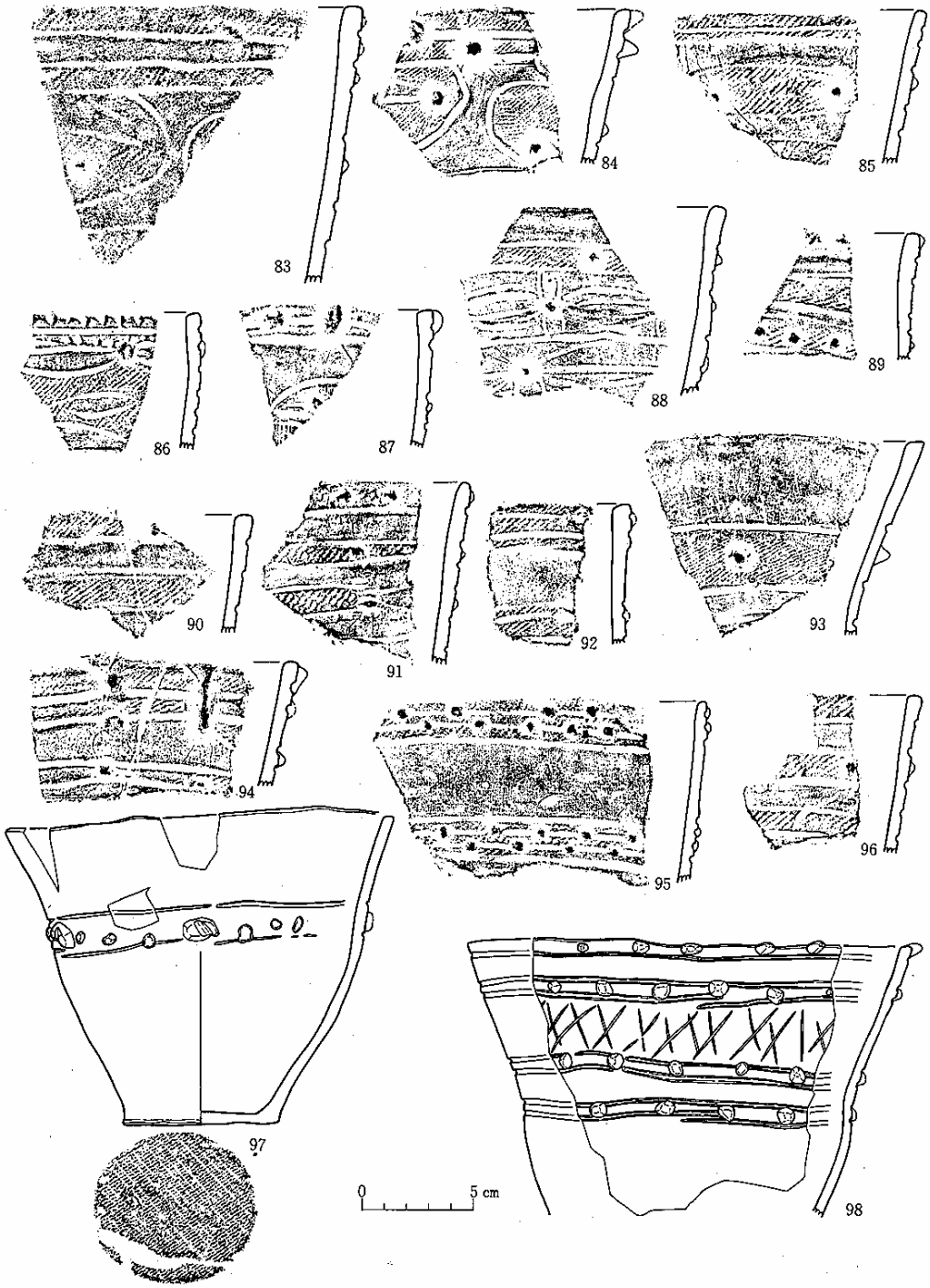
第21図　縄　文　土　器

線による入組文がえがかれており、文様中に瘤状小突起が貼付されている。また、口縁部には頂部が二分された拇指状突起がみとめられる。65 も櫛目状沈線による入組文がえがかれており、波頂部には透しのある逆台形状の突起がとりつけられている。66 も櫛目状沈線による入組文がみられ、瘤状小突起が貼付されている。67～69 は磨消縄文手法による入組文を有している。このうち、67 は波頂部に瘤状小突起がみとめられる。また、68・69 は口縁端が内側に稜をもって肥厚している。この３点の地文はすべてＬＲ縄文である。これら波状口縁を有するものは概して大形の深鉢形土器である。

Ａ２類　平縁で拇指状突起のつくものである(70・71)。いずれも櫛目状沈線による平行線文がめぐっている。このうち、71 は大形の深鉢形土器で、口縁端が内側に稜をもって肥厚している。

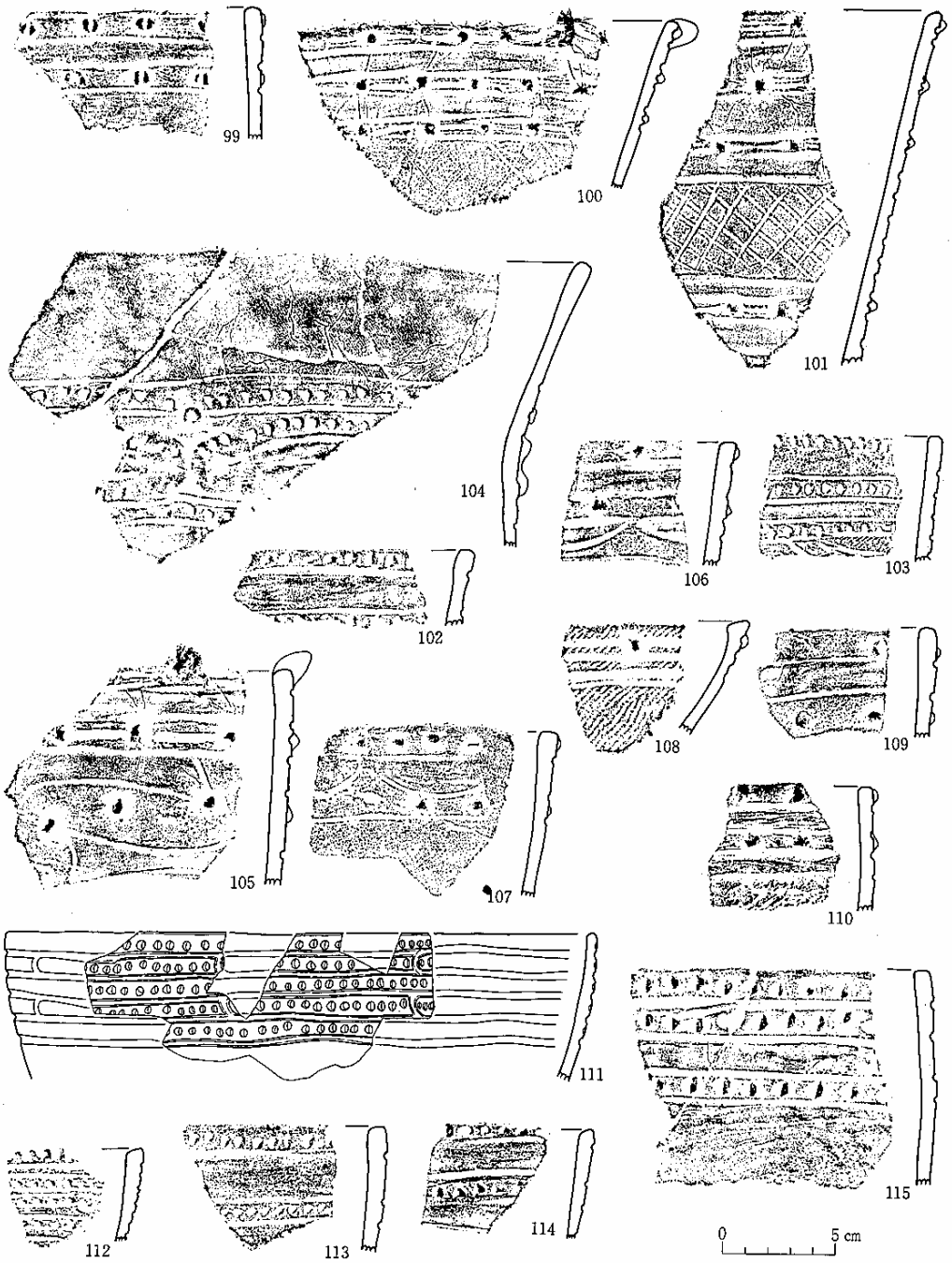
Ａ３類　平縁で山形突起のつくものである(72～80)。突起の頂部が二分ないしは三分されているものが多い。これらは突起を含めて口縁端が肥厚している。小破片が多いが主文様の判明する 72～76 はすべて入組文である。施文技法は刻目ないしは磨消縄文手法であり、縄文原体はすべてＬＲ縄文である。81 は突起を欠損しているが、おそらく山形突起であろうと思われる。突起下には三叉状の彫去がみられる。さらに 75 と 81 は口縁下に横長楕円形の彫去が１条めぐり、その下の入組文の入組部分には三叉状の彫去が加えられている。

Ａ４類　平縁で突起のつかないものである(82～104)。82～84 は磨消縄文手法による入組文がえがかれているが、前２者は摩滅のため原体は不明である。83 は瘤状小突起がほとんど剥落している。85～88 は弧線連結文(安孫子：1969)がえがかれている。前２者は磨消縄文手法により施文されており、原体はＬＲ縄文である。86 は口縁下に刻目による平行線文が２条めぐっている。87 は櫛目状沈線による弧線連結文がえがかれている。88 は、沈線により区画された文様外にはミガキが加えられているが文様中には何らかの器面調整なり地文なりがみとめられない（以下、本稿ではこのような施文技法を区画外ミガキ手法と仮称する)。89～96 は磨消縄文手法による幅の狭い平行線文が数条めぐるものである。この中には 91・96 のように平行線文が等間隔でめぐっているものと 92・95 のように口縁下と頸部にだけめぐるものとがある。97～101 は２・３条の平行沈線が１単位として数単位帯状にめぐり、そこに瘤状小突起が貼付されるものである。97 は口縁部は無文帯で頸部にのみ文様のみとめられるものであるが、他はすべて口縁下から施文されている。98・101 には斜格子沈線文もえがかれている。99 の瘤状小突起は縦に二分されている。97 は底部に網代痕がみとめられる。102～104 は刺突による平行線文が数条めぐるものである。102・103 は口縁下から施文されている。これに対して 104 は頸部にのみ施文されており、刺突帯中に粘土紐を背中合わせに貼り合わせてそこにも刺突がなされている。



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出度地点
83	P17－2	84	N18－2	85	M16－2	86	M16－2	87	O21－2
88	N14－3	89	N16－3	90	3住堆	91	M16－2	92	K15－1
93	X－X	94	N17－2	95	X－X	96	K13－2	97	K15－3
98	K13－2								

第22図　縄　文　土　器



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出度地点
99	L16—2,3	100	K14—2	101	K14—2	102	P20—3	103	R21—2
104	O16—ピット	105	M16—ピット	106	R21—2	107	O21—2	108	K15—3
109	K15—ピット	110	P19—3	111	N17—2	112	P20—3	113	O20—2
114	P21—2	115	N17—2						

第23図　縄　文　土　器

B）口縁部が直立ないしは外傾しながら屈曲せずに単純に底部に至るもの(105～123)。

これらの口縁部形態はすべて平縁で突起はつかない。105 は区画外ミガキ手法による入組文がえがかれている。106・107 は区画外ミガキ手法による弧線連結文がえがかれており、口縁部が肥厚している。108 は磨消縄文手法による幅の狭い平行線文が口縁部に３条めぐり瘤状小突起が貼付されている。地文はＬＲ縄文である。109・110 は区画外ミガキ手法による平行線文がめぐり、そこに瘤状小突起が貼付されているものである。111～122 は刺突による平行線文が数条めぐるものである。117 はその間に磨消縄文手法による平行線文もめぐっている。これらの土器は大形の深鉢形土器である。

Ⅱ：文様のないもの

すべて底部から屈曲せずに立ち上がるものである(B)。口縁部は平縁であるが、突起のつくものとつかないものとの二類に類別できる。

Ｂ１類　頂部の二分された拇指状突起のつくもので、１点だけである(123)。口縁部は無文で頚部以下に櫛目状沈線が縦位に施されている。口縁端は内側に稜をもって肥厚している。

Ｂ２類　突起のつかないものである(124～164)。124～135 は口縁部から縄文が施文されている。134 がＬＲ＋Ｒの附加縄文、129・131 がＲＬ縄文で、他はすべてＬＲ縄文であるが、130 はさらにＲの綾絡文も施文されている。125・129 は口縁部が肥厚している。136 は口縁部が無文で頚部以下にＬＲ縄文が施文されている。137～142 は口縁部から櫛目状沈線が施されるものである。縦走するもの、斜行するもの、曲線状になるものなどまとまりはみられない。143～150 は口縁部が無文で頚部以下に櫛目状沈線が施されているものである。櫛目状沈線の走向にはまとまりがみられず、また 145・149 を除いて口縁部が肥厚している。151～155 は口縁部が無文で頚部以下に条線が縦位もしくは斜位に不規則にえがかれている。口縁部はすべて肥厚している。156～164 は無文のものである。156・157 は口縁部に入念なミガキが加えられるのに対して頚部以下は軽いミガキが施されている。他は入念なミガキが全面に及んでいる。

浅鉢形土器

浅鉢形土器には文様のあるものと文様のないものとの両者がある。

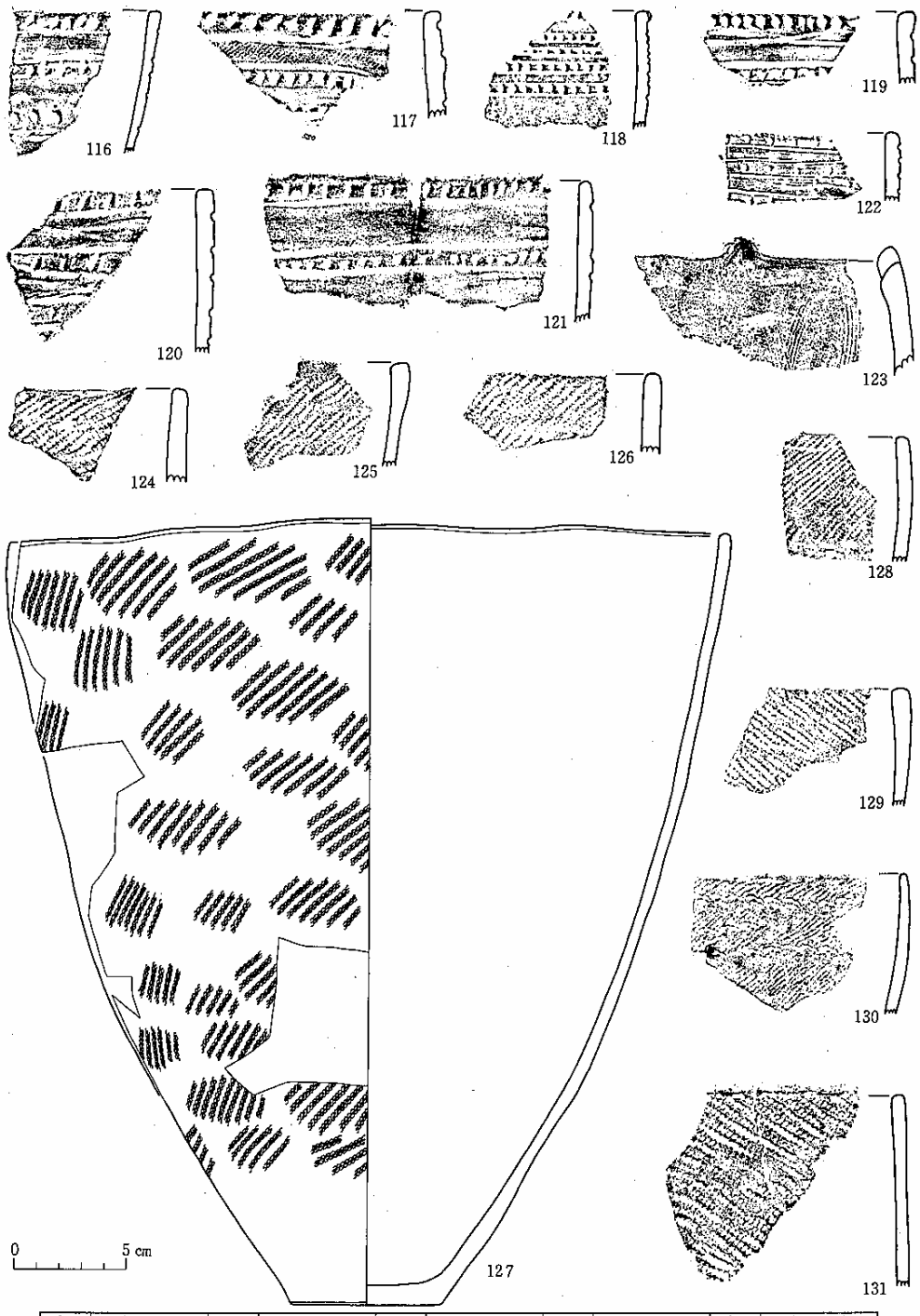
Ⅰ：文様のあるもの

器形の違いから、直線的に大きく外傾するもの(A)と内弯気味に立ち上がって開くもの(B)とがある。

A）直線的に大きく外傾するもの

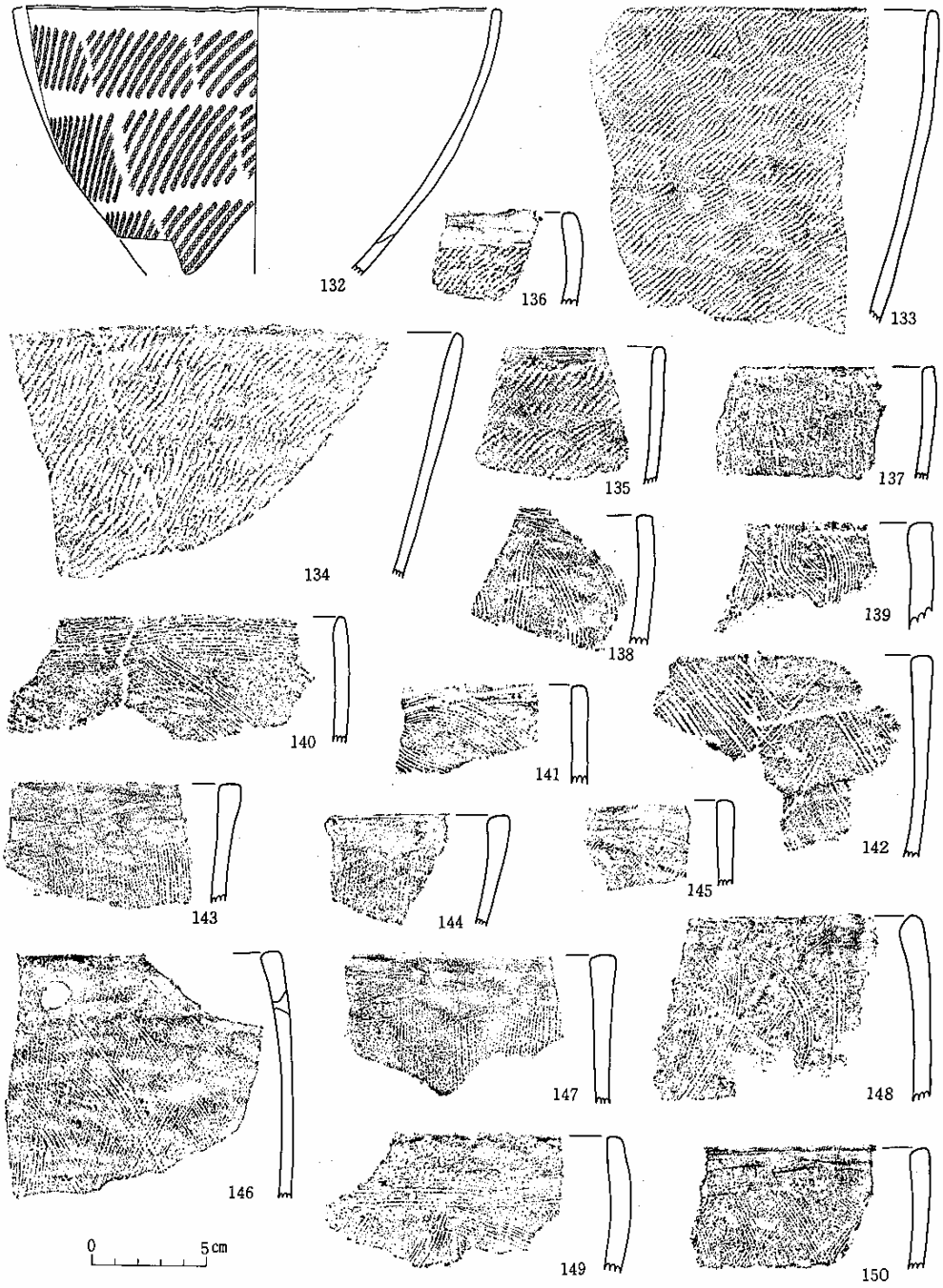
口縁部はすべて平縁であるが、突起の有無とその組み合わせから三類に類別できる。

Ａ１類　拇指状突起のつくものである(165)。３条の平行沈線がめぐり、中央の沈線には瘤状小突起が貼付されている。口縁部内面には段がついて肥厚している。



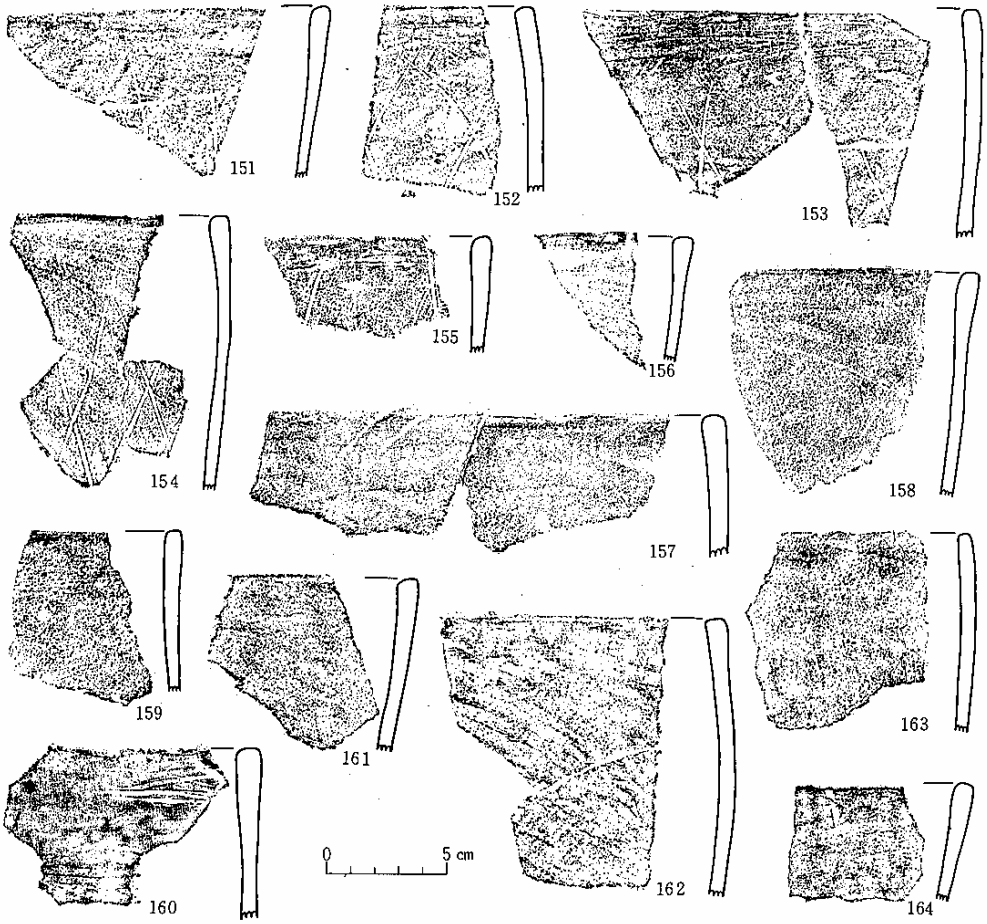
番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
116	N17－2	117	J13－2	118	K14－2	119	K15－1	120	N17－2
121	O20－2	122	N18－2	123	P21－2	124	L16－2.3	125	O21－2
126	M13.14－2.3	127	N15－ピット	128	M17－2	129	N17－2	130	N20－2
131	M14－2								

第24図　縄　文　土　器



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出度地点
132	O16―ピット	133	P21―2	134	X―X	135	X―X	136	K15―3
137	O19―4	138	R21―2	139	K13―2	140	L13―2	141	V3―2
142	K13―2	143	O19―2	144	N18―2	145	5住堆	146	N18―2
147	O19―2	148	N18―2	149	J13―2	150	O20―2		

第25図　縄　文　土　器



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
151	K13―3	152	K13―2	153	O19.20―2.3	154	K14―2	155	L13―2
156	5住一堆	157	N16―3	158	P21―2	159	O20―3	160	M18―2
161	K14―2	162	O20―3	163	M18―2	164	N17―2		

第26図　縄　文　土　器

Ａ２類　山形突起のつくものである(166・167)。166 は４単位の山形突起がめぐっている。口縁部には区画外ミガキ手法による平行線文が施され、そこに瘤状小突起が貼付されている。167 は項部の二分された山形突起がつき、突起と突起の間を弧線で結び、その下の沈線との間を区画外ミガキ手法によって施文されている。

Ａ３類　突起のつかないものである(168)。１条の沈線によって口縁部が画され、そこに瘤状小突起がめぐっている。

Ｂ）内弯気味に立ち上がって開くもの(169～172)

口縁部はいずれも平縁で突起はつかない。169 は口縁部に平行沈線が２条めぐり、瘤状小突

起が貼付されている。170は１条の磨消縄文帯が、171は刻目による平行線文が２条めぐるもので、どちらも体部は無文である。172は磨消縄文手法による弧線連結文がえがかれている。

Ⅱ：文様のないもの

器形の違いから、直線的に大きく外傾するもの(A)と内弯気味に立ち上がって開くもの(B)とがある。

A）直線的に大きく外傾するもの(173・174)

いずれも平縁で突起はつかない。内外面に入念なミガキが及んでいる。

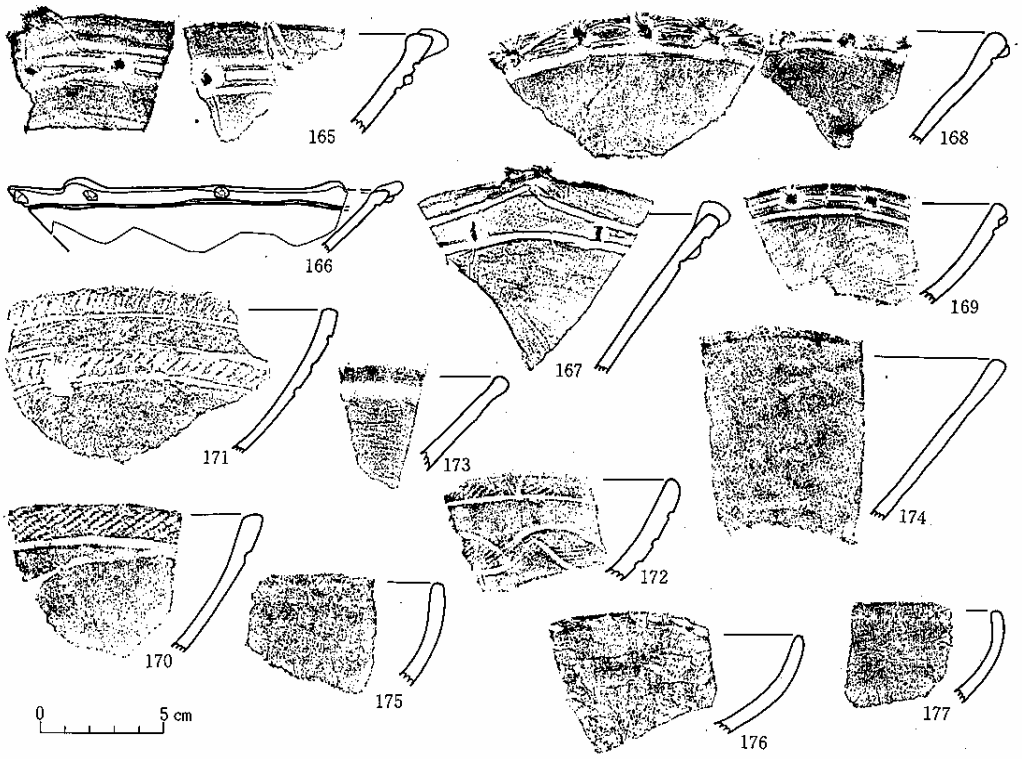
B）内弯気味に立ち上がって開くもの(175～177)

これもすべて平縁で突起がつかず、全面にミガキが施されている。

（体部資料）

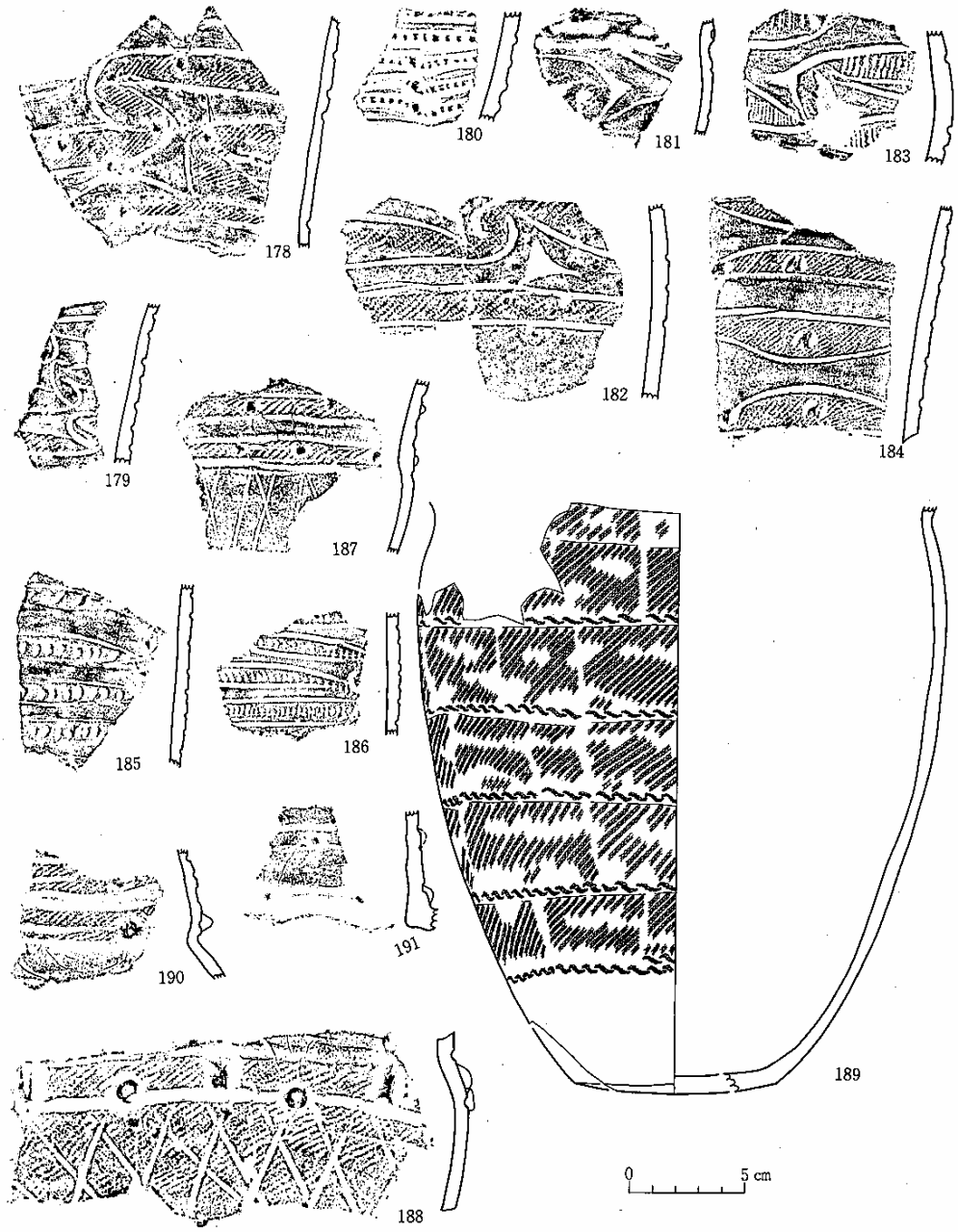
深鉢形土器

文様構成の不明なものが多い。ここでは比較的明らかなものを図示し、他は集計表にまとめる。



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
165	O20－3	166	K14－2	167	O19－2	168	O21－1	169	P22－ピット
170	N20－2	171	P22－ピット	172	4住一堆	173	P21－2	174	K14－2
175	D34－2	176	N15－3	177	O20－1				

第27図　縄　文　土　器



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
178	O21－2	179	N17－2	180	O20－1	181	R21－2	182	P17－2
183	L16－3	184	O20－2	185	N17－2	186	M16－2	187	P20－3
188	O20－2	189	Q22－2	190	R18－2	191	5住一堆		

第28図　縄　文　土　器

178・179 は磨消縄文手法による入組文がえがかれており、前者にはさらに瘤状小突起が貼付されている。原体はどちらもＬＲ縄文である。180 は刻目による入組文がえがかれている。181～183 は入組文の入組部に三叉状彫去の施されているものである。前二者が磨消縄文手法、後者が刻目により施文されている。184 は磨消縄文手法による弧線連結文がえがかれており、文様中には両側から摘んだような刺突が加えられている。185・186 は刻目による弧線連結文がえがかれている。187・188 は頚部に瘤状小突起を有する磨消縄文手法の平行線文をめぐらし、体部には斜格子沈線文を施文している。189 は頚部で屈曲するもので、体部にＬＲ縄文とＲの綾絡文が６段にわたって施文されている。

壺形土器

190 は頚部に磨消縄文手法による平行線文が、191 は頚部に平行沈線がめぐるものである。いずれも瘤状小突起が貼付されている。

（底部資料）

平底・揚底・台付の三者がみとめられる。

平底のなかには丸底風のものもあるが、大部分のものは平坦である。底部外面には 192～198 に網代痕、199～201 に木葉痕がみとめられるが、202～208 はミガキが加えられて無文になっている。215 は平行する圧痕がみとめられるが、どのような物質の圧痕かは不明である。

209～211 は揚底のものである。３点とも底径は小さい。

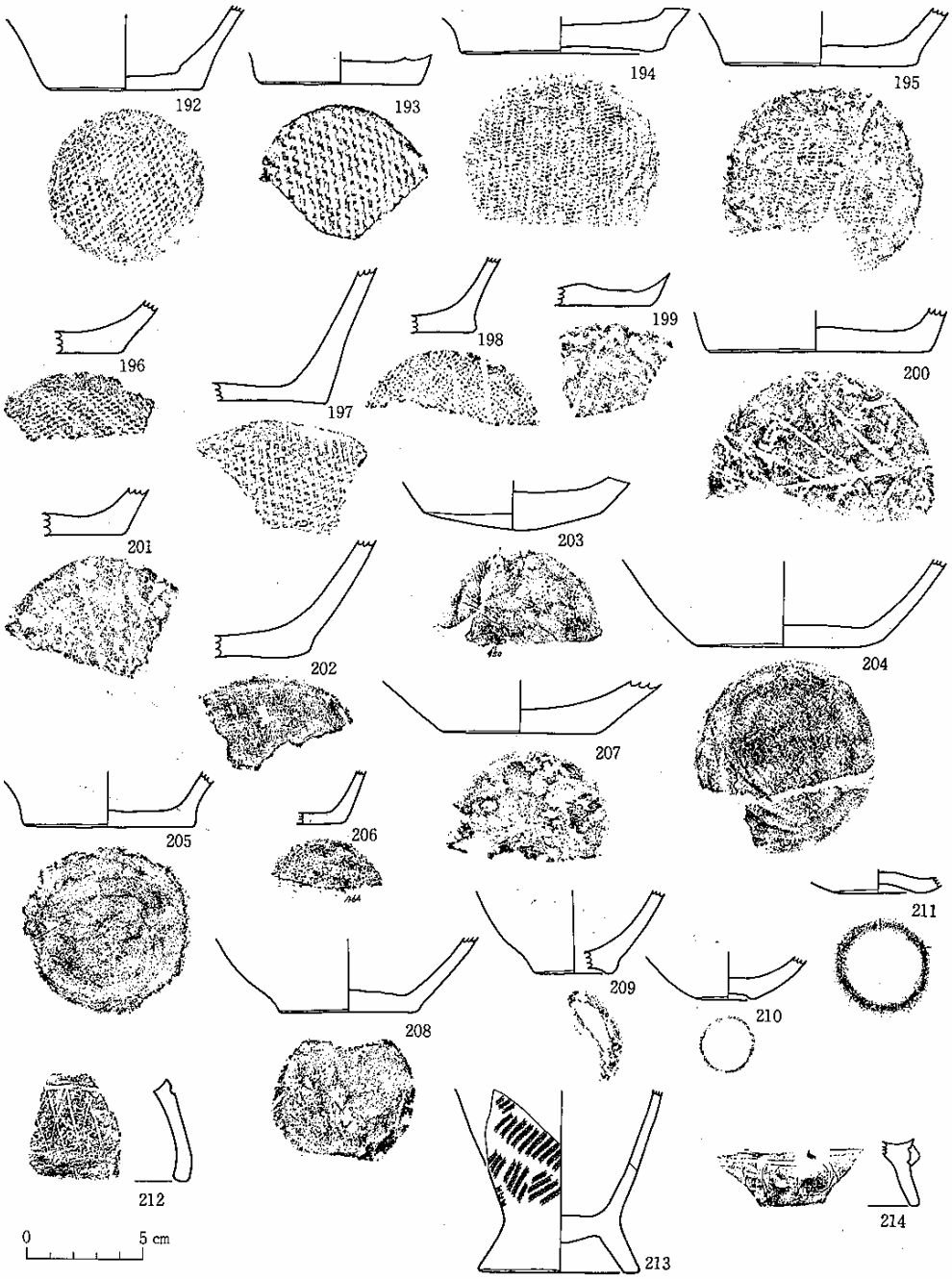
212～214 は台付土器である。212 は台部に斜格子沈線文が、214 は平行沈線文と瘤状小突起がみとめられる。

なお、216・217 は網代痕を有する平底のものであるが、どちらも底部中央に焼成後の穿孔がみとめられる。

以上述べてきた 64～217 の土器は器形および文様の特徴から後期後葉の金剛寺式(伊東：1957)であると考えられる。深鉢Ⅱ類、浅鉢Ⅱ類および底部資料には他時期のものも含まれているかもしれないが、出土量から考えて該期のものとして大過ないと思われる。

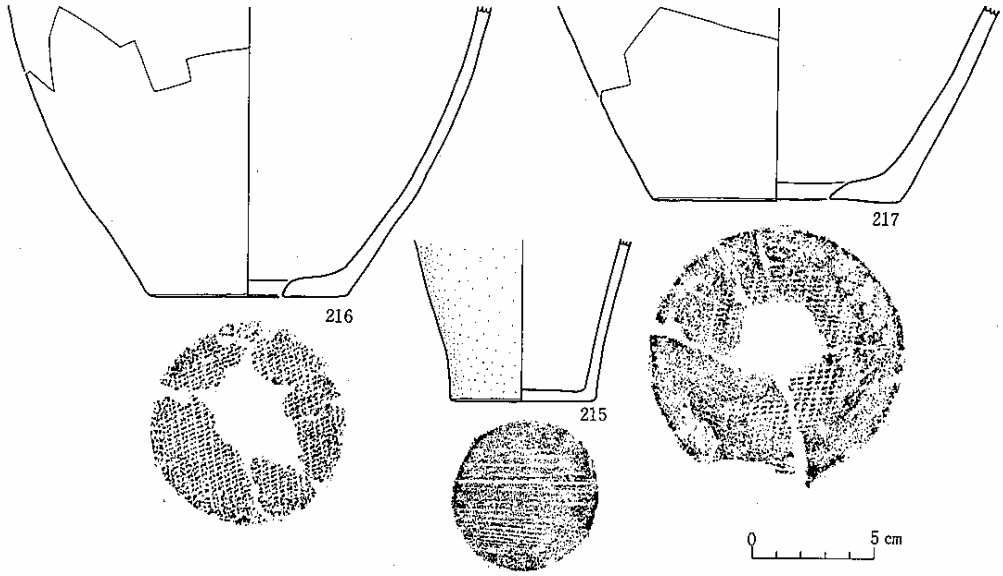
〔晩期の土器〕

218～237 は口縁部に三叉状文のえがかれているものである。このうち 218～233 は小波状口縁である。234～237 は平縁であるが、234・236 には突起がみとめられる。218 は魚眼状三叉文、219～224・236・237 は玉抱き三叉文、225～228 は入組三叉文、229～232・234・236 は波頂部や突起部につきだすような三叉状文がそれぞれえがかれている。233 は玉抱き三叉文か入組三叉文か不明である。234 は底部に網代痕がみとめられる。235 は底部に低い三足を有している（この土器は現在紛失中である)。地文は 228・230・233 がＲＬ縄文、234 が附加縄文（ＬＲ＋Ｒ）で、他はすべてＬＲ縄文である。これらは三叉状文を有することから、大洞Ｂ式(山内：1930)と考えら



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
192	N16—3	193	K15—2	194	K15—1	195	J13—2.3	196	P21—2
197	O21—2	198	N17—2	199	P22—2	200	O21—2	201	M18—2
202	O19.20—2.3	203	N18—2	204	O21—2	205	L16—2.3	206	P16—1
207	K14—2	208	O20—2	209	O18—2	210	N15—3	211	O20—2
212	P21—2	213	D34—2	214	M15—2				

第29図　縄　文　土　器



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
215	D35－2	216	N15－X	217	M14－2

第30図　縄　文　土　器

れる。

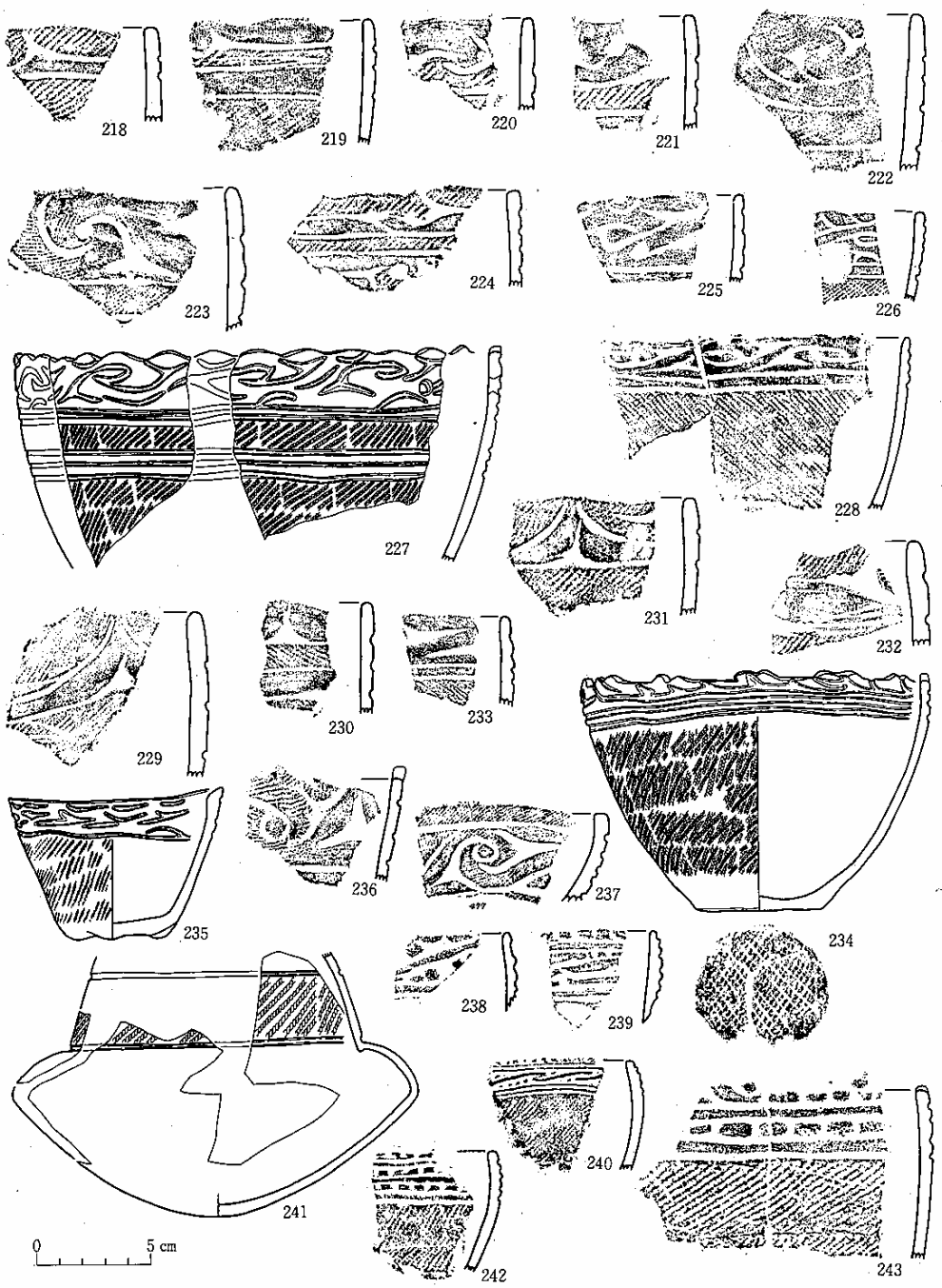
238～240 は口縁部に羊歯状文がえがかれている。前２者は口縁部が直立し、後者は内傾する深鉢形土器である。大洞ＢＣ式(山内：1930)に属するものと考えられる。

241 は口縁部を欠損しているが、底部から頚部まで残存している注口土器である。底部は丸底で、体部は内弯気味に立ち上がり、肩部が強く張り、頚部は内傾している。頚部には幅の広い磨消縄文帯がめぐり、その他の部分は黒色でミガキが加えられている。注口部は欠失している。この土器は器形上の特徴から晩期前葉のものと考えられる。

242～244 は口縁部に彫刻的な刻目列がめぐるものである。前２者は深鉢形土器で、後者は浅鉢形土器である。245 は壺形土器の肩部、246 は注口土器の肩部であるが、２点とも刻目列がめぐっている。247 は口縁部を欠損しているが、体部が直線的に開く浅鉢形土器である。体部には磨消縄文手法による雲形文がえがかれている。このような特徴の土器は大洞式C_1式（山内：1930）に属するものと考えられる。

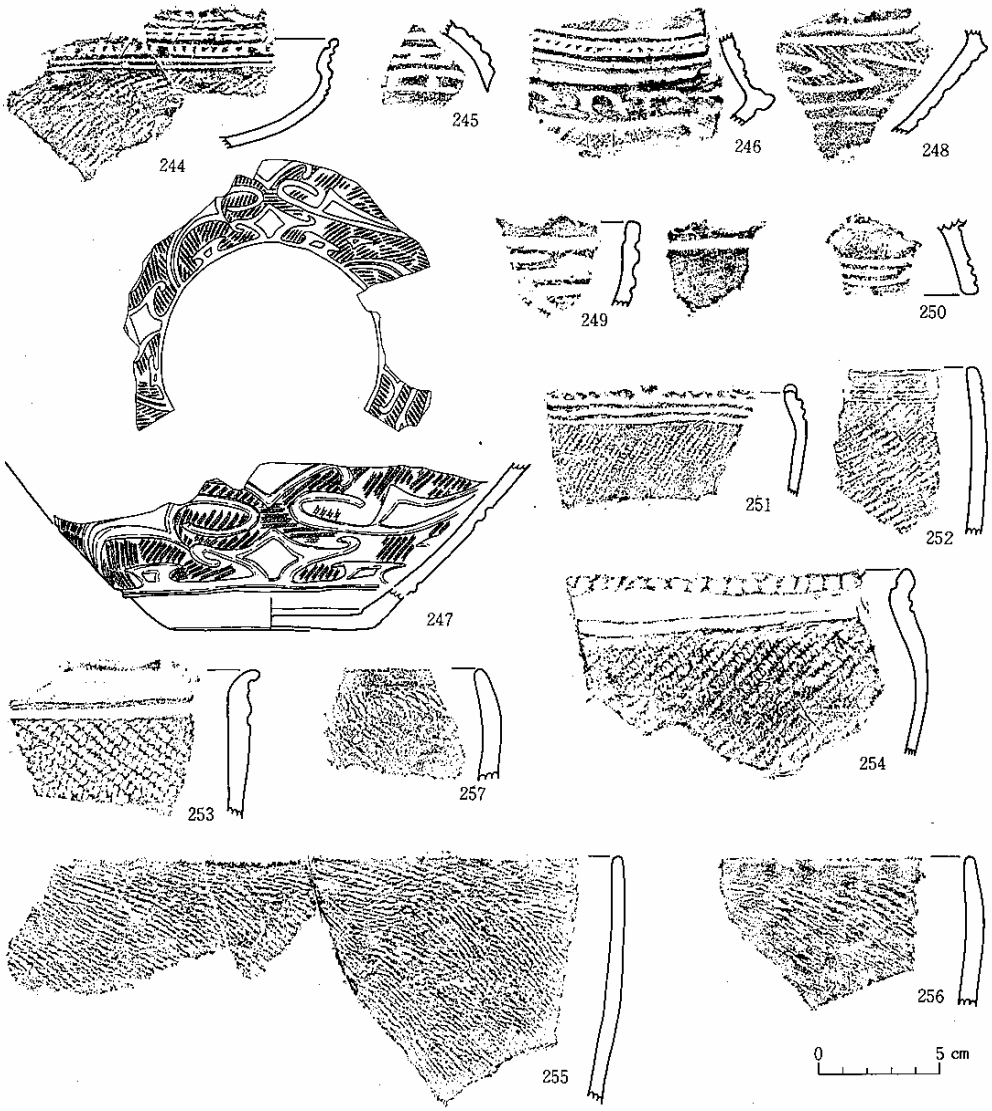
248 は注口土器の体部破片である。磨消縄文手法によって横に流れる曲線的な文様がえがかれており、大洞C_2式(山内：1930)に属するものと思われる。

249 は浅鉢形土器(?)の口縁部で、250 は台付土器の台部である。２点とも平行沈線の一部を彫去したπ字状の工字文がえがかれている。どちらも小破片のため明確ではないが、ほぼ大洞Ａ式に属するものと思われる。



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
218	O21－2	219	P16－2	220	X－X	221	M12－2	222	M12－2
223	L14－2	224	O21－1	225	P16－1	226	P22－2	227	O21－2
228	1住一堆	229	M12－2	230	L14－2	231	D35－2	232	R21－3
233	2住一堆	234	O20－1	235	5住一堆	236	O20－2	237	1住一堆
238	P21－2	239	X－X	240	D35－2	241	X－X	242	N17－2
243	V3－2								

第31図　縄　文　土　器



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
244	2住一床	245	O21－2	246	V 2－2	247	O20－2	248	R19－1
249	L16－3	250	L16－3	251	D36－4	252	N17－2	253	Q18－2
254	V 2－2	255	O21－3	256	N20－2	257	P21－2	258	LM14－3
259	O19.20－2·3	260	JK14－2						

第32図　縄　文　土　器

251 は口縁部に２個１対の小突起がつき、それ以外の部分の口唇部に刻目が加えられている浅鉢形土器である。252 は平縁の深鉢形土器である。どちらも口縁部に３条の沈線がめぐり、頚部以下にはＬＲ縄文が施文されている。これらの土器は晩期中葉のものと考えられる。

253・254 は平縁の深鉢形土器であるが、254 は口唇部に刻目が加えられている。どちらも口縁部が無文帯になっており、頚部に沈線をめぐらして区画し、体部には縄文が施されている。縄文原体は 253 がＲＬ縄文、254 がＬＲ縄文である。255～257 は地文のみの深鉢形土器で、前二者がＲの撚糸文、後者がＬの撚糸文である。これらの土器は角田市梁瀬浦遺跡出土土器（角田市教委：1976）に類例があり、晩期後半のものと考えられる。

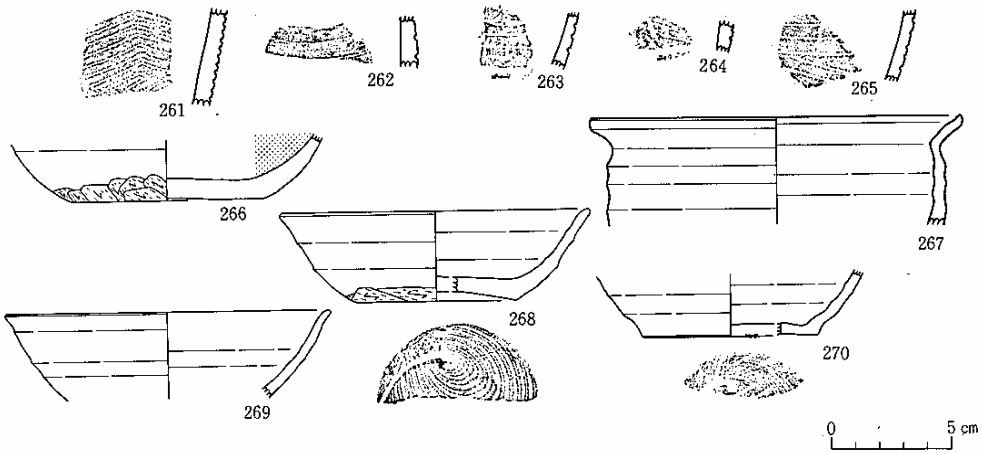
258 は袖珍土器である。口縁部をわずかに欠損しているがほぼ完形である。頚部に１条の沈線をめぐらし、橋状把手がついている。口縁部には山形突起を有しており、中央部のがやや高く両脇のは低い。これは山形突起の特徴から晩期中葉のものと考えられる。

〔時期不明のもの〕

259・260 ともに袖珍土器である。259 は底部を欠損している。内外面にオサエの痕跡が顕著である。260 は口縁部を欠損している。外面には縦位の不規則な櫛目状沈線がみとめられる。

２．弥生土器

５点の弥生土器が出土している。胴部小破片のため器形は不明である。いずれも幅の狭い一本工具を使用した沈線による文様がえがかれている。261 は８条以上の沈線による菱形文が、262 は同心円文がえがかれている。263・264 は横位平行沈線文が施されている。265 はさらに斜位の平行沈線文も施されている。これらは、文様および施文技法上の特徴から蔵王町西裏遺跡出土の長頚壺を標式とする円田式(伊東：1957)に属すると考えられる。



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出度地店
261	R18―２	262	２住一堆	263	２住一堆	264	O19―１	265	２住一床
266	M19―２	267	２住一堆	268	２住一堆	269	２住一堆	270	O20―１

第33図　弥生土器・土師器・須恵器・赤焼土器

３．土師器

少量出土している。図示できるのは坏・甕１点ずつである。

266 は口縁部を欠損している坏である。製作に際してロクロを使用している。体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが施されており、底部切離し技法は不明である。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

267 は製作に際してロクロを使用している甕である。体部上半から口縁部にかけての破片であり、長胴形を呈している。体部はほぼ円筒形で、口縁部は外反し口縁端部はわずかに上方につまみあげられている。器面調整は内外面ともロクロ調整である。

これらは、ロクロ使用という特徴から平安時代の表杉ノ入式(氏家：1957)に比定することができる。

４．須恵器

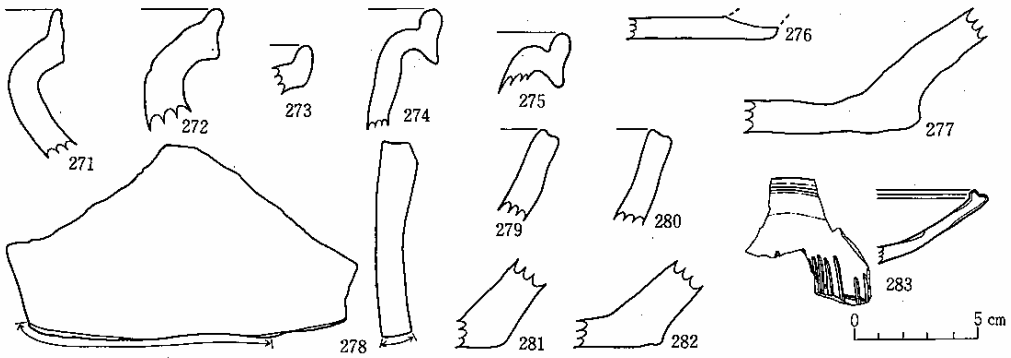
坏が５点出土している。図示できるのは１点だけである(268)。底部切離し技法は回転糸切り技法であり、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。器形は体部が内弯気味に外傾して口縁部でやや外反する。共伴する土師器が不明のため明確な時期を決することはできないが、本遺跡出土の土師器が表杉ノ入式であることから、須恵器も平安時代のものと思われる。

５．赤焼土器

坏が２点出土している。269 は底部を欠損している。体部は内弯気味に外傾して口縁部でやや外反している。270 は口縁部を欠損している。体部は底部から内弯気味に立ち上がっている。赤焼土器は県内各地で表杉ノ入式の土師器と共伴していることから、本遺跡のものも平安時代のものと考えられる。

６．陶器

陶器が少量出土している。小破片のために全体の形状がわかるものはない。無釉のものと施



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
271	M19—2.3	272	P21—1	273	P22—2	274	N18—1	275	O18—2
276	P20—3	277	N21—2	278	K18—2	279	O22—2	280	O18—1
281	R18—2	282	Q18—2	283	L13・14—2				

第34図　陶　　器

釉されたものとがあり、前者は甕と擂鉢、後者はオロシ皿である。

甕は口縁部破片が５点出土している(271～275)。いずれも口縁部が横もしくは斜め上方に外折し、さらにその先端が上方に折り曲げられて外側に口縁帯を形成しており、内面はいわゆる受口状の口縁部になっている。このうち、274・275 はさらに口縁帯の下部が下方に突き出ている。器面調整はいずれも内外面とも横ナデが施されている。

甕の底部破片は２点出土している(276・277)。いずれも底部外面には特徴的な器面調整の痕跡がみとめられる。

甕の体部破片は 35 点出土しているが、このうち外面に暗褐色の斑点が内部から噴き出しているようにみえる特色ある破片が２点含まれている。また、甕の体部破片の周縁を一部研磨しているものが１点出土している(278)。

擂鉢の口縁部破片は２点出土している(279・280)。両者とも口唇部に沈線状の浅いくぼみが１条めぐっている。また、２点とも器面調整は内外面横ナデがなされている。

擂鉢の底部破片は２点出土している(281・282)。いずれも内面は使用により摩滅しており、また底部外面には特徴的な器面調整の痕跡がみとめられない。

擂鉢の体部破片は７点出土しているが、いずれも内面には筋目がみとめられず、使用により摩滅している。

オロシ皿は１点出土している(283)。口縁部内面には断面形方形の隆帯が１条めぐっている。オロシ目は直交しており、その断面形は深く鋭いＶ字形である。口縁部内外面に淡緑色の灰釉が施されており、釉には貫入がみとめられる。

次に、これらの陶器の年代・生産地について述べる。

甕は、白石市東北窯跡(藤沼：1976)、三本木町多高田窯跡(三本木町教委：1978)、築館町熊狩Ａ窯跡(東北歴史資料館：1979)出土のものに口縁部形態が類似しており、本遺跡出土のものも鎌倉時代中期から後期に属するものと思われる。ただし、口縁帯の下部が下方に突き出ている 274・275 は時期が若干下って、南北朝時代頃のものかもしれない。

擂鉢は編年が不充分であり、その年代は不明であるが、甕とほぼ同時期と考えて差し支えないものと思われる。

なお、暗赤褐色の小斑点が内部から噴き出しているようにみえる甕の体部破片は色調や胎土などが、白石市東北窯跡(藤沼：1976)で生産されたものの特徴と著しく近似している。

オロシ皿は小破片のため、年代・生産地とも不明である。

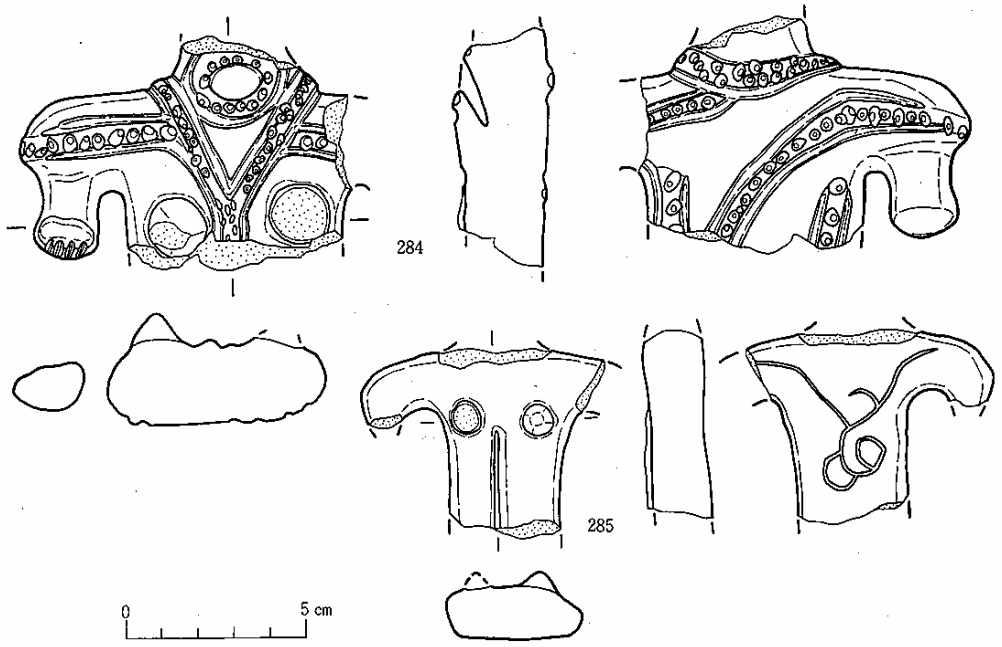
７．土製品

土偶：２点出土している(284・285)。284 は厚みのある板状の土偶であり、頭部・左腕・腹部以下を欠損している。正面の首の付け根の部分には頭部方向からの大きな円孔がある。口を表

現したものかもしれないが不明である。低い隆帯とその両脇の沈線がＹ字形に施文されて、そのまま正中線に連続している。また、左右の肩にも横方向に低い隆帯がのびている。これらの隆帯には刺突が施されており、その中に赤彩されていた痕跡がみとめられる。左の乳房は剥落している。背面には、正面と同じように低い隆帯とその両脇に沈線が施文されているが、どのような文様として展開するのかは不明である。285 は大きさの割に厚みのある板状の土偶で頭部・右手・左腕・下半身を欠損している。正面には隆帯によって正中線が表現されており、右の乳房が剥落している。背面には細い沈線による曲線的な文様がえがかれており、沈線内には赤彩されていた痕跡がみとめられる。

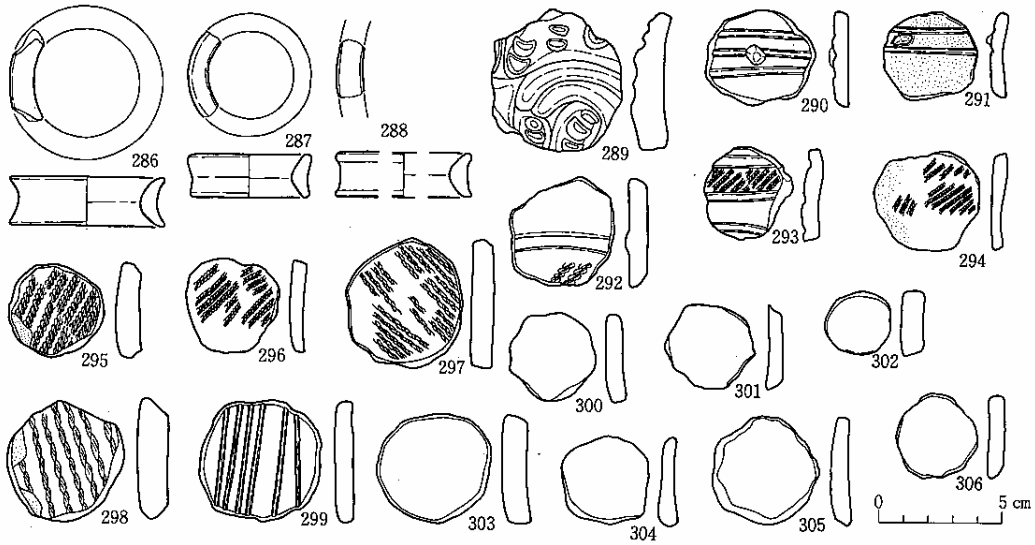
284 と形状、文様、文様表現技法の類似しているものが七ケ浜町二月田貝塚から出土しており、大洞Ｂ式に属すると考えられている（宮城県塩釜女子高：1972）。本遺跡のものは二月田貝塚出土例に比較して欠損部分が大きく文様の不明な点も多いので、後期後葉から晩期初頭と幅をもって考えておきたい。285 は時期不明である。

環状耳飾：３点出土している（286～288）。286 と 287 は残存部分から、直径がそれぞれ約６㎝、約５㎝と推定されるが、289 は小破片のために推定径を求めることができない。３点とも無文である。時期不明であるが、本遺跡の主体的な土器が後期後葉のものであることから、これらもほぼ同時期と思われる。



番号	出土地点	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）
284	O20―１	(6.5)	(9.1)	3.1
285	L13―２	(5.3)	(6.8)	1.9

第35図　土　製　品



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
286	N14－2	287	R17－2	288	D36－4	289	D34－2	290	2住一堆
291	L13－2	292	J14－2	293	J13－2	294	K15－3	295	L16－3
296	O20－2	297	K22－2	298	O16－2	299	Q18－2	300	D35－2
301	L14－ピット	302	D34・35・36-2	303	Q20－2	304	D35－2	305	R21－2
306	P21－2								

第36図　土　製　品

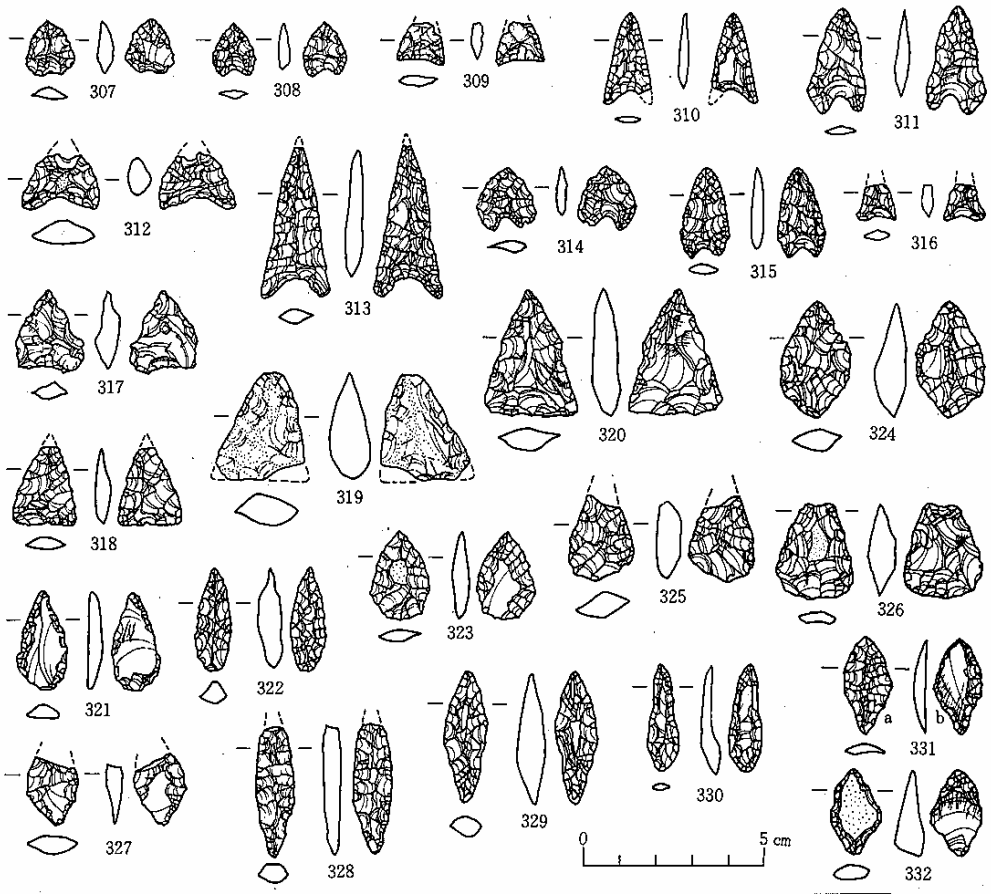
円板状土製品：土器の体部破片を素材とし、周縁に敲打や研磨を加えて円形に成形したものが18点出土している(289～306)。素材となった土器片をみると、289には隆沈文と刺突、290・291には平行沈線と瘤状小突起がみとめられる。292には低い隆帯が施されており、293には磨消縄文手法による文様がえがかれている。294～299は地文のみのもので、294～296がＬＲ縄文、297はＲの撚糸文、298はＬの撚糸文、299は条線が施文されている。300～306は無文のものである。時期は289が中期末の大木９式、290・291が後期後葉の金剛寺式であり、その他のものは不明である。

８．石器・石製品

縄文土器に次いで出土量が多い。石鏃・石錐・石匙・石箆・不定形石器・異形石器などの剥片石器、およびその素材となる石核・剥片、石斧・石棒・石剣・独鈷石・研磨痕を有する石製品などの磨製石器、石皿・敲石・凹石・石錘・円板状石製品・砥石などの礫石器や垂飾品など多くのものがある。

石鏃：50点出土している(307～355)。

307～316は基部にえぐりをいれた凹基のものである。307・309・316は基部のえぐりが浅い。309・316は尖頭部側縁が平坦なのに対して、307はふくらんでいる。308・311・314・315は基部のえぐりが深く尖頭部両側縁は大きくふくらんでいるが、310・312・313は基部のえぐりが深く



番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石　　材
307	石　鏃	2住一堆	1.6	1.4	0.5	0.6	玉ずい
308	〃	M12—2	1.5	1.2	0.3	0.4	珪質頁岩
309	〃	O22—2	(1.2)	1.3	(0.3)	(0.3)	玉ずい
310	〃	2住一堆	(2.5)	(1.4)	0.3	(0.7)	珪質頁岩
311	〃	K14—2	3.0	1.6	0.4	1.3	〃
312	〃	N15—3	(1.5)	(2.1)	0.7	(1.6)	〃
313	〃	2住—床	(4.3)	1.9	0.5	(3.0)	〃
314	〃	O21—2	1.8	1.7	0.3	0.7	珪化凝灰岩
315	〃	3住一堆	2.5	1.4	0.4	0.9	珪質頁岩
316	〃	X—X	(1.0)	1.1	(0.3)	(0.2)	〃（一部玉ずい）
317	〃	2住一堆	2.1	1.9	0.6	2.0	黒曜岩
318	〃	O20—2	(2.2)	1.8	0.4	1.0	珪質頁岩
319	〃	2住一堆	(3.0)	(2.5)	1.1	(5.5)	石英安山岩
320	〃	P17—ピット	3.5	2.6	0.8	4.9	頁　岩
321	〃	2住一堆	2.8	1.4	0.4	1.3	珪質頁岩
322	〃	4住一堆	2.9	1.0	0.7	1.6	〃
323	〃	N16—3	2.4	1.7	0.5	2.0	〃
324	〃	5住一堆	3.2	1.9	0.8	4.0	〃
325	〃	P19—1	(2.4)	1.8	(0.7)	(2.5)	〃
326	〃	O21—2	(2.7)	2.2	0.8	(3.9)	〃
327	〃	2住一堆	(1.9)	1.4	(0.5)	(0.9)	玉ずい
328	〃	P16—2	(3.6)	1.1	(0.5)	(1.9)	珪質頁岩
329	〃	2住一堆	3.7	1.2	0.8	2.7	〃
330	〃	N16—ピット	3.0	0.9	0.5	1.0	〃
331	〃	N15—3	2.8	1.4	0.4	0.8	玉ずい
332	〃	4住—3	2.4	1.4	0.8	2.0	珪質頁岩

第37図　石　　器

尖頭部両側縁が平坦なものである。310 はｂ面の中央に一次剥離面を残している。313 は尖頭部先端をわずかに欠損している。

317～320 は基部が平基のものである。４点とも尖頭部両側縁はほぼ平坦である。317 は粗い二次加工であるのに対して、318 は入念な二次加工が施されている。319 は器面の風化が著しい。

321～326 は基部が丸味をもって突き出しているが茎の作り出しがみられないものである。尖頭部両側縁はいずれも直線的かややふくらむ程度である。321 は周縁にのみ二次加工を加えており、基部には素材となった剥片の打面がわずかに残っている。323・326 は一部に自然面を残している。326 は尖頭部を欠損しているが、欠損面にも二次加工が見られることから不定形石器として再利用された可能性もある。

327～332 は基部形態がＶ字状で茎を作り出しているものである。327 は基部に一次剥離面を残している。329 は尖頭部と基部の側縁がわずかに摩耗している。331 はａ面側の二次加工が全面に及んでいるのに対して、ｂ面側は周縁にのみ二次加工がみとめられる。332 は自然面と主要剥離面を大きく残している。

333～353 は基部側縁にえぐりをいれてＹ字状になっているものである。333 は火熱を受けて白色化し全体的に脆くなっている。333・342・352 は基部に部分的に黒い物質が付着しており、膠着剤の一部が残存したものと思われる。340 は尖頭部の側縁がわずかに摩滅している。341・343 は周縁にのみ二次加工が施されており、一次剥離面を大きく残している。351 は尖頭部左側縁が大きくふくらんでおり、左右非対称である。

354・355 は尖頭部だけの破片のため基部形態は不明である。いずれも入念な二次加工が施されている。

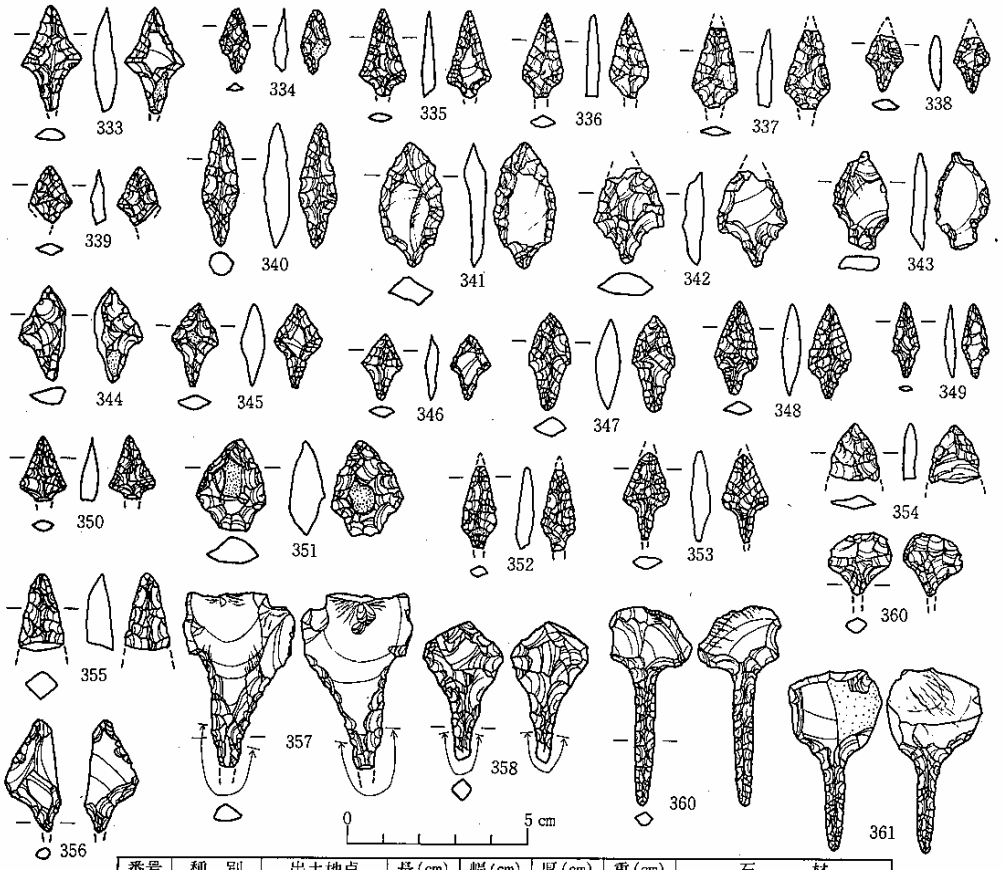
石錐：８点出土している(356～363)。

356～362 はつまみ部を有するものである。356～358 はつまみ部から錐部へ緩やかな角度で移行している。358 は錐部先端が使用により摩耗している。357 は錐部先端を欠損しているが、その後も使用しており、欠損面の縁辺も摩耗している。359～362 はつまみ部から錐部へ急角度で移行しているために、両部位が明瞭に区別できるものである。360・362 はつまみ部にも入念な二次加工が施されている。

363 は棒状のものである。両端を欠損している。

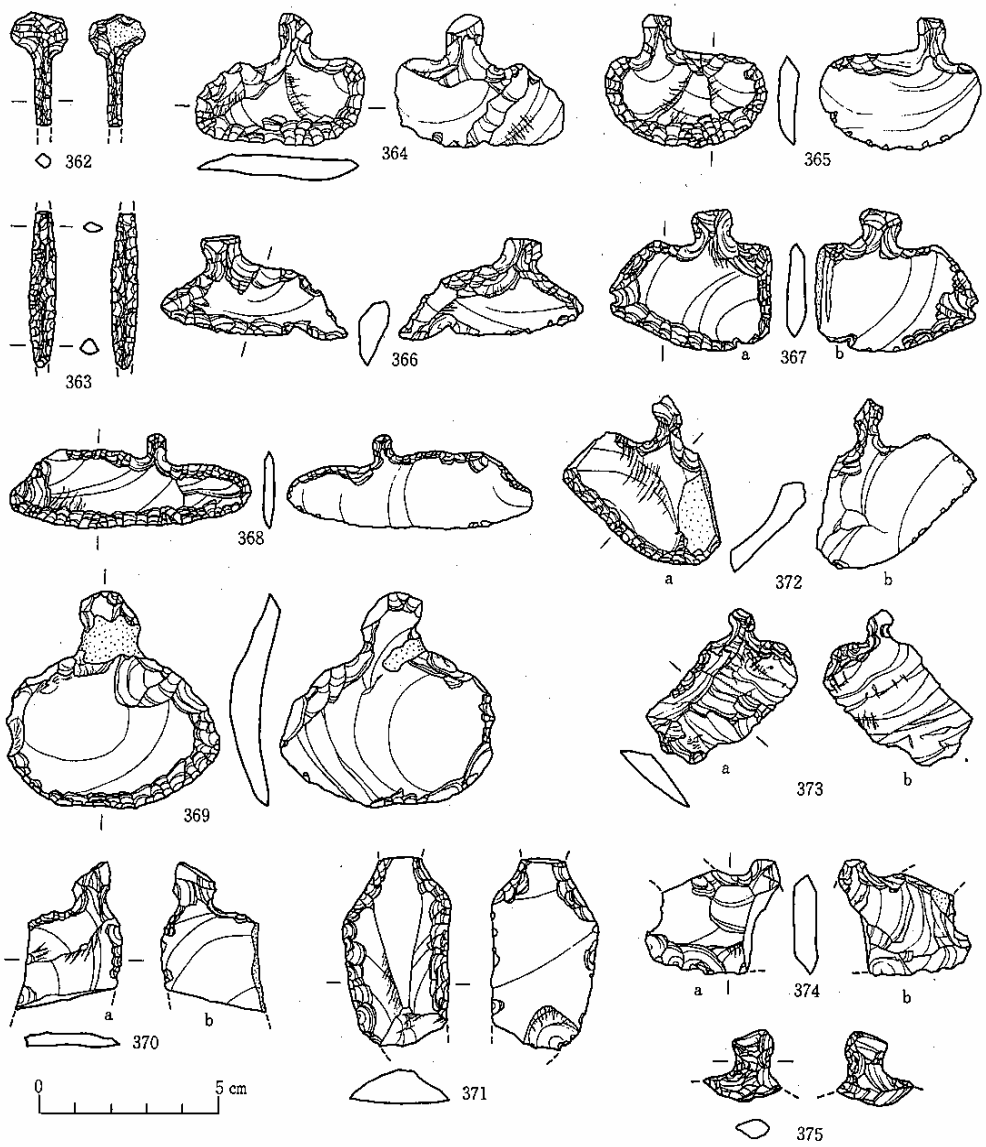
石匙：12 点出土している(364～375)。

364～369 は横型石匙である。368 は上部の刃部が両面加工になっているが、他のものはすべて片面加工の刃部である。369 は主要剥離面側に刃部が作り出されており、つまみ部には黒い物質が付着していることから膠着剤が残存したものと考えられる。367 はｂ面左側縁に自然面を残している。



番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石　　材
333	石　鏃	M12―ピット	(2.9)	1.7	0.6	(1.5)	珪化凝灰岩(一部玉ずい)
334	〃	2住一堆	1.8	0.9	0.4	0.4	玉ずい
335	〃	M12―2	(2.4)	1.3	0.4	(0.7)	珪質頁岩
336	〃	2住一堆	(2.4)	1.1	0.4	(0.7)	玉ずい
337	〃	P16―2	(2.2)	1.3	0.4	(1.2)	珪質頁岩
338	〃	O20―2	(1.6)	1.0	0.3	(0.4)	〃
339	〃	P16―2	(1.6)	(1.2)	0.4	(0.6)	玉ずい
340	〃	K15―ピット	3.5	1.0	0.7	1.9	珪質頁岩
341	〃	M19―2	3.5	1.8	0.6	3.2	〃
342	〃	O19―1	(2.7)	2.0	(0.6)	(2.2)	珪化凝灰岩
343	〃	5住一堆	2.7	1.5	0.4	1.7	珪質頁岩
344	〃	O16―ピット	(2.6)	(1.3)	(0.8)	(1.1)	〃
345	〃	K15―2	2.4	0.8	0.7	1.0	〃
346	〃	5住一堆	1.9	1.2	0.4	0.4	〃
347	〃	X―X	2.7	1.2	0.7	1.5	玉ずい
348	〃	X―X	2.6	1.2	0.5	1.1	珪質頁岩
349	〃	J14―2	2.1	0.8	0.3	0.3	玉ずい
350	〃	K14―2	(1.8)	1.3	0.5	(0.6)	〃
351	〃	K14―2	2.6	2.0	1.0	3.2	珪質頁岩
352	〃	X―X	(2.3)	1.0	0.4	(0.8)	〃
353	〃	X―X	(2.4)	1.3	0.6	(0.9)	玉ずい
354	〃	V2―2	(1.6)	(1.4)	(0.4)	(0.7)	珪質頁岩
355	〃	X―X	(2.1)	(1.2)	(0.7)	(1.7)	〃 (一部玉ずい)
356	石　錐	P19―3	(3.1)	1.6	0.9	(2.8)	〃
357	〃	O19・20―2・3	(4.9)	3.1	0.7	(8.3)	〃
358	〃	O16―ピット	3.8	2.2	0.9	5.6	〃
359	〃	K15―2	5.5	2.3	0.6	3.2	〃
360	〃	X―X	(1.7)	1.8	0.8	(1.5)	〃
361	〃	V3―X	5.0	2.6	1.4	9.9	〃

第38図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石材
362	石錐	J13—2	(3.2)	1.6	0.8	(2.0)	珪質頁岩
363	〃	K15—2	(4.3)	0.8	0.6	(1.8)	〃
364	石匙	L15—2	4.7	3.7	0.7	12.0	〃
365	〃	K13—1	4.5	3.7	0.6	11.1	〃
366	〃	O19—1	4.9	3.5	0.8	8.2	〃
367	〃	N18—1	4.5	3.9	0.6	12.8	〃
368	〃	O20—2	6.7	2.6	0.3	7.4	〃
369	〃	O22—1	6.1	6.0	1.3	37.6	頁岩
370	〃	M14—2	(2.9)	(4.2)	(0.5)	(6.3)	珪質頁岩
371	〃	E34—3	(3.0)	(5.3)	1.0	(15.2)	〃
372	〃	P16—2	3.9	4.6	0.8	11.5	〃
373	〃	N16—3	4.4	4.3	0.7	7.5	〃
374	〃	O21—2	(3.8)	(3.2)	(0.6)	(11.1)	〃
375	〃	X—X	(2.2)	(2.0)	(0.6)	(1.6)	〃

第39図　石　　器

370・371 は縦型石匙である。370 は刃部の下半を欠損しており、残存している刃部にはわずかに連続する片面加工がみとめられる。ｂ面右側縁には自然面を残している。371 はつまみ部と刃部先端を欠損している。両側縁には入念な片面加工が施されている。

372・373 はつまみ部に対して刃部が斜めに作り出されているものである。372 には入念な片面加工の刃部がみとめられ、ａ面右側に自然面を残している。373 はａ面の左側縁にわずかに片面加工が施されており、他の縁片には二次加工がみとめられない。

374 は横型石匙かと思われるが、ａ面右側と左側縁が欠損して不明である。残存している刃部には粗い片面加工により鋸歯状になっている。375 はつまみ部だけの破片である。

石錐：５点出土している(376～380)。

376～378 は上辺が狭く下辺が広くなる縦長の台形状の形態をもつ。いずれも両面加工が施されているが、378 はａ面中央に自然面を残している。両側縁は３点とも直線的であるが、下辺は 376 がやや内弯気味なのに対して他の２点は直線的である。

379 はＬ字形の形状になっている。両面加工が施されているものの、両面に自然面が残っている。ａ面下辺左側の縁辺は使用によると思われる摩耗がみとめられる。

380 は半欠品であるが、縦長の長方形であろうと推測される。粗い両面加工がなされている。

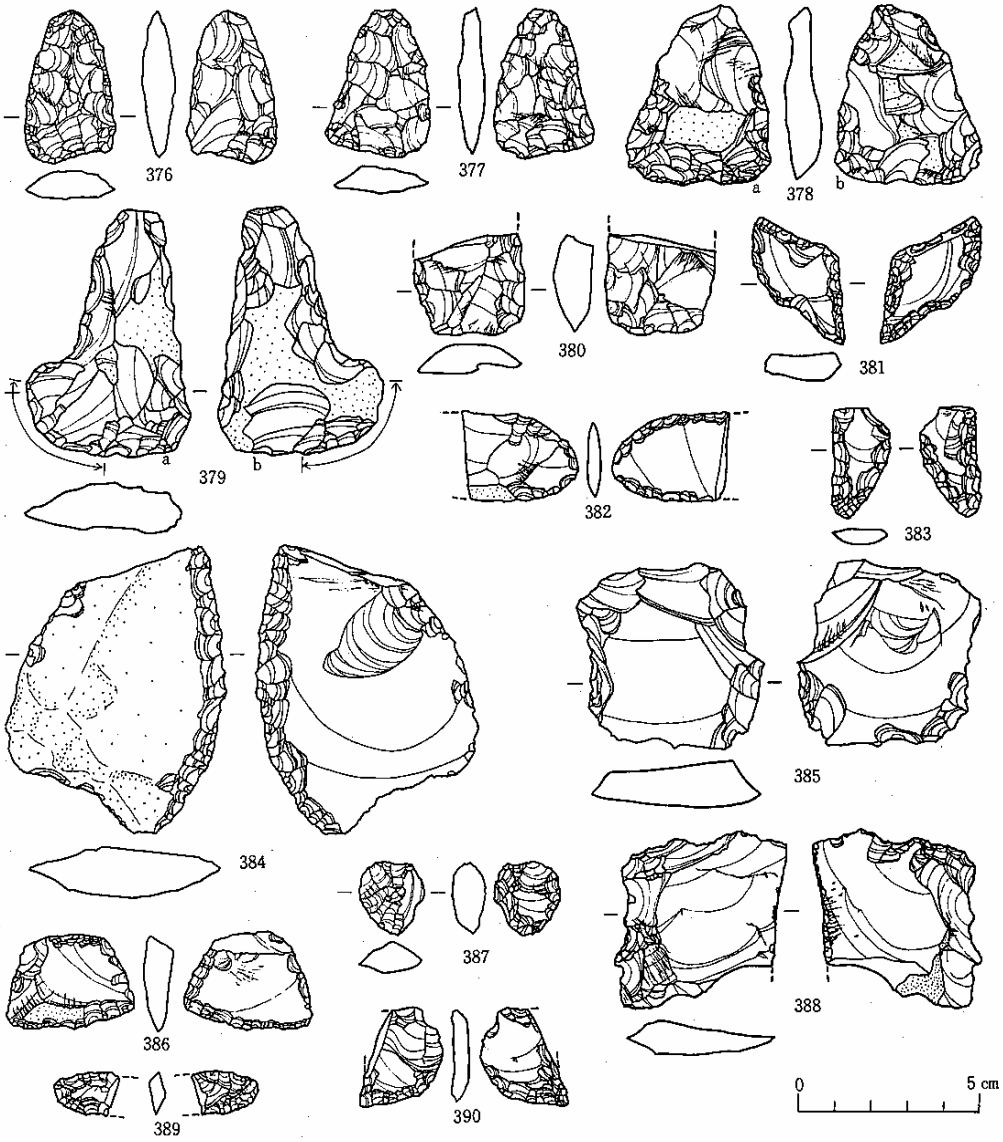
不定形石器：38 点出土している(381～415)。

381～390 は両面加工による刃部を有するものである。385・388 は粗い二次加工が施されて鋸歯状の刃部になっている。384 は背面が自然面の剥片を素材としている。387・389 は二次加工の及んでいる範囲が広く、背面と主要剥離面が明らかでない。381・383～386 は打面が残っている。

391 はａ面の左側縁が両面加工で、右側縁が片面加工の刃部である。素材となった剥片はツインバルブの縦長のものである。

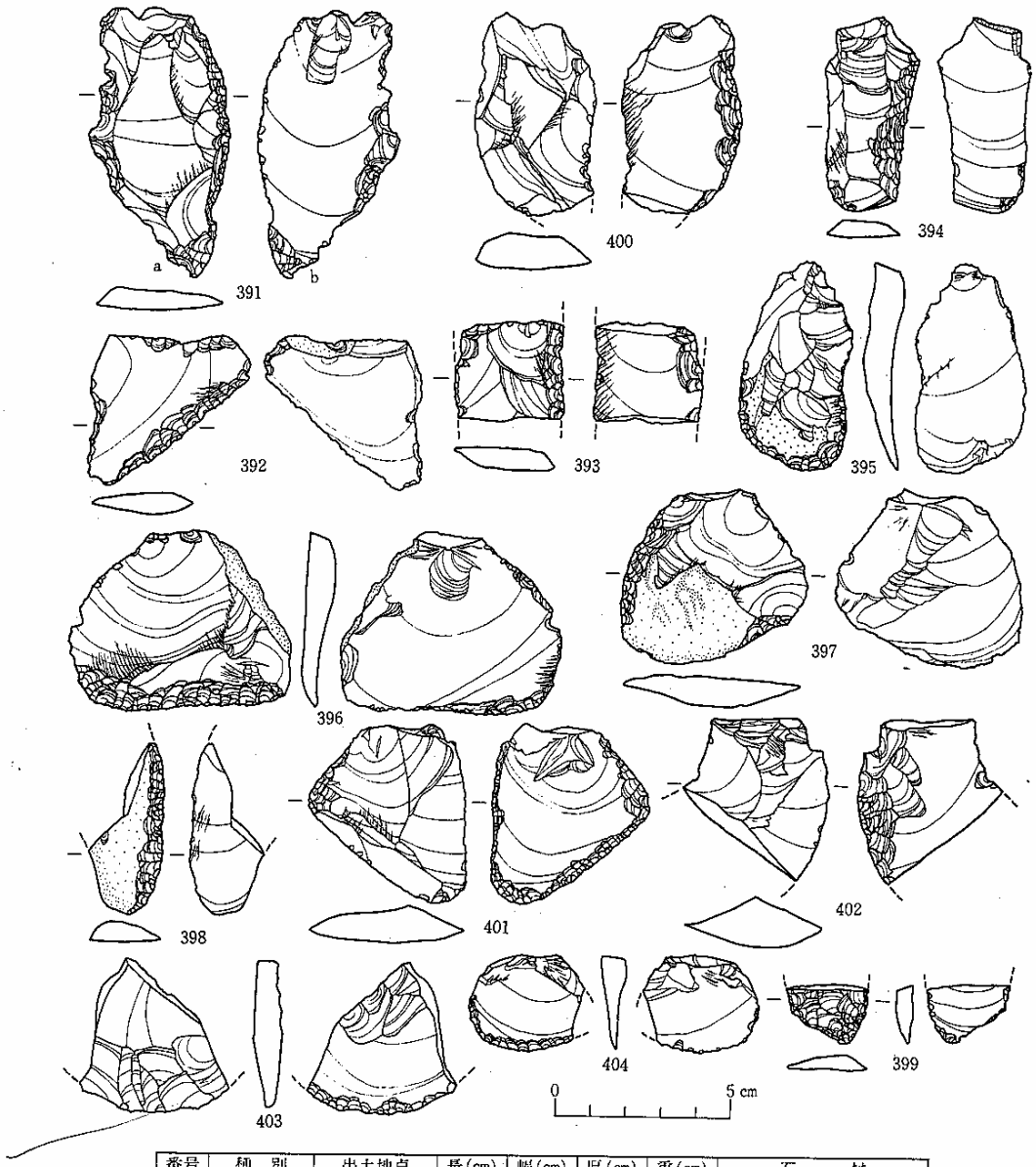
392～408 は片面加工の刃部を有している。392～399・404 は背面側に二次加工が加えられている。400～403・405 は主要剥離面側に二次加工がなされている。406～408 は背面側と主要剥離面側に二次加工が施されて錯向剥離の刃部が形成されている。399 は背面全面に二次加工が及んでいる。405 は刃部の中央に両側から１回ずつの加撃で抉り込みの刃部を作り出している。

409～415 は剥片の一部を尖頭状に作り出しているものである。このうち、409・410・414・415 は両端が尖頭状に加工されている。410・415 は一部に自然面を残している。411～413 は一端を尖頭状にしたものである。412 は主要剥離面を残しており、ａ面の右側縁を一部欠損している。411 は尖頭部をわずかに欠損している。なお、これらの７点は別器種として取り上げるべきものかもしれないが、出土点数が少ないので、一応不定形石器に含めておく。



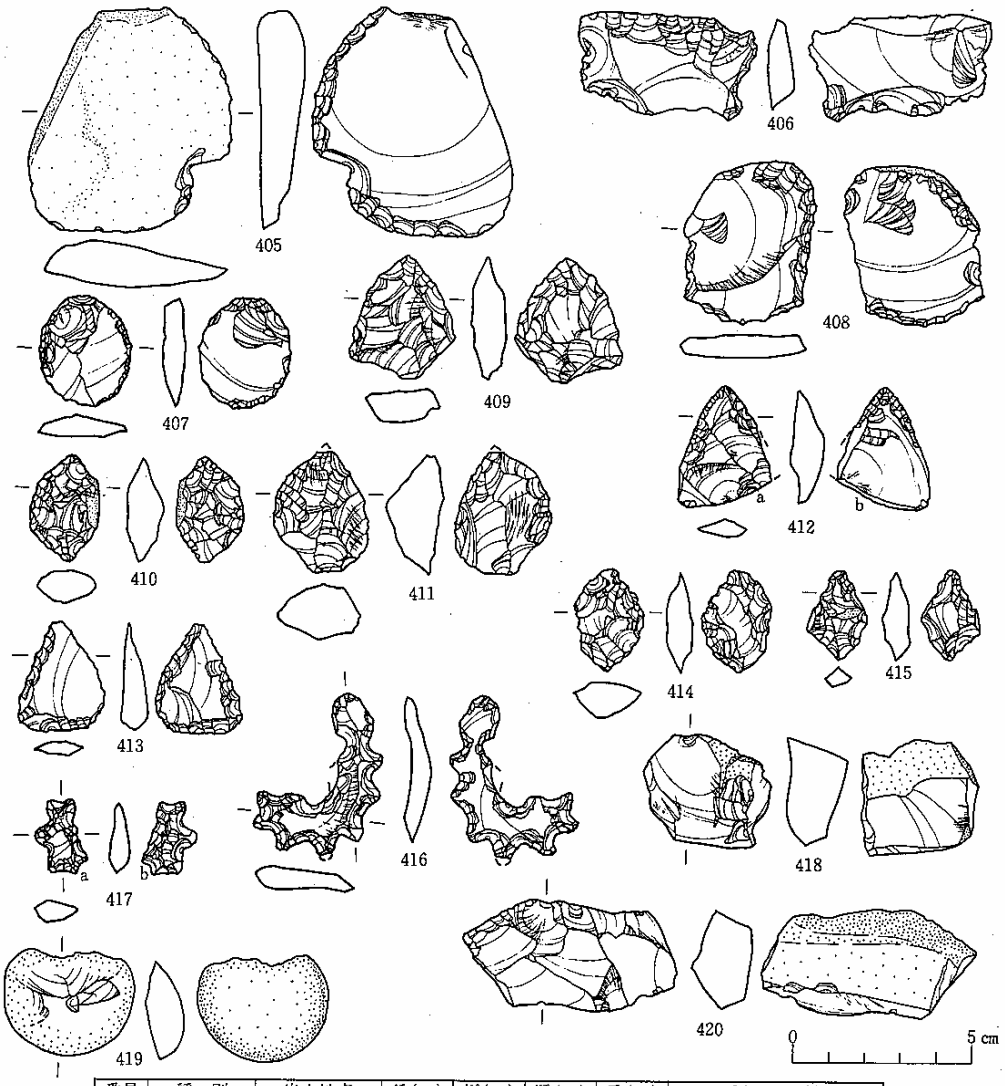
番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石　　材
376	石　　鏃	R18―2	4.3	2.5	1.0	8.5	珪質頁岩
377	〃	V3―2	4.1	2.3	0.8	8.3	〃
378	〃	X―X	5.0	4.0	1.1	18.7	〃
379	〃	L15―3	6.9	4.6	1.4	45.9	〃
380	〃	Q18―3	(2.8)	(3.1)	(1.2)	(10.9)	〃
381	不定形石器	N16―ピット	3.7	2.4	0.8	5.7	〃
382	〃	D36―4	(2.6)	3.3	(0.4)	(6.0)	〃
383	〃	K15―2	3.0	1.6	0.5	2.3	珪質凝灰岩
384	〃	N17―2	7.3	6.9	1.5	70.1	珪質頁岩
385	〃	M18―2	5.2	5.3	1.4	44.7	頁　岩
386	〃	4住一堆	3.5	2.6	0.7	7.8	珪質頁岩
387	〃	D34―2	2.0	1.8	0.9	2.7	〃　(一部玉ずい化)
388	〃	K14―2	(6.3)	(5.0)	(1.0)	(21.9)	〃
389	〃	X―X	(1.2)	(1.8)	(0.5)	(1.0)	〃
390	〃	L14―2	(2.8)	(2.3)	(0.5)	(3.6)	〃

第40図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石材
391	不定形石器	V1－1	7.7	4.0	0.6	23.3	珪質頁岩
392	〃	X－X	4.6	4.3	0.7	13.4	〃
393	〃	X－X	(3.6)	(3.8)	0.6	(8.5)	〃
394	〃	R18－2	5.2	3.4	0.6	9.1	〃
395	〃	L12－2	6.0	3.1	1.0	15.8	〃
396	〃	K15－2	5.2	6.3	0.8	30.5	〃
397	〃	X－X	5.6	5.2	1.0	27.8	〃
398	〃	K14－2	(4.8)	(2.1)	(0.7)	(5.4)	珪質凝灰岩
399	〃	K14－2	(1.7)	(2.3)	(0.5)	(1.6)	珪質頁岩
400	〃	R17－ピット	(5.5)	4.0	1.1	(22.9)	〃
401	〃	M18－2	5.1	4.5	0.8	24.6	〃
402	〃	R19－2	(4.7)	(4.2)	(1.4)	(27.7)	〃
403	〃	O21－2	(4.4)	(4.3)	0.8	(14.0)	〃
404	〃	O22－2	(2.7)	3.3	0.7	(5.0)	〃

第41図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
405	不定形石器	M19－2・3	6.3	5.6	1.4	50.4	珪質凝灰岩
406	〃	P16－2	3.0	5.0	0.8	13.5	珪質頁岩
407	〃	D36－2	3.1	2.6	0.7	5.3	〃
408	〃	L23－2	4.3	3.7	0.9	16.5	〃
409	〃	N18－2	3.5	3.0	1.0	9.0	〃
410	〃	2住－堆	3.0	2.0	1.0	5.8	玉ずい
411	〃	L22－2	(3.4)	2.6	1.6	(11.5)	黒曜岩
412	〃	O18－2	3.3	(2.7)	1.0	(6.5)	珪質頁岩
413	〃	P21－2・3	3.1	2.5	0.8	4.0	珪化流紋岩
414	〃	3住－堆	2.8	1.9	1.0	4.0	珪質頁岩
415	〃	S19－2	2.5	1.7	0.8	2.8	珪化凝灰岩
416	異形石器	O18－2	4.6	3.7	0.6	5.4	珪質頁岩
417	〃	O18－2	2.0	1.5	0.6	1.3	〃

番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	最終剥離面				石材
							長(cm)	幅(cm)	長幅指数	打角	
418	石核	V3－2	3.3	3.4	2.7	25	3.4	3.3	103	63°	珪質頁岩
419	〃	X－X	2.9	3.6	1.1	13	1.5	3.3	45	67°	黒曜岩
420	〃	P21－1	3.1	6.1	2.1	42	1.7	1.4	121	85°	珪質頁岩

第42図　石　　器

異形石器：２点出土している(416・417)。

416 は全体が J 字形になっている。10 ケ所にえぐりを入れて、えぐりとえぐりの間を突出すように作り出している。１ケ所は突出部が基部から欠損しており、もう１ケ所は突出部の先端を欠損している。両面加工が周縁部にのみ施されている。417 は全体として長方形であるが a 面左側縁には２ケ所えぐりこみがみられ、その間が突出している。両面加工がほぼ全面に及んでいる。

石核：23 点出土している(418～440)。

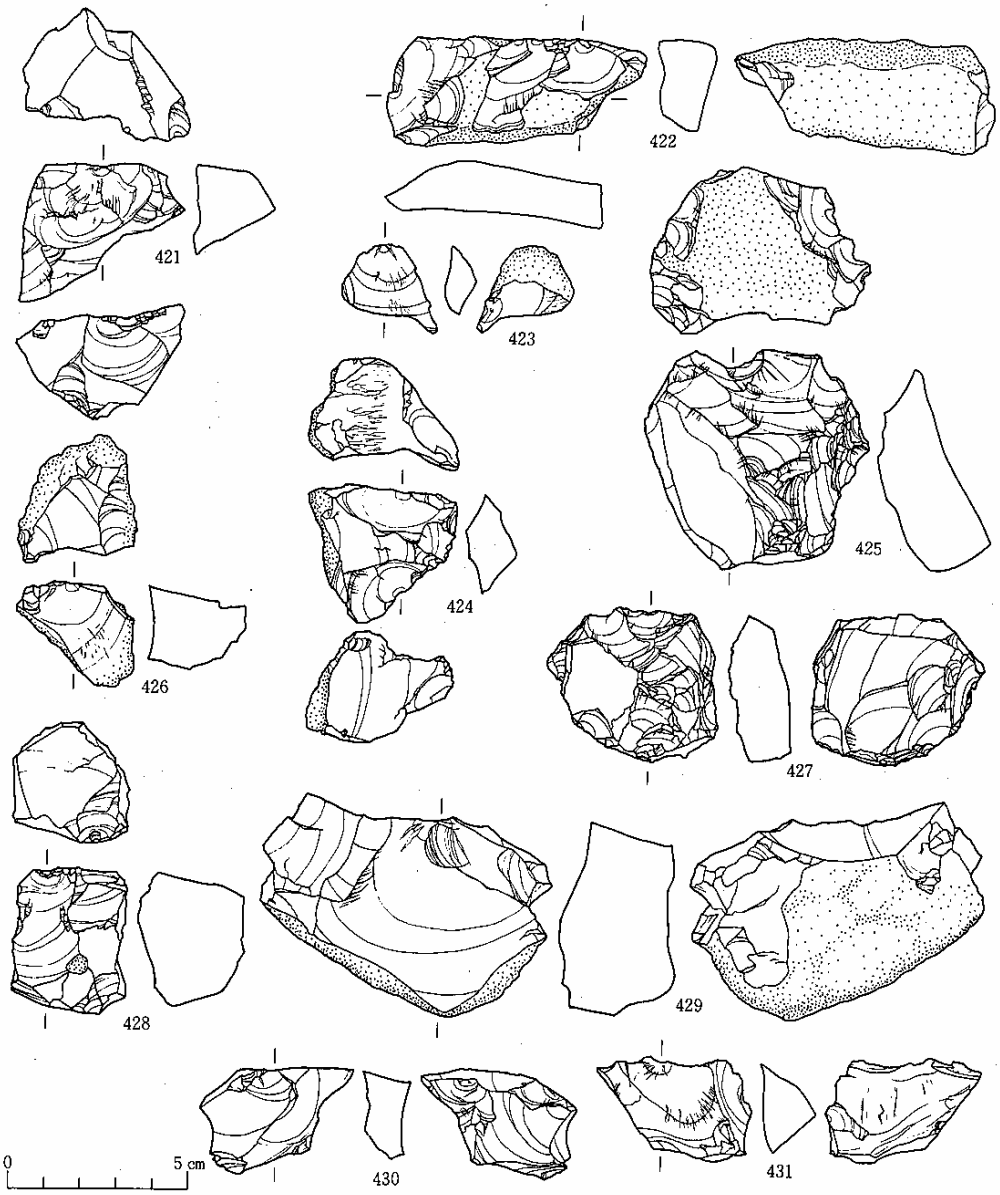
418～425・439 は自然面もしくは節理面を最終剥離の打面としているものである。439 は a 面側と b 面側から大きな剥片を数枚剥離しただけの石核である。礫器かもしれないが、剥離面と打面との境界の稜には摩耗痕や刃潰れなどがみとめられない。419・421～423 は加撃に適当な自然面や節理面から数枚の小さな剥片を剥離している。425 は打面を約 90 度単位で転位して剥離作業が行なわれている。

426～438・440 は剥離された面を最終剥離の打面としているものである。440 は節理に沿って方形に粗割りした後に剥離が行なわれている。剥離作業は１つの面で約 90 度単位で打面転位をしながらなされ、剥離困難になると別の面でまた打面転位をしながらなされている。428 も 440 と同じような剥離作業がなされた石核である。432 と 435 も先に剥離作業の行なわれた面を打面として次の剥離が施されているが、打面転位の角度は任意である。426・429・438 は礫を半截した後、その面を打面として数枚の剥離されている。436 は打点上に半円形の小さなくぼみがあり、間接打法による剥離がなされたのかもしれない。なお、332 に示した石鏃は接合しないが 438 と同一母岩資料であると考えられる。

剥片：2,001 点の剥片が出土している。このうち、周縁に不連続な二次加工痕のあるものや連続する微細剥離痕のあるものが 218 点含まれている。また、接合資料が４例みとめられた。ここでは、その接合資料について述べ、その他のものは集計表に一括する。

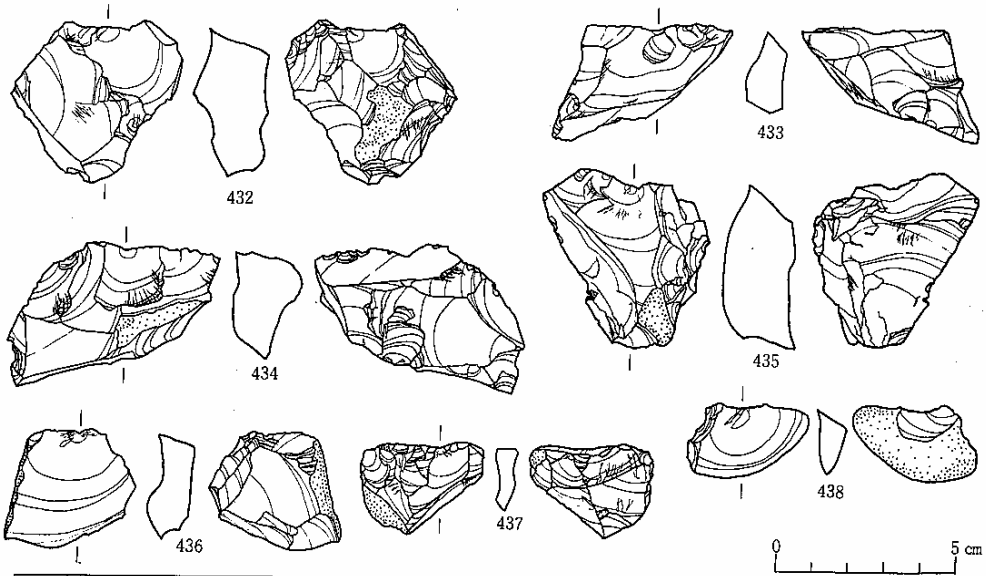
資料１は４点接合したものである(441～444)。資料１の剥離工程を復元すると次のようになる。

① 剥片 441 の打面を形成する剥離
② ①の打面から少なくとも３回以上の剥片剥離
③ 剥片 441 の剥離
④ 剥片 442 の剥離
⑤ ①の打面から３回の剥片剥離
⑥ 打面を約 90 度転位して自然面を打面として剥片 443 の剥離
⑦ 剥片 444 の剥離

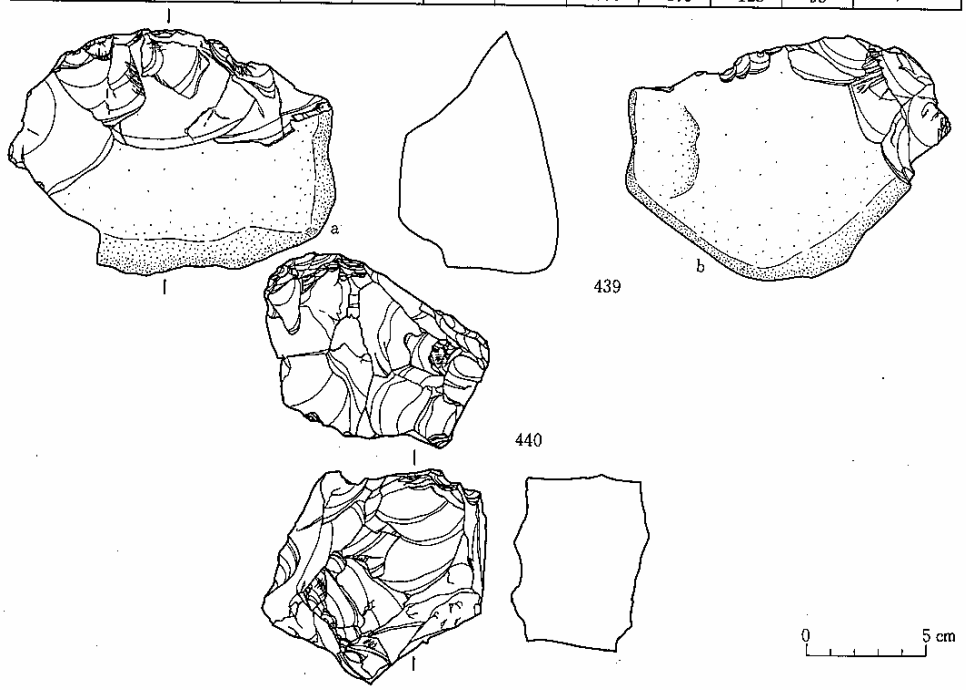


番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	最終剥離面				石材
							長(cm)	幅(cm)	長幅指数	打角	
421	石核	N17－2	3.9	4.5	3.1	37	2.3	3.5	65	80°	珪質頁岩
422	〃	5住－堆	3.0	7.1	1.5	45	1.7	2.6	65	80°	〃
423	〃	D36－2	2.6	2.7	1.1	4	2.6	2.3	113	76°	〃
424	〃	K14－2	3.8	4.3	2.7	27	1.5	3.3	45	73°	〃
425	〃	M15－1	6.1	6.2	2.4	82	2.9	3.7	78	73°	〃
426	〃	P22－2	3.3	3.2	3.7	34	2.7	3.2	84	70°	〃
427	〃	M15－1	4.3	4.7	2.4	39	1.9	2.4	79	84°	〃
428	〃	D35－2	4.1	3.3	3.5	58	3.4	2.2	154	77°	〃
429	〃	X－X	5.5	8.3	4.4	228	5.4	6.7	80	85°	〃
430	〃	O20－3	2.9	4.3	1.8	12	2.4	3.0	80	75°	〃
431	〃	O16－ピット	2.8	4.2	1.9	20	2.7	4.1	65	70°	〃

第43図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	最終剥離面				石材
							長(cm)	幅(cm)	長幅指数	打角	
432	石核	2住一堆	4.5	4.8	2.6	37	2.7	2.8	96	75°	珪質頁岩
433	〃	O20—2	3.2	5.0	1.7	16	2.0	4.5	44	66°	〃
434	〃	L13—2	4.2	5.7	1.9	39	1.9	1.8	105	61°	〃
435	〃	4住一堆	4.8	4.8	2.5	42	3.7	2.7	137	70°	〃
436	〃	P16—1	3.3	3.6	1.3	17	3.3	3.6	91	63°	〃
437	〃	M14—2	2.7	3.5	1.4	9	1.9	1.9	100	83°	玉ずい
438	〃	O20—3	2.1	3.4	2.3	7	2.1	3.3	63	40°	珪化凝灰岩
439	〃	X－X	7.1	13.8	7.1	1023	6.4	5.5	116	69°	珪質頁岩
440	〃	3住一堆	9.1	9.2	8.9	667	5.0	3.9	128	95°	〃



第44図　石　　器

このことから、①で打面作出が行なわれた後、ａ面を剥離作業面として目的剥片を生産しており、その間に打面転位がなされていることがわかる。

資料２は３点接合したものである(445～447)。資料２の剥離工程を復元すると次のようになる。

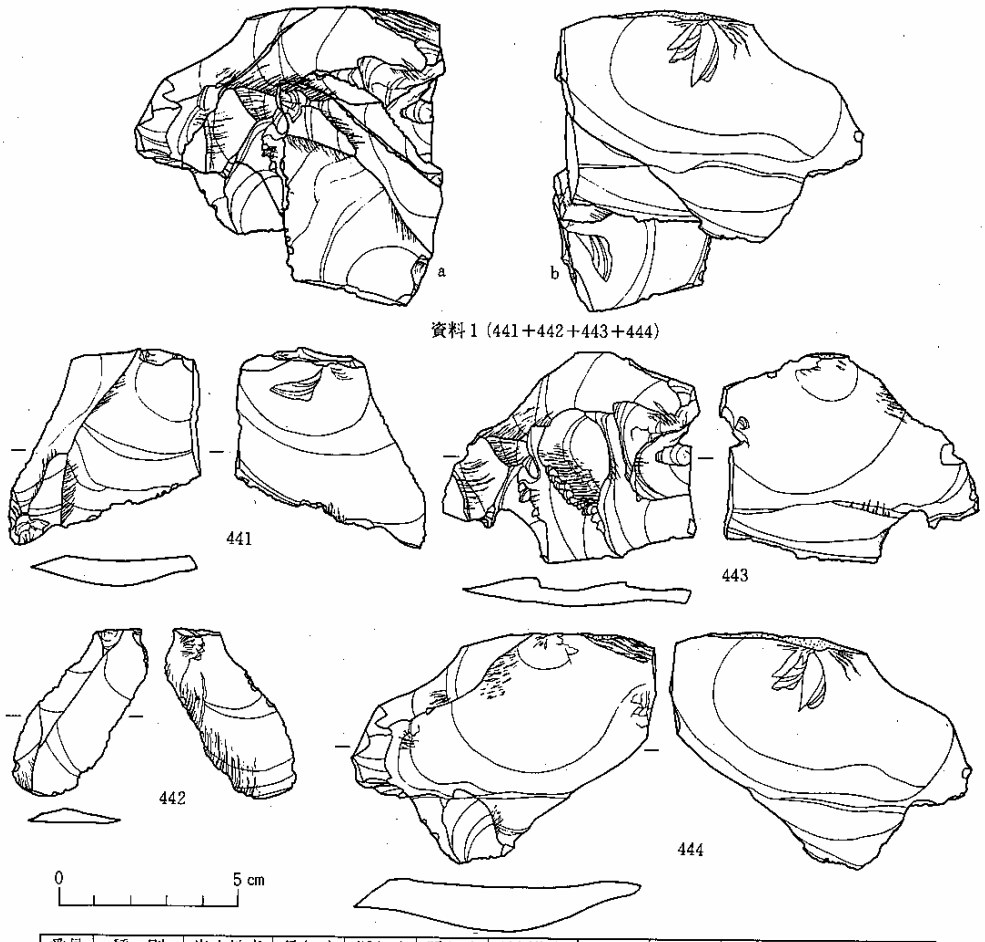
① 剥片445・446と同一の打面（自然面）から少なくとも４回以上の剥片剥離

② 打面を約90度転位して剥片447と同一の打面（自然面）から１回以上の剥片剥離

③ ①と同一の打面に再度転位して剥片445の剥離

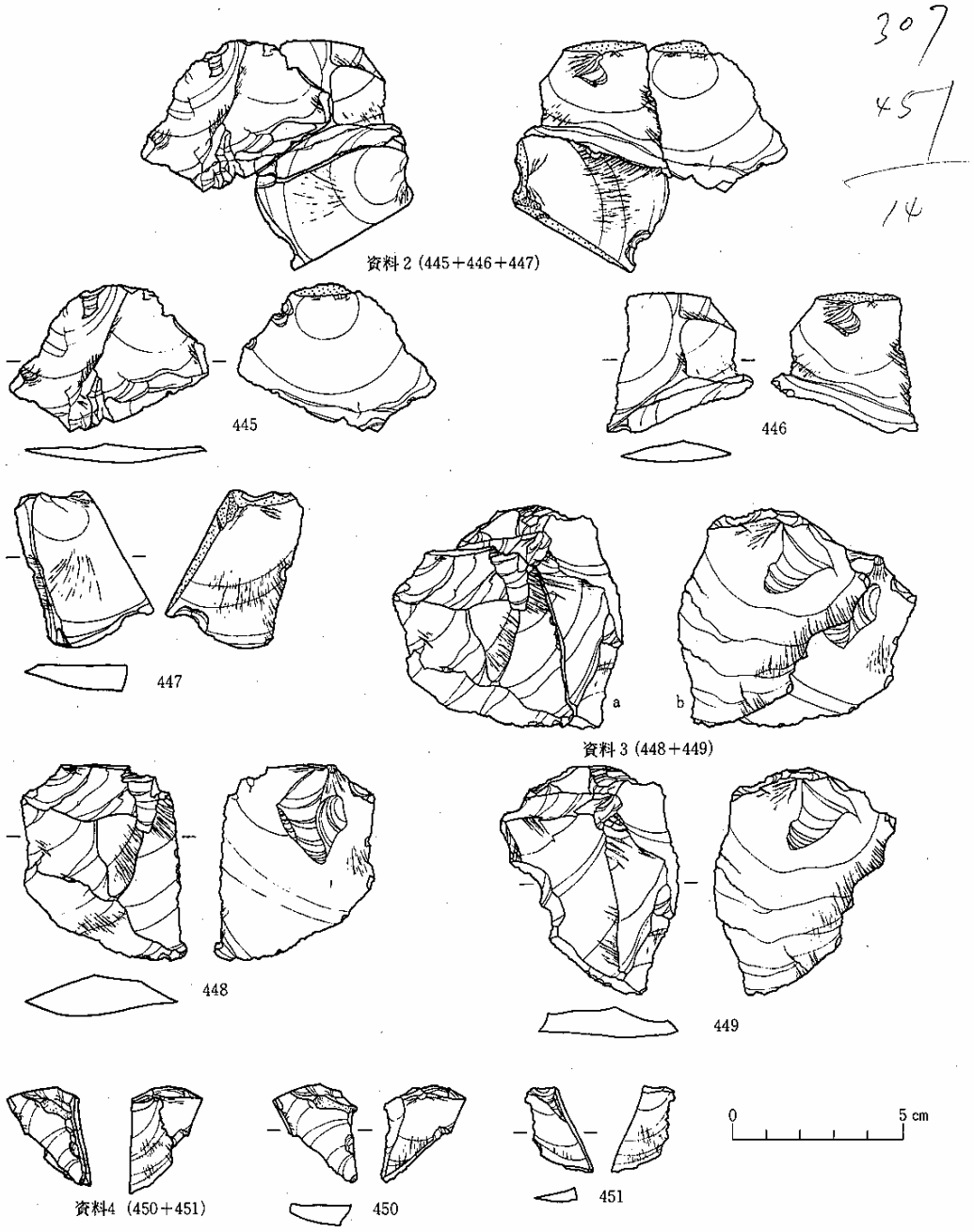
④ 剥片446の剥離

⑤ ②と同一の打面に転位しで剥片447の剥離



番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長幅指数	打　角	重(g)	石　　材
441	剥　片	R18－2	5.4	5.3	0.7	102	104°	23.8	珪質頁岩
442	〃	〃	4.6	3.7	0.4	124	101°	15.2	〃
443	〃	〃	5.8	7.1	0.6	82	97°	24.4	〃
444	〃	〃	6.9	8.5	1.3	81	100°	60.7	〃

第45図　石　　器



番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長幅指数	打　角	重(g)	石　材
445	剝　片	R18－2	4.3	5.9	1.0	73	113°	12.1	珪質頁岩
446	〃	〃	4.1	4.3	0.7	95	111°	10.2	〃
447	〃	〃	4.6	4.1	1.0	112	113°	13.0	〃
448	〃	〃	5.7	4.8	1.2	119	81°	30.8	〃
449	〃	〃	6.7	5.3	1.7	126	110°	41.2	〃
450	〃	O19－4	2.9	2.5	0.8	116	117°	5.0	〃
451	〃	〃	2.5	2.0	0.4	125	105°	1.2	〃

第46図　石　　器

このことから、資料２では打面作出がなされず、素材となった礫の形状をそのまま利用して打面転位を頻繁に行なった剥片剥離であったことがわかる。なお、資料１と資料２は同一のグリッドから出土した同一母岩資料であり、これらと同じ同一母岩資料は他に６点出土しているが接合しなかった。また資料１と資料２の先後関係は不明である。

資料３は２点接合したものである(448・449)。資料３の剥離工程を復元すると次のようになる。

① 剥片448・449の打面を形成する剥離
② ①の打面から少なくとも３回以上の剥片剥離
③ 打面を約60度転位して少なくとも４回以上の剥片剥離
④ 再度①の打面に転位して剥片448の剥離
⑤ ①の打面から少なくとも４回以上の剥片剥離
⑥ 剥片449の剥離

このことから、①で打面作出がなされ、ａ面を剥離作業面として剥片生産が行なわれ、その間に打面転位を頻繁に行なっていることがわかる。なお、資料３と同一母岩資料が同一グリッドから他に24点出土しているが接合しなかった。

資料４は２点接合したものである(450・451)。剥片 450・451 の打面作出を行なった後に剥片450、剥片451と順次剥離されているが、資料１・２・３ほどは剥離工程を明確にできない。

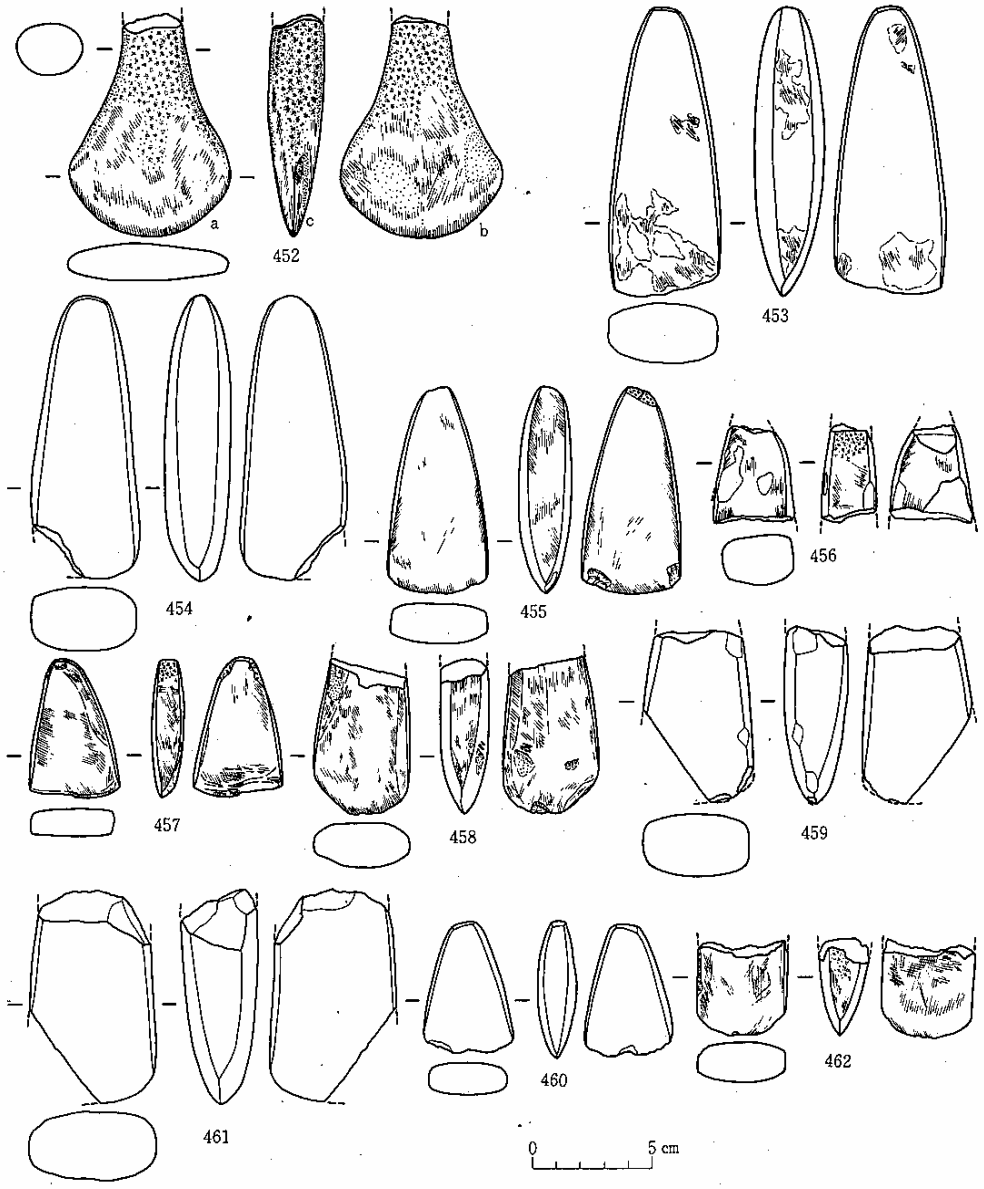
磨製石斧：13点出土している(452～464)。

452は斧頭部を欠損している。刃部は扁平で幅が極端に広いが、着柄部は急激にすぼまって円柱状になっている。刃縁は大きく外弯している。ｂ面刃部の中央部と右側に石斧製作時の剥離のくぼみがみとめられる。着柄部には敲打痕がみとめられ、それを切って刃部が研磨されている。

453～460 は斧頭部の幅が狭く刃部の幅の広いものである。455・457 は研磨の後に斧頭部に敲打を施している。455・457～460は刃縁に破損がみとめられるが、457 では破損部を再研磨している。454・456・459・460は器面が風化しており、研磨の痕跡がみとめられない。

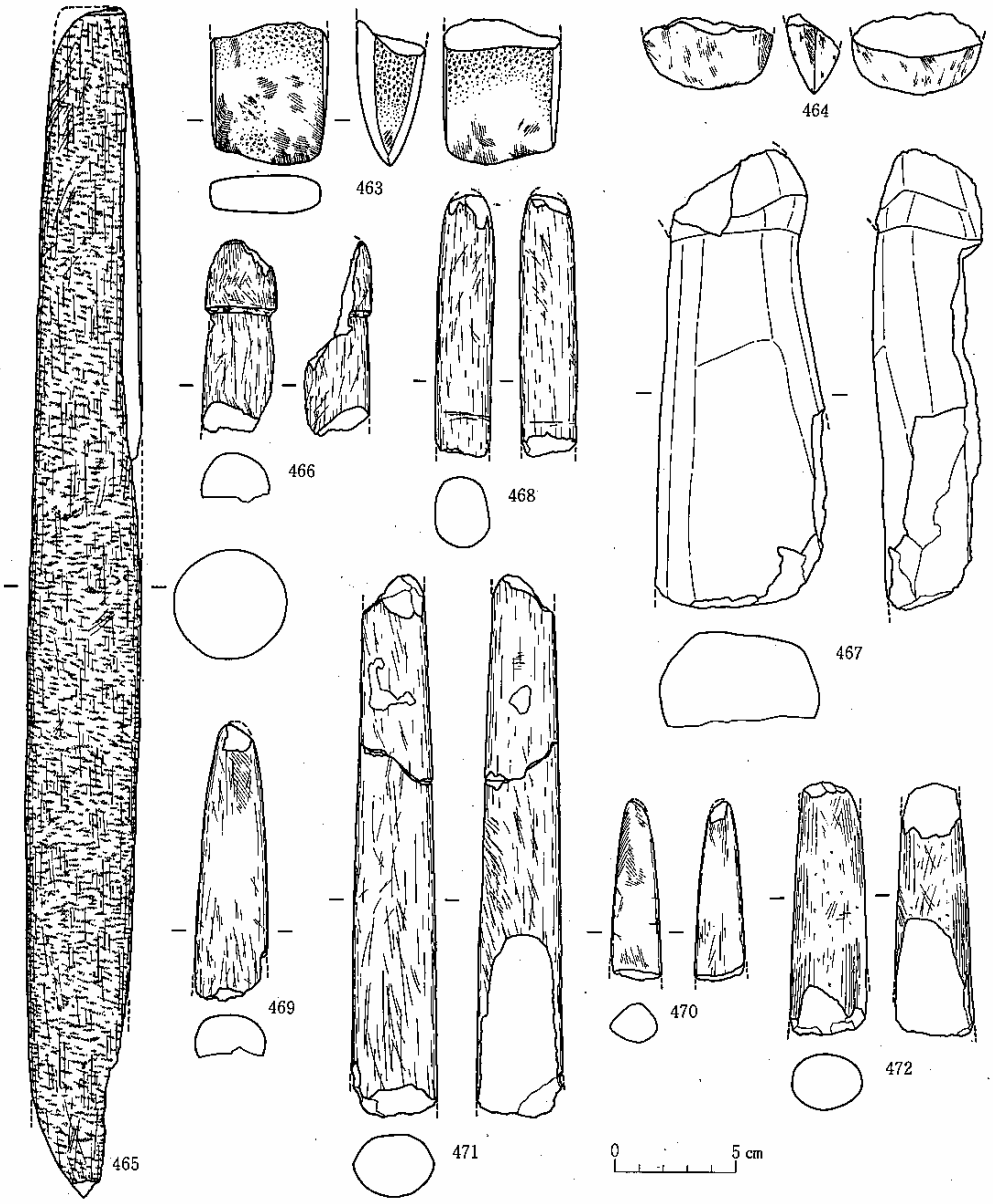
461～463は斧頭部と刃部の幅がほぼ等しいものである。461は器面の風化が著しい。463は胴部に敲打痕がみとめられ、刃部のみ研磨されている。

464は刃部だけの破片である。刃縁には丸味を帯びた細かい凹凸が見られる。刃こぼれ後も使用し摩耗した結果であろうと思われる。



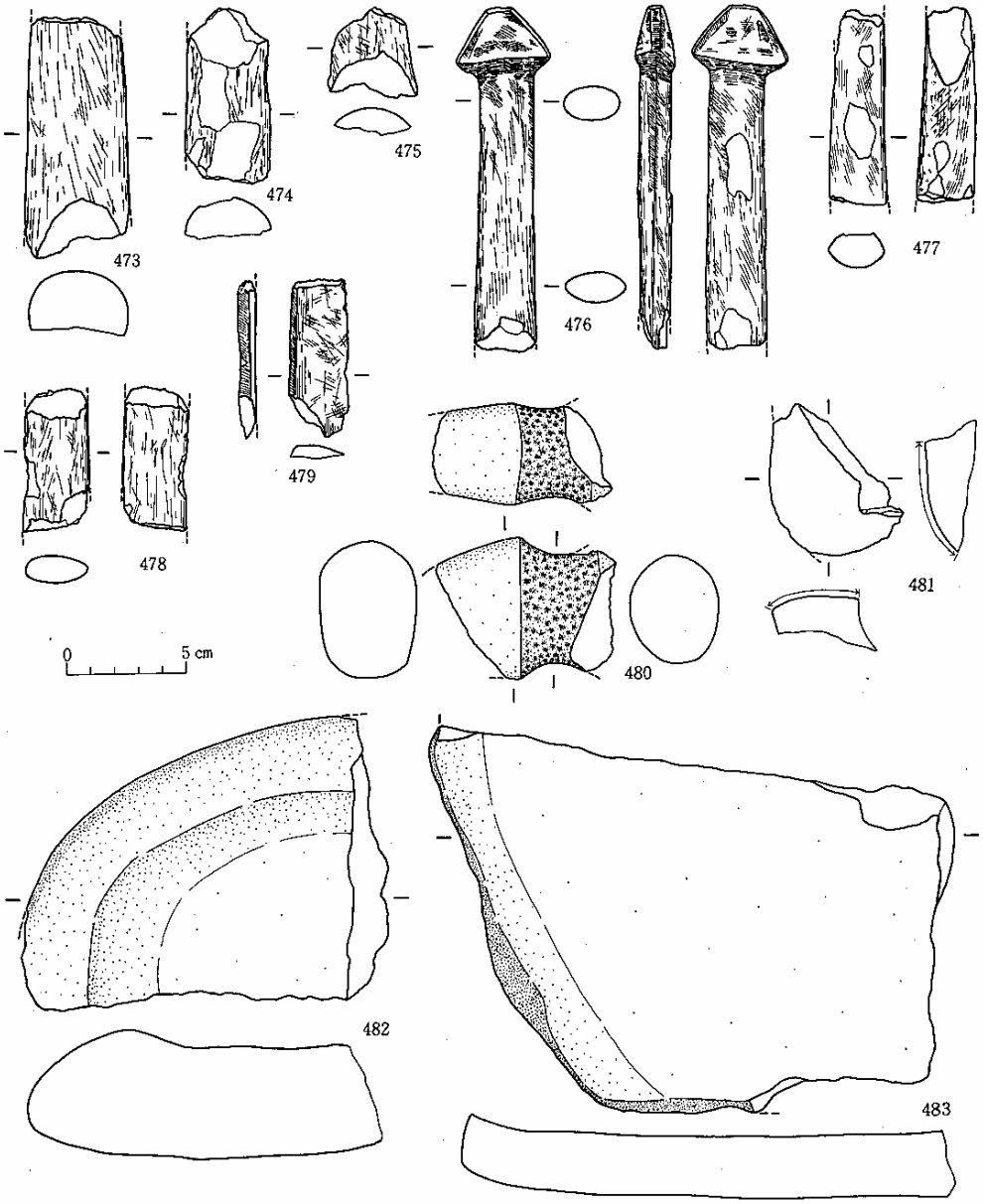
番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石　　材
452	磨製石斧	O21－2	(9.3)	6.7	2.3	(138)	玢　岩
453	〃	K21－2	12.1	4.7	2.9	239	安山岩
454	〃	K16－2	11.9	(4.5)	2.8	(235)	〃
455	〃	N19－2	8.6	4.2	2.2	119	〃
456	〃	N18－2	(4.1)	(3.4)	(2.3)	(49.2)	砂質凝灰岩
457	〃	Q18－3	5.9	3.8	1.4	43.2	珪化凝灰岩
458	〃	3住一堆	(6.5)	4.0	(2.0)	(90)	安山岩
459	〃	2住一堆	7.2	(4.5)	2.7	(141)	砂質凝灰岩
460	〃	D36－2	5.4	3.7	1.6	42	安山岩
461	〃	R19－2	8.9	(5.2)	3.2	(228)	〃
462	〃	1住一堆	(4.1)	3.8	(2.1)	(44)	珪化凝灰岩

第47図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
463	磨製石斧	B、B7－2	(5.9)	4.9	(2.9)	(121)	安山岩
464	〃	N13・14－3	(3.1)	(5.4)	(2.3)	(34)	〃
465	石棒	L12－2	(49.7)	4.6	4.7	(1162)	粘板岩
466	〃	M13・14－2・3	(8.1)	3.0	2.2	(55)	〃
467	〃	K22－1	(19.0)	(7.0)	(4.4)	(712)	石英安山岩
468	〃	4住－3	(11.0)	2.4	3.0	(139)	粘板岩(ホルンフェルス化)
469	〃	M13・14－2・3	(11.6)	(3.1)	(1.7)	(80)	凝灰岩質粘板岩
470	〃	R21－2	(7.5)	(2.0)	1.7	(31)	粘板岩(ホルンフェルス化)
471	〃	L15－2	(22.7)	(3.5)	2.6	(314)	〃
472	〃	O21－2	(10.6)	(3.3)	(2.4)	(101)	〃

第48図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(cm)	石材
473	石棒	R18－2	(10.0)	4.4	(2.5)	(138)	粘板岩
474	〃	M16－ピット	(7.4)	(3.6)	(1.8)	(49)	〃
475	〃	N17－2	(3.8)	(3.7)	(1.2)	(12)	〃
476	石剣	L13－2	(14.6)	4.0	1.7	(89)	〃
477	〃	Q18－1	(8.2)	(2.4)	(1.6)	(46)	〃（ホルンフェルス化）
478	〃	J10－2	(6.1)	(2.7)	(1.2)	(27)	〃
479	〃	M14－1	(6.7)	(2.5)	(1.0)	(15)	〃
480	独鈷石	Q18－2	(6.0)	(7.5)	(4.2)	(232)	安山岩
481	研磨石製品	N16－3	(6.4)	(5.6)	(2.1)	(55)	石英安山岩
482	石皿	1住一堆	(12.0)	(15.3)	(5.3)	(1200)	安山岩
483	〃	N18－1	(21.8)	(16.4)	(2.8)	(1700)	石英安山岩

第49図　石　　器

石棒：11 点出土している(465～475)。完形品はない。

465 は頭部と先端部の一部を欠損している。火熱を受けて赤変した部分がみとめられる。節理面に沿って細長く割れているが、おそらく火熱によるものと推測される。表面には敲打痕がみとめられ、それを切って研磨の際の擦痕が石棒と平行な方向にみとめられる。断面形は円形である。466・467 は頭部の破片である。467 は大形のものである。器面は風化が著しく製作時や使用時の痕跡はみとめられない。466 は小形のもので、全面に擦痕がみとめられる。２点とも頭部は男根に近い形状である。468～470 は先端部の破片である。469・470 は先端部の幅がすぼまり尖り気味になっているが、468 はそのままの幅で丸味をもつ先端部になっている。断面形は 470 が不整円形で、468 が楕円形である。３点とも表面に擦痕がみとめられる。471～475 は中央部の破片である。472 は表面に擦痕の他にわずかに敲打痕がみとめられるが、他の４点は擦痕のみである。断面形は 471 が不整円形、472 が楕円形、473 が円形で 474・475 は不明である。

石剣：４点出土している(476～479)。完形品はない。

476 は頭部破片である。頭部は台形になっている。剣身部の断面形は凸レンズ形である。全面に擦痕がみとめられる。477～479 は剣身部の破片である。いずれも擦痕がみとめられる。477・478 は断面形が凸レンズ形である。479 は平坦な棟が作り出されており、片刃の石剣と考えられる。

独鈷石：１点出土している(480)。把部の破片であり、全体の形状は不明である。把部と鈷部とは稜によって分かれている。把部には敲打痕がみとめられる。鈷部は研磨されているが、擦痕などは不明である。

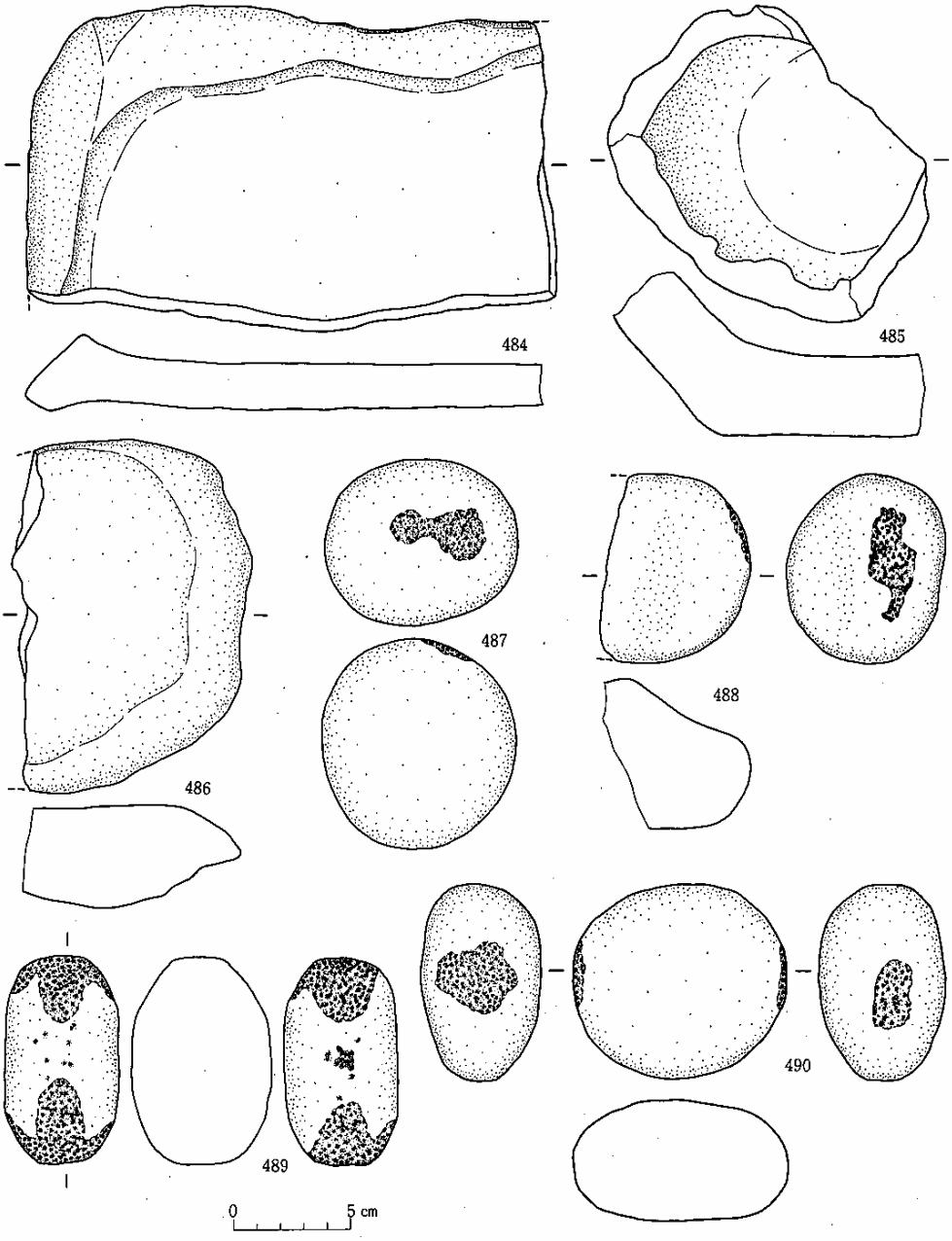
研磨痕を有する石製品：欠損品のため全体の形状が不明である(481)。表面は丸味を帯びており研磨されている。

石皿：５点出土している(482～486)。すべて欠損品であり、片面だけに磨面を有するものである。また５点とも無脚である。482～485 は有縁のもので、そのうち前三者は断面形が三角形になっている。486 は無縁のものである。

敲石：７点出土している(487～493)。

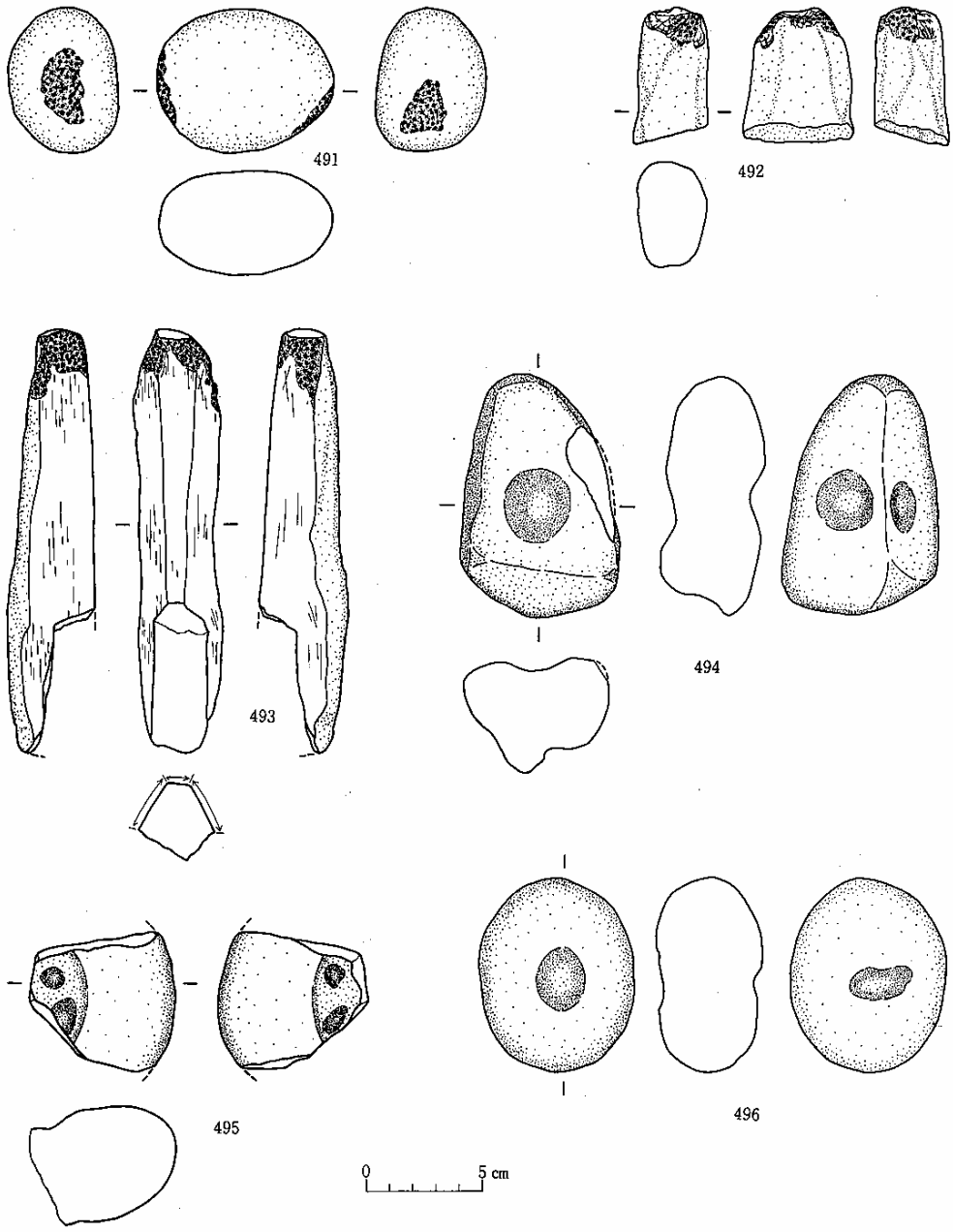
487～491 は楕円形の礫を素材としているものである。487 は長軸上の一端に敲打痕がみとめられるが、489～491 は長軸の両端に敲打痕があり、489 はさらに側縁にもみとめられる。488 は半欠品である。

492・493 は棒状の礫を素材としているものである。493 は一端に敲打痕がみとめられる。側縁には研磨による擦痕が不鮮明ながらみとめられるので、砥石としても使用されたのかもしれない。492 は完形品である。かなり使用されたものらしく、先端には敲打痕の他に剥離面もみとめられる。



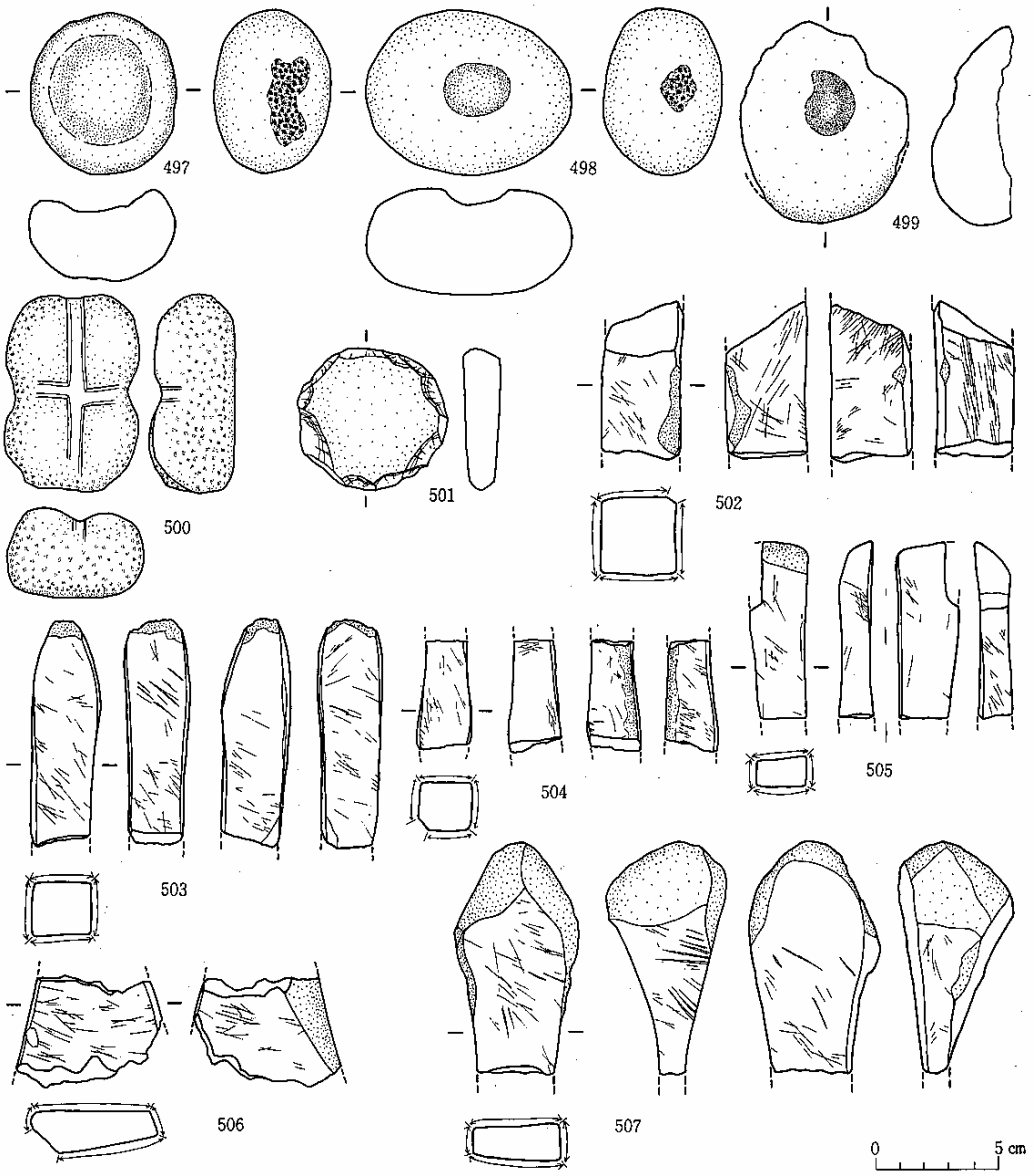
番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石　　材
484	石　皿	P16—1	(14.0)	(22.7)	(2.9)	(1540)	安山岩
485	〃	M14—2	(13.5)	(13.7)	(4.1)	(810)	〃
486	〃	K·L14—2	(15.2)	(10.3)	(4.4)	(900)	石英安山岩
487	敲　石	L12—2	9.0	8.4	7.2	812	細粒閃緑岩
488	〃	S18—ピット	(8.1)	(6.8)	(6.4)	(420)	安山岩
489	〃	O19·20—2·3	9.0	6.0	4.9	469	石英安山岩
490	〃	M12—2	8.3	9.2	5.3	538	安山岩

第50図　石　　器



番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石　材
491	敲　石	V 3－2	6.2	7.5	4.5	350	石英安山岩
492	〃	R21－2	5.8	4.8	3.0	130	蛇紋岩
493	〃	N 6－4	(18.2)	3.7	(3.3)	(271)	石英安山岩
494	凹　石	O20－1	10.5	(6.9)	4.3	(360)	〃
495	〃	P21－2	(6.0)	(6.3)	(4.8)	(237)	〃
496	〃	K13－2	8.4	6.7	4.3	373	〃

第51図　石　　器



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
497	凹石	M12—2	6.8	6.1	3.2	145	玄武岩
498	〃	X—X	6.9	8.6	4.5	422	石英安山岩
499	〃	K13—2	(8.5)	(7.0)	(3.7)	(183)	〃
500	石錘	J13—2	8.2	5.6	3.6	229	〃
501	円板状石製品	K15—2	6.3	6.0	1.5	85	〃
502	砥石	O16—2	(6.6)	(3.4)	(3.2)	(117)	石英安山岩質凝灰岩
503	〃	L16—1	(9.4)	(2.9)	(2.3)	(121)	〃
504	〃	P21—1	(4.6)	(2.3)	(2.2)	(36)	石英安山岩質細粒凝灰岩
505	〃	M19—2	(7.4)	(2.3)	(1.3)	(41)	〃
506	〃	O20—2	(4.7)	(6.1)	(1.8)	(53)	石英安山岩質凝灰岩
507	〃	K15—ピット	(9.7)	(5.2)	(5.0)	(229)	細粒凝灰岩

第52図　石器・石製品

凹石：６点出土している(494～499)。

494～496 は楕円形の礫の上下両面にくぼみのみとめられるものである。494・496 は各面に１個ずつのくぼみであるが、495 は数個ずつみとめられる。

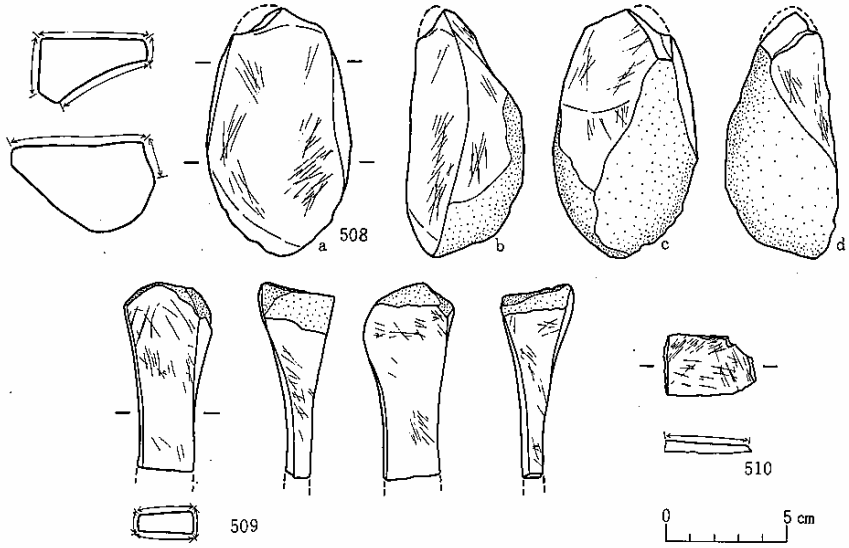
497・498 は上面に１個のくぼみをもつものである。497 は他の５点よりも小形であるがくぼみは大きく特異である。石材も本遺跡中で唯一の玄武岩である。別器種かもしれないが、類例がないので一応凹石の中に含めておく。498 は礫の両端に敲打痕がみとめられ、敲石としても使用されたことがわかる。499 は片面だけの欠損品であり、中央部に１個のくぼみがみとめられる。

石錘：１点出土している(500)。平面形は隅丸の長方形である。上面には十字形の索溝を有し、索溝と平行方向に擦痕がみとめられることから紐ずれの痕跡と考えられる。側縁は敲打により整形されており、下面は平坦な自然面である。

円板状石製品：１点出土している(501)。扁平な礫を素材として円形に加工しているものである。上下両面には礫の自然面をそのまま残しており、周縁部は両側からの加撃による剥離面がみとめられる。

砥石：９点出土している(502～510)。すべて欠損品である。

502～505 は棒状の砥石である。４点とも４面が使用面であり、擦痕がみとめられる。503・505 の先端には素材の自然面が残っている。506 は板状の砥石である。上下両面が使用面で、側縁は自然面である。507・509 は中央部が扁平で、先端部の分厚いものである。どちらも４面が使用



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石　材
508	砥石	O15―2	(10.4)	6.0	3.9	(248)	細粒凝灰岩
509	〃	L15―2	(8.2)	3.7	3.1	(72)	石英安山岩質細粒凝灰岩
510	〃	Q18―2	(2.6)	(3.8)	(0.5)	(8)	石英安山岩質凝灰岩

第53図　石　　器

面であり、先端部には粗割り面が残っている。508 は一部を欠損しているものの、ほぼ完形に近いものである。楕円形の礫を素材としている。ａ面全面とｂ・ｃ・ｄ面の一部を使用面としており、自然面が大きく残っている。510 は平面形が不明の小破片である。

垂飾品：４点出土している(511～514)。

511 は勾玉である。現在は紛失しており、概報(佐々木：1972)の記述や実測図をもとにして説明を加える。頭部の内側に３本の刻線があり、くびれ部にも１本みとめられる。貫通孔は両面から穿孔されている。石材は緑色の軟玉である。

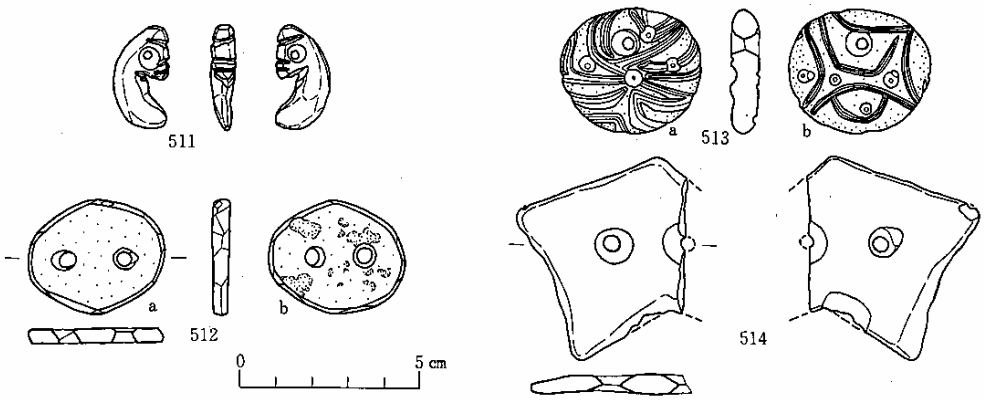
512 はボタン状石製品である。扁平な自然礫を素材として楕円形に加工している。ａ面は平坦な自然面であり、ｂ面は凹凸のある自然面である。周縁には研磨面と擦痕がみとめられる。長軸上に２面の貫通孔があり、両面から穿孔されている。

513 は扁平な楕円形の自然礫を素材としている。ａ面には先端の鋭利な工具によって放射状の文様が線刻されている。ｂ面には弧状の文様が線刻されている。また、両面に４個ずつ盲孔がみとめられる。上部に１個の貫通孔があり、両面から穿孔されている。

514 は扁平な自然礫を素材としている。平面形は星形のようにも思えるが欠損品のため不明である。貫通孔が２個あり、両面から穿孔されている。

以上述べてきた 307～514 の石器は伴出土器が不明のため時期を限定できないが、出土した土器の量から考えて大部分のものは縄文時代後期から晩期のものと思われる。ただし、砥石には平安時代もしくはそれ以降のものも多数含まれていると思われる。

なお、石核および剥片の項で述べたように、打面転位を頻繁に行ない打面調整や打面再生がなされないという剥片剥離技術がみとめられたが、これは大衡村上深沢遺跡(宮城県教委：1978)、



番号	種別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材
511	勾玉	X－X	2.8(?)	1.5(?)	0.7(?)		
512	ボタン状石製品	P16－ピット	3.8	3.2	0.5	7.7	珪質頁岩
513	石製垂飾品	N16－3	3.5	3.9	0.7	15.9	〃
514	〃	V２－１	(5.6)	(4.7)	(0.5)	(20.4)	細粒石英安山岩質凝灰岩

第54図　石　製　品

名取市金剛寺貝塚(後藤：1980)、北海道聖山遺跡(芹沢編：1979)で指摘されている特徴と同一であり、縄文時代においては一般的な剥片剥離技術であったろうと考えられる。

9．鉄製品

刀子：１点出土している(515)。刀身の先端部分の破片である。断面形から平造りであると思われる。

鉄鏃：有茎鏃が１点出土している(516)。身は両側縁が若干ふくらむ二等辺三角形になっている。茎は基部の断面形が扁平な長方形である。

釘：先端部分の破片が１点出土している(517)。断面形はほぼ正方形である。

不明鉄製品：１点出土している(518)。断面形が扁平な長方形の棒状鉄製品である。一方の端部は直角に折り曲げられているが、もう一方の端部は先細りに成形されている。

この他に鉄製品の破片が数点出土しているが、いずれも銹化のはげしい小破片であり、図示することができない。

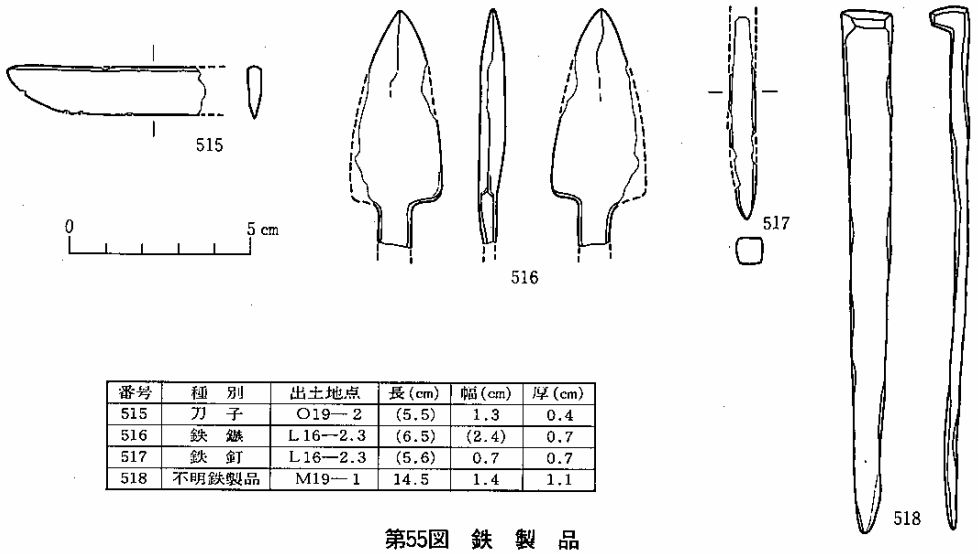
これらの鉄製品は伴出土器が不明のため時期を限定できないが、平安時代もしくはそれ以降と考えられる。

10．古銭

６枚出土している(519～524)。

519は皇宋通宝(初鋳年1039年)、520は元豊通宝(1078年)であり、いずれも北宋銭である。521は文久永宝(1863年)で、背文として波紋が鋳出されている。

522は天禧(?)通宝(1017年、北宋)と思われる。周縁を研磨して小さくした加工銭である。523は嘉祐(?)通(?)宝(1056年、北宋)と推測される。524は□永通□と判読でき、寛永通宝(1036年)と

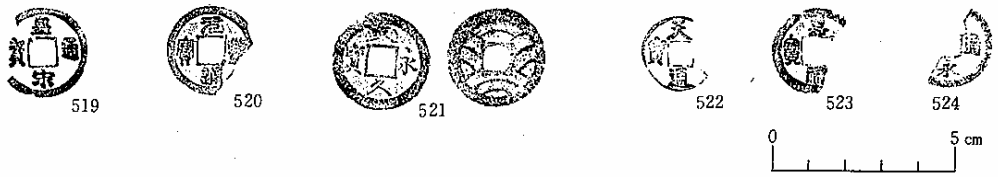


番号	種　別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
515	刀　子	O19―2	(5.5)	1.3	0.4
516	鉄　鏃	L16―2.3	(6.5)	(2.4)	0.7
517	鉄　釘	L16―2.3	(5.6)	0.7	0.7
518	不明鉄製品	M19―1	14.5	1.4	1.1

第55図　鉄　製　品

思われる。

北宋銭は中世陶器に伴うものと考えられる。



番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点	番号	出土地点
519	N16―3	520	5住一堆	521	I 30―2	522	L 13―2	523	O16―2	524	J 13―2

第56図　古　　銭

Ⅳ．考　　察

１．縄文時代後期後葉の土器

前述したように、今回の調査で出土した縄文土器のうち、主体となるのは後期後葉の土器である。

これらの土器のうち、最も出土量の多い深鉢形土器について、文様と器形や口縁部形態との関係を図示した資料でみると下表のようになる。

文　様	施文技法	器形	口縁部形態	個体数		
入組文	櫛目状沈線	ＩＡ	波状口縁	3	3	15（＋1）
	磨消縄文		波状口縁	3	8（＋1）	
			平縁＋山形突起	2（＋1）		
			平縁	3		
	刻目		平縁＋山形突起	3	3	
	区画外ミガキ	ＩＢ	平縁	1	1	
弧線連結文	櫛目状沈線	ＩＡ	平縁	1	1	6
	磨消縄文		平縁	2	2	
	区画外ミガキ		平縁	1	3	
		ＩＢ	平縁	2		
平行線文	櫛目状沈線	ＩＡ	平縁＋擬指状突起	2	2	33
	磨消縄文		平縁	8	9	
		ＩＢ	平縁	1		
	刺突	ＩＡ	平縁	3	15	
		ＩＢ	平縁	12		
	平行沈線	ＩＡ	平縁	5	5	
	区画外ミガキ	ＩＢ	平縁	2	2	
計				54（＋1）		

（　）は突起部欠損

これによれば３種類の文様とも頚部で屈曲する深鉢（ＩＡ）と単純深鉢（ＩＢ）のいずれとも組み合っている。しかし、口縁部形態との関係でみると、入組文は波状口縁のものや山形突起をもつものとの組み合わせが多いのに対して、弧線連結文や平行線文は圧倒的に多く平縁のものと組み合っている。さらに、後期後葉の主体的な文様である入組文についてみると、磨消縄文手法によるものは波状口縁・山形突起をもつ平縁・突起をもたない平縁の３種類の口縁部形態のものに施文されているが、櫛目状沈線によるものは波状口縁のもの、刻目によるものは山形突起をもつ平縁のものに限定されているという特徴がみとめられる。

従来、東北地方南部の後期後葉の土器は「新地式」（山内：1932）や「金剛寺式」（伊東：1957）として一括されてきた。しかし、後藤氏（1956 他）、斎藤氏（1968）、槇氏（1968）、安孫子氏（1969、1980）、小井川氏（1980）などの諸氏の研究は金剛寺式が細分され得ることを示しており、後藤氏は宮戸各式、安孫子氏は第Ｉ～Ⅳ段階の編年案をそれぞれ提示している。それによれば、櫛

目状沈線による文様をもつものは西ノ浜式(後藤：1962)や第Ⅰ段階(安孫子)として該期の中でも古く位置づけられ、また刺突・刻目による文様をもつものは宮戸Ⅲｂ式(後藤)や第Ⅲ・Ⅳ段階(安孫子)として該期の中でも新しく考えられている。しかし、これらの編年案が一般の承認を受けるまでには至っていない。

前述したように、本遺跡出土土器には櫛目状沈線による入組文と刻目による入組文とでは組み合う口縁部形態に違いがみとめられた。この差異が後藤氏や安孫子氏の指摘する時期差による可能性が考えられるものの、今回の調査では層位的に確認できなかったし、完形品や大形破片が少ないという資料的限界もあり、それを検討することは困難である。ここでは後期後葉の土器を金剛寺式とだけしておく。

２．遺構の年代

⑴　竪穴住居跡

第５号住居跡から出土した土器は深鉢ⅡＢ２類、浅鉢ⅠＢ類であり、体部破片であるが弧線連結文の土器がみとめられる。このことから、第５号住居跡は金剛寺式期に比定できる。

第１号住居跡から出土した土器は深鉢ⅡＢ２類と浅鉢ⅡＡ類であり、明確な時期を限定できないが金剛寺式期の第５号住居跡に切られており、しかも平面形や炉の特徴などが第５号住居跡と類似していることから、本住居跡も金剛寺式期であると考えられる。

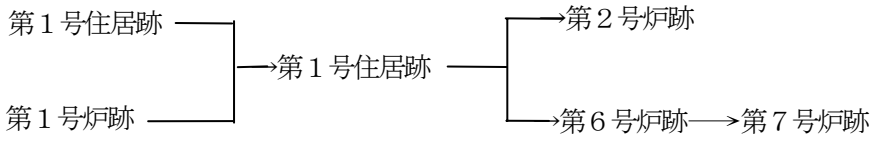
第４号住居跡から出土した土器は深鉢ⅡＢ２類であり、これも明確な時期は不明である。しかし、平面形や炉の特徴などが第１・５号住居跡と類似しており、本住居跡も金剛寺式期であろうと考えられる。

第２号住居跡は出土した土師器が表杉ノ入式であり、平安時代の住居跡であると考えられる。

第３号住居跡から出土した土師器甕は時期を限定できないが、本遺跡出土の土師器坏はすべて表杉ノ入式であることから本住居跡も平安時代であると考えられる。

⑵　炉跡

いずれも伴出遺物はなく、不明である。しかし、第１号炉跡は第５号住居跡に切られており金剛寺式期もしくはそれ以前であることがわかる。第２号炉跡は第５号住居跡の堆積土中にあり、また第６・７号炉跡は第５号住居跡の炉の直上に構築されており、これらの金剛寺式期もしくはそれ以降であると言える。これらの関係を図化すると次のようになる。



７基とも円形の石囲炉跡であり、これは第１・４・５号住居跡の炉と共通していることから、後期後葉のものが多く含まれていると思われる。

⑶　埋設土器遺構

埋設土器は口縁部を欠く無文の深鉢形土器であり、時期は不明である。しかし、器面調整の状態などが深鉢ⅡＢ２類に類似しており、後期後葉のものとして、ほぼ誤りないものと考えられる。

⑷　ピット群

すでに述べたように、時期は不明である。

３．遺跡について

縄文時代後期後葉の竪穴住居跡が３軒確認された。後期中葉以降晩期末までの住居跡が発見された遺跡は本遺跡を除くと宮城県内では次の５遺跡がある。

No.	遺跡名	種別	時期	平面形	炉	文献
1	亘理町椿貝塚	竪穴２軒	後期後半	円形	不明	亘理町：1975、志間：1973
2	七ケ浜町二月田貝塚	平地１軒	大洞Ａ式	不明	地床炉	塩釜女子高：1970、1972
3	松島町西ノ浜貝塚	平地	大洞Ｃ式	不明	地床炉・円形石囲炉	宮城県教委：1968
4	南方町長者原貝塚	竪穴３軒	大洞C_2式	円形	地床炉	南方町教委：1978
5	田尻町中沢目貝塚	竪穴３軒	晩期	円形	地床炉・円形石囲炉	未公刊

例数が多いとは言えない。その理由を「おそらく平地住居であるために、床面が発見しにくいからであろう」とする見解もある（八幡：1969）。ここでは、その当否を論ずるだけの資料がないが、後・晩期において竪穴住居跡が特殊な例ではないということは言えるであろう。本遺跡の竪穴住居跡の平面形が円形であることは、平面形の判明している他の遺跡と共通する特徴である。しかし、本遺跡の場合、炉が円形の石囲炉に限定されるのに対して、他の遺跡では地床炉もみとめられる。これがどのような原因による差異なのかは今後の問題である。

７基の炉跡については、前述したように、単独の炉跡なのか住居跡に伴うものなのかは確認できなかった。しかし、後・晩期において、確実な屋外炉として報告された例はなく、おそらく住居跡に伴うものであろう。また、埋設土器遺構はその性格を推定できるものは何もみとめられなかったが、本吉町前浜貝塚（本吉町教委：1979）や山形県玉川遺跡（致道博物館：1973）の場合のように埋葬施設であった可能性がある。

もし、以上の推定がみとめられるものであるならば、後期後葉の日常生活の場と埋葬施設が発見されたことになり、類例の少ない該期においては貴重な例であり、意味深いものと言える。しかし、居住区域、墓域として、遺跡内での使い分けがあったのかどうかまでは明らかにでき

なかった。類例の増加をまって、もう一度検討してみる必要があろう。

Ⅴ．まとめ

１．東足立遺跡は高館丘陵内の谷底平野に面した丘陵東斜面に立地している。

２．遺構として、縄文時代後期後葉金剛寺式期の竪穴住居跡３軒、ほぼ同時期の埋設土器遺構１基、炉跡７基、平安時代の竪穴住居跡２軒、時期不明のピット群が発見された。

３．遺物として、縄文土器(主体は後期後葉から晩期初頭)、土師器(平安時代)、石器・石製品など、多くの種類と多くの量が出土した。

引用・参考文献（ＡＢＣ順）

安孫子昭二(1969)：「東北地方における縄文後期後半の土器様式」『石器時代』第９号

(1980)：「コブ付土器様式から亀ケ岡土器様式への変遷過程」『考古風土記』第５号

致道博物館(1973)：『玉川遺跡』

江坂輝弥・渡辺誠(1968)：「寺脇貝塚発掘調査報告」『小名浜』

江坂輝弥・渡辺誠・高山純(1967)：「大間町ドウマンチャ貝塚」『下北』

藤沼邦彦(1975)：「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』第１巻

(1976)：「宮城県地方の中世陶器窯跡(予察)」『東北歴史資料館研究紀要』第２巻

後藤勝彦(1956)：「宮城県宮戸島台囲貝塚の研究」『宮城県の地理と歴史』第１輯

(1959)：「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器の研究」『宮城県の地理と歴史』第２輯

(1962)：「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」『考古学雑誌』第48巻第１号

後藤秀一(1980)：「金剛寺貝塚採集の剥片接合資料」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎１号墳他』宮城県文化財調査報告書第67集

芳賀寿幸(1974)：「向畑遺跡調査概報」『柴田町郷土研究会報』７号

林　謙作(1965)：「東北」『日本の考古学』Ⅱ

伊東信雄(1957)：「古代史」『宮城県史』第１巻

角田市教育委員会(1976)：『梁瀬浦遺跡』宮城県角田市文化財調査報告書第１集

小井川和夫(1980)：「宮戸島台囲貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」『宮城史学』第７号

熊谷幹男(1980)：「西原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

草間俊一・金子浩昌(編)(1971)：『貝鳥貝塚』

槇　要照(1968)：「陸前宮戸島に於ける縄文後期末遺物の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』

南方町教育委員会(1978)：『長者原貝塚』南方町文化財調査報告書第１集

宮城県教育委員会(1968)：『埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報－西の浜貝塚－』宮城県文化財調査報告書第16集

(1968)：『埋蔵文化財緊急調査概報－東北縦貫自動車道遺跡－』宮城県文化財調査報告書第17集

(1973)：『菅生田遺跡調査概報』宮城県文化財調査報告書第29集

(1978)：『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ(上深沢遺跡)』宮城県文化財調査報告書第52集

(1978)：『北沢遺跡発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第56集

(1980)：『金取遺跡』宮城県文化財調査報告書第70集

(1981)：『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第73集

宮城県塩釜女子高等学校社会部(1970)：『宮城県七ケ浜町二月田貝塚』

(1972)：『宮城県七ケ浜町二月田貝塚(Ⅱ)』

本吉町教育委員会(1979)：『前浜貝塚』

小川淳一(1980):「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第71集

岡村道雄(1979):「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『東北歴史資料館研究紀要』第５巻

斎藤良治(1959):「宮城県鳴瀬町宮戸台囲貝塚の研究」『宮城県の地理と歴史』第２輯

(1968):「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について」『仙台湾周辺の考古学的研究』

三本木町教育委員会(1978):『多高田窯跡調査報告書』三本木町文化財調査報告書第４集

佐々木安彦(1972):「東足立遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第25集

芹沢長介(1960):『石器時代の日本』

(編)(1979):『聖山』

七戸貞子(1972):「菅生田遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第25集

志間泰治(1973):「椿遺跡」『日本考古学年報』24

東北歴史資料館(1979):『伊豆沼古窯・熊狩Ａ窯跡発掘調査報告』東北歴史資料館資料集Ⅰ

氏家和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

渡辺一雄・馬目順一(編)(1966):『寺脇貝塚』

亘 理 町(1975):『亘理町史』上巻

八幡一郎(1969):「縄文晩期文化」『新版考古学講座』第３巻

山形県教育委員会(1978):「的場遺跡」『昭和50・51年度山形県営農林事業関係遺跡調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第14集

山内清男(1930):「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第１巻第３号

(1932):「日本遠古之文化」『ドルメン』第１巻第６・７号

(1937):「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第１巻第１号

(1979):『日本先史土器の縄紋』

弥生時代研究会(1979):「弥生時代遺跡地名表〈村田町編〉」『籾』創刊号

縄文土器（口縁部・底部）破片集計表（図示遺物を除く）

部位	種別	文様	技法	地文	1住	2住		3住	4住	5住	ピット	1層					2層								3層					V区	B地点	X-X	計
					堆	床	堆	堆	堆	堆		10～12	13～15	16～18	19～21	22～24	4～6	7～9	10～12	13～15	16～18	19～21	22～24	34～36	10～12	13～15	16～18	19～21	34～36				
口縁部	深鉢	入組文	磨消	LR																		1											1
		〃	〃	不明縄文																												1	1
		平行線文	〃	LR			1			2	3			2	7						6	13	18	14		3		3	1			2	75
		〃	〃	RL											1						1		2					1					5
		〃	〃	不明縄文				2						3	3	1					8	6	6	9		2	2					1	43
		〃	〃	櫛目状沈線															1			2	2										5
		〃	(区画外ミガキ)	(—)			2				1		1								7	2	2				1	3	1			1	21
		〃	磨消+瘤	LR			1			1					1		1				3	4	6					1	1				19
		〃	〃	RL																		1											1
		〃	〃	L							1											1	1										3
		〃	〃	不明縄文						1			1		1						5	2				1						1	12
		〃	〃	櫛目状沈線						1											1	1											3
		〃	(区画外ミガキ+瘤)	(—)			1	2			3			1	3						13	7	3				2				3	38
		〃	刺突・刻目				2	1			3			6	3	1					3	9	7	2		1	9			1	3	51
		〃	刺突・刻目+瘤												1							5	2			1	1		1				11
		〃	沈線					1		2	2				6	1					14	2	9	3	9	2	1	1	1	5	1	8	68
		〃	沈線+瘤						1		2	2		2	6						12	7	11					6		1			50
		三又状文	沈線							1	3		1		2						1	5	5			1	1		1	1		2	24
		不明	磨消	LR				1			4			2	1				1		4	5	8		4			3		1		2	36
		〃	〃	RL																	2	1											3
		〃	〃	不明縄文			1	1							1				1		6	2	4		2	1			2	2		1	24
		〃	(区画外ミガキ)	(—)																	1						1						2
		〃	磨消+瘤	LR																	3		1										4
		〃	〃	不明縄文				1														2	1										4
		〃	(区画外ミガキ+瘤)	(—)						1				1	1						2	4	1										10
		〃	刺突・刻目					1					1								1	1	1										5
		〃	沈線				4				1			4	3						4	11	12		4			4	2	2	4		4	59
		〃	沈線+瘤											1							2	1	11		1								16
		無文	研磨		4	1	17	13	4	8	35		6	22	31	2	1		8		103	111	133	18	34		7	16	28	8	18	1	15	644
				LR			3	1			13		2	1	7	1	1				11	16	17	2	16			1	2	1	7		5	107
				RL					1		1			1	2				2		2	4	3		2					2	3			23
				L				1			1			3							3	2	7	1	3	1							22
				R																			1								1		2
				LRL																			1										1
				撚糸R	1		1							1							1		6		5						3		1	19
				撚糸L							2		1	2	1						2	1	5	1	14				2	1	1	1	34
				不明縄文			2	2	1		4		1	1	4						4	5	9	3	6		2	1	2	1	8	1	6	63
				櫛目状沈線			1			2	1			2	2						12	14	21		8		1		3		1		1	69
				条線							1			1	1								1										4
		摩滅不明					4	2		2	7		1	4	1	1					19	24	14	2	19	1	4	3	1	7	1		6	123
	浅鉢	平行線文	磨消	LR											2								4		1						1		1	9
			〃	不明縄文											1								1						1		1		1	5
			磨消+瘤	LR																		1											1
			(区画外ミガキ+瘤)	(—)																	1		1										2
		無文	研磨							1	6		1	2	2						4	6	8	3	3			2	1				1	40
				LR							1																						1
	壺	平行線文	磨消	LR																					1								1
		〃	沈線																		1		1		2								4
		無文	研磨												1	1										1			1			1	5
		摩滅不明									1																						1
底部	不明	平底	無文		1	1	3	2	1	3	7			10	14			2	2		29	31	45	3	18		4	6	11	5	11		6	215
			木葉痕		1	1	1								2								3	1	5				1				15
			網代痕				4	2	3		5		1	3	3						7	15	27	3	14		2	4	3	1	8		4	109
			不明		1		2	2		1	5	1	1	2	3	2					9	6	28	1	8		3	1	4	5	3		1	89
		揚底					1			2	1			1							6	5	6		2			1					2	27
		台付									1		1										5							1			8
計					8	3	51	35	11	28	115	3	19	78	117	10	3	2	15	313	335	461	43	204	1	38	60	75	41	83	4	81	2,237

縄文土器（体部）破片集計表（図示遺物を除く）

部位	種別	文様	技法	地文	1住	2住		3住	4住	5住		ピット	1層					2層								3層						V区	B地点	X・IX	計
					堆	床	堆	堆	堆	床	堆		10～12	13～15	16～18	19～21	22～24	4～6	7～9	10～12	13～15	16～18	19～21	22～24	34～36	4～6	10～12	13～15	16～18	19～21	34～36				
体部		入組文	磨消	LR																	1	3	4		1						1				10
		〃	〃	RL																	1														1
		〃	〃	不明縄文																	1		1		1						1	1			5
		〃	〃	櫛目状沈線																										1					1
		〃	(区画外ミガキ)	(一)											1						1	1							1						4
		〃	磨消+燈	LR																	2	1	2												5
		〃	〃	不明縄文																		2													2
		〃	〃	櫛目状沈線						1												1													2
		〃	(区画外ミガキ+燈)	(一)																														1	1
		〃	刺突・刻目												2							2			1			1	1			1			8
		弧線連結文	沈線																															1	1
	不	平行線文	磨消	LR			1				4	3			1	7				1	5	11	13		12			1	1	4	1	4		4	73
		〃	〃	RL								1		1	1							1	3	1	3						1				12
		〃	〃	L																		2	1						1						4
		〃	〃	不明縄文				1			1				1					1	3	5	5		8			1	1	1	2			1	31
		〃	〃	櫛目状沈線																	1		1											1	3
		〃	(区画外ミガキ)	(一)	1		1	1				1			1	1					6	4								2					18
		〃	磨消+燈	LR			1	1				2				1					3	5	9		1			1	1	2	1	1		1	30
		〃	〃	RL												1																			1
		〃	〃	LR・RL								1										1													2
		〃	〃	不明縄文				1													1			1				1							4
		〃	〃	櫛目状沈線																	2	1													3
		〃	(区画外ミガキ+燈)	(一)			3	2				4		1	4	2					10	10	6						2	1				3	48
		〃	刺突・刻目				3	3				10			3	2	1	1			7	21	12	5	5		1	2	7	3				1	87
		〃	刺突・刻目+燈													1						3	2												7
		〃	沈線				2	1			3	1		1	3	3					12	14	6	6	11			3	6	1	3	2		5	83
		〃	沈線+燈				1							1	3	2					6	4	2		1										20
		三又状文	沈線				1				1											1	1		1				1	1				1	8
		羊歯状文																					1												1
		不明	磨消	LR	3		11	5	5		4	25		1	8	21		2		1	38	69	88	12	28		1	3	16	12	5	10	1	17	386
		〃	〃	RL			3		1			2			1	3	1				5	4	12	2	3			2	1	5				1	45
		〃	〃	L			1								1	1					2	4	3	1	1			1			1				16
		〃	〃	LR・RL				4							1													1					1	8
		〃	〃	LR+綾結																												1			1
		〃	〃	撚糸L																											1				1
		〃	〃	撚糸R																			1	1											2
		〃	〃	不明縄文	2	1	17	5	1		3	7		3	17	14	1	1		5	33	54	36		17		2	4	7	11	7	10		15	273
		〃	〃	櫛目状沈線			2	1			1	3		1		1					6	13	3							2				2	35
		〃	(区画外ミガキ)	(一)	2		5	1			5	8		1	2	2					19	20	11	1				3	7	2				4	93
		〃	磨消+燈	LR	2		1				1	2		1	1	2					7	8	9			2		1	1	4				1	43
		〃	〃	RL																									1						1
		〃	〃	L												1							1												2
		〃	〃	LR・RL										1																					1
		〃	〃	不明縄文					1		2	1		1		3					8	6	8				1	1	2	3				1	38
		〃	〃	櫛目状沈線																	3		1							1					5
		〃	(区画外ミガキ+燈)	(一)				3	1		4	4				4				1	22	7	6						2					2	56
		〃	刺突・刻目		3		2	4				5			3	2					18	20	13	2	5			3	14	2	3	1		2	102
		〃	刺突・刻目+燈						1														1												2
		〃	沈線			1	15	1	3		11	15		4	7	28		3		4	46	56	67	9	13			8	11	15	1	11		16	345
		〃	沈線+燈		1		1	3						1	6	12					23	20	48	3	3			1	5	4	1	1		1	134
		無文	磨		32	16	165	147	14	11	111	311	5	30	223	280	16	7	2	34	927	1,155	1,201	105	217	38	91	323	158	65	165	14	225	6,088
				LR	10	37	16	17	6	2	14	120	1	8	37	54	8		1	5	111	159	222	62	113	2	13	27	35	19	49	20	54	1,222
				RL	1	1	15	1	2			16	1	1	11	5				1	30	37	40	8	27	2	2	6	5	10	22	1	14	259
				L	2		1					4			3	1					9	9	13	2	10		4	2	2	1	5		5	73
				R																	1				2					1	2			6
				LRL																	1													1
				RLR																	1		1	1										3
				LR+綾結	2			1				2				4	1					1	8	6		15	1			1	4	7		9	62
				RL+綾結								1									1		1											3
				L+綾結	1							1					1						1										1	5
				LR・RL		2	1	1				4		1	5	4	1				15	11	5	1	3			3	2	1	3	7		2	72
				LR・R																	1													1
				L・R														1			1													2
				(LR+綾結)・RL			1																							1					2
				撚糸L	1	1	3	1	1		2	6			6	11	1		1		35	23	53	12	77	1	2	1	8	7	13	7	4	277
				撚糸R			3	2	1		2	2			8	22	4				10	14	57	22	79	1	1	1	9	7	4	2	9	260
				不明縄文	2	7	39	10	11		4	37	2	5	42	45	2		2	12	105	145	154	27	179	3	17	17	22	41	110	9	87	1,136
				不明縄文+綾結											3							7	2					2			3	2		1	20
				不明撚糸	1			1	2		2			1	1	6	1				3		6	5	7			1		1		4		7	49
				櫛目状沈線	2		10	9	2	1	16	16	2	7	17	30		1	1	6	139	95	175	10	36	6	16	9	34	6	14	3	16	679
				条線	2	1	6	3	1	3	17	8	1	7	17	8				2	94	82	78	3	4	2	8	7	21			1	10	386
		摩滅不明			2	4	54	9	7		11	131		22	58	51	4	5		42	225	277	179	28	178	7	85	57	39	46	112	5	76	1,714
口部	注	不明	磨消	LR																														1	1
		〃	浮彫り			1																	1											1	3
		無文	磨																			1	1					1						2	5
			(注口部)													2					1														3
計					72	72	385	239	60	17	220	754	12	100	498	637	42	21	7	115	2,004	2,397	2,573	330	1,062	2	68	283	542	414	241	560	63	607	14,397

土器破片集計表（図示遺物を除く）

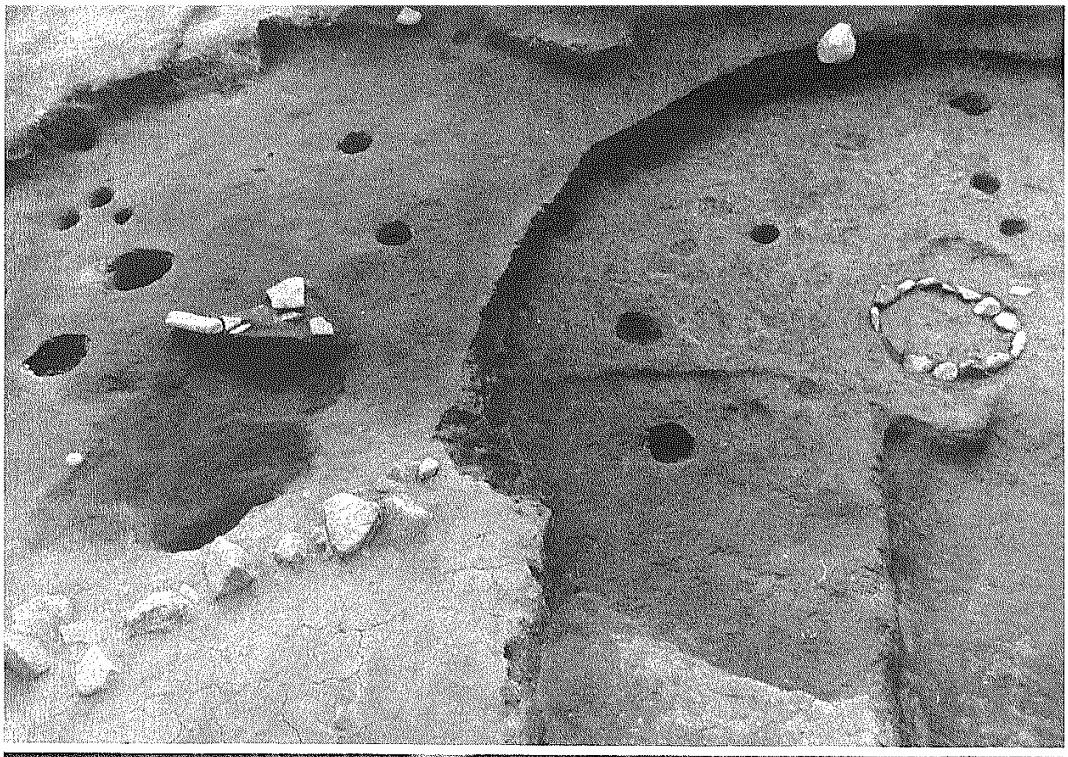
	種別	部位	器面調整等 外面―内面	2住 床	2住 堆	3住 堆	ピット	1層 13～15	1層 16～18	1層 19～21	1層 22～24	2層 4～6	2層 7～9	2層 10～12	2層 13～15	2層 16～18	2層 19～21	2層 22～24	2層 34～36	2層 V区	3層 13～15	3層 19～21	X－X	計
土師器	坏	口縁部	ロクロ―ミガキ(黒)	1	1	1				1						1	2							7
			―不明												1	1								2
			ミガキ―ミガキ(黒)														1							1
			不明―ミガキ		1																			1
			―ミガキ(黒)		1					1					1								1	4
			―不明							1														1
		体部	ロクロ―ミガキ(黒)	1	1												1							3
			手持ケズリ―							2		1				3								6
			―ミガキ	2																				2
			ミガキ―ミガキ(黒)							1														1
			不明―	1	1								1			1	1							5
		底部	手持ケズリ―													1	1							2
			回転ヘラケズリ		1											1								2
	甕	口縁部	ロクロ―ロクロ	1	1												1							3
			―不明		1																			1
			横ナデ―横ナデ																				1	1
		体部	ロクロ―ロクロ	1	1																			2
			―ナデ	2	2											1	1		1					7
			―刷毛目										1											1
			―不明	1	1																			2
			横ナデ―ナデ																				1	1
			刷毛目―		1										2									3
			―刷毛目			1											1							2
			手持ケズリ―ミガキ(黒)														1							1
			―ヘラナデ		2												1							3
			―刷毛目	1																				1
			―ナデ	2	5												1			1			2	11
			―不明	3	2																			5
			不明―ナデ	3	3												1						1	8
			―刷毛目	2																				2
			―不明	2	3																		2	7
		底部	回転糸切り	2	1					1							1							5
			不明	4	1																			5
	計			29	30	2				7		1	2		4	9	14		1	1			8	108
須恵器	坏	口縁	ロクロ―ロクロ					1												1				2
		底部	回転糸切り													1								1
			不明							1														1
	計							1		1						1				1				4
中世陶器	甕	体部	ナデ―ナデ				1	1		2					3	4	4	3				1		19
			―不明							1	1					2								4
			ケズリ―ナデ													1							1	2
			自然釉―ナデ				1							1			2				1		1	6
			不明―自然釉								1													1
		頸部	横ナデ―横ナデ										1			1								2
			―ナデ												1									1
			―自然釉														1							1
		体部	横ナデ―磨滅						1	1						3	1							6
			ナデ―													1								1
	計						2	1	1	4	2		1	1	4	12	8	3			1	1	2	43

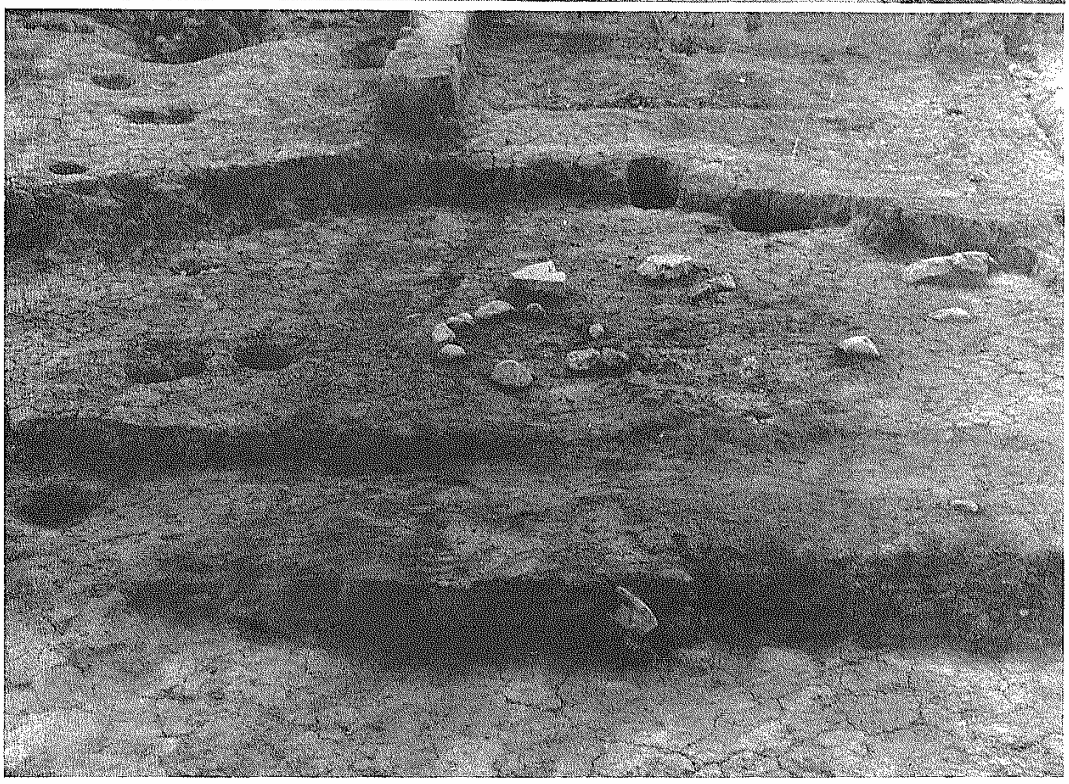
石器集計表（図示遺物を除く）

		1住 床	1住 堆	2住 床	2住 堆	3住 堆	4住 床	4住 堆	5住 床	5住 堆	ピット	1層 10～12	1層 13～15	1層 16～18	1層 19～21	1層 22～24	2層 7～9	2層 10～12	2層 13～15	2層 16～18	2層 19～21	2層 22～24	2層 34～36	3層 10～12	3層 13～15	3層 16～18	3層 19～21	V区	B地点	X－X	合計
剝片	完形	5	2	5	38	17	3	9	1	20	44	2	12	26	27	1		4	128	134	128	17	35	3	25	19	32	37	21	68	863
	不完形	5	1	6	43	17	4	4		29	29	1	7	20	30	3	2	5	164	164	115	16	50	2	16	27	36	49	16	48	909
剝離痕ある剝片		1			12	6		2	1	5	17		4	6	6	2			40	30	29	2	13		3	3	10	7	4	15	218
計		11	3	11	93	40	7	15	2	54	90	3	23	52	63	6	2	9	332	328	272	35	98	5	44	49	78	93	41	131	1,990

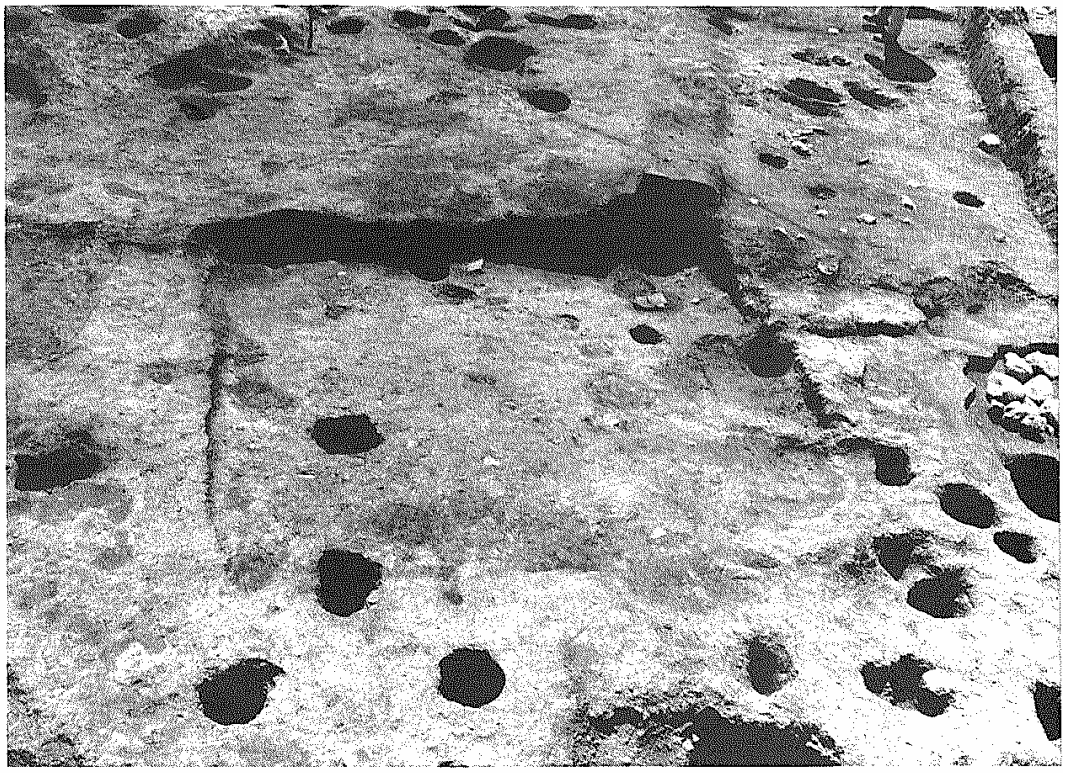
写　真　図　版

図版１　上：遺跡全景
下：Ａ地点遺景

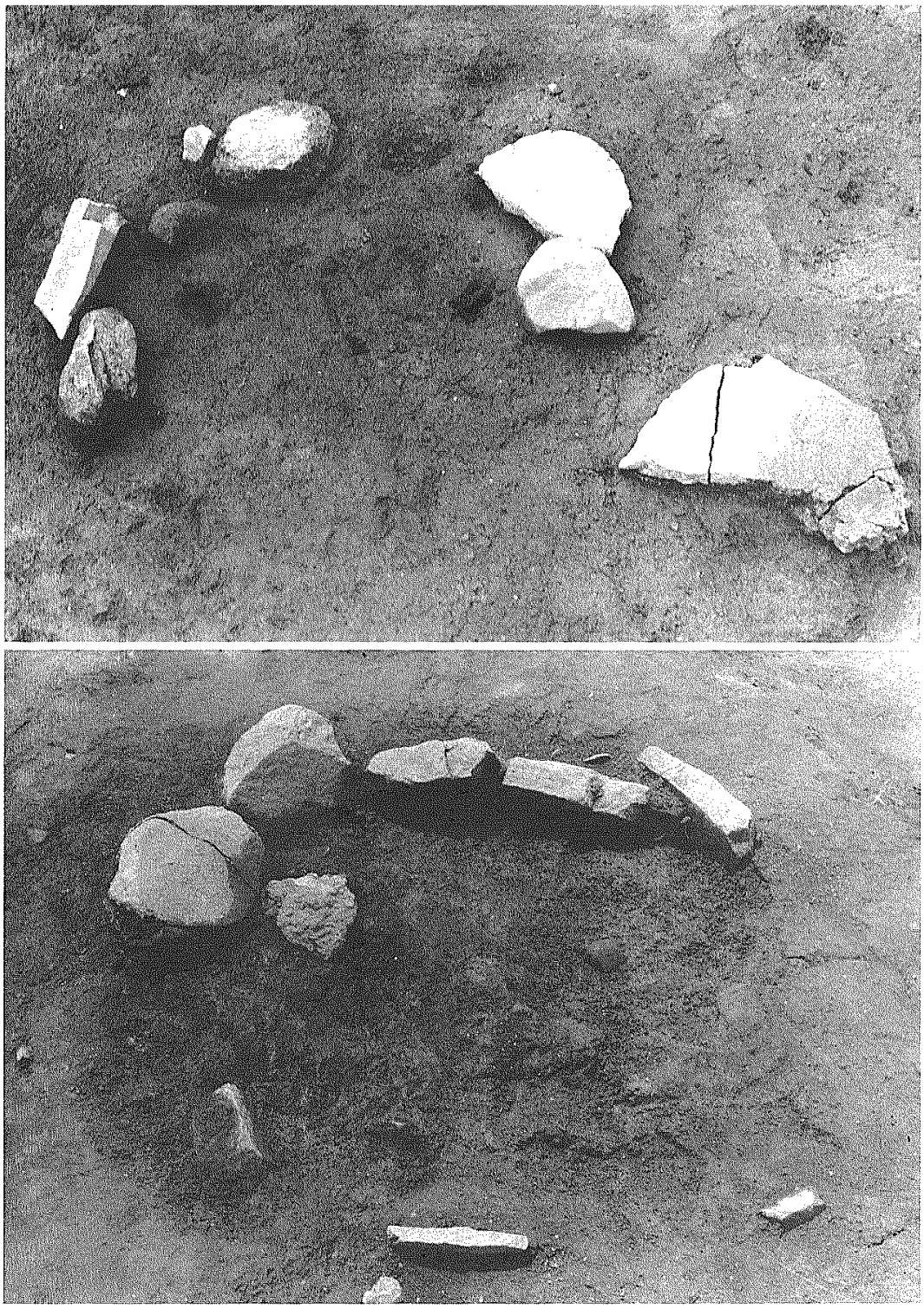




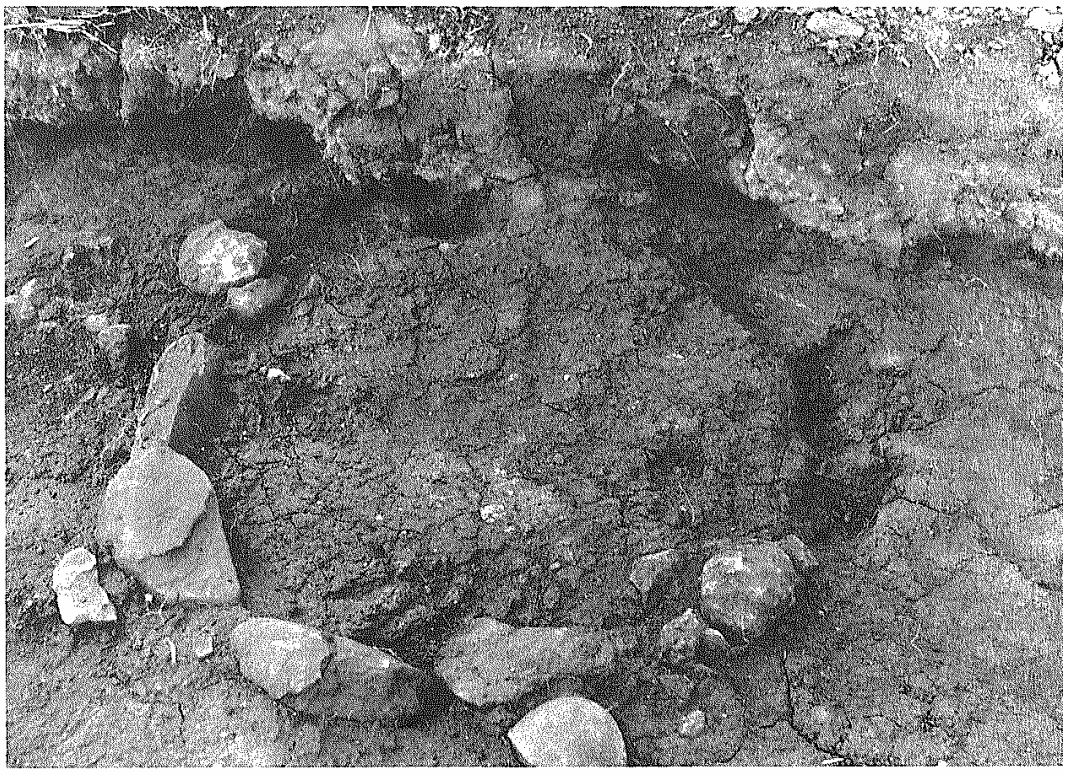
図版２　上：第１号住居跡（左）第５号住居跡（右）
下：第４号住居跡



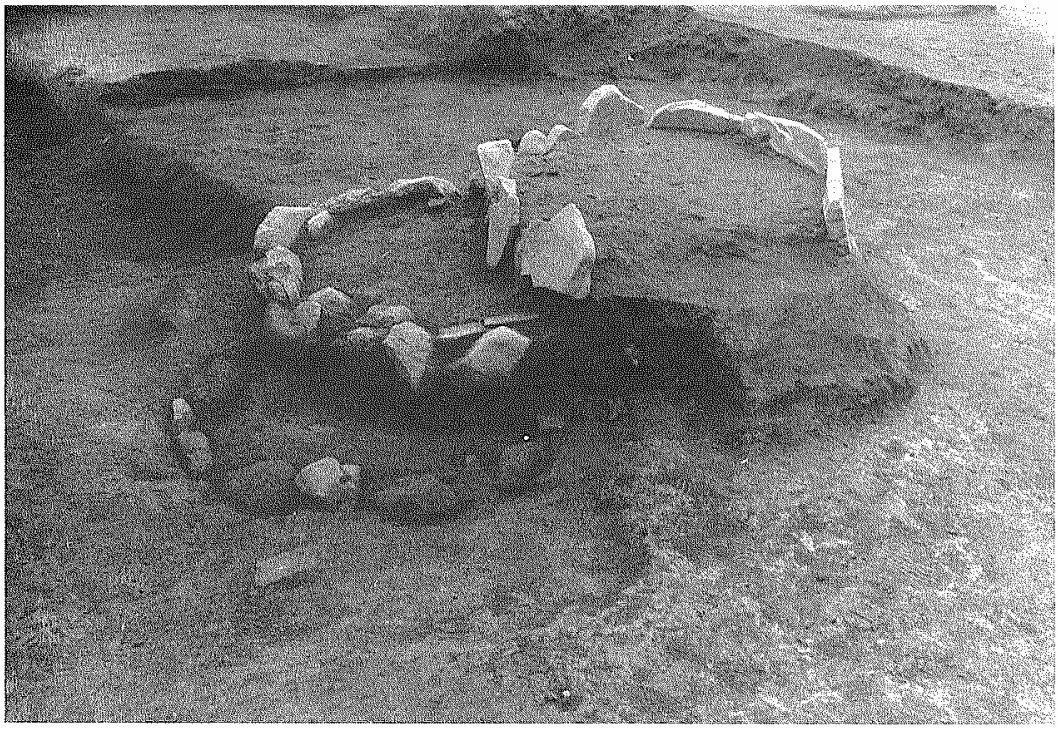
図版３　上：第２号住居跡
下：第３号住居跡

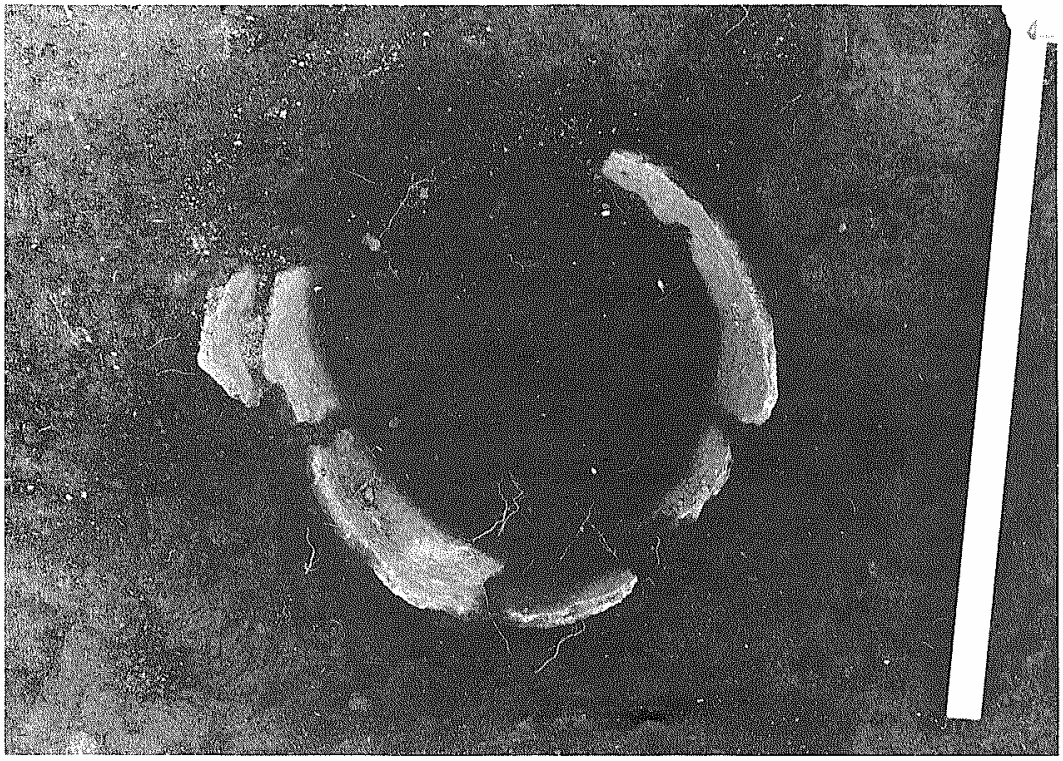


図版４　上：第２号炉跡
下：第３号炉跡

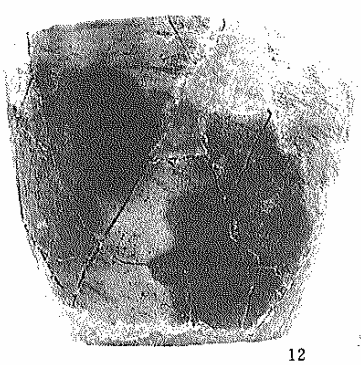


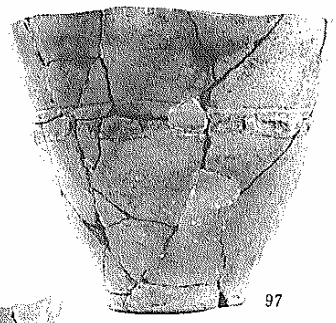
図版５　上：第４号炉跡
下：第５号炉跡

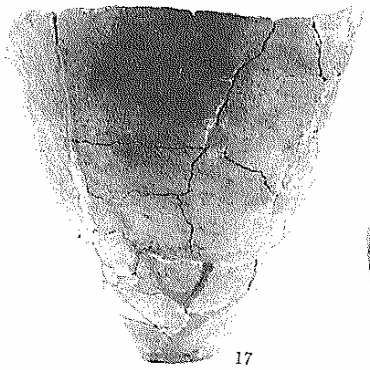




図版６　上：第７号炉跡（上）第６号炉跡（中）第５号住居炉跡（下）
下：埋設土器遺構

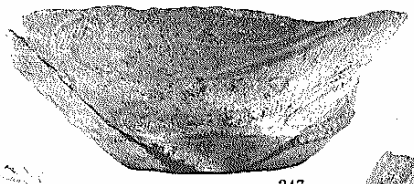

12

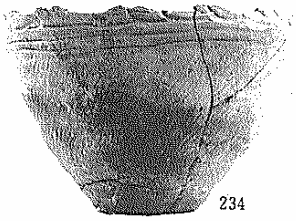

97

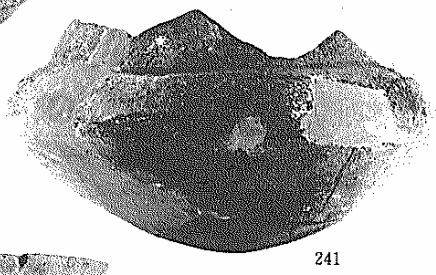

17

127

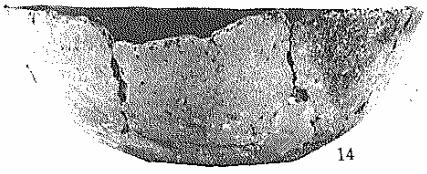
189

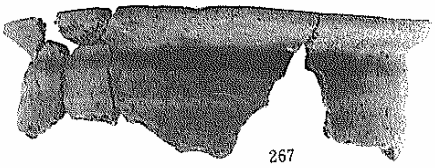

247


234

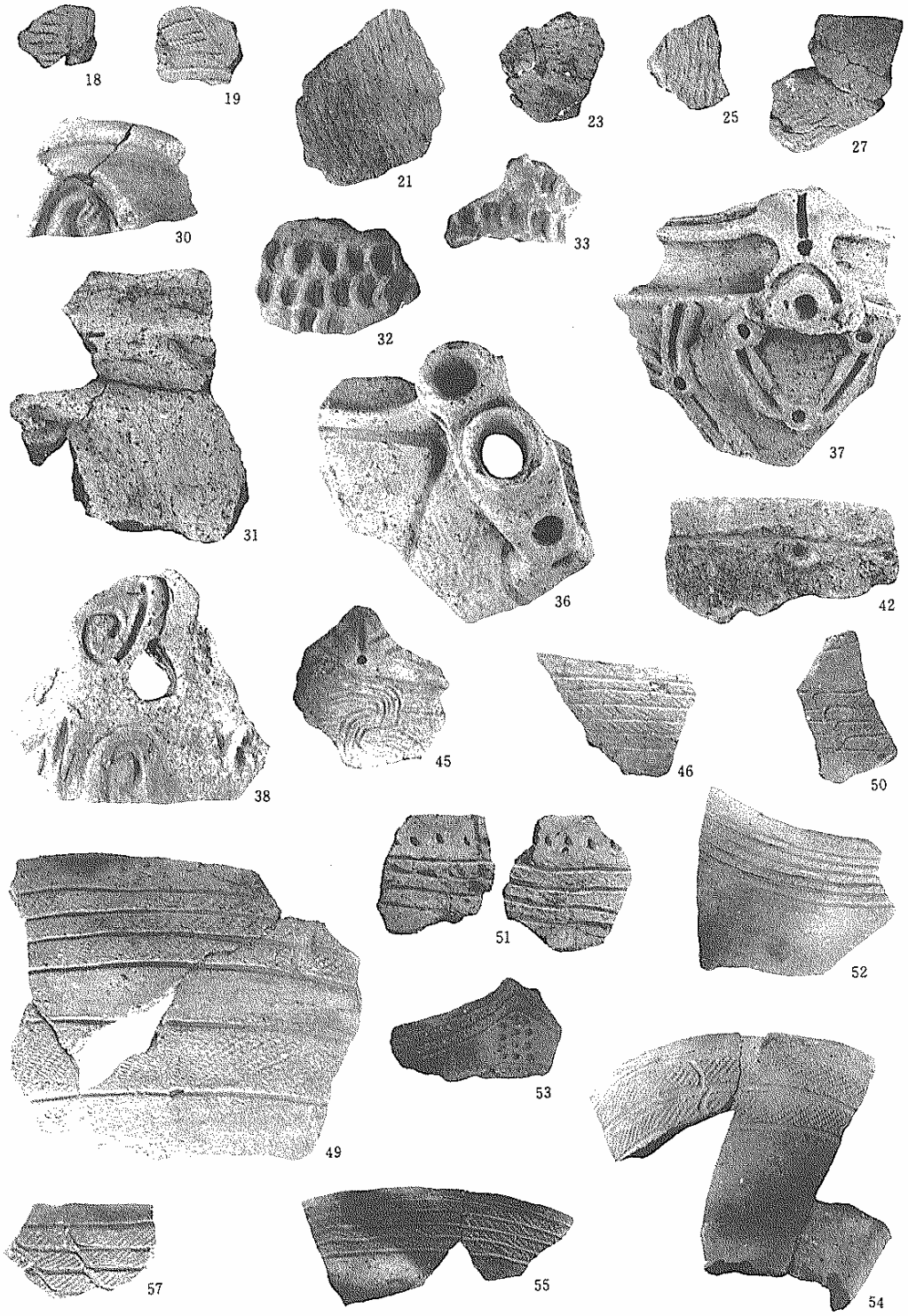

241

15

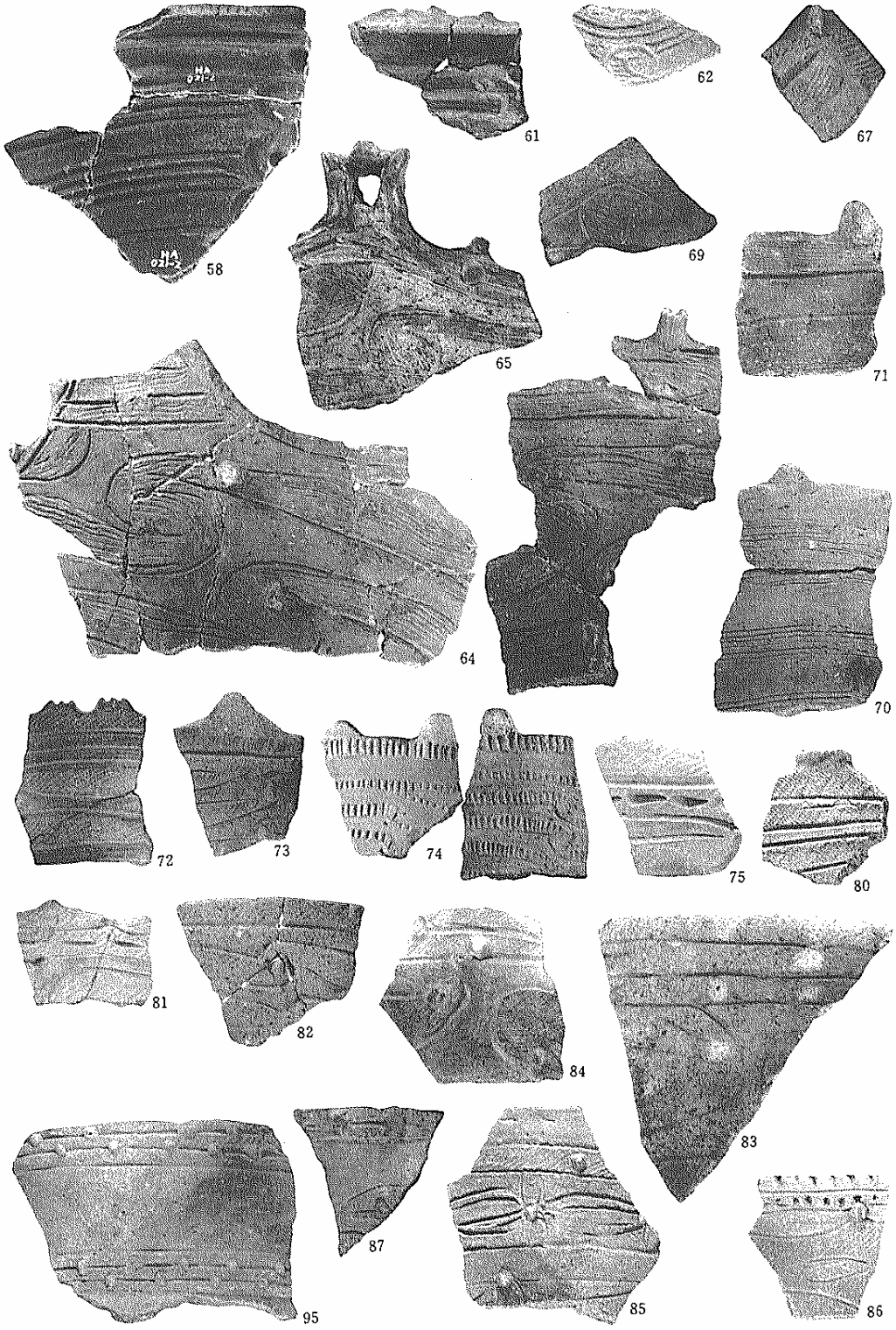

14


267

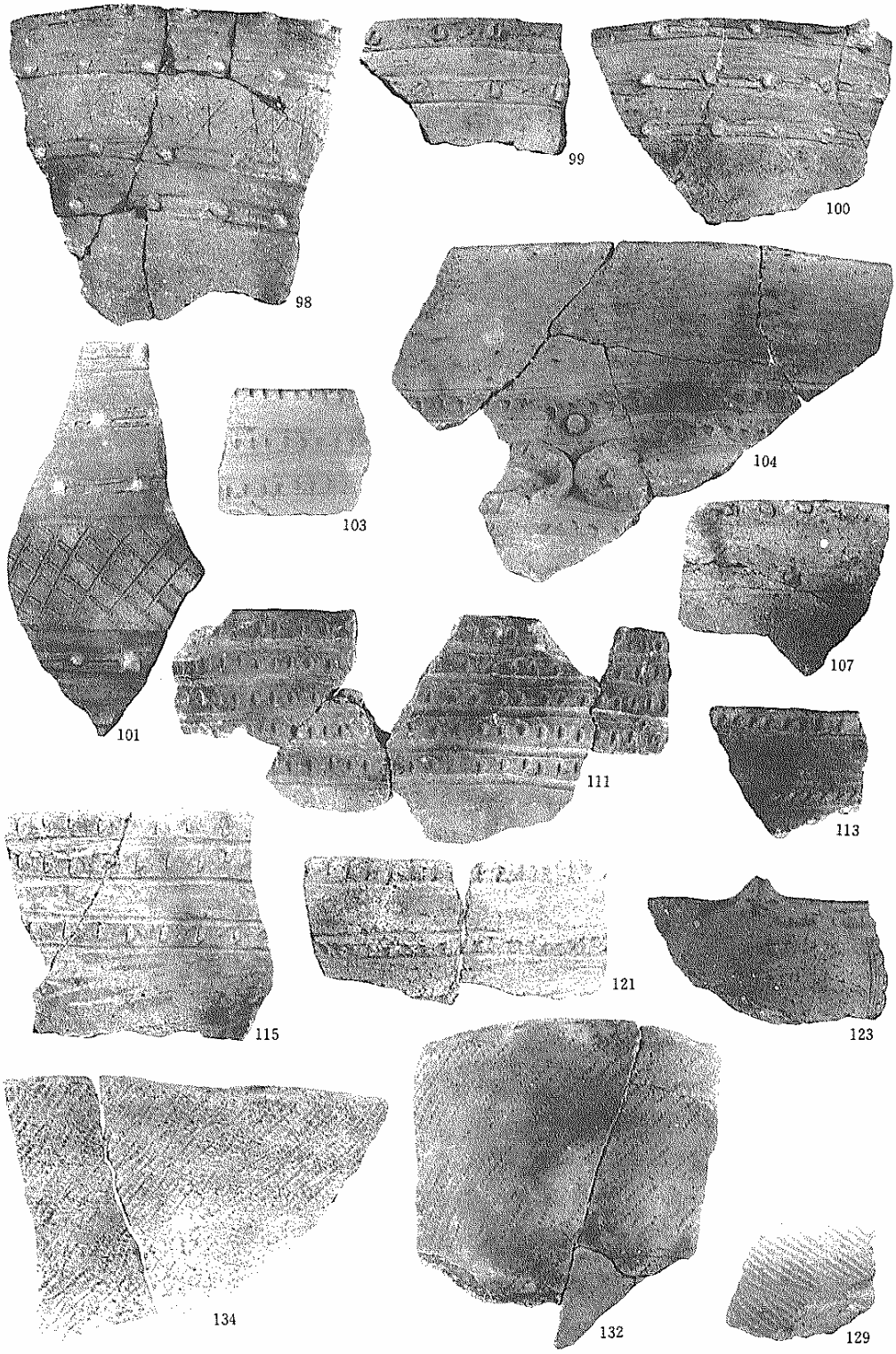
図版７　縄文土器・土師器



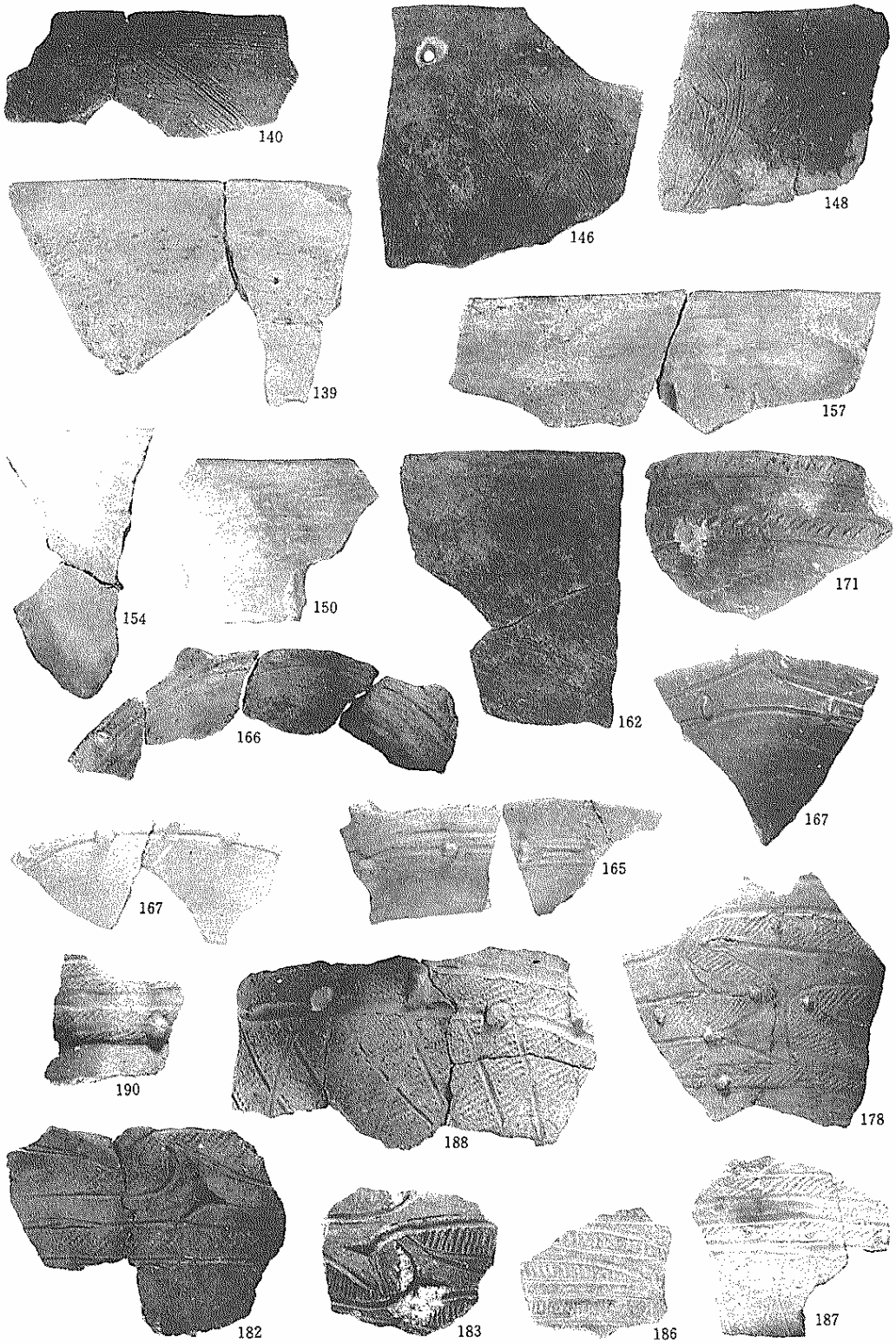
図版８　縄文土器



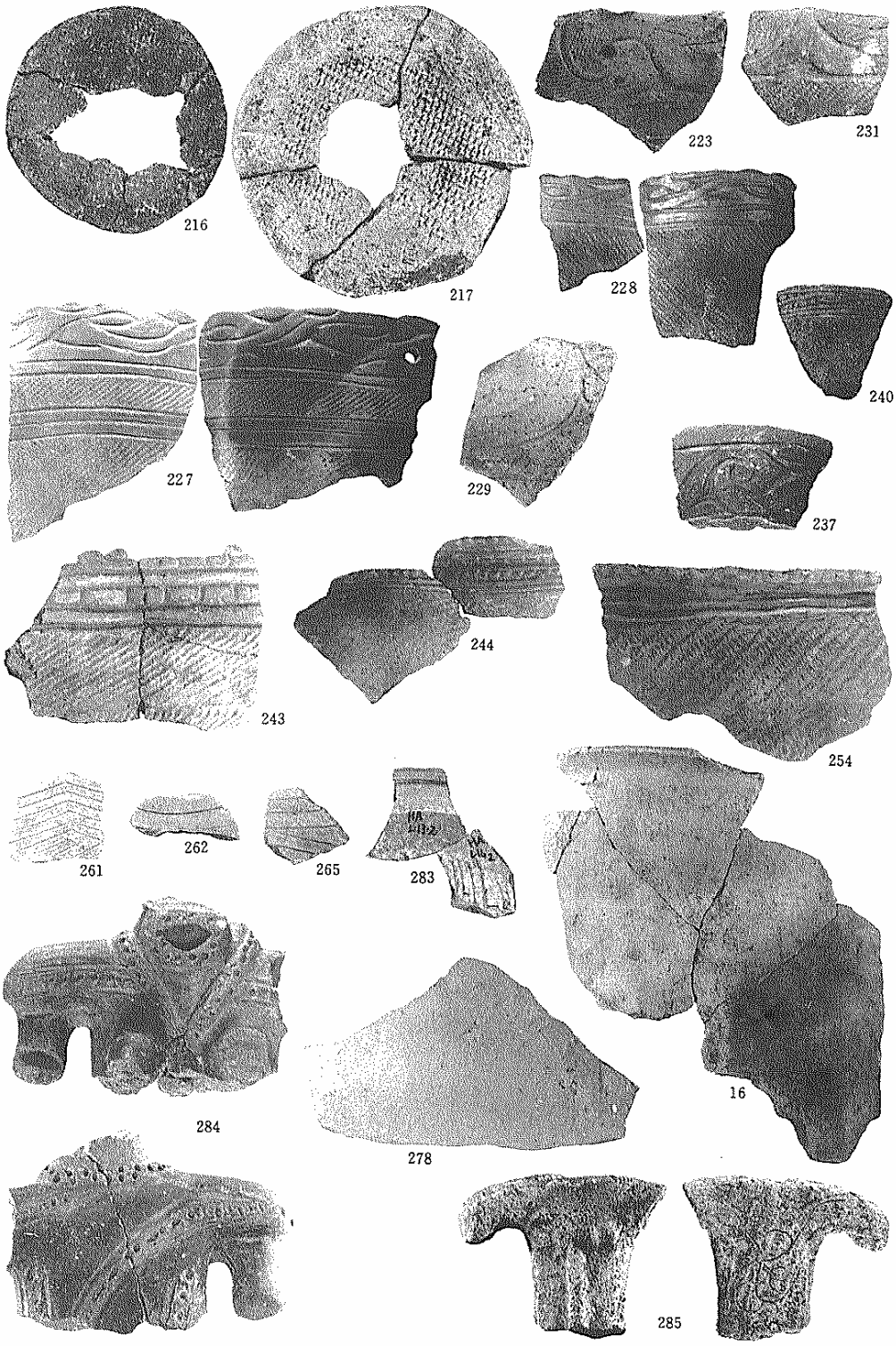
図版９　縄文土器



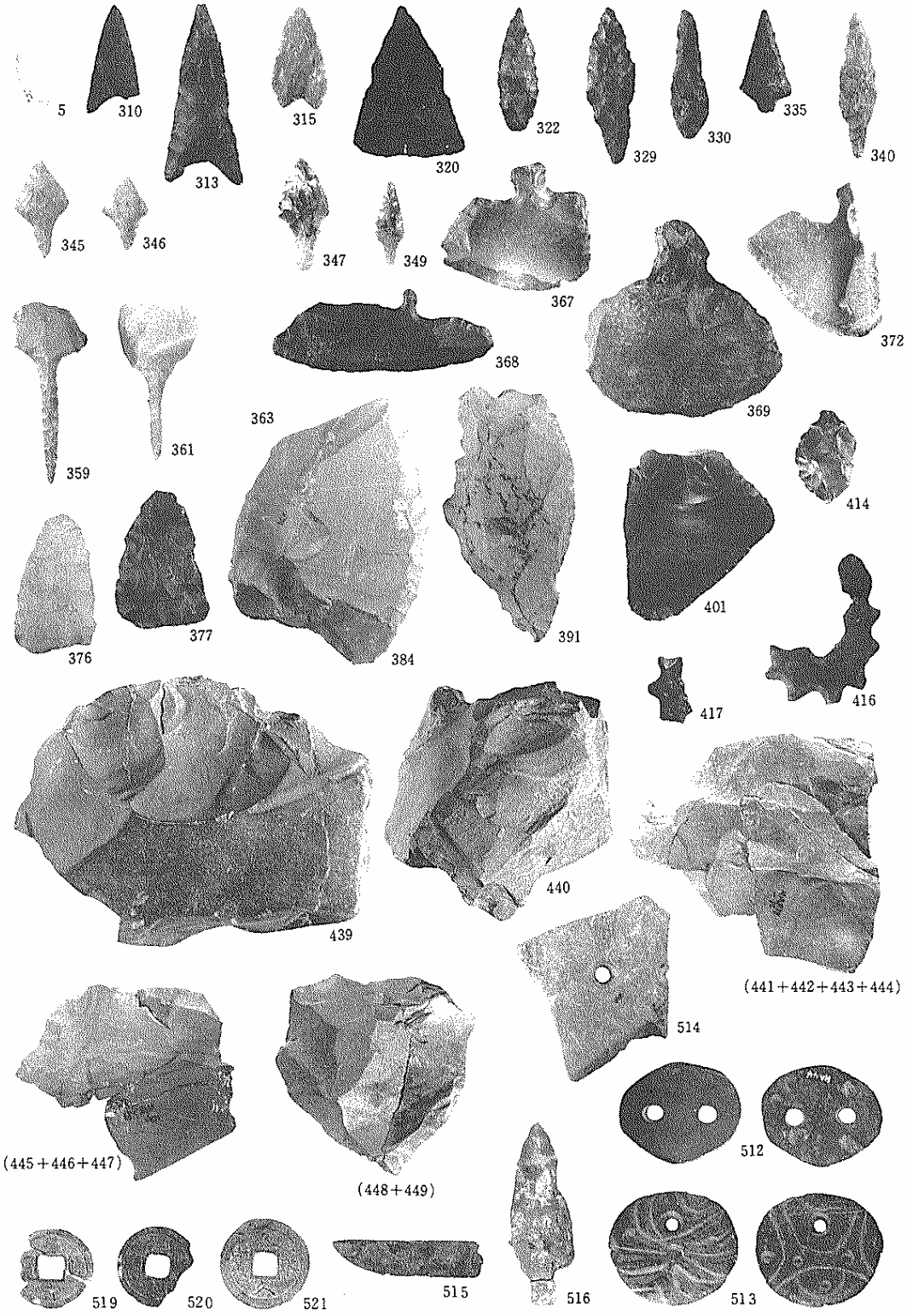
図版10　縄文土器


140
146
148
139
157
154
150
171
162
166
167
167
165
190
188
178
182
183
186
187

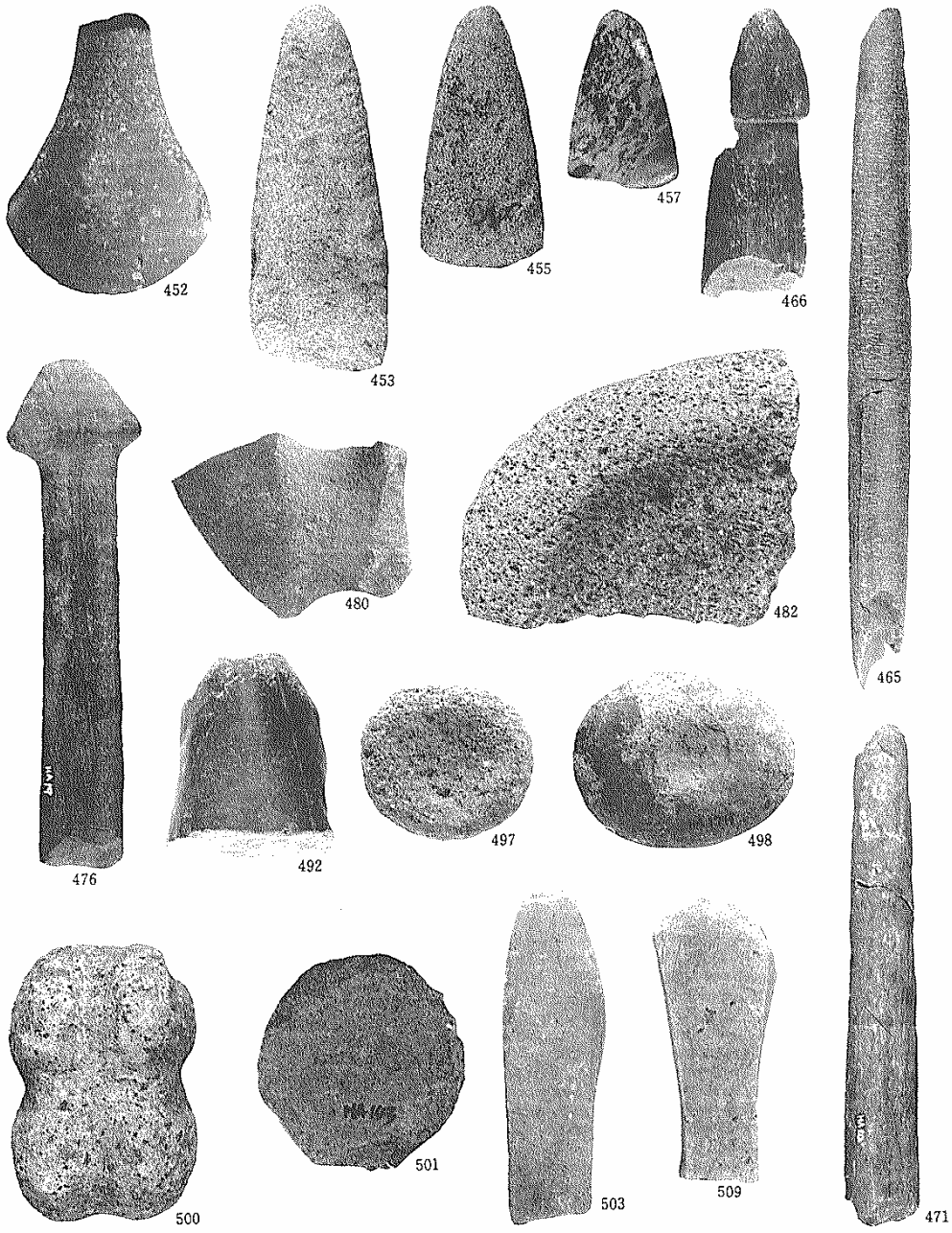
図版11　縄文土器



図版12　縄文土器・弥生土器・土師器・陶器・土偶



図版13　石器・石製品・鉄製品・古銭


452
453
455
457
466
465
476
480
482
492
497
498
500
501
503
509
471

図版14　石器・石製品

（7）　日光山遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 283
　１．遺跡の位置と現状 …… 283
　２．歴史的環境 …… 283
Ⅱ．調査の経過 …… 286
Ⅲ．遺構と遺物 …… 290
　１．封土のある塚 …… 290
　２．土壙 …… 304
　３．封土がなく地山削り出しによる塚 …… 306
　４．遺構以外の出土遺物 …… 310
Ⅳ．遺構と遺物について …… 311
　１．出土遺物の年代 …… 311
　２．遺構の年代 …… 313
　３．遺構の構築と性格 …… 314
　４．遺跡の性格について …… 326
Ⅴ．ま　と　め …… 327
日光山遺跡火葬墓出土人骨について　札幌医大第２解剖学教室　　百々幸雄 …… 330

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町鶴巣北目大崎字日光山
遺 跡 記 号：ＡＣ（宮城県遺跡地名表登載番号：23048）
調 査 期 間：昭和47年7月26日～10月27日
調 査 面 積：約1,500㎡
発 掘 面 積：約800㎡
調　査　員：文化財保護室
　　藤沼邦彦　白鳥良一　斎藤吉弘　熊谷幹男　遊佐二郎
調査補助員：東北大学　柳瀬和幸　石森勉
　　宮城教育大学　太田昭夫　三浦好江　斎藤智恵子　真砂まゆみ

Ⅰ．遺跡の位置と周辺の遺跡

１．遺跡の位置と現状

日光山遺跡は黒川郡大和町北目大崎字日光山に所在し、大和町役場の南東約4.5㎞に位置する。

大和町南部の地形をみると、奥羽山脈から富谷丘陵が東へのびてきている。この丘陵の間には吉田川とその支流（竹林川・西川など）が東流し、川の周囲には河岸段丘・河岸平野・谷底平地などが開けている。この富谷丘陵の中で泉市の明道付近から大和町にむかって竹林川と西川の間に北東に派生する標高 90～70㎝ の丘陵がある。この丘陵は下草付近で西から入り込む谷底平地をはさみ北と南の２つの丘陵に分岐しており、北側は大崎地区に南側は鳥屋地区にのびていく。この北に分岐した丘陵の北側では吉田川に竹林川・善川などの支流が合流し、その周囲に河岸平野が開けている。また、丘陵の南側には西から入るせまい谷底平地が形成され、勝負沢、具足沢などの沢地が発達している。

北側に分岐した丘陵の北側と南側には大小の沢が発達しており、特に北目大崎字柴田付近で北側の河岸平野と南側の谷底平地から大きく入り込む沢によってせまい尾根となっている。この南から入り込む谷の東側にある小丘陵に標高約42m小丘陵に遺跡は立地する。

遺跡はこの南の沢地にむかって南にのびる丘陵上に立地しており、丘陵の西と東には南から小さな谷が入り込んでいる。遺跡の北側は開田で、南側は道路のために削平を受けており、一部が雑木林として丘陵の現地形を残している。残っている丘陵は北から南にかけてゆるやかに傾斜した平坦面であり、その頂部に高まりが確認できた。

遺構は丘陵頂部の北と南に２つの方形状をした塚があり、その間に 16 基の方形や楕円形の塚が不規則に並んでいた。また、調査に入って刈払いを行なったところ、東斜面にも４基の高まりが確認できた。

２．歴史的環境

大和町には旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が知られている。この中で本遺跡の立地する丘陵周辺にも縄文時代から近世までの遺跡が数多く知られている。

縄文時代の遺跡は、吉田川両岸の段丘上や丘陵斜面に立地している。遺跡の南には谷底平地に面し中期の勝負沢遺跡、また本丘陵上の東には晩期の中興寺遺跡・別所遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は、吉田川の右岸に石包丁の出土した要害遺跡が知られるだけである。

古代の遺跡には古墳・集落跡・窯跡などがある。古墳は本遺跡周辺の大崎地区から大郷町東沢にかけての丘陵上に数多く見られ、北目大崎古墳、真山古墳、鳥屋古墳（奈良時代前半）・

国土地理院5万分の1吉岡を複製

大和町

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	日光山遺跡	中・近世	13	新田古墳	古墳	25	別所遺跡	縄文
2	吉岡・城跡	江戸	14	八谷古城跡	中世	26	別所横穴古墳群	古墳
3	吉岡古館跡	中世	15	上ノ山遺跡	平安	27	北目大崎館跡	中世
4	安楽院遺跡	縄文	16	新坂遺跡	縄文	28	北目大崎古墳	古墳
5	天王寺遺跡	平安	17	要害館跡	中世	29	天神館跡	中世
6	糸繰遺跡	縄文	18	斉ノ前遺跡	縄文・平安	30	鳥屋八幡古墳	古墳
7	一里塚	江戸	19	要害遺跡	弥生	31	勝負沢遺跡	縄文
8	一里塚遺跡	縄文	20	相川堤防遺跡	縄文・平安	32	大崎窯跡	中世
9	西浦田遺跡	平安	21	下草古城跡	中世	33	鳥屋窯跡	奈良～平安
10	御所館跡	中世	22	鵜巣館跡	中世	34	佐和城跡	中平
11	八谷館跡	中世	23	観音堂小塚群	近世			
12	新田古墳	古墳	24	日光山小塚群	近世			

富谷町

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
35	馳取城跡	中世	39	奈良木城跡	中世	43	態野館跡	中・近世
36	門前城跡	〃	40	原前南遺跡	奈良～平安	44	穀田経塚	中世
37	館山経塚	室町	41	小国館跡	中世	45	穀田十三塚	近世
38	大童館跡	中世	42	南楯城跡	中世			

第1図　周辺の遺跡

別所横穴古墳（奈良時代中～平安時代初）が知られている。この他に大郷町で平安時代の埋葬に関係する土壙（勢見ヶ森古墳）が発見されている。集落跡には住居跡が検出された勝負沢遺跡（平安時代）や原前南遺跡（富谷町―奈良時代）がある。窯跡には鳥屋窯跡群・三角田窯跡（奈良時代前半）がある。この富谷～大郷地区にかけての地域は、奈良～平安時代には黒川郡三郷のうち白川郷・驛家郷の二郷が設置された地域として考えられており、また遺跡の立地する北側には古代に国府から加美郡に通じる道路があったと考えられている（清水・1972）。

中世の遺跡には城館跡・経塚などがある。城館跡は吉田川流域の丘陵頂部や突出部に多く立地しており、この中で御所館、八谷館、鶴巣館などが調査されている。本遺跡の立地する丘陵上にも北目大崎館跡がある。経塚は館山経塚・穀田経塚（富谷町）が知られている。館山経塚は本遺跡から河岸平野をはさんで西１㎞ の二ノ関城の頂部に立地し、永和二年（1376 年）の銘のある青銅製経筒が出土している。中世前半の歴史は文献が散逸し明確でない。室町中期以降になると落合蒜袋～下草（大崎地区も含む）周辺を拠点として黒川氏が黒川郡を支配したとされており、御所館と鶴巣館は黒川氏の居館として考えられている。他の城館は黒川氏に属する家臣団に関係するものとして伝えられている。黒川氏が秀吉の奥州仕置で没びた後、本郡では天正 18 年（1590）に秀吉の命で検地が行なわれており、現在、黒川郡検地帳が残っている。その中にこの北目周辺では「毎野」・「鳥屋」分のものがみられ、これには名請人（黒川氏の支配下にあった地侍と思われるものもいる）の名が見られ中世末には本丘陵周辺でこれらの人々（地侍）を核にして村落が形成されていたと考えられている（1975：『大和町史』。）

近世の遺跡としては下草古城跡・観音堂小塚群・日光山西小塚などがある。下草古城跡は慶長 15 年（1610）に伊達宗清が旧黒川領の中心であった下草村の北側の自然堤防に築いた平城であるが、５年ほど居城して元和二年（1616）吉岡新城を築き現在の吉岡町に移った。

本遺跡の立地する地区は江戸時代初期の状況は不明であるが、江戸時代中期になるとこの地区は安永三年の『北目大崎村風土記書出』に見られる北目大崎村に属していたことが知られる。

北目大崎村については『大和町史』によると、「慶長 15 年（1610 年）～寛永 11 年（1634 年）までは、伊達宗清の支配であり下草～大崎周辺は佐斉才蔵の知行地となっていた」としている。また、江戸初期の北目大崎村の様子は不明であるが、安永３年『北目大崎村風土記書出』によって『大和町史』では「人頭（本百姓）43 人、家 49 軒、男女合計が 352 人となっている。田畑合計が 189 貫 516 文、耕地の 91％が給地（八谷、大越などの知行地）で、他が蔵入地（仙台藩の直接支配地）となっており、この他に７軒の隷属農民がみられる。このことから人頭１人の平均は４貫 407 文で、１軒の平均人数は隷属農民も含め 7.18 人となっている」としている（渡辺・大藤：1975）。

Ⅱ．調査の経過

本遺跡は昭和 44 年の東北縦貫自動車道に伴う分布調査で発見され、遺構として丘陵頂部に塚が確認された。これらの塚は中世および近世の経塚、十三塚などの遺構と考えられた。その後、遺跡が路線敷にかかることに決定したために、昭和 47 年に地形測量を行ない塚の分布状況を地形図に示した（第３図）。その結果、塚は丘陵頂部に 20 基確認された。

調査は昭和 47 年７月 26 日に開始した。最初に各々の塚にトレンチを設定し、20 基の塚の構築方法と内部施設の確認を行なった。その結果、頂部にみられる 20 基の塚はいずれも封土をもつもので、その形態には方形の塚と円形の塚が確認された。方形の塚は土壙を伴う３段築成のものと周溝のめぐるものの２種類であり、円形の塚はすべて土壙を伴うものであった。円形の塚の土壙中には火葬骨と棺の底板や棺を埋葬した痕跡がみられ、陶器、磁器、キセル、貨幣などの副葬品が出土した。その後、他の遺構の有無を確認するために塚の周辺と東斜面の塚を調査した結果、東斜面で封土をもたない地山を削り出した円形の塚、丘陵全体に土壙が検出された。

封土をもたない円形の塚には周溝のめぐるものとめぐらないものがあり、土師器・須恵器などが出土し、土壙からは棺の痕跡と共に貨幣が出土した。

最終的に遺構は丘陵頂部全体と東西斜面の北側で計 40 基確認され、各遺構ごとにみると封土をもつ塚 18 基、封土をもたない塚８基（周溝のめぐるもの６基、円形の削り出しのもの２基）、土壙８基となった。これらは出土遺物などから封土をもつ塚は中世末～近世中頃、封土をもたない地山削り出しの周溝をもつものと円形のものは奈良～平安時代、土壙は近世中頃のものと考えられた（第４図）。

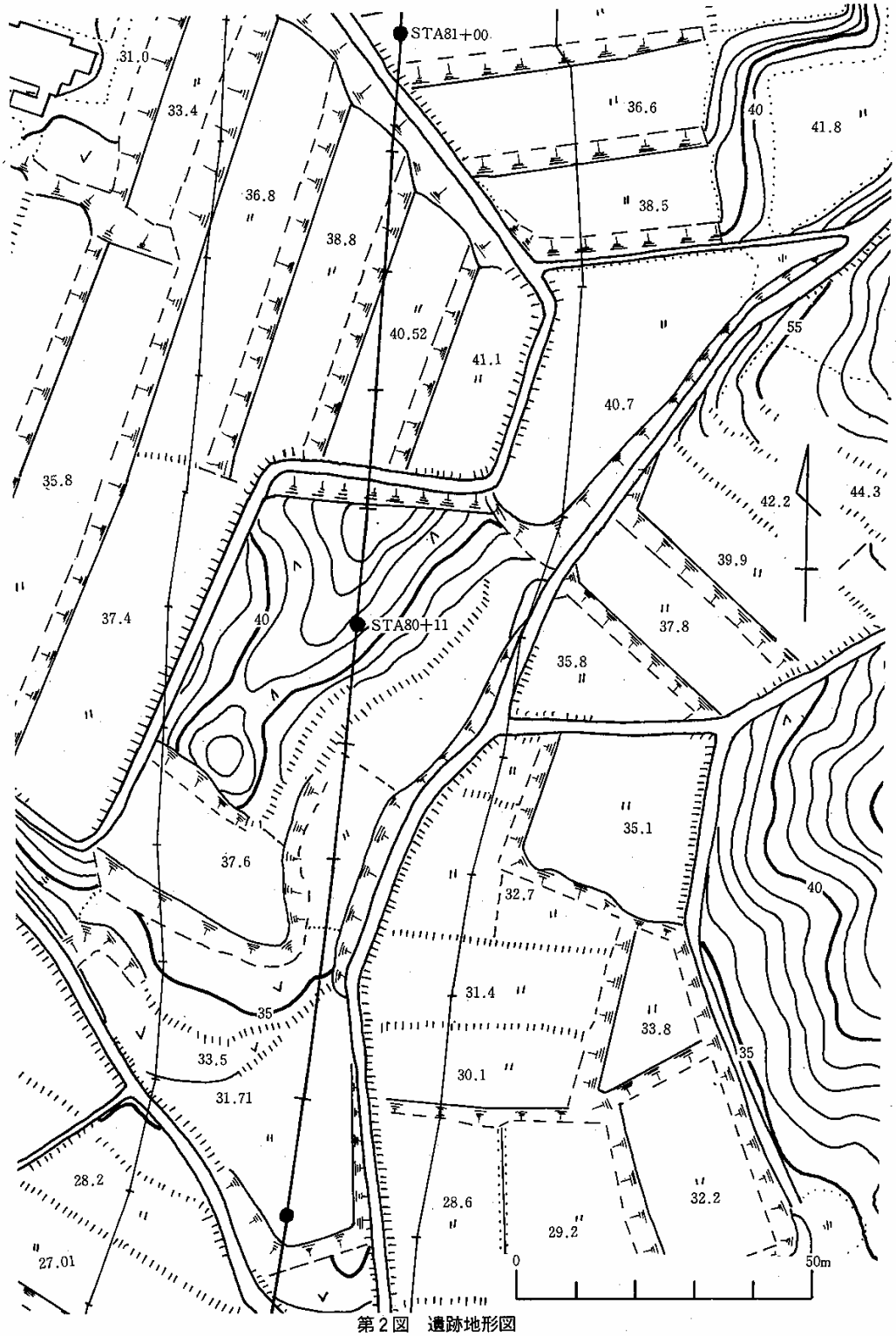
９月１日に勝負沢遺跡といっしょに現地説明会を行ない、10 月 27 日に調査は終了した。

整理にあたって：遺構の番号については発掘の際に掘り上げた順につけた番号をそのまま使用した。

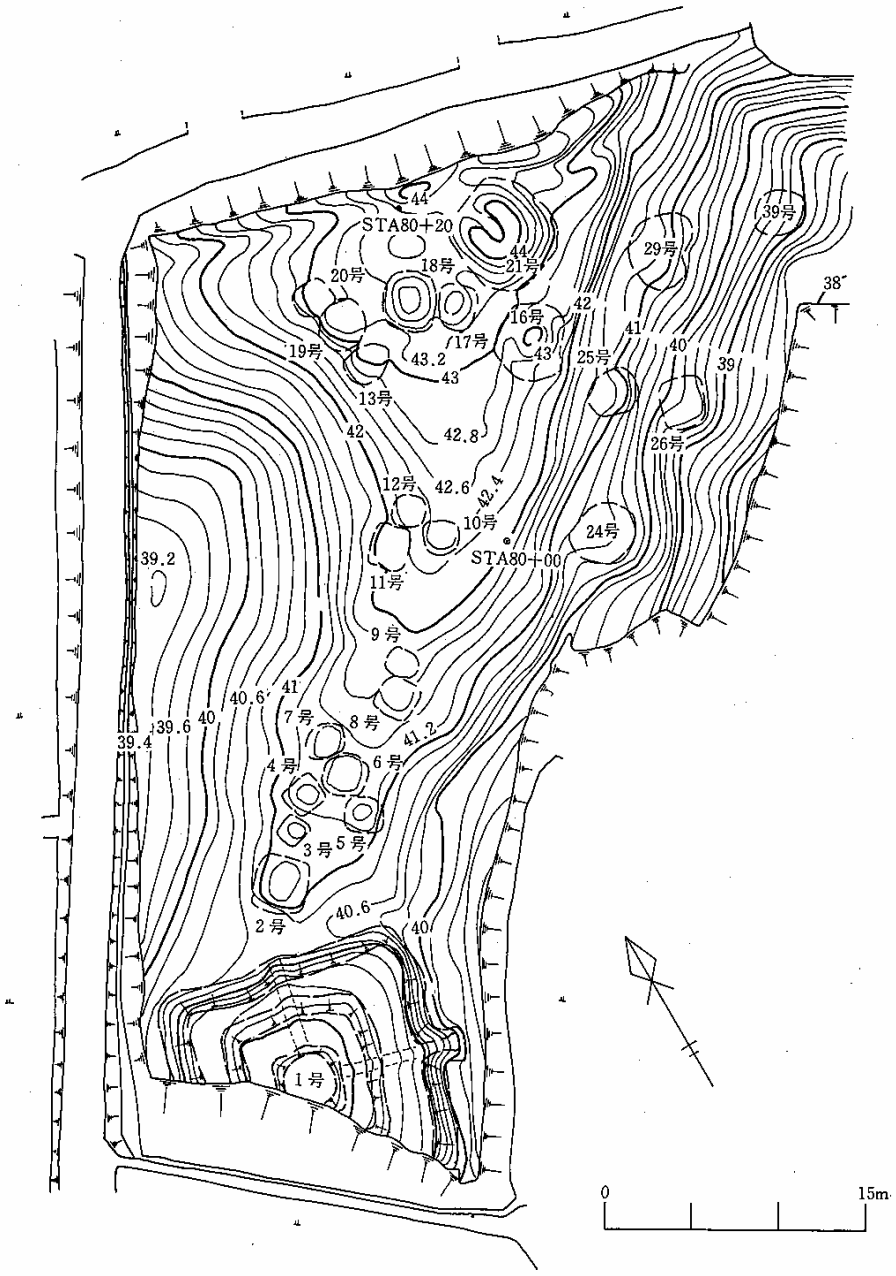
１．封土のある塚
- ○方形の塚　・１、21
- ○円形の塚　・２、４、５、７、９、10、34、３、６、11、12、13、16、17、18、19、20、23

２．土　壙　・22、28、30、31、32、36、37、38、35

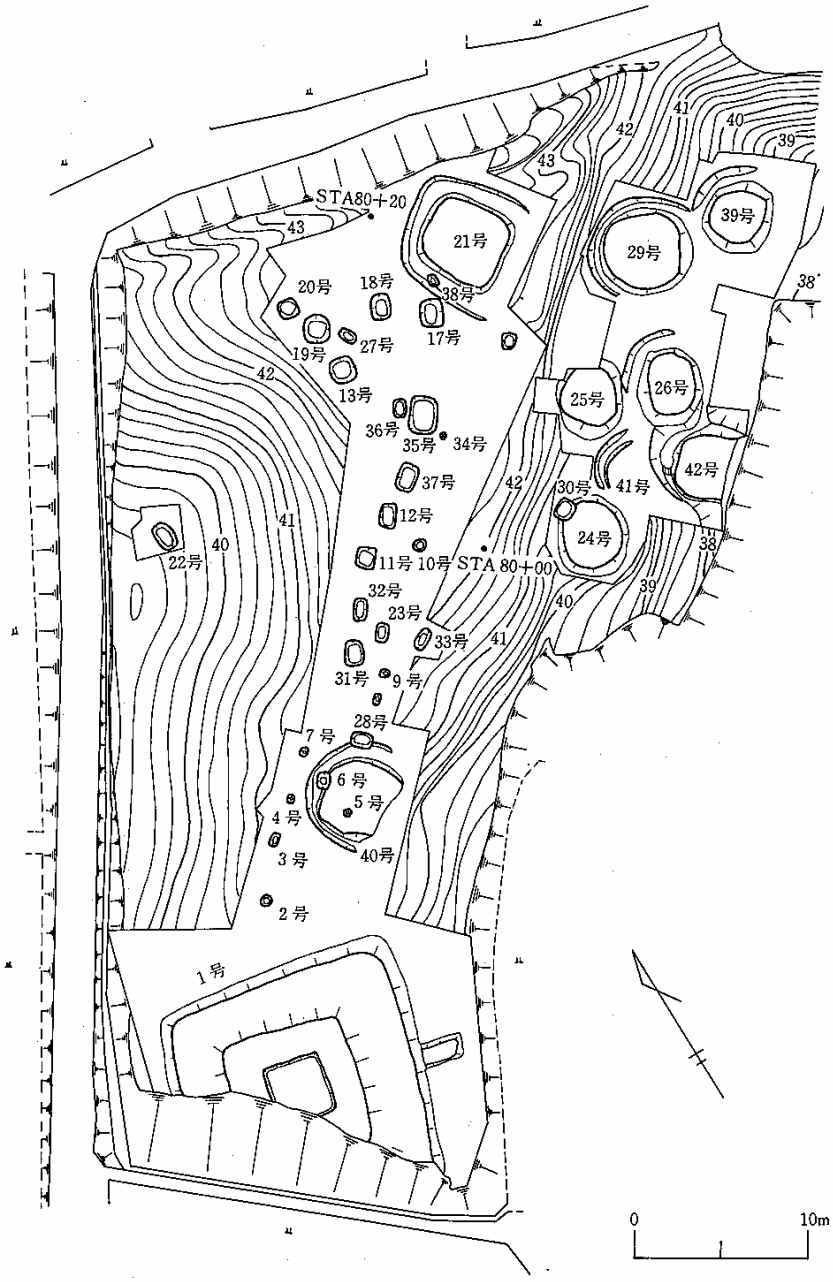
３．封土のないけずり出しによる塚
- ○円形に周溝がめぐるもの・26、29、39、40、41、42
- ○円形に削り出されるもの　・24、25


STA81+00
STA80+11
31.0
33.4
36.6
40
41.8
36.8
38.5
38.8
40.52
41.1
55
40.7
35.8
42.2
44.3
39.9
37.4
40
37.8
35.8
35.1
37.6
32.7
40
31.4
35
33.8
33.5
35
30.1
31.71
28.2
28.6
32.2
29.2
27.01
0
50m

第２図　遺跡地形図



第３図　日光山遺跡平面図



第４図　日光山遺跡遺構配図

Ⅲ．遺構と遺物

遺跡の基本的層位は、Ⅰ層－暗褐色土（表土）、Ⅱ層－黒褐色土（旧表土）、Ⅲ層－黄褐色土（地山）である。遺構は丘陵頂部と東西斜面の北側で40基検出された。その種別は封土のある塚・土壙・封土のない削り出しによる塚である。塚は地表面で観察されており、土壙は地山面で検出された。これらの発見された遺構の形態・規模と出土遺物についてのべてゆく。

１．封土のある塚

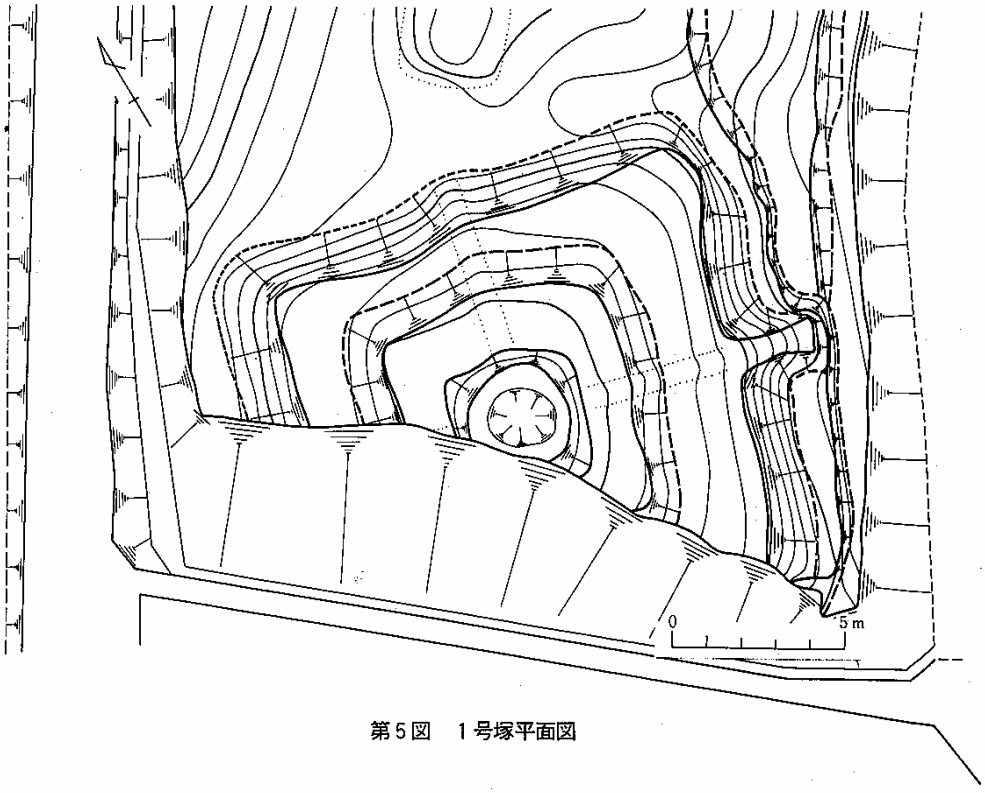
封土のある塚は平面形と形態から⑴－平面が方形で三段築成の塚、⑵－平面が方形で段をもたない周溝がめぐる塚、⑶－平面形が円形の塚の３種類みられた。

⑴　平面形が方形で三段築成のもの

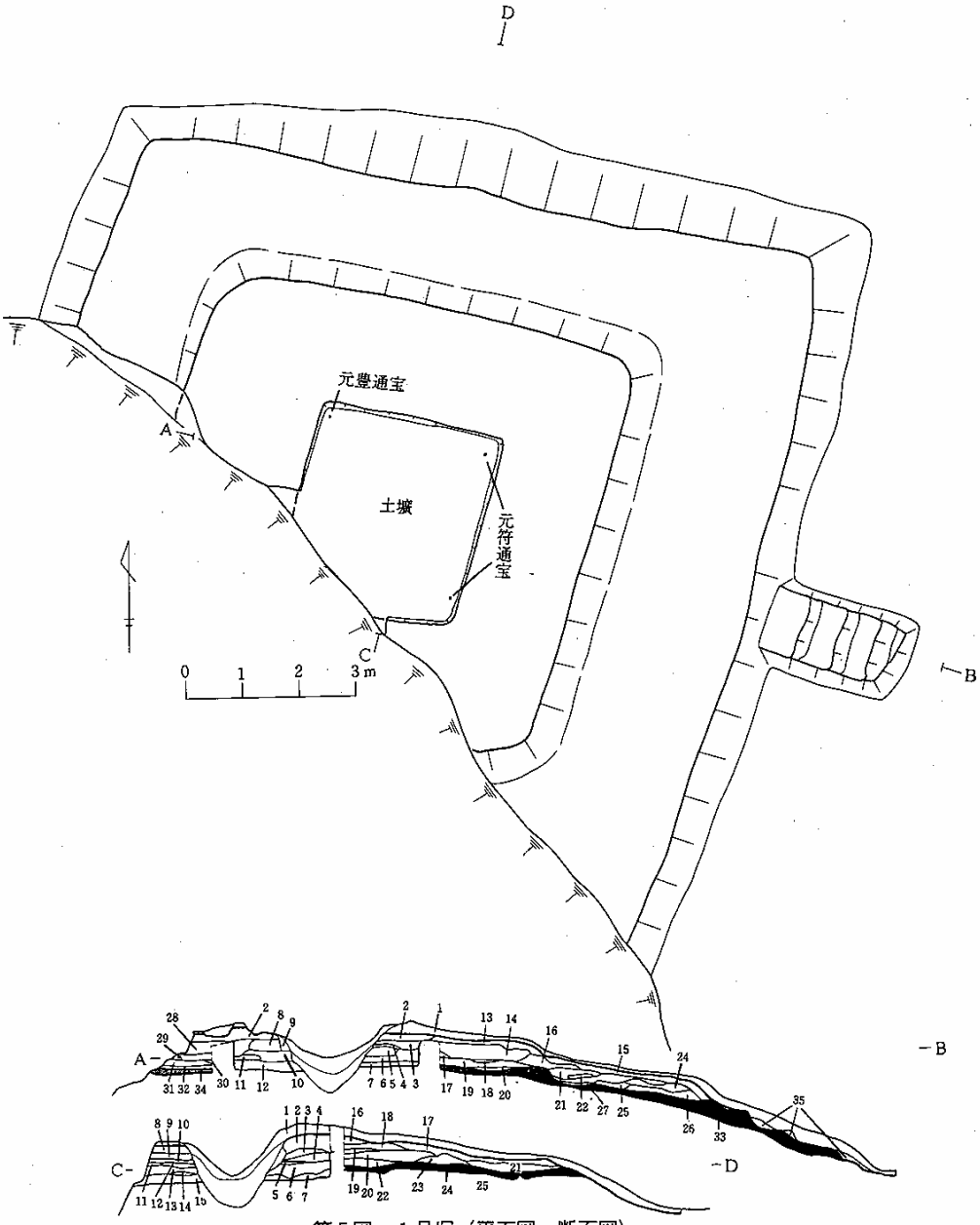
遺跡の南端に位置する１基だけで、遺構群の中で最も大きい塚（１号）である。

１号塚

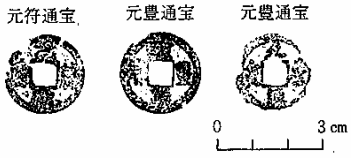
３段築成のもので、南西部の約$\frac{1}{3}$が破壊されている。上段には盗掘孔がみられた。中段と上段の三隅の状況と長さからほぼ正方形と思われる。現状での規模は下段の北辺で約15.1m、東



第５図　１号塚平面図



第５図　１号塚（平面図・断面図）



第６図　１号塚土壙出土遺物

辺で15.2mである。上段までの高さは北側で約1.7m、東側で約2.4mである。下段の東辺中央に土手状の張り出しがみられ、その規模は長さ約３m、幅約１mである。また、北辺中央部付近が上・中・下段ともにやや張り出している。各段の北辺と東辺の長さと高さについては第１表に示した。

（形態・規模）　表土をのぞいた後の平面形はほぼ正方形である。北辺の長さは約13.7m、東辺の長さは13.5mである。上段までの高さは北側で約1.4m、東側で約２mである。壇築の状況をみると、下段は崩壊土でおおわれていたために西辺と東辺の立ち上がりは明確であったが、上段、中段は土のくずれで壁の傾斜はゆるく、上段の輪郭はわかりにくい。東辺中央の張り出しは地山を削り幅約80cmの３段の階段状になっており、各段の高さは約20cmである。

第１表　１号塚の規模

	長さ（m）				高さ（m）	
	北辺		東辺		北辺	東辺
	上端	下端	上端	下端		
上段	2.8	3.8	2.7	3.7	1	1.8
中段	6.6	8.7	6.8	8.5	0.4	0.4
下段	12.5	15.1	12.2	15.2	0.2	0.2
計					1.7	2.4

第２表　１号塚断面図

層No	土色色	備考		18	暗褐色土	軟くぱさぱさしている。	
1	黒褐色土	さらさらした砂質	表土	19	暗褐色土	ロームを含む。ややしまり、ぱさぱさしている。	積土中段
2	暗オリーブ色土	軟くさらさらしている	積土上段	20	黒褐色土	ロームを粒状に含む。軟く粘性あり。	
3	黒褐色土	軟くさらさらしている	土壙埋土	21	暗褐色土	ロームを含む、ややしまり、ぱさぱさしている。	積土下段
4	黒褐色土	ロームが粒状に点在している。軟くぱさぱさしている。		22	オリーブ黒色土	軟く、ぱさぱさしている。	
5	暗褐色土	軟くぱさぱさしている。		23	オリーブ黒色土	ロームをブロック状に含む、軟くぱさぱさしている。22層より明るい。	
6	黒褐色土	軟くぱさぱさしている。3層より暗い		24	黒褐色土	軟く、ぱさぱさしている。	
7	暗褐色土	軟くぱさぱさしている。		25	オリーブ黒色土	ローム塊を多く含む、ややしまりぱさぱさしている。	
8	黒褐色土	きり状にロームを含む。軟い。		26	黒褐色土	ロームを多く含む軟くぱさぱさしている。	
9	黒褐色土	地山のロームが多く点在、軟い		27	黒色土	ロームを粒状に含む、ぱさぱさしている。	
10	オリーブ黒色土	ロームの細い粒子を含む。軟くぱさぱさしている。		28	褐色土	ロームおよび砂質の岩盤の小ブロックからなる。	
11	黒色土	軟くぱさぱさしている。		29	褐色土	ロームおよび砂質の岩盤の小ブロックからなる。	
12	オリーブ黒色土	ロームの細い粒子が10層より少ない、軟くぱさぱさしている。		30	黒色土		
13	オリーブ褐色土	ロームをしもふりに含む。	積土中段	31	褐色土	ロームおよび砂質の岩盤の小ブロックからなる。	
14	暗褐色土	ロームを多量に含む、ややしまり、ぱさぱさしている。		32	黒褐色土	ロームを含む。	
15	暗褐色土	軟くぱさぱさしている。		33	オリーブ黒色土	軟く、ぱさぱさしている。	旧表土
16	オリーブ黒色土	軟くぱさぱさしている。		34	オリーブ黒色土		
17	黒褐色土	ロームを含む。軟くやや粘性あり。		35	暗褐色土	ロームを粒状に含み軟くぱさぱさしている。	崩壊土

層No	土色	備考		13	暗オリーブ褐色土		
1	黒褐色土	さらさらした砂質。	表土	14	オリーブ褐色土	ロームブロックが混る。	土壙埋土
2	暗灰黄褐色土	ぱさぱさしている砂質	積土	15	黒褐色土	軟くぱさぱさしている。	
3	暗褐色土		土壙埋土	16	褐色土	ぱさぱさして、しまっている。	上段
4	黒褐色土			17	黒褐色土		
5	暗褐色土			18	オリーブ褐色土	軟く、ぱさぱさしている。	
6	黒色土			19	暗褐色土		積土 中段
7	暗オリーブ褐色土			20	暗オリーブ褐色土		下段
8	黄褐色土		積土	21	暗黄褐色土		
9	極暗褐色土			22	褐色土		
10	暗褐色土			23	黒色土	かたくしまっている。	
11	暗黄褐色土	ロームブロックが入る。		24	黒色土	軟くぱさぱさしている。	旧表土
12	暗褐色土			25	暗オリーブ褐色土		地山

（積　　土）　地山と旧表土を削り出し、旧表土上面に地山と黒褐色土を互層に積土を行い３段に築いている。その積土の順序は土壙を掘り込んでいる層（３～15 層）と土壙を埋め、その上にのせた層（１～２層）に分かれる（第２表）。

（内部施設）　塚のほぼ中央にあり、平面形は長方形である。規模は長軸 3.6m×短軸 3.3mで深さは 0.5mである。土壙の長軸方向はN－10°－Eである。積土３層から掘り込まれている。土壙内の積土はほぼ水平な堆積をしている。底面はほぼ平坦でⅢ層を床としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり第Ⅱ層と積土を壁としている。なお、ここからは宋銭が３枚出土している。出土状況は土壙床面近くで北東隅と東西隅から元豊通宝（初鋳年 1078）が１枚ずつ、北西隅から元符通宝（初鋳年 1098）が１枚である。三隅から出ているが、残りの南西隅にあったかどうか不明である。

(2)　平面形が方形で段をもたない周溝がめぐるもの

遺跡の北端に位置し、地形的に最も高いところにある。南端にある１号塚についで二番目に大きい塚（21 号）であり、１基だけである。

21 号塚

平面形はほぼ正方形の塚で、北と西側の裾まわりが幅１m、深さ 10～20㎝ ほど溝状に窪んでいる。塚の頂上部中央部に掘り込まれた攪乱孔がある。

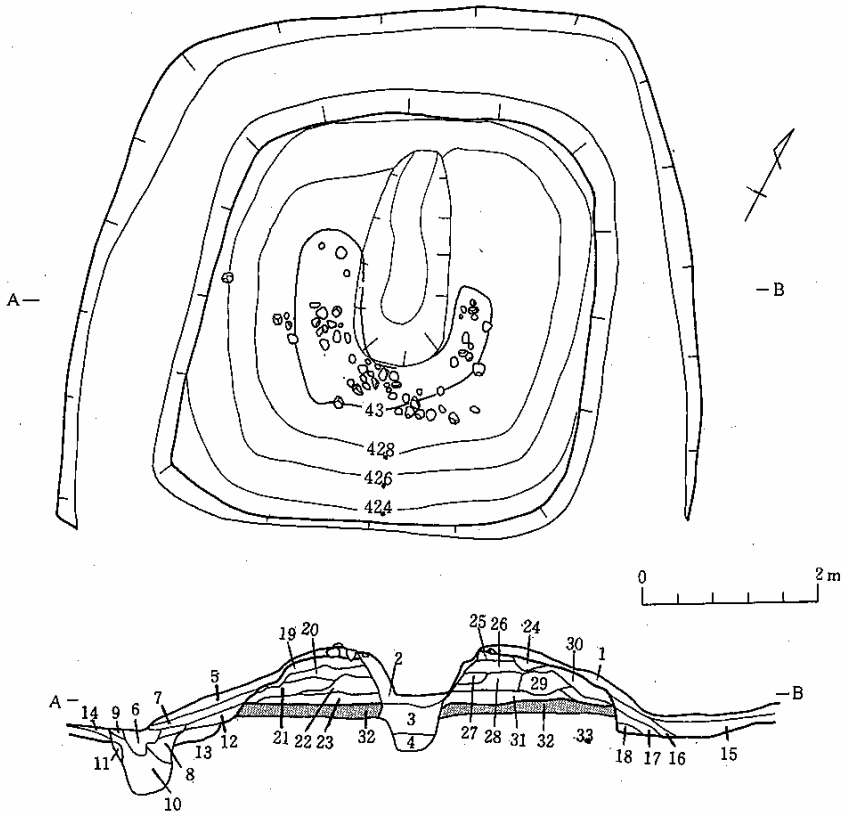
現状での規模は長軸約 5.3m×短軸約 5.2mで高さは約１mである。南側周溝堆積土を 38 号土壙が掘り込んでいる。

（形態・規模）　表土をはいだ後の平面形は、方形である。長軸 5.1m×短軸 4.8mで、その外側を溝がめぐる。溝底面から塚頂部までの高さは 0.7mである。頂部はやや平坦で径 10～20㎝ の円礫が２m×1.5mの範囲でみられる。

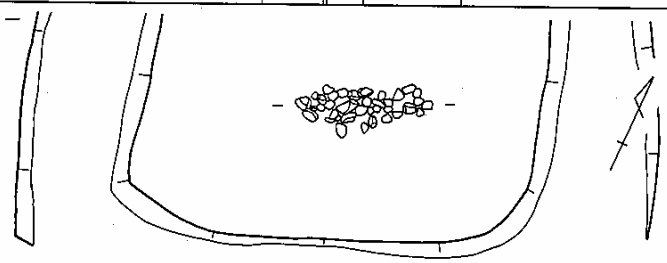
（周　　溝）　地山面で確認されたが、南辺が削平を受けているため全体の形状は不明である。周溝の外周の長さは東西７m、溝の上端幅は 1.2～1.5m、下端幅は 0.8～１m、深さは 0.3mである。底面は平坦であり、壁の立ち上りは内側が急で外側がゆるやかに立ち上る。堆積土は塚の崩壊土である暗褐色土とローム混りの褐色土が流れこみ、その後に外側からの流入がみられる。

（積　　土）　下部は地山と第Ⅱ層を削り出してその上に積土を行なっている。積土は６層確認され、地山・黒褐色土などを中央から外側へと交互に積まれている。

（集　　石）　積土を除去すると南側の旧表土上面で 10～20㎝ の円礫が東西に 1.5×0.5mの範囲に不規則にならべてあった。



層No.	土色	備考		層No.	土色	備考	
1	黒褐色土		表土	17	暗褐色土	16層より暗く、硬質	周溝埋土
2	暗褐色土		撹乱	18	にぶい黄褐色土		
3	暗褐色土	暗褐色土、黒色土が混入、軟らかい。		19	明黄褐色土	明るい感じ	積土
4	褐色土			20	黄褐色土		
5	褐色土		表土	21	暗褐色土	1層と19層を混合した感じ	
6	黒色土		土壌	22	黒褐色土		
7	暗褐色土	12、13層よりやや軟質		23	黄褐色土		
8	黄褐色土			24	黒褐色土	木の根による落ち込み	
9	黒褐色土	ローム粒子を若干含む		25	黄褐色土		
10	にぶい黄褐色土			26	暗褐色土		
11	黄褐色土			27	黄褐色土		
12	褐色土		周溝埋土	28	黒褐色土	中央部に黄褐色土を帯状に含む	
13	暗褐色土			29	黄褐色土		
14	褐色土			30	黒褐色土		
15	暗褐色土	ローム粒子を若干含む		31	黄褐色土		
16	暗褐色土			32	黒色土		旧表土
				33			地



第7図　21号塚平面図・断面図・集石遺構

(3) 平面形が円形のもの（円形塚）

円形の塚は 18 基あり丘陵頂部全体に構築されている。現状での平面形は長方形あるいは楕円形などをしているが、表土を削いだ後の平面形はすべて円形を基調とするものであった。

塚は黒色土や黄褐色土を盛り上げているもので、いずれも塚の下に内部施設を伴なっている。これ等の土壙の内部をみると堆積土や底面で火葬骨や棺を埋葬していた痕跡が確認されるものもあることから、円形塚には火葬骨を埋葬したものと棺などを埋葬したものの２種類が認められる。各塚の形態、規模は第３表に示したとおりである。

円形塚については、火葬骨を埋葬した塚と、棺などを埋葬した塚にわけ、それぞれを火葬墓、土葬墓として塚と埋葬施設、副葬品についてまとめて説明を加える。

第３表　円形塚の規模

No	種別	塚			土壙			埋葬施設	土壙出土遺物
		形態	長軸×短軸	高さ	形態	長軸×短軸	深さ		
2	火葬墓	円形	2.5×2.5	0.6	円形	0.5× 1	0.1	有	キセル、骨
4	〃	楕円形	2.2×1.4	0.3	楕円形	0.6×0.5	0.3	有	骨
5	〃	〃	1.8× 1.4	0.3	楕円形	0.5×0.4	0.1		キセル、骨
7	〃	〃	1.8×1.5	0.3	〃	0.8×0.5	0.2		寛永通宝、骨
9	〃	〃	1.8×1.5	0.15	円形	0.4×0.4	0.35		キセル、骨
10	〃	〃	1.7×1.5	0.3	楕円形	0.7×0.6	0.3	有	骨
34	〃	〃	(1.7×1.7)	0.2	〃	0.45×0.35	0.2		骨

No	種別	塚			土壙			埋葬施設	土壙出土遺物
		形態	長軸×短軸	高さ	形態	長軸×短軸	深さ		
3	土葬墓	楕円形	1.7×1.4	0.25	長方形	1.5×0.8	0.8		北宋銭、刀子、歯、明銭、鉄ナベ、漆器
6	〃	〃	1.8×1.4	0.3	〃	1 ×0.7	0.46		
11	〃	〃	1.8×1.5	0.1	〃	1.4×1.1	1.1		大観通宝、寛永通宝、磁器、漆器
12	〃	〃	1.8×1.6	0.1	〃	1.4×0.9	0.5		寛永通宝、鉄ナベ、陶器、漆器
13	〃	〃	2.4×1.9	0.3	円形	4	0.7		
16	〃	?	2 ×0.25	0.25	長方形	1 × 0.7	0.6		
17	〃	楕円形	2.5×2.2	0.4	〃	1.6× 1.2	0.6		寛永通宝
18	〃	〃	3.3×3	0.7	〃	1.4× 1	0.6		北宋銭、寛永通宝
19	〃	〃	2.5×2.1	0.25	円形	1.5	1.3		
20	〃	〃	2.1×1.8	0.5	〃	1.1	0.7		
23	〃	〃	1.8×1.5	0.2	長方形	1.1× 0.7	0.6		骨

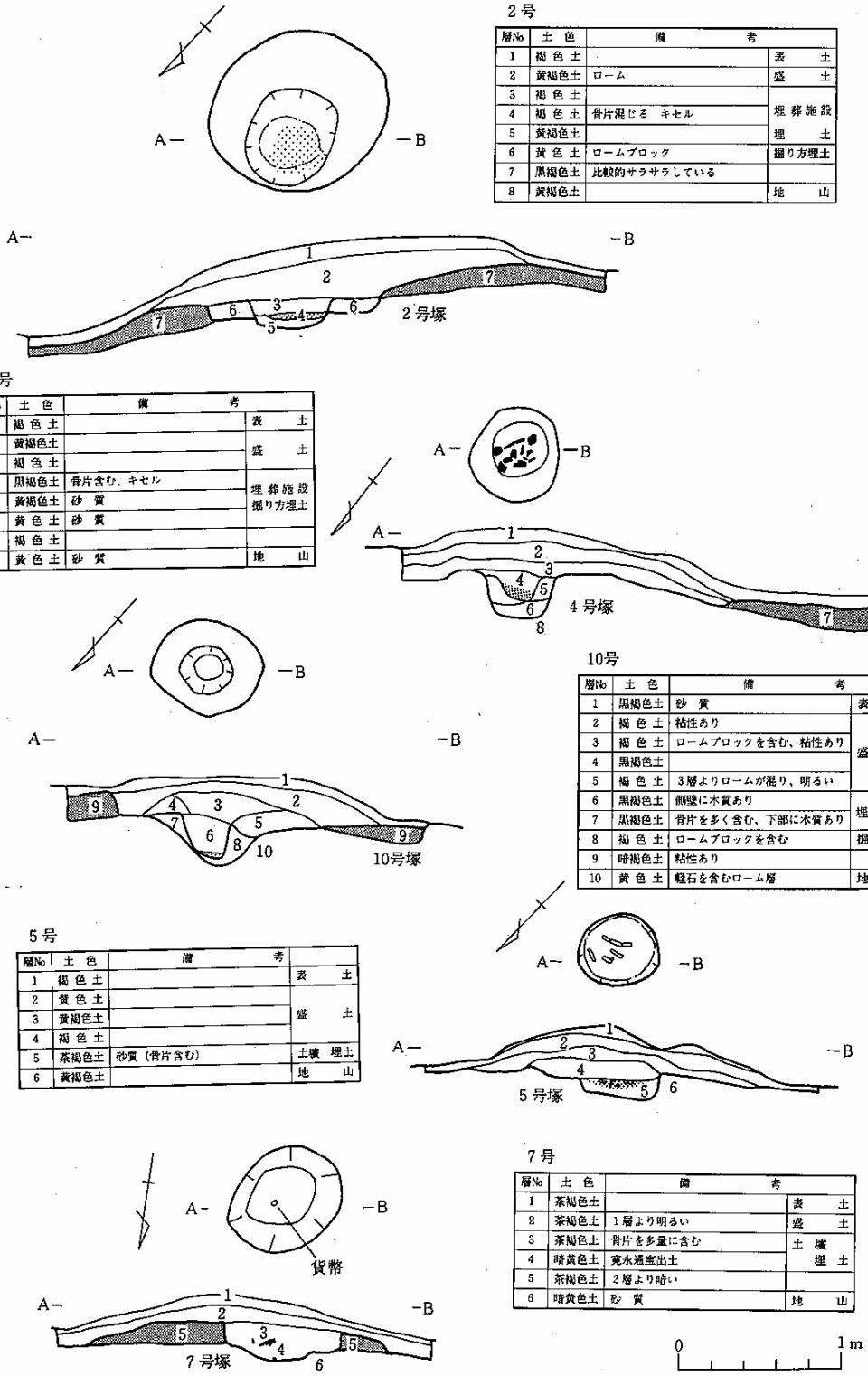
〈火葬墓〉

火葬墓は７基（２、４、５、７、９、10、34 号）である。

塚：形態は円形のもの（２号）と楕円形（４、５、７、９、10 号）のものがある積土は１～２層であり土壙の上に盛り上げているものである。

埋葬施設：内部施設は小形の掘りこみで旧表土から掘り込まれている。火葬骨が埋葬されている土壙の状況についてみると、掘り方と納骨容器の瘍跡を残すもの（２、４、10 号）と掘り方だけのもの（５、７、９、34 号）がある。前者は曲物のような容器が考えられ、後者は直接土壙に埋葬したもの、または布のような形の自由になるものに入れたものである。それぞれについてその形態と副葬品をみると次のようである。

・納骨施設がある火葬墓――２、４、10 号



2号

層No	土色	備考	
1	褐色土		表土
2	黄褐色土	ローム	盛土
3	褐色土		埋葬施設
4	褐色土	骨片混じる キセル	
5	黄褐色土		埋土
6	黄色土	ロームブロック	掘り方埋土
7	黒褐色土	比較的サラサラしている	
8	黄褐色土		地山

4号

層No	土色	備考	
1	褐色土		表土
2	黄褐色土		盛土
3	褐色土		
4	黒褐色土	骨片含む、キセル	埋葬施設 掘り方埋土
5	黄褐色土	砂質	
6	黄色土	砂質	
7	褐色土		
8	黄色土	砂質	地山

10号

層No	土色	備考	
1	黒褐色土	砂質	表土
2	褐色土	粘性あり	盛土
3	褐色土	ロームブロックを含む、粘性あり	
4	黒褐色土		
5	褐色土	3層よりロームが混り、明るい	
6	黒褐色土	側壁に木質あり	埋葬施設
7	黒褐色土	骨片を多く含む、下部に木質あり	
8	褐色土	ロームブロックを含む	掘り方埋土
9	暗褐色土	粘性あり	
10	黄色土	軽石を含むローム層	地山

5号

層No	土色	備考	
1	褐色土		表土
2	黄色土		盛土
3	黄褐色土		
4	褐色土		
5	茶褐色土	砂質（骨片含む）	土壙 埋土
6	黄褐色土		地山

7号

層No	土色	備考	
1	茶褐色土		表土
2	茶褐色土	1層より明るい	盛土
3	茶褐色土	骨片を多量に含む	土壙 埋土
4	暗黄色土	寛永通宝出土	
5	茶褐色土	2層より暗い	
6	暗黄色土	砂質	地山

第8図　2、4、10、5、7号塚平面図、断面図

（２号塚）

納骨施設の平面形は円形である。埋土は水平で、褐色土中に径 30㎝、深さ４㎝ の範囲で骨片がみられる。木質部の破片が残り、骨片の残存状況からその大きさは底径30㎝ のものである。

掘り方の平面形はほぼ円形であり、大きさは径 50ｍで深さは 10㎝ である。底面は平坦で壁は緩やかに立ちあがる。埋土は黄褐色土である。

副葬品はキセルの雁首が出土している。キセルは銅製のものである。火皿との継ぎ目に一段のくびれがある。羅宇との継ぎ目には二重の縁がある。合せ目は側面に認められる。長さが９㎝、火皿の径 1.5㎝、深さ１㎝ で雁首付根径７㎜ である。

（４号塚）

納骨施設は掘り方の中央に位置している。掘り方埋土との土色に違いはみられたが、容器などの遺存物は確認できない。埋土は単層で黒褐色であり中央から床面にかけて骨片が出土している。骨片の範囲から平面形は円形で径 30㎝、深さは 16㎝ である。

掘り方は２層から掘り込まれており、平面形は楕円形である。大きさは長軸 60㎝×短軸 50㎝ で深さは 30㎝ である。底面は丸味をおび、斜めに立ち上がる。積土は黄褐色土（砂質）でピットの下面と周囲にみられる。

（10 号塚）

納骨施設は土壙の中央に位置している。埋土は黒褐色土であり、ピット底面に骨片がみられる。ピット底面と側壁に木質部が付着していた。木質部の一部は板状を思わせるものがある。

平面形は楕円形で長軸 20㎝、深さは 25㎝ である。

掘り方は平面形が楕円形であり、大きさは長軸 70㎝、短軸 60㎝ で深さは 30㎝ である。底面は丸味があり、壁は斜めに立ち上る。掘り方の埋土は中央のピット埋土と比較して粘性がある。

●納骨施設の痕跡がみられない火葬墓５、７、９、34 号

５・７・34 号の掘り方は楕円形であり、大きさが長軸 45～80㎝×短軸 35～55㎝ の範囲で、深さは 10～20㎝ である。土壙の底面と壁の状況をみると、底面が平坦なもの（５・34 号）と底面の中央がややくぼむもの（７号）などがあり、壁はいずれもゆるやかに立ち上る。

９号の掘り方は円形で大きさが径 40㎝ で、深さは 35㎝ である。底面が丸味のあるものである。

埋葬品

５号は砂質の茶褐色土が１層であり、その上面に骨片とキセルの雁首が埋葬されている。

キセル：銅製のキセルの雁首で火皿と雁首付根までの部分が残っているが、羅宇とのつなぎの部分は焼いた際に溶解して不明である。煙管の水平部から弯曲して立ち上り、火皿との継きめに段がある。残存長は３㎝ であり、火皿は径約 1.5㎝ で、深さ１㎝、雁首狩根径６㎜ である。

７号は暗褐色土が１層であり、層の途中に骨片と土壙底面中央に寛永通宝（２枚）が埋葬されている。

34 号は暗褐色土が１層であり、１層中に数片の骨片が埋葬されている。

９号は褐色土とロームを含む暗褐色土の２層が認められ、１層中に骨片とキセルの雁首が埋葬されている。

キセル：銅製のキセルの雁首の部分で長さは７㎝である。火皿は径 1.5㎝､深さ１㎝で雁首付根径５㎜、羅宇とのつなぎ目径１㎝である。

〈土葬墓〉

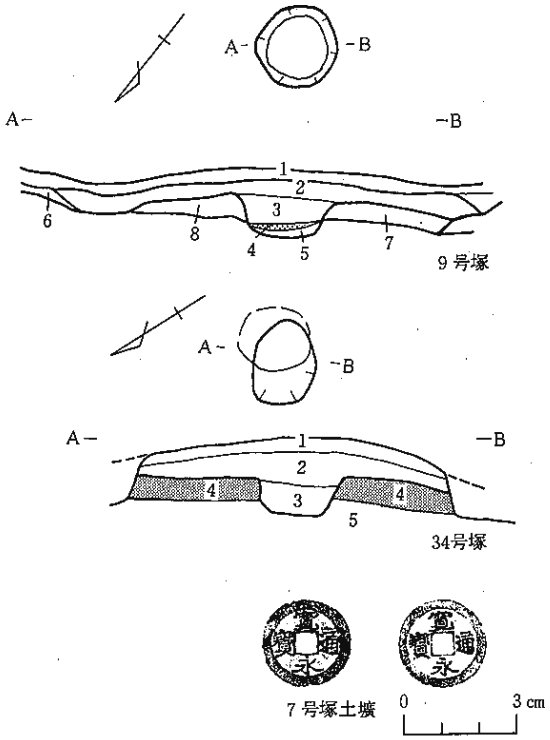
棺を埋葬した痕跡のある土壙を伴う塚は 12 基である（第３表）。

塚：形態はいずれも楕円形である。大きさは長軸 1.7～3.3m×短軸 1.4～３mで､高さは 0.1～0.7㎝で大きさは様々であるが、火葬骨の塚より大きいものである。

積土は土壙の上に盛り上げている。

土壙確認面はいずれも地山面である土壙の形態をみると、13、19、20 号は円形のもので他は長方形のものである。

円形の土壙は径 1.4mのもの（13 号）と径 1.1mのもの（19・20 号）があり、深さは 0.7～1.3m



9 号

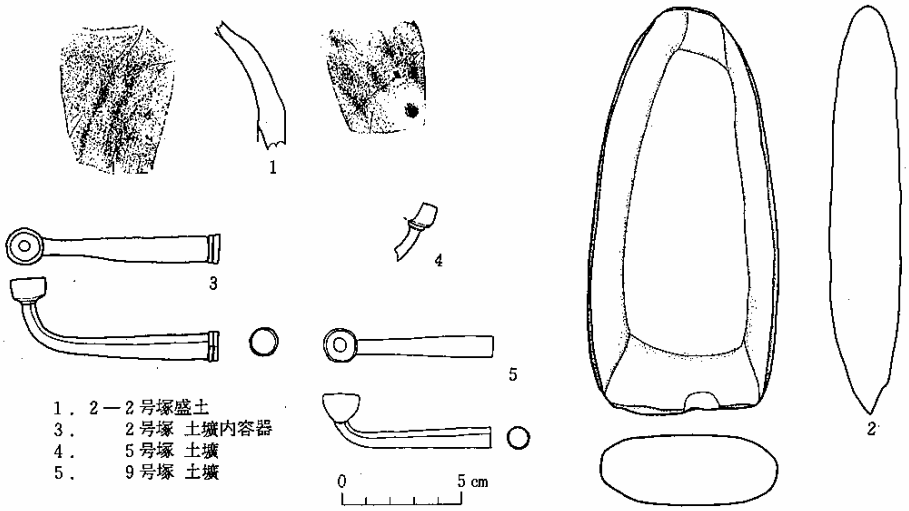
層No	土 色	備	考
1	茶 褐 色 土	砂 質	表 土
2	茶 褐 色 土	粘性あり	盛 土
3	褐 色 土	砂質、骨片	土壙埋土
4	褐 色 土	骨片多し	
5	暗 褐 色 土	ロームを多く含む	
6	黄 褐 色 土		23号盛土
7	黒 褐 色 土		
8	黄 色 土		地 山

34号

層No	土 色	備	考
1	茶 褐 色 土		表 土
2	黄茶褐色土		盛 土
3	暗 褐 色 土	骨片含む、砂質	土 壙
4	暗 褐 色 土		旧 表 土
5	黄 色 土		地 山

0　1 m

第９図　９・34号塚平面図・断面図・７号塚埋葬品



第10図　2・5・9塚埋葬品

である。円形の土壙は底面が平坦なもので、壁はやや斜めに立ち上がる。堆積土をみるといずれも棺を埋葬した周囲に水平な埋土がみられ、13・20号は桶棺の部分がくさって、一部空洞になって、19号は桶の部分に盛り土が落ち込んでいる。落ち込んだ土は軟かく水平な堆積をした掘り方埋土と区別ができる。

長方形の土壙は長軸1～1.6m×短軸0.6×1mで深さは0.4～0.8mである。堆積土は土壙の内部をみると3・6・11・12・17・23号は底面に棺の底板が残り、16号は底面が長方形にくぼむものである。18・23号は底面に粘性のある青灰色土がみられる。

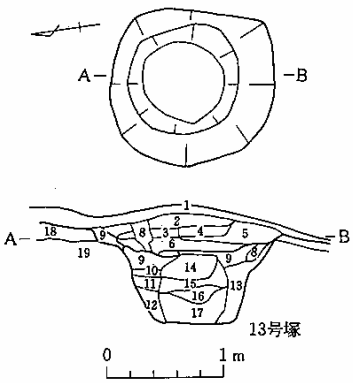
副葬品は3・11・12・17・18号の底面にみられる。

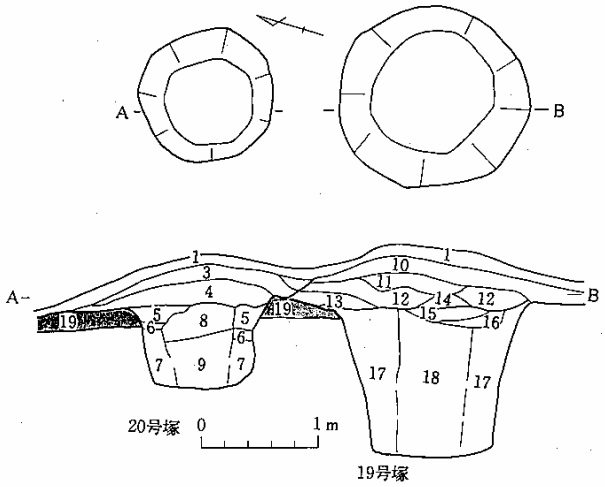
3号　棺の底面に貨幣、装飾品、漆器などの副葬品と歯がみられ、底面より20cm高い位置で鉄ナベが逆位の状態で出土している。

貨幣は紙縒を通してあり、北宋銭が36枚、明銭が1枚、不明銭が1枚の計38枚である。銭貨名と初鋳年は次のようである（第4表）。

第4表　3号塚埋葬貨幣

銭貨銘	枚数		初鋳年	銭貨銘	枚数		初鋳年
祥符元寶	1	北宋	1008	治平元寶	1	北宋	1064
祥符通寶	2	北宋	1008	熙寧元寶	1	北宋	1068
天禧通寶	2	北宋	1017	元豊通寶	2	北宋	1078
天聖元寶	1	北宋	1023	元祐通寶	8	北宋	1086
景祐元寶	1	北宋	1034	紹聖元寶	2	北宋	1094
皇宋通寶	11	北宋	1039	聖宋元寶	1	北宋	1101
至和元寶	1	北宋	1054	聖和通寶	1	北宋	1111
至和通寶	1	北宋	1054	永楽通寶	1	北宋	1408





13号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	暗黄色土		塚(盛土)
3	暗黄色土	2層よりやや明るい	
4	茶褐色土		
5	暗黄色土	3層より明るい	
6	黄色土	ロームブロック混入	
7	明褐色土		
8		空洞	
9	黄色土	ロームが斑点状に入る	土壙(棺の埋土)
10	黄色土	ロームが多い	
11	黄色土	ロームが斑点状に入る	
12	黄色土		
13	黄色土		
14		空洞	
15	明褐色土	ロームのブロック混入	(棺の崩落土)
16	黒褐色土	ローム混入	
17	黄褐色土		
18	暗褐色土		
19	黄色土		地山

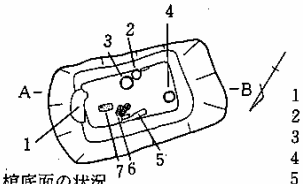
20号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	暗褐色土	砂質	塚(盛土)
3	暗黄褐色土		
4	暗黄褐色土	3層より明るい	
5	黄色土	ロームブロック	土壙(棺の埋土)
6	黄色土	褐色土混り、ロームブロック	
7	黄色土	黒色土混り、ロームブロック	
8		空洞	
9	暗黄褐色土		(棺の崩落土)

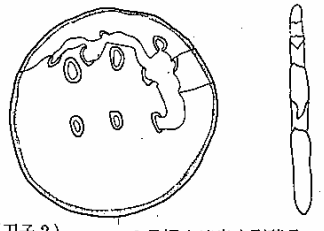
19号

層No	土色	備考	
10	暗黒色土		塚(盛土)
11	暗黄色土		
12	暗黒色土	10層より明るい	
13	暗褐色土		
14	暗黒褐色土		
15	暗褐色土	軟い	
16	暗黄褐色土	ローム粒混入	
17	黄色土	ローム	土壙(棺の埋土)
18	暗褐色土	ローム混り、軟い	(棺の崩落土)
19	黒色土		旧表土
20	明褐色土		地山

副葬品の埋葬状況（1）

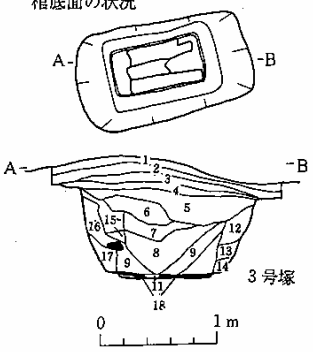


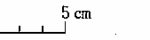
1　鉄鍋
2　装飾品
3　漆器
4　〃
5　鉄製品（刀子？）
6　貨幣
7　歯



3号塚土壙出土副葬品

棺底面の状況

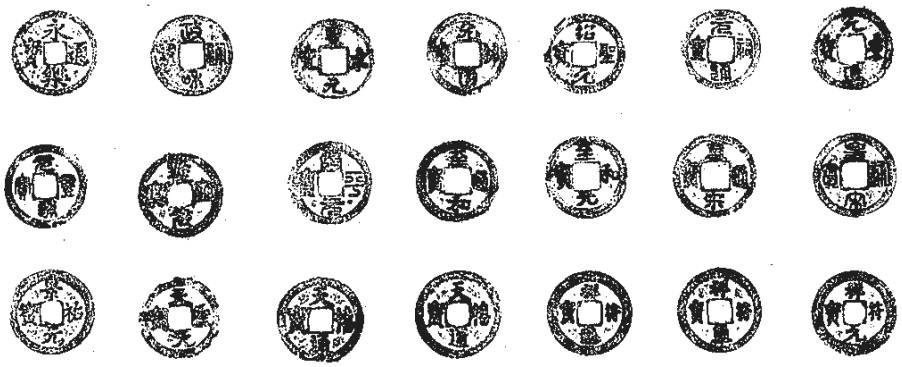




3号

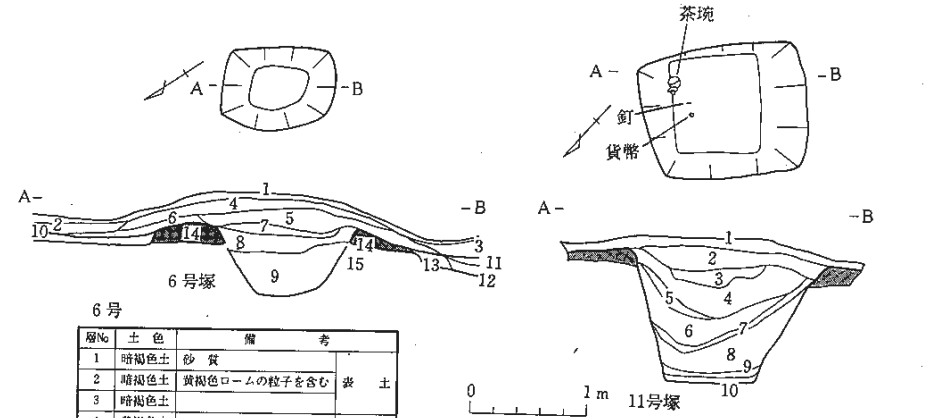
層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	黄色土	粘性あり	塚(盛土)
3	黄褐色土		
4	黄色土	ローム	
5	黒褐色土	ロームブロック混り	
6	褐色土	ロームブロック	
7	黄色土	砂質	土壙(棺の崩落土)
8	黒色土	砂質	
9	黒色土	ロームブロック混り	
10			(棺の埋土)
11	青灰色土	粘性あり	
12	黒色土	砂質	
13	黄色土		
14	黄色土	粘性あり	
15	黄色土	粘性あり	
16	黒色土	ロームブロック混り	
17	黒褐色土		
18		木質部、棺の底板	箱棺
19	明褐色土		地山

第11図　13、20、19、3号塚と副葬品



第12図　3号塚土壙出土副葬品

0　5 cm

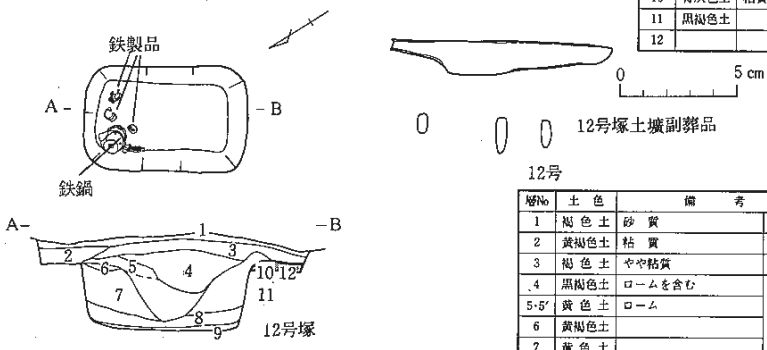


6号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土	砂質	表土
2	暗褐色土	黄褐色ロームの粒子を含む	
3	暗褐色土		
4	黄褐色土		塚盛土
5	暗褐色土		
6	黒褐色土	砂質の黄褐色の粒子を含む	
7	褐色土	黄色ローム混り	
8			土壙
9			
10	黒色土	須恵器片出土	40号周溝溝堆積土
11	極暗褐色		
12	褐色土	砂質ローム混入	
13	褐色土	褐灰色ローム含む	
14	黒褐色土		
15	黄色	砂質ローム	

11号

層No	土色	備考	
1	褐色土		表土
2	黄褐色土	やや粘質	土壙埋土
3	黒褐色土	粘質	
4	黄色土	やや褐色土が入る、軟い	
5	褐色土	ややローム入る	
6	黄色土	やや褐色土が入る、軟い	
7	黒褐色土	ややローム入る	
8	黄色土		
9	黒灰色土	粘質	
10	青灰色土	粘質(副葬品)・木質部有	
11	黒褐色土		旧表土
12			地山

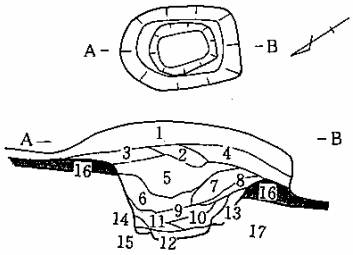


12号塚土壙副葬品

12号

層No	土色	備考	
1	褐色土	砂質	表土
2	黄褐色土	粘質	崩壊土
3	褐色土	やや粘質	盛土
4	黒褐色土	ロームを含む	土壙埋土
5・5′	黄色土	ローム	
6	黄褐色土		
7	黄色土		
8	褐色土	ロームのブロックを含む	
9	青灰色	粘質、副葬品なし	
10	黒褐色土		旧表土
11	褐色土		地山

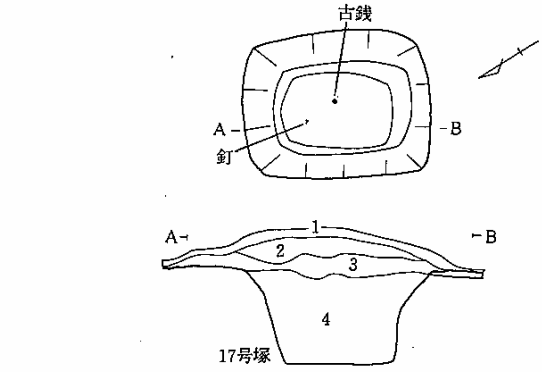
第13図　6、11、12号塚平面形・断面形



16号塚

16号

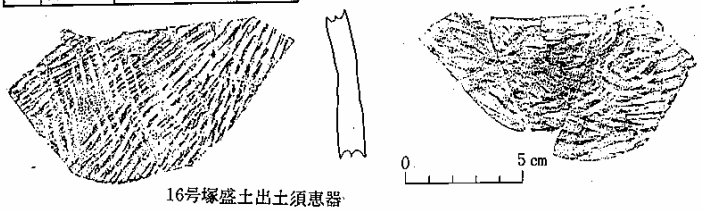
層No	土色	備	考
1	茶褐色土		表土
2	黒色土		盛土
3	茶褐色土	1層より明るい	
4	茶褐色土	1層より明るい	土壙への崩落土
5	暗褐色土		
6	黄褐色土	非常にかたい	
7	暗褐色土	5層より暗い	
8	暗黄色土	ロームブロック混り	
9	黄褐色土		
10	暗褐色土		
11	褐色土	黒色のブロック混り	
12	灰黄褐色土	釘	
13	褐色土		(棺の埋土)
14	赤褐色土		
15	明黄褐色土		
16	黒褐色土	砂質	
17	黄色土	粘性あり	



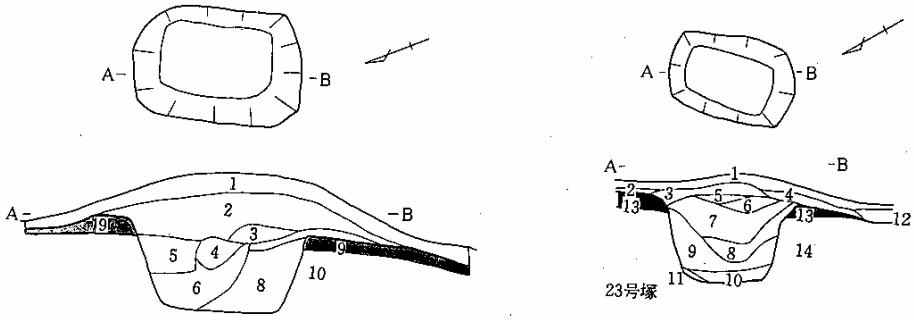
17号塚

17号

層No	土色	土	考
1	暗褐色土	砂質	表土
2	褐色土		塚(盛土)
3	黒褐色土		
4	黄褐色土	ローム混り	土壙(埋土)
5	極暗褐色土		
6	黄色土	砂質	地山



16号塚盛土出土須恵器



18号塚

23号塚

18号

層No	土色	備	考
1			表土
2	暗黄色土	砂質	塚(盛土)
3	暗褐色土		土壙
4	暗褐色土	ぽさぽさして軟らかい	
5	暗褐色土	ローム混入	
6	暗黄色土		
7	黄色土	ローム、かたい	
8	暗褐色土	ロームが混入し、ぽさぽさしている	
9	黒褐色土		
10			地山

23号

層No	土色	備	考
1	茶褐色土		表土
2	褐色土	粘性あり	塚(盛土)
3	褐色土	ロームを含む	
4	黄褐色土	粘性あり	
5	黒褐色土		土壙
6	褐色土		
7	黒褐色土	ローム多く混入	
8	暗褐色土	やや粘性あり	
9	暗褐色土		
10	暗黄褐色土	灰白色の砂質ロームを含む、骨片含む	
11	灰白色土	砂質ローム	
12	茶褐色土	粘性あり	9号塚(盛土)
13	黒褐色土		
14	黄色土		地山

0　1 m

第14図　16、17、18、23号塚平面図・断面図

装飾品は９㎝×8.5㎝の楕円形状の鉄製品である。１㎝×0.6㎝ほどの楕円形の孔が９個ほどみられるが、１部破損しているため全体の数は不明である。

鉄鍋は片口であり、つり手がつくものである（破損のため図示することはできない）。

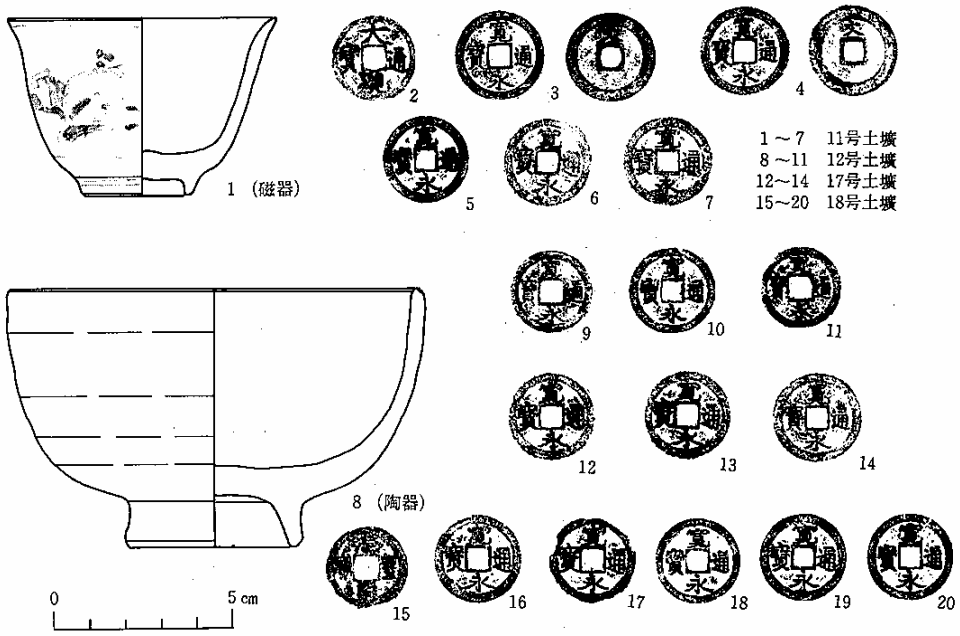
11号　箱棺の底面から貨幣、漆器、磁器などの副葬品と骨片が出土している。貨幣は大観通宝１枚と寛永通宝12枚である。磁器は小形の台付埦である。体部が外傾して立ち上り口縁端がわずかに外反する。外面に染付による草花文が描かれる。口縁と体部下半に横位の線が描かれている。底部外面に「大明」の文字がみられる。

12号　箱棺の底面から陶器、貨幣、鉄ナベ（片口汁鍋）、鉄製品、刀子、淡器の副葬器と歯が出土している。貨幣は寛永通宝３枚である。陶器茶碗は底部から直立ぎみに立ち上り台は外側にやや開くもので、灰釉茶碗である。

刀子は一口出土している。茎端部と刃部の１部が欠損しているが現存長9.3㎝、幅は茎が約６㎜、刃部が1.5㎝である。平面形は先端にいくにしたがって、わずかに細くなる。刃部と茎との境には関がある。

17号　箱棺の底面から寛永通宝が３枚出土している。

18号　箱棺の底面から寛永通宝５枚と元豊通宝１枚が出土している。



第15図　11、12、17、18号塚埋葬品

2．土　　壙

土壙は７基みられ、いずれも第Ⅲ層で確認されている。土壙の平面形はすべて長方形であり大きさは長軸１～1.6m×短軸0.65～１mで、深さ0.25～0.9mの範囲である（第５表）。大きさ深さは様々であるが16・30号が約25cmで浅い。

堆積土はロームブロック混りの暗褐色土、黒褐色土などが４～10層認められる。堆積状況をみると22号は水平な堆積を示すもので、28、31、32、36、37、38号は底部が水平で中央が上から落ち込んだものなどがみられる。底面をみると22、28、38号は箱棺の木質部が残っているもので、31、32、37、38号は堆積土の最下層に粘性のある灰褐色土が水平に堆積している。22号は底面が長方形にくぼんでおり、長軸0.65cm×短軸0.5m、深さ40cmである。底面は22号が長方形にくぼんでいるが、他の土壙の底面は平坦であり、壁はいずれも底面からゆるやかに立ち上る副葬品は棺の底部や灰褐色土の粘質土中に認められ、22、28、31、37、38号の５基から出土している。

22号：箱棺底面から寛永通宝20枚とくしが出土している。

28号：箱棺底面から布袋入の寛永通宝　　枚が出土している。

31号：底面から寛永通宝４枚と歯が出土している。貨幣は麻布袋に入っている。

37号：底面の北隅から宋銭６枚が出土している。銭貨銘と年代は次の種類である（第６表）。

38号：箱棺底面から鉄片が１片出土している。

35号土壙（馬葬墓）

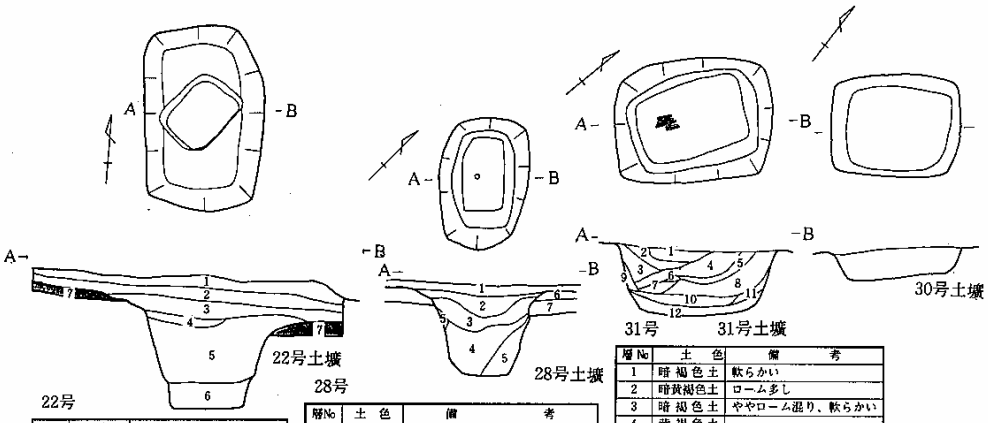
平面形は長方形で大きさは長軸2.15m×短軸1.65m、深さは85cmである。底面の北西側で下顎骨と足の骨が出土している。

第５表　土壙の規模と副葬品

No	土壙			備考	土壙出土遺物
	形態	長軸×短軸	深さ		
22	長方形	1.6×　1 （箱棺0.65×0.5）	0.9 （0.9）		寛永通宝（14）
28	〃	1.15×0.75	0.6		寛永通宝
31	〃	1.4×1.1	0.6		寛永通宝(8)、歯
32	〃	1.2×0.65	0.72		
36	〃	1 ×0.8	0.25		
37	〃	1.8×0.9	0.95		宋銭(6)
38	〃	1.25×0.8	0.55		鉄片

第６表　37号土壙副葬品（貨幣）

銭貨銘	枚数		年代
咸平元寶	1	北宋	998
天禧通寶	1	北宋	1017
熙寧元寶	1	北宋	1068
元祐通寶	2	北宋	1086
紹聖元寶	1	北宋	1094



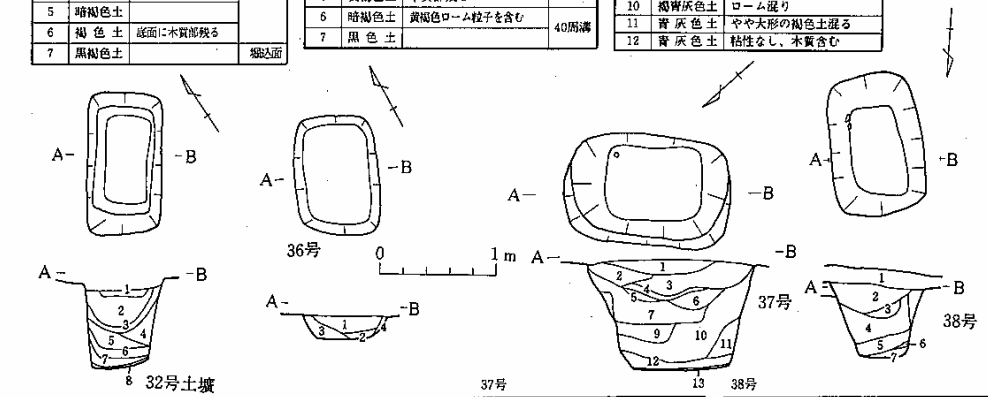
22号

層No	土色	備考	
1	黒色土		表土
2	黒褐色土		土壌
3	黒色土	ロームの粒子混入	
4	黒褐色土		
5	暗褐色土		
6	褐色土	底面に木質部残る	
7	黒褐色土		張込面

28号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土	砂質	表土
2	暗褐色土		土壌
3	黄褐色土	ロームブロック	
4	暗褐色土	黄褐色ロームブロック含む	
5	黄褐色土	木質部残る	
6	暗褐色土	黄褐色ローム粒子を含む	40周溝
7	黒色土		

層No	土色	備考
1	暗褐色土	軟らかい
2	暗黄褐色土	ローム多し
3	暗褐色土	ややローム混り、軟らかい
4	黄褐色土	
5	暗褐色土	ローム混り
6	黄褐色土	ローム多し
7	暗褐色土	ややローム混る
8	黄褐色土	ローム多し
9	暗褐色土	ローム混り
10	褐青灰色土	ローム混り
11	青灰色土	やや大形の褐色土混る
12	青灰色土	粘性なし、木質含む



32土壌

層No	土色	備考	
1	暗褐色土	ロームブロック含む	土壌
2	黄褐色土	ロームブロック含む	
3	暗褐色土		
4		ロームブロックに暗褐色土混入	
5		ロームブロックに黒色土混入	
6	灰白色土	ロームブロック混り、しまりあり	
7	青灰色土	ロームブロック混り、粘性あり	
8	灰白色土		

36号

層No	土色	土色	
1	茶褐色土		土壌
2	灰褐色土	ローム粒混入、粘性あり	
3	黄褐色土		
4	黄褐色土	粘性あり	

37号

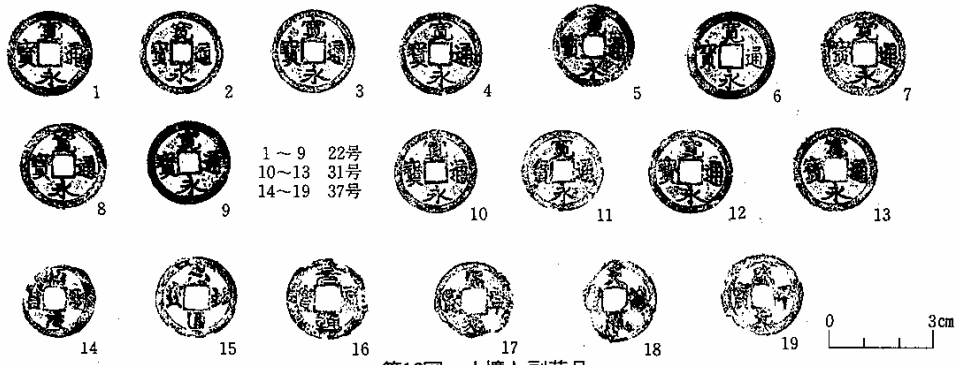
層No	土色	備考	
1	暗褐色土		土壌
2	暗褐色土		
3	黄褐色土		
4	暗褐色土	ロームブロック混り	
5	灰暗褐色土	ロームブロック混り	
6	黄褐色土		
7	褐色土		
8	暗褐色土		
9	暗褐色土		
10	黄褐色土		
11	にぶい黄褐色土		
12	黄褐色土	ローム粒入る	
13	褐灰色土	粘性あり、板の痕跡あり	埋葬部

38号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	黒褐色土		
3	黒色土		土壌
4	にぶい黄褐色土		
5	にぶい黄褐色土	ローム粒を含む	
6	暗灰黄色土	ローム粒を含む、粘性あり	
7	褐灰色土	かたい、粘土が付着、木質部あり	
8	黄褐色土	かたい、棺の痕土	
9	褐色土		21周溝堆積土

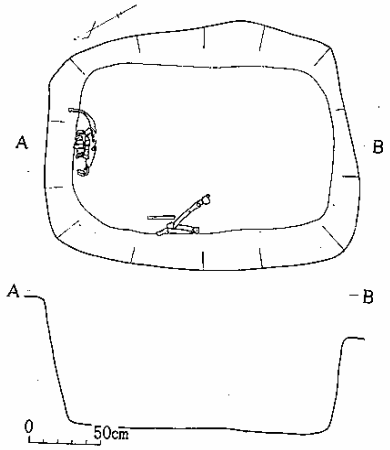
38号土壌副葬品

22、28、30、31、32、36、37、38号土壌平面図・堆積土



1～9　22号
10～13　31号
14～19　37号

第16図　土壌と副葬品



第17図　35号土壙

３．封土がなく地山削り出しによる塚

⑴　周溝のめぐるもの

丘陵頂部南と東斜面北側に位置するもので、遺構はいずれも第Ⅲ層で確認されている。第Ⅲ層から掘り込まれて円形にめぐる溝とそれによって造り出された平坦な台状部からなる。現状で台状部が楕円形の高まりが確認されているものがある（26、29、39 号。）確認した６基とも削平などの周溝は全周しない。このために全体の形態・規模は不明である（ここでは円形周溝と呼称する）。

40 号

６号塚、28 号塚が周溝堆積土を掘り込んでおり、また５号土壙が台状部を切っている。周溝は西側$\frac{2}{3}$が残存しており、円形に巡るものと思われる。規模は溝外周径で南北 7.5mである。溝の上帳は 0.7m～１m、下幅は 0.4～0.7mである。溝底面は平坦でやや斜めに立ち上る。台状部径４mで溝底面からの高さは 15cm である。

遺物は南側の溝中より土師器(坏)赤焼土器(坏)底部と須恵器甕破片が出土している。

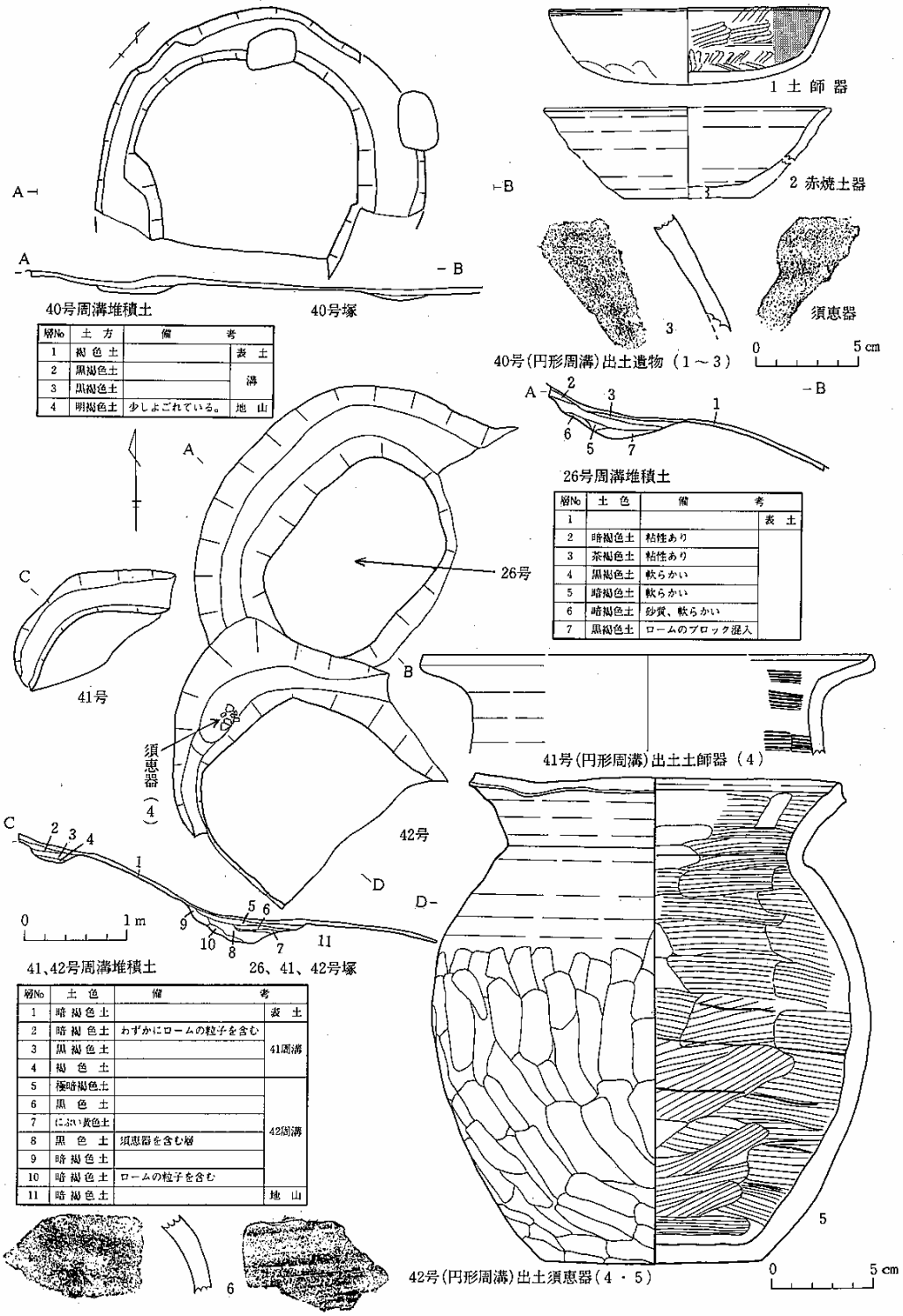
土師器坏

製作にロクロを使用しないものである。平底風の丸底である。口縁部は底部よりやや内弯しながら外傾して立ち上る。外面の器面調整は底部にヘラケズリ、口縁部に横ナデが施され、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

41 号

周溝西側の１部分だけが確認されている。溝の上幅は 0.8m、下幅は 0.5mである。溝の底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。溝底面からの高さは 15cm である。

遺物は溝中より土師器甕が出土している。



層No	土方	備考	
1	褐色土		表土
2	黒褐色土		溝
3	黒褐色土		
4	明褐色土	少しよごれている。	地山

層No	土色	備考	
1			表土
2	暗褐色土	粘性あり	
3	茶褐色土	粘性あり	
4	黒褐色土	軟らかい	
5	暗褐色土	軟らかい	
6	暗褐色土	砂質、軟らかい	
7	黒褐色土	ロームのブロック混入	

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	暗褐色土	わずかにロームの粒子を含む	41周溝
3	黒褐色土		
4	褐色土		
5	極暗褐色土		42周溝
6	黒色土		
7	にぶい黄色土		
8	黒色土	須恵器を含む層	
9	暗褐色土		
10	暗褐色土	ロームの粒子を含む	
11	暗褐色土		地山

第18図　40、41、42、26塚と出土遺物

土師器甕：口縁部～体部にかけての破片である。製作にロクロを使用したもので、口縁部は体部から外傾し、口縁端がつまみ出される。内面にハケ目の痕跡がみられる。

26 号

周溝の北西が残っており、溝の上幅は 1.2～1.6m、下幅は 0.3～0.4mである。周溝で囲まれる台状の部分は平面形が楕円形であり、長軸 4.8m×短軸 3.6m、溝底面からの高さが約 35㎝ である。

42 号

26 号の南側を切っている。周溝は西半分が残っている。溝の上幅は 1.6m、下幅は 0.4～0.8m である。溝底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。溝で囲まれる台状部は平坦で東へやや傾斜する。大きさは南北 4.4mである。溝底面までの深さは 40㎝ である。

遺物は周溝西側底面から須恵器甕と台状部から須恵器甕破片が出土している。

須恵器甕：体部中央にふくらみをもち、頸部が屈曲し口縁部が外反する器形である。最大径は体部中央にあり、器高が体部径より大きい。製作に際しロクロを使用したもので、外面の体部下半と底面にヘラケズリ、内面にヘラナデがみられる。

29 号

周溝は西半分が残っており、溝の上幅は 1.5m、下幅は 0.6mである。底面は丸味をおびゆるやかに立ち上る。台状部の平面形は円形で長軸 4.8m×短軸 4.3mである。溝底面からの高さは 15㎝ である。

39 号

周溝の西側と東側が残っており、溝の上幅は 0.8～１m、下幅は 0.6～0.8mである。底面は「U」字形をしている。周溝で囲まれた台状の部分は楕円形で長軸 4.2m×短軸 3.8mで高さは溝底面から約 40㎝ である。

遺物は溝底面から土師器(坏)、須恵器片(甕)が出土している。

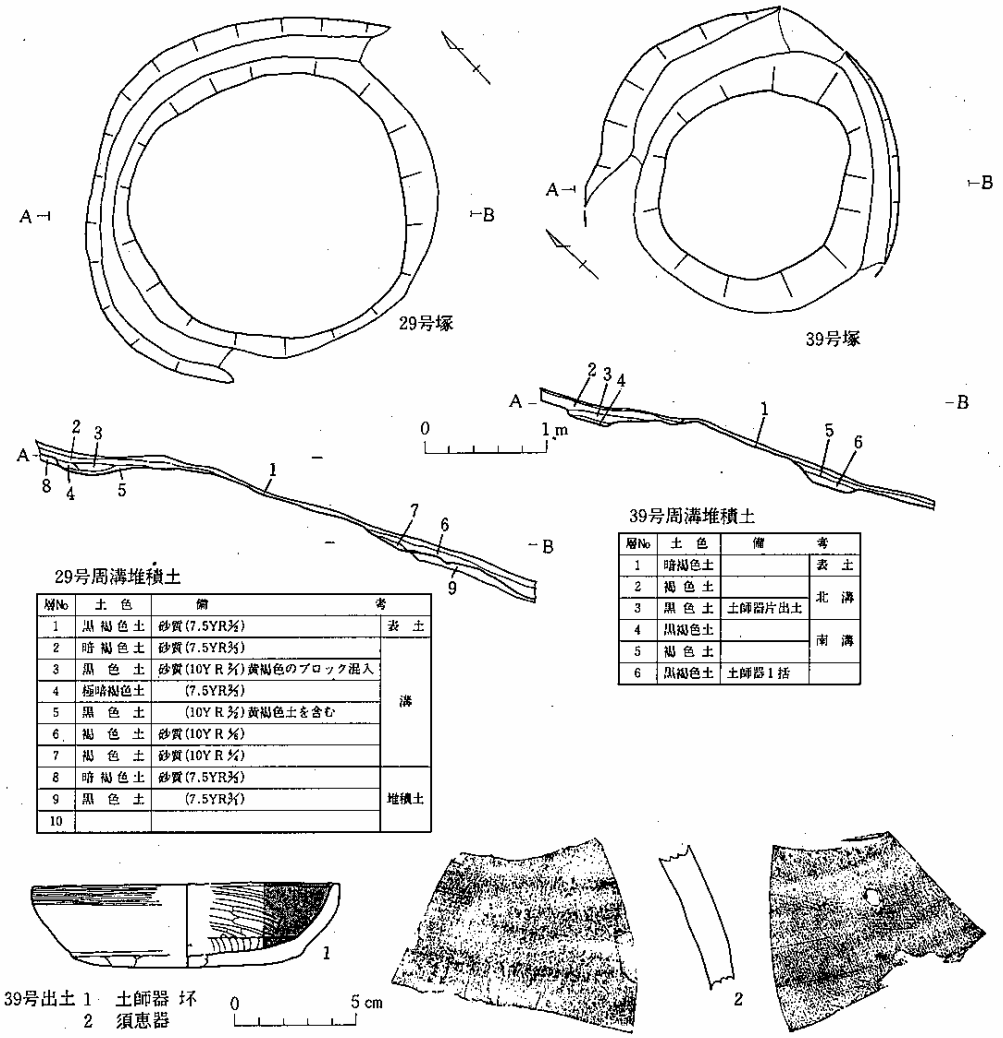
土師器坏：製作にロクロを使用しないものである。底部は丸底で口縁は内弯ぎみに立ち上る外面体部下端に軽い段と内面にも稜がみられる。外面の器面調整は底部全体にヘラケズリ、口縁部にヘラミガキと様ナデが施され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

⑵　地山削り出しのもの

東斜面の上部中央に位置しており、現状での平面形は楕円形の高まりをしている。遺構の確認面は第Ⅲ層であり、第Ⅲ層を削り出して台状部をつくり出しているものである。24 号、25 号とも台状部の平面形は楕円形である(ここでは円形壇と呼称する)。

24 号

30 号土壙が北隅を切っている。台状部は東側にやや傾斜している。大きさは下端で長軸 4.5m



29号周溝堆積土

層No	土色	備考	
1	黒褐色土	砂質(7.5YR3/3)	表土
2	暗褐色土	砂質(7.5YR3/3)	溝
3	黒色土	砂質(10YR 3/1)黄褐色のブロック混入	
4	極暗褐色土	(7.5YR3/3)	
5	黒色土	(10YR 3/2)黄褐色土を含む	
6	褐色土	砂質(10YR 5/6)	
7	褐色土	砂質(10YR 5/4)	
8	暗褐色土	砂質(7.5YR3/3)	堆積土
9	黒色土	(7.5YR3/1)	
10			

39号周溝堆積土

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	褐色土		北溝
3	黒色土	土師器片出土	
4	黒褐色土		南溝
5	褐色土		
6	黒褐色土	土師器1括	

第19図　29号・39号平面・断面と出土遺物

×短軸４m、上端で長軸3.8m×短軸3.4mで高さは10～25cmである。

遺物は立ち上りの部分から土師器(坏)と鉄鏃が出土している。

土師器坏

製作にロクロを使用しないものである。平底風の丸底である。外面体部外端に軽い段と内面にも稜がみられる。外面の器面調整は底部にヘラケズリ、口縁部にミガキと横ナデが施され、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

鉄鏃：銹化のため形がわかるのはなく、のかつぎ（４本）と鏃身先端（２本）の部分が判明している。長頸炎根式と思われる。

鏃身先端部：１は剣形のもので、２は刀身形のものである。

のかつぎ：いずれも鏃身との境には両関がある。３・４は木質部の上に葛糸巻がみられる。５は木質部が残る、６は鉄芯だけであるが、末端にいくにしたがって細くなっている。鏃身部の断面形はいずれも角がいくぶん丸い長方形である。

25 号

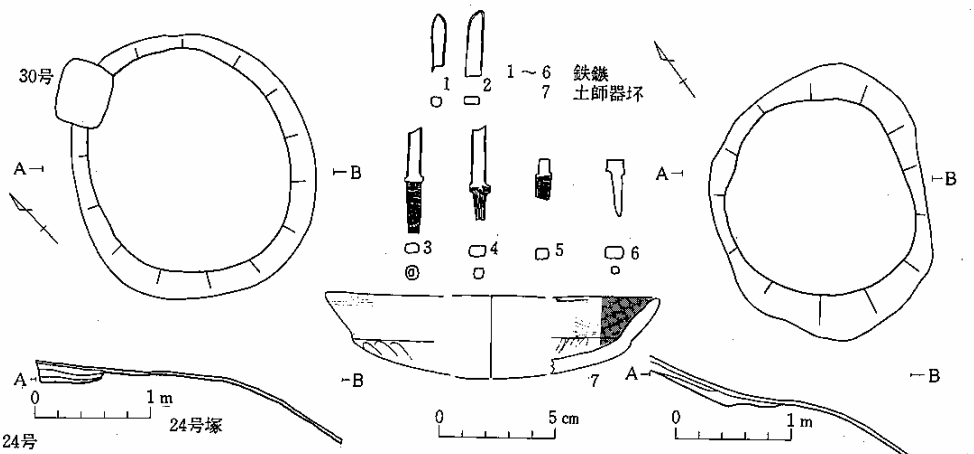
台状部の東側が 26 号の溝によって削平を受けて東西長が短くなっている。大きさは下端で長軸 4.2m×短軸 3.5m、上端で長軸３m×短軸 2.8mである。出土遺物はない。

４．遺構以外の出土遺物

東斜面の１層から須恵器𩰫、壺の破片が出土している。

𩰫：頸部から口縁部である。頸部はやや開いて立ち上がり、口縁部は屈曲して外傾し、口縁中央の稜から「く」字状に外傾して立ち上がる。

壺：体部破片で外面にロクロの後にヘラケズリ、内面にヘラナデの痕跡がみられる。



24号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	暗褐色土	かたくしまっている	
3	黒褐色土	かたくしまっている	
4	極暗褐色土	底部ではロームが多く混入する、2,3層より軟かい	
5	褐色土		地山

25号

層No	土色	備考	
1	暗褐色土		表土
2	暗褐色土	砂質	
3	黒褐色土		

第20図　24号・25号平面図・断面図と24号出土遺物

第20図　東斜面出土須恵器

Ⅳ．遺構と遺物について

１．出土遺物の年代

出土遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、陶器、磁器、鉄鏃、貨幣、キセル、刀子などがある。

土師器：坏と甕が出土している。

坏は製作に際してロクロを使用していないものである。形態、器面調整から次の２種類がみられる。

（Ⅰ類）　形態的には底部が丸底で口縁部が内弯しながら立ち上がり、外面に軽い段と内面に稜がある。器面調整をみると外面は底部にヘラケズリ、口縁部に横ナデが施され、内面はヘラミガキ、黒色処理である（19図－１・20図－８）。

（Ⅱ類）　平底風の丸底で口縁部が底部よりやや内弯して立ち上がる。外面の器面調整は底部全体にヘラケズリ、口縁部に横ナデが施され、内面はヘラミガキ・黒色処理である（18図－１）。

以上のⅠ、Ⅱ類のような器形と器面調整がみられる土師器坏は国分寺下層式（奈良時代）として編年されているものである（阿部・加藤：1980）。

甕は製作に際してロクロを使用したものである。口縁部が頸部より外傾し、口縁端がわずかに上方につまみ出されており、内面に刷毛目が施されている。このような特徴をもつ甕は表杉ノ入式に編年されているものである（阿部・早坂：1980）。

須恵器：甕と𤭯の口縁部の他に甕の体部と横瓶の肩部の破片が出土している。

甕は製作に際し粘土紐積み上げの後にロクロを使用している。調整は外面下半に縦方向のヘラケズリと底部全体にヘラケズリが施されており、内面全体にヘラナデがみられるものである。

器形がほぼ同じで体部外面下半に縦方向のケズリがみられるものが栗駒町の鳥屋ヶ崎１号墳で出土している。(加藤：1972)。また、大和町三角田２号窯出土（甕Ⅰ－１）、鳥屋３号窯出土(甕501）の甕は体部が不明であるが口縁～頸部形態が類似している（加藤：1975）。器形や体部の調整の技法などで、このような特徴をもつものはいずれも８世紀前半～８世紀後半に位置づけられている（加藤:1972、1975）。このことから一応、奈良～平安時代のものと考えられる(18図－５)。

𤭯、は体部を欠損するが、頸が上方で大きく「く」の字状に開く形をしており、このような口縁部の形態は陶邑でⅢ期（７世紀中頃）に位置づけられている𤭯の口縁部に類似している（中村：1970）。また、このような形態は宮城県では岩沼市引込横穴などで出土しており、７世紀前半～後半として位置づけられている（渡辺：1980）。このことから本遺跡の𤭯、については、７世紀前半～後半のものとしておきたい（20図－８）。

赤焼土器：坏であり内外面ともにロクロ調整で底部切り離しは回転糸切りによる。共伴する

遺物はないが、県内各地で表杉ノ入式の土師器に伴って出土しており平安時代と考えられている（阿部・早坂：1980）。本遺跡出土の赤焼土器もほぼ同時期のものと思われる(18図－2)。

陶器：ほぼ完形のものであり、灰釉の茶埦で貫入現象がみられる。時期は元禄頃(1680年頃)のものとされる（東北大学教授－芹沢長介氏の御教示による）(15図－1)。

磁器：器形は小形の埦である。文様は染付による草花文が描かれており、底部には「大明」の文字が見られる。文様はいくぶん異なるが、天狗谷の「B－11」窯出土の小形埦に器形が類似すること「大明」の銘が見られることなどから18世紀中頃のものと思われる(15図－8)。

貨銭：出土した貨銭は中国銭（北宋銭・明銭）・寛永通宝である。貨銭の種類と初鋳年は第7表に示した。

第7表　貨銭出土状況

銭貨名	初鋳年	1号	3号	18号	37号	7号	11号	12号	22号	33号
咸平元寶	北宋 998				1					
祥符元寶	1008		1							
祥符通寶	1008		2							
天禧通寶	1017		2		1					
天聖元寶	1023		1							
景祐元寶	1034		1							
皇宋通寶	1039		11							
至和元寶	1054		1							
至和通寶	1054		1							
治平元寶	1064		1							
熙寧元寶	1068		1		1					
元豐通寶	1078	1	1	1						
元祐通寶	1086		8		2					
紹聖元寶	1094		1		1					
元符通寶	1098	1								
聖宋元寶	1101		1							
大觀通寶	1107						1			
政和通寶	1111		1							
永楽通寶	明 1408		1							
不明			1							
寛永通寶				1		2	12	3	10	4

中国銭北宋銭は咸平通宝（998）から政和通宝（1107）まで、17種類、明銭は永楽通宝(1408)の1種類である。北宋銭の日本への輸入は13世紀初め、永楽銭は16世紀初め頃といわれる(山口：1979)。副葬された古銭の文字をみるとくずれのみられないものと摩滅したものがみられることや同種の貨銭でも大小があることなどから公鋳銭と私鋳銭が混在している可能性がある。

寛永通宝出土した寛永通宝はいずれも銅製であり、裏に背文のないものとあるものがみられる。銅製で裏が無文のものは一般的に寛永13年～万治2年までのもので古寛永と呼ばれ、裏に「文」などの背文がみられるものは寛文3年（1663）～寛保元年（1741）までのもので新寛永と呼ばれるものである（佐藤：1980）。

輸入銭は寛文10年(1670)に使用禁止令が出されるまで流通していたとされているが、中国銭の中には土壙に古寛永通宝と埋葬されているものもあり、17世紀中頃以降まで流通していたものと考えられる。

キセル：出土しているのは「長ギセル」の雁首である。「長ギセル」と称する羅宇の前後に雁

首と吸口がつく煙管が一般化するのはキセルが日本に渡来した慶長年間以後の寛永（1624）～正保（1645）年間とされている。遺存している煙管の中で使用年代のはっきりしている古いものは、寛永13年に伊達政宗の棺に埋葬されたキセルなどが考えられている（伊東：1979）。火葬骨と埋葬されたキセルも火皿が大きく、火皿の継ぎ目に段があること羅宇とのつなぎに縁があることなど形態が類似していることからほぼ寛永年間使用のものであろう。

２．遺構の年代

発見された遺物（第８表）や遺構の切り含い（第９表）などから遺構の年代についてふれてみたい。遺構の中で遺物が出土しているのは19基である。

第８表　遺物の出土状況

	遺構	遺物	
No	塚形態	土壙・溝	盛土
1	方形	北宋銭	
2	円形(火葬)	キセル	須恵器
5	〃 〃	キセル	
7	〃 〃	寛永通宝	
9	〃 〃	キセル	
3	円形(土葬)	北宋銭、刀子・鉄ナベ・漆器	
11	〃 〃	大観通宝・寛永通宝・磁器・漆器	
12	〃 〃	寛永通宝・刀子・鉄ナベ・陶器・漆器	須恵器
16			
17		寛永通宝	
18		北宋銭・寛永通宝	
22	土壙	寛永通宝14	
28		寛永通宝	
31		寛永通宝８	
37		北宋銭６	
32	周溝	土師器（坏）	
40		土師器（坏）、赤焼（坏）	
41		土師器（カメ）	
42		須恵器（カメ）	
24	円形壇	土師器（坏）鉄鏃	

第９表　遺構の重複関係

21号塚	→	38号土壙		
23号塚(土葬)	→	９号塚(火葬)		
40号周溝	→	６号塚(土葬)	→	28号土壙(土葬)
19号塚(土葬)	→	20号塚(土葬)		
26号周溝	→	42号周溝		
24号周溝	→	30号土壙(土葬)		

⑴封土をもつ塚の年代について

方形をした塚の年代

１号塚では土壙の３隅に元豊通宝（初鋳 1078）と元符通宝（初鋳 1098）が計３枚埋葬されていた。輸入された北宋銭の流通期間は13世紀後半～17世紀後半までとされているが、寛永通宝などの出土がないことから、寛永13年以前の可能性があり、構築年代は13世紀後半～17世紀中半と考えられる。21号塚は遺物が出土していないが、溝の堆積土を切って38号土壙が掘られていることから38号土壙より古いといえる。

円形をした塚の年代

火葬墓：７号から寛永通宝、２、５、９号からは長キセルの雁首が出土している。７号出土の寛永通宝は古寛永と呼ばれるものであり1636年以降の鋳造である。２、５、９号出土のキセルの年代は出土例などから寛永年間以降であると考えられる。このことから火葬墓の２、５、７、９号の塚は17世紀の中頃以降に埋葬されたと考えられる。

土葬墓：11号からは18世紀中頃と考えられる磁器が出土しており、12号からは元禄（1680年頃）と考えられる陶器が出土している。このことから11号は18世紀中頃、12号は17世紀後半以

降の年代が与えられる。

３号塚には北宋銭と明銭が埋葬されているが、他に年代を示すものがみられないことから中国銭の流通していた 17 世紀前半頃に埋葬されたものとして考えられる。

17、18 号には古寛永と思われる寛永通宝が埋葬されていることから 1636 年以降に考えられる。

23 号塚は９号塚（火葬）の盛土が 23 号塚の盛土の上に一部分盛ってあることから９号塚より古いことがいえ 17 世紀前半に考えられる。このことから土葬の塚の年代は 17 世紀前半～18 世紀中頃までの塚が考えられ、約 150 の期間にわたって構築されたものと思われる。

⑵封土をもたない塚の年代について

39 号は溝底面より国分寺下層式の坏が出土している。40 号の溝からは国分寺下層式の土師器坏と赤焼土器（坏）、41 号の溝からは表杉ノ入式の土師器甕、42 号の溝底面からは須恵器甕が出土している。以上のことから、39 号は奈良時代に 40 と 42 号は８世紀後半～９世紀、42 号は９世紀以降に構築されたものと考えられる。

24 号の肩からは国分寺下層式の土師器坏が出土していることから奈良時代と考えられる。

⑶土壙の年代について

土壙：22、28、31 号からは古寛永と思われる寛永通宝が出土しているので 1637 年～1662 年以降に構築されたもの、37 号からは北宋銭だけが出土しているので 1670 年頃以降に構築されたものとしておきたい。このことから土壙の年代は 17 世紀後半以降と考えられる。

３．遺構の構築と性格

遺構は 40 基検出され、これらの遺構についてその形状の違いから、１－封土をもつ塚、２－土壙、３－封土をもたないけずり出しによる塚の３種類とした。それぞれについて形態、規模内部施設（埋葬方法）についてまとめ、これらの遺構について出土遺物や他の調査例と比較して性格についてふれてみたい。

⑴遺構の構築について

⒜塚（封土をもつもの）

塚の形態・規模

平面形から方形塚と円形塚がみられる。

方形塚：形態には３段築成のものと墳丘をもち周溝がめぐるものの２種類がある。方形塚と円形塚の大きさは第 10 表にみられるように、方形塚が円形塚よりも長さ、高さでその数値は大きい。方形塚についてみると１号は長さ 13.7×13.5m高さ２ｍで 21 号は長さ 5.1×4.8m、高さ 0.7ｍであり、１号塚が 21 号塚の約 2.5 倍の大きさである。

塚の構築方法をみると、黒色土の上面に黒褐色土や暗褐色土を互層に水平に積み上げて、そ

の後に方形に整形している。方形塚の中でも、１号は土壙を掘り込んだ後にその上にさらに積土を行っている。土壙は積土を掘り込んだ長方形の土壙である。

円形塚：いずれも墳丘状をしている。平面形は楕円形が多い。円形塚の長軸と短軸の長さをみると第10表のようになり、２m以下、２～2.5m、３mの３つの大きさに分かれる。円形の塚は周囲や土壙から掘り上げた褐色土、黒褐色土を土壙の上に１～２枚盛り上げて塚を築いている。

内部施設（土壙）

円形塚はいずれも土壙を伴うものである。土壙の掘り込み面や形態をみると、第Ⅱ層から掘り込まれており、円形（楕円形）・長方形の２種類がある。

埋葬方法

円形塚の土壙内の状況をみると、堆積土内に火葬骨がみられるもの、土壙の底面などに棺の底板の痕跡がみられるもの、または棺を埋葬した痕跡が認められるものなどがある。

火葬骨がみられる２号・４号・10号の土壙についてみると、納骨施設の痕跡がみられ、その中に骨片が埋葬されている。他の３基は堆積土中に骨片がまとまってみられる。この中で２・10号は骨片の周辺に腐植した木質部がみられるが４号は遺存物はみられない。このことから、2号と10号には(木製容器)を用いて埋めたもので他は腐植しやすいもの(布袋)などに堆葬したものと思われる。2号･4号の容器は径30㎝で､10号の容器は径20㎝である。高さについては不明である。

棺を埋葬したと考えられる土壙には円形（３基）と長方形（７基）のものがある。円形土壙は周囲の堆積土がほぼ水平の埋まり方をして中央が周囲の埋土と土色が異なって円形に落ち込んでいるものや円形に一部空洞になっているものがみられる。このことから丸い桶状のものを埋葬したものと思われる。長方形のものは底面に長方形の窪みや板状のものが検出されたことから箱形のものを埋葬したものと思われる。この中で18号は長方形の土壙であるが内部の中央の堆積土は円形の落ち込みを示しており、長方形の土壙の中に桶状の棺を埋葬した掘り方の痕跡を残したものといえる。

土壙の規模

火葬骨を埋葬した掘り方は円形（３基）楕円形（４基）のものがみられ、大きさは径0.4～１m、深さは10～35㎝である。

棺を埋葬した土壙は、円形のものは径1.1～1.4mで深さは0.7～1.3mである。長方形のものは大きさが長軸１～1.5m、短軸0.6～１mで深さは0.5～1.3mである。深さが0.6～0.8mのものが多い。

⑹封土がなく削り出しによる塚

周溝のめぐるもの

第10表　封土をもつ塚計測表

No	種別	塚			土壙			埋葬施設			遺物	備考
		形態	長軸×短軸	高さ	形態	長軸×短軸	深さ	形態	長軸×短軸		土壙　塚	
1		方形(3段築成)東辺に張り出しあり	13.7×13.5	1.4～2	長方形	3.6×3.3	0.5				北宋銭(3)	
21		長方形(配石あり)	5.1× 4.8	0.7								周溝1.2～1.5 深さ 0.2
2	火葬墓	円形	2.5× 2.5	0.6	円形	1 × 1	0.1	(円形)	(0.3)	(0.04)	(キセル、骨) 須恵器	
4	〃	楕円形	2.2× 1.4	0.3	〃	0.4×0.4	0.16	(円形)	(0.3)	(0.16)	骨	
5	〃	〃	1.8× 1.5	0.3	楕円形	0.5×0.4	0.1				キセル、骨	
7	〃	〃	1.8× 1.5	0.3	〃	0.8×0.5	0.2				寛永通宝(2)、骨	
9	〃	〃	1.8× 1.5	0.15	円形	0.4 ×0.4	0.35				キセル、骨	
10	〃	〃	1.7× 1.5	0.3	楕円形	0.7×0.6	0.3	(円形)	(0.2)	(0.25)	(骨)	
34	〃	〃	(1.7×1.7)	0.2	〃	0.45×0.35	0.2				骨	
3	土葬墓	〃	1.7× 1.4	0.25	長方形	1.5×0.8		(箱棺)			北宋銭、明銭、刀子 歯、鉄ナベ、漆器	
6	〃	〃	1.8× 1.4	0.3	〃	1 ×0.7	0.46					
11	〃	〃	1.8× 1.5	0.1	〃	1.4×1.1	1.1				大観通宝、寛永通宝 銭貨、漆器	
12	〃	〃	1.8× 1.6	0.1	〃	1.4×0.9	0.5	(箱棺)			寛永通宝、鉄ナベ 銭貨、漆器	
13	〃	〃	2.4× 1.9	0.3	円形	1.4	0.75	(樋棺)	(55)	(60)		
16	〃	?	2 ×0.25	0.25	長方形	1 ×0.7	0.6	(箱棺)	(50×40)			
17	〃	楕円形	2.5× 2.2	0.4	〃	1.6×1.2					寛永通宝	
18	〃	?	3.3× 3	0.7	〃	1.4× 1		(樋棺)	(65×60)		北宋銭、寛永通宝	
19	〃	?	2.5× 2.1	0.25	円形	1.5	1.3	(樋棺)	(60×1.3)			
20	〃	?	2.1× 1.8	0.7	〃	1.1	0.7	(樋棺)	(60)	(70)		
23	〃	?	1.8× 1.5	0.2	長方形	1.1×0.7	0.6				骨	

第11表　土壙計測表

No	形態	土壙		出土遺物
		長軸×短軸	深さ	
22	長方形	1.6×1 (棺台0.65×0.5)	0.9 (0.4)	寛永通宝 (14)
28	〃	1.15×0.75	0.6	寛永通宝
30	〃	1.1 ×0.9	0.2	
31	〃	1.4 ×1.1	0.6	寛永通宝、歯
32	〃	1.2 ×0.65	0.72	
36	〃	1 ×0.8	0.25	
37	〃	1.8 ×0.9	0.95	宋銭 (6)
38	〃	1.25×0.8	0.55	鉄片
35		2.1 ×1.7	0.9	

第12表　封土をもたない塚

No	形態	台状部		周溝幅	出土遺物	
		長軸×短軸	高さ		台状部	周溝
26	円形周溝	4.8 × 3.6	0.35	1.2 ～ 1.6		
29	〃	5.5 × 5	0.15	1.5		
39	〃	4.2 × 3.8	0.4	0.8 ～ 1		土師器坏 須恵器破片
40	〃	4	1.5	0.7 ～ 1		土師器・赤焼土器坏 須恵器甕破片
41	〃		1.5	0.8		須恵器甕
42	〃	4.4 × 3.2	4.0	1.6	須恵器破片	須恵器甕
24	円形壇	4.5× 4	0.1～0.26		土師器坏、鉄鏃	
25		3 × 2.5	0.2			

形態・規模：第Ⅲ層を円形状に溝を掘り込んだものであるが、全周するものはなく本来の形態・規模は不明である。

溝：溝幅はそれぞれ異なるが0.7～１mのもの（39・40・41号）と、1.2～1.6mのもの（26・29・42号）がみられ、深さは一定せず、15～40cm である。溝底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。

周溝のめぐらないもの

形態、規模：第Ⅲ層を円形状にけずり出して壇状にしているものである。規模は長軸4.5m×短軸4.7m（24号）と長軸３m×短軸2.5m（25号）で、壇の高さは0.2～0.3mである。壇の上面はやや丸味をおびている。

(C)土　壙

埋葬方法

土壙内の状況をみると22号は底面が長方形状に窪んでおり、他の土壙の底面は平坦である。底面が平坦なものの中で28、31、37、38号は底面から棺の底板の痕跡がみられ、32、36号は床面に粘性のある青灰色土が堆積し釘などが出土している。堆積土や底面の状況から箱形のものを埋葬したものと思われる。

形態・規模

平面形はすべて長方形である。規模は長軸1.6～1.8m×短軸0.9×１mで、深さ0.6～１mのものと、長軸１～1.4m×短軸0.65～0.8mで深さ0.25～0.7mの２種類がみられる。

⑵遺構の形態について

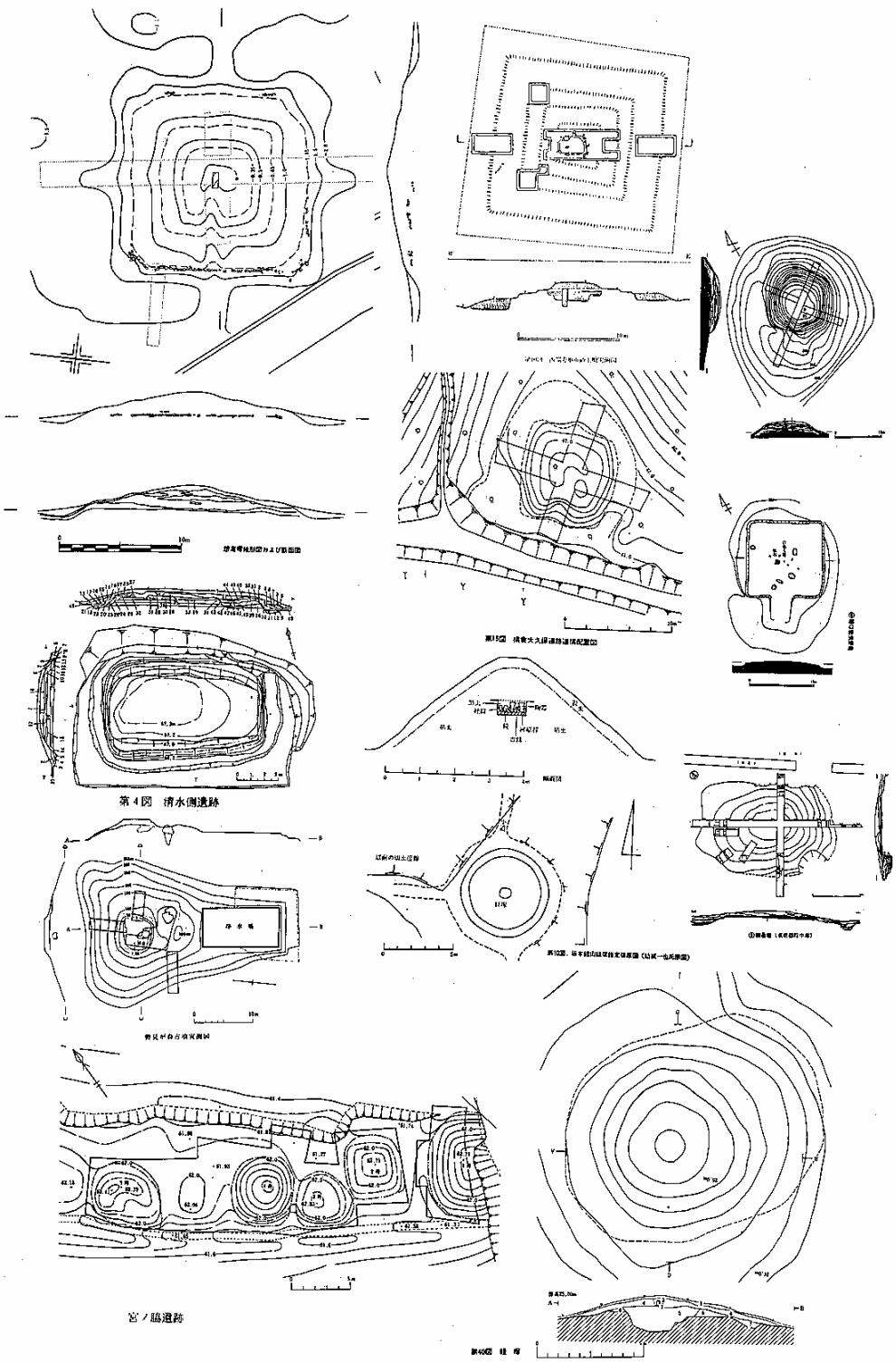
このように40基の遺構の中で塚と土壙については形態と内部施設から次のような種類に分かれた。

封土をもつ塚はその平面形から方形塚(Ａ－１)と円形塚(Ａ－２)にわけることができる。これらはさらに形態、内部施設の違いなどから、方形塚は３段築成で内部に土壙のあるもの(Ａ－１－ａ）と周溝が巡るもの（Ａ－１－ｂ）に分かれる。円形塚はいずれも下部に土壙を伴なうものであり土壙内に火葬骨を埋葬したもの（Ａ－２－ａ）と棺を埋葬した痕跡をもつもの（Ａ－２－ｂ）がみられた。(Ａ－２－ａ）としたものの土壙の堆積土中には容器を用いて堆葬しているも（ｉ）と、そのまま埋葬しているもの（ii）の２種類がみられた。(Ａ－２－ｂ）としたものの土壙には円形と長方形のものがみられ、桶棺と箱棺が埋葬されている。

土壙はいずれも棺を埋葬したもので、土壙の形態には円形と長方形のものがある。

第13表　遺構の形態

封土のある A 塚 1	方形塚	a　3段築成で土壙有		
		b　周溝がめぐり土壙無		
2	円形塚	a　火　葬（土壙有）	Ⅰ	容器のあるもの
			Ⅱ	容器不明のもの
		b　土　葬（土壙有）	Ⅰ	樋　棺
			Ⅱ	箱　棺
B　土　壙		a土葬(土壙有)	Ⅰ	箱棺
C封土のない塚	周　溝			



第21図　各地区の塚平面図

⑶遺構の性格について

県内において中世～近世にかけて構築された塚の調査例としては、

① 宮城町想海塚
② 古川市清水側１号塚
③ 角田市大久保遺跡
④ 高清水町宮ノ脇遺跡
⑤ 金成町七ツ森遺跡
⑥ 大郷町勢見ヶ森遺跡
⑦ 白石市権現山遺跡
⑧ 三本木館山経塚
⑨ 豊里町沼崎山経塚

などが知られている。これらの塚の形態に類似するものが、他の県などにもみられ、県内で調査されている９例に加えてその性格についてどのように考えているかふれてみたい。

方形塚について

（方形塚の調査例）

１号塚は積土の途中に掘り込んだ長方形の土壙の隅に、北宋銭が埋められた後にさらに積土を行ない３段の方形の土壇としているもので、21 号は周囲に溝がめぐり積土の上面に集石が認められ、いずれも中世末～近世にかけて構築されたものと考えた。

１号塚のような３段築成の例としては、宮城町想海塚が知られるが、この他に岩手県北上市十三菩堤遺跡の東・西端の方形重層方壇がみられる。想海塚は一基だけ立地しており、内部に土壙は認められないものである。構築年代は宋銭が出土していることから鎌倉中期～室町時代のものとし、性格は宗教的な築壇としている（志間 : 1973）。十三菩堤塚の遺構は２基とも一辺約 16～17mの４段築成のものであり、この２基の間に 13 基の楕円形の塚が並ぶ。西端の重層方壇では積土の上部から川原石と小石を環状にめぐらした中から、火葬人骨が検出され、土壇積土断面にピットの痕跡がみられる。このことからこの土壇は柱を建てた後に土壇を構築し、人骨を埋葬したものであり、性格としては、修法壇として構築した後に火葬墓としたと考えている（板橋・佐々木 : 1970）。

また、地域が離れているが中世の遺物を出土した段をもつ方形塚の例としては、東京都府中市西府町の御岳塚や神奈川県横浜市富岡の堀口修法壇がある。御岳塚は３段の塚で２段目の積土の中央がやや窪んで中世陶器を出す面と近世の遺物を出土する上段の面からなる。性格としては中世に築造された修法壇の上部にさらに土を盛って近世の御岳山信仰の塚として信仰されたものと考えられている（坂詰 : 1980）。堀口修法壇は南側に通路状の張り出しのある三段の塚

で、積土下の基底部中央付近で１ｍの範囲で敷石と白色土層が検出された。性格としては中央に護摩壇が付設されていたとしている（坂詰：1980）。

１号塚では骨片や埋経などの痕跡は総出されなかったことから、火葬墓や経塚の例にあてはまらないと思われる。形態としては想海塚や御岳塚や堀口遺跡の修法壇とされるものに類似するものと思われる。

21 号塚のように周囲に溝がめぐり、積土の上面に集石が認められる例は古川市清水側遺跡、岩手県北上市口内町宝積古墓群２号墳、岩手県紫波町墳館３号墳などがある。いずれも上面の礫の下に火葬骨が埋葬されたピットがあったことから、火葬骨を埋葬した塚と考えている。この中で宝積古墓２号墳は封土中で北宋銭、明銭が出土しており、墳館３号墳も封土中から北宋銭が出土していることで中世～近世の火葬墓としている（菊地：1970、岩手県教委 1970）。

また、周溝だけがめぐる例としては角田市横倉大久保遺跡の塚がみられる。大久保遺跡では塚の下部中央の土壙中から、火葬骨・炭化米塊・北宋銭が出土しており中世以降の火葬骨を埋葬した塚としている（宮城県教委：1977）

溝はないが、塚の形態が 21 号と類似している例としては高清水町宮ノ脇遺跡（Ｂグループ）白石市権現山遺跡、岩手県和賀町福田蝦夷森塚などがある。宮ノ脇遺跡では塚が５基調査され土壙を内部主体とするＡグループの塚（火葬の後に土壙の上に盛り土を行なった可能性があるものー２、３号塚）と施設をもたないＢグループの塚（４、５号塚）が検出された。Ｂグループの塚についてもＡグループの塚と同じ火葬の後に盛土を行なったものと考えており、Ａグループの構築年代は土壙中から火を受けた宋銭が出土したことからＢグループも同様に中世末～近世初頭としている（土岐山：1980）。福田蝦夷森塚は塚の基底部に東西方向に小形の礫を一列に組んでおり、遺物の出土はないが石組遺構が認められること、周辺に火葬墓があることなどで中世以陵の経塚か火葬墓としている（地：1977）。権現山遺跡は十三塚に類する遺構としているが、その年代は不明としている（森：1980）。

この他に塚をもつものとしては三本木町館山経塚、豊里町沼崎山経塚の調査例があり、いずれも塚頂部から経筒が出土していることで中世の経塚としている。沼崎山経塚では長方形の塚の周囲に方形にめぐる周溝が確認されたが塚との関係については不明としている（遊佐:1979）。

また、山形県川西町下小松の中世の火葬墓群では径 5.6～17ｍの円形の墳丘をもち周湟が認められるものがみられたが、塚中には何らの出土遺物も認められない例もある（川崎：1976）。

このような例から 21 号塚は、塚の構築からみて大久保遺跡や宮ノ脇の塚のＡグループの土壙をもつような遺構としては考えにくく、形態的に清水側遺跡の塚や他の遺跡の墳丘をもつ火葬墳墓や経塚に類似した塚と考えられる。埋葬品は、攪乱孔によって、火葬骨、経筒、古銭を頂部に埋葬するようなピットが失われたことも考えられる。

（方形塚の性格についての見解）

このような中世～近世にかけてのほとんど遺物を含まない塚については堀一郎・大場磐雄などによって考えが示されている。

大場磐雄は中世～近世にかけての、これらの歴史時代の塚を古墳との異いからその立地、形態、構築方法などからその特徴について、次の５点をあげその区別をしている（大場：1971）

⑴　群集せず、単独に存する。

⑵　形状は円形または方形で壇状に築くものもある。

⑶　封土は黒色土壙のみから成るものが多い。

⑷　各種の伝説や民俗が結びついている。

⑸　遺物はほとんどない。まれに仏具や人骨が発見されている。

さらに、中世～近世にかけて土壇や塚を築くものとしては大峰山や金峯山などの修験道の山岳修行の行場にみられる「経塚」や「塚」などをあげ、このような「塚」については「修験者自身の修行の他に、地霊などを鎮める修法の遺跡」とした。⑴～⑸のような特徴をもつ中世～近世にかけて構築された塚についてもこのような修験道の塚と関係づけて、これに類似した行法の場と考え「各地区に分布する十三塚・行人塚・山伏塚と称する遺構の中には、中世～近世初頭にかけて全国各地を遊行した修験者が、人々の要求にこたえて修法を行なった行場（修法壇や自埋葬の跡）も考えられる」とした。

堀一郎はまた「近世初頭からみられる三山塚・富士塚・浅間塚と呼ばれるものは、三山講・富士講、浅間講など講に関係した土地に祭壇として塚を築くこともあった」としている。

このような塚と修験道との関係について宮家準一は、「中世末～近世に入ると修験者は地域社会に定住し、自分の居住近くの山岳で修行を行うようになっていき、しだいにその地域社会に定住した各末派の修験者は村人の依頼にこたえて鎮守の別当や仏寺の住職になっていくことが多かった。こうして修験者は鎮守の祭り、種々の祈禱や庶民の要求にこたえて村々で修法を行った。」としている（宮家：1979）

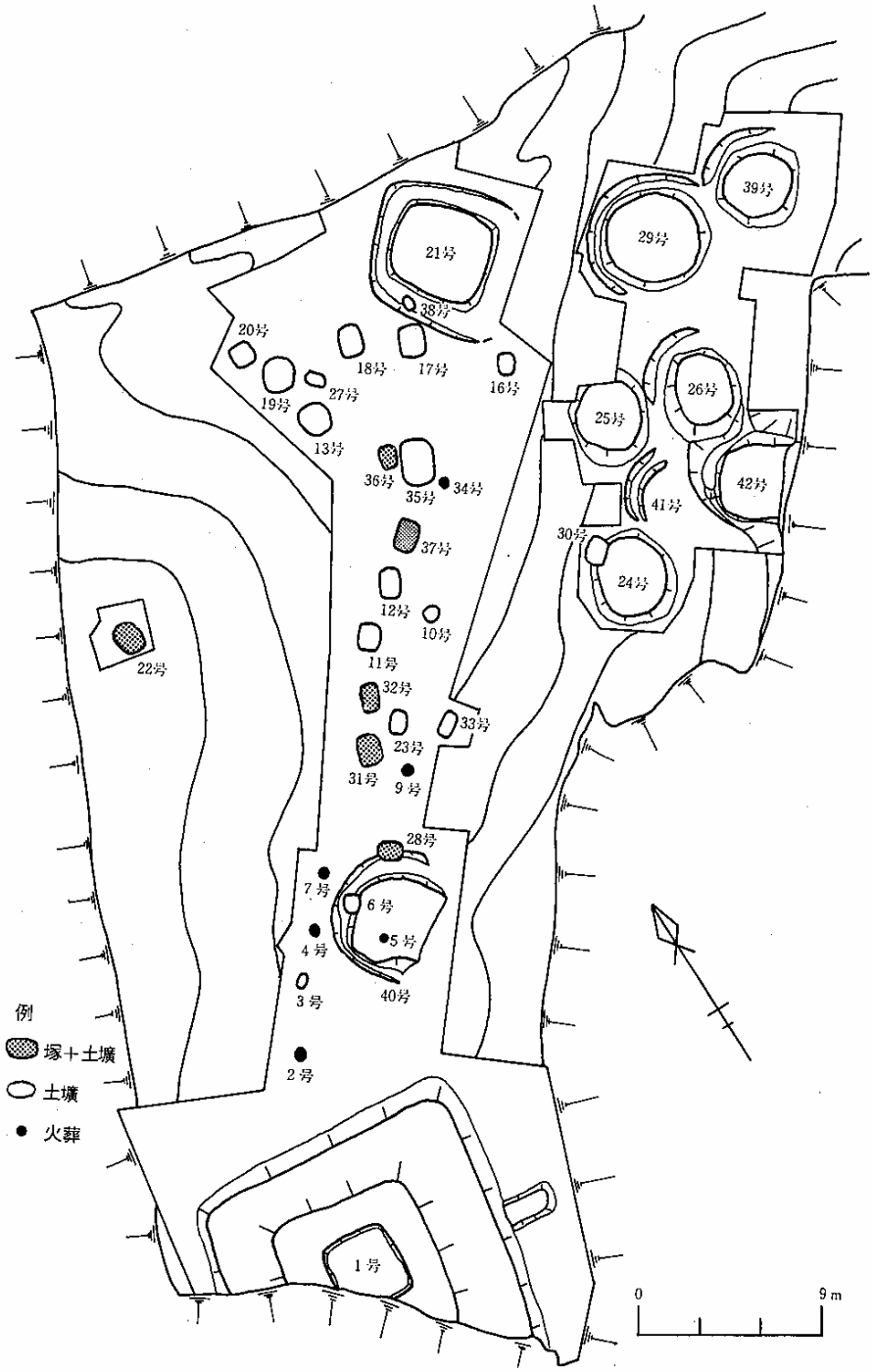
また塚の性格については関東地区で最近の調査例から、白石竹雄・水村老行・鈴木道之助などによってその性格について考え方が示されている（第14表）

白石竹雄は千葉県北総地区（千葉ニュータウン計画地内）の塚の調査例と総括し形態および出土遺物などから、塚の構築上限を室町期とし塚を２種に大別している（白石：1945）。

①　民間信仰にかかわるもの－富士塚・三山塚・庚申塚・二十三夜塚

②　行人または道者の修行場または祭場、入定塚にかかわるもの－行人塚・山伏塚・念仏塚法印塚

としている。



第22図　日光山遺構分布図

水村孝行は埼玉県の塚の調査例などから

① 文献と伝承から館跡と関係する旗塚

② 民間信仰

の２種類が考えられるとし、さらに白石の見解をうけて、③行人または道者の修行場または祭場としての場の可能性をあげている（水村：1979）

鈴木道之助は茨城県の塚の調査例から、いくつかの塚群が古い道路沿に並び、またこれらの塚が寺の周縁にあることから塚・道路・寺との関係が考えられるとしている。

（塚の性格）

本遺跡の１号と 21 号は大場磐雄の分類によると１号は⑴・⑵・⑶・⑸にあてはまり、21 号は⑴・⑵・⑶にあてはまると考えられる。性格については遺構が中世～近世である可能性があり、１号のような階段状の通路がある塚は伝承もないこと、群集していないことなどから、旗塚・十三塚・境塚とは考えにくく、中世末～近世初にかけて修験者が行法に際して使用した壇に近い性格をもつものと考えられる。また 21 号塚も同様の性格と考えられる。

以上のことから方形塚の中の１号塚は、土壙の出土遺物や他の遺構の例などから中世末～近世にかけてのもので土壙の中に鎮壇のために宋銭を供献用として埋め、壇上で何らかの祭祀的なこと（修験者の行法）を行ったものと考えられる。また、21 号塚は 38 号土壙より古い（17 世紀前半の可能性があり）ことや他の塚の調査例などから中世末～近世初めのもので行人（修験者）に関係した塚か火葬墓の可能性がある。

第14表　塚の性格と名称

番号	性　　格	塚の名称
①	修法遺跡	経塚（塚）
②	行人・道者の修行場・祭場・入定跡	行人塚・念仏塚・法印塚・入定塚
③	文献と伝承から館跡と関係するもの	旗塚・首塚
④	道路と寺に関係するもの	
⑤	民間信仰	浅間塚・富士塚・三山塚・狐塚・庚申塚・二十三夜塚・十三塚
⑥	境　塚	十三塚

円形塚について

いずれも円形（楕円形）や長方形をした土壙を伴う塚である。これらは土壙中に火葬骨を伴うグループと棺の痕跡と思われるもの（板状の木質部、底面の長方形の窪み、埋土に円形の落ち込みなど）を伴うグループの２種類がみられた。前者からは火を受けた痕跡のあるキセルや寛永通宝などが出土しており、後者からは歯・人骨の一部の他に貨幣・刀子・装飾品などが出土している。このことから、いずれも墓壙として考えられ、前者は火葬墓、後者は土葬墓と考えることができる。

火葬墓　火葬墓は丘陵の南側にみられるものである。基本的には土壙を掘り火葬骨を埋葬し、その上に土壙から掘り上げた土や周囲の土をよせて盛り上げているものである。塚の平面形は

楕円形で、内部にみられる土壙は円形や楕円形をしている。

火葬骨の出土状況から埋葬の際に何らかの容器に入れて埋葬したもの（２、４、10）と土壙に直接埋葬したもの（５、７、９、34 号）がみられる。容器については布袋や木製容器が考えられる。

火葬墓の年代はキセル、寛永通宝が出土しており、寛永通宝の初鋳年が 1636 年であることから、17 世紀中頃以降のものとした。

遺物の出土していない火葬墓については塚の大きさや、土壙の大きさ、埋葬方法が類似していることから遺物の出土しているものとほぼ同様の年代が考えられる。

これまで県内において火葬骨を伴なう調査例としては、

① 蔵王町　小山田遺跡　（土壙－平安）　二次埋葬
② 角田市　中平遺跡　（土壙－平安）　二次埋葬
③ 名取市　宇ヶ崎遺跡　（土壙－平安以降）　茶毘　？
④ 白石市　谷津川遺跡　（土壙－中世）　茶毘　？
⑤ 角田市　大久保遺跡　（土壙－中世）　茶毘　？
⑥ 古川市　清水側１号塚　（ピット－中世？）　二次埋葬
⑦ 蔵王町　持長地Ⅳ－Ｇ　（焼土－中世）　茶毘　？
⑧ 大河原町　葉坂戸ノ内第１焼土、第３焼土遺構　（土壙－？）　茶毘？
⑨ 利府町　菅谷道安寺横穴群　（横穴再利用－中世）　二次埋葬

などが知られている。この中で、③、④、⑤、⑦、⑧は土壙中に焼面や焼土がみられることから、茶毘所の可能性もある遺構である。また、①、②、⑥は火葬骨を茶毘所とは別の場所に埋葬したもので、二次埋葬の例と考えられている。これらの遺跡はいずれも平安時代～中世と考えられているものであり、本遺跡のような近世の火葬墓の報告例はみられない。

火葬の場合は大きくわけて「茶毘所（火葬場）で火葬した後に骨を拾集して別の場所に埋葬する」ものと「茶毘所と埋葬場所が同一である」ものが考えられている（斎藤：1978）。本遺跡の場合は土壙に焼けた痕跡がみられないこと、盛土や土壙の堆積土の中に焼土や木炭片などがみられ、さらに、副葬品されたキセル、貨幣が火を受けていることから別の場所で火葬を行なった後にここに葬った二次埋葬の場所と考えられる。

土葬墓　長方形、楕円形、円形の墓壙を掘って棺を埋葬して土を寄せて盛っている。長方形の土壙底面には板状の木質部や長方形に窪むもの、粘性の堆積土があり副葬品を伴うものなどがみられる。また、円形土壙には堆積土の中央が円形に空洞、もしくは円形の黒色土の堆積土状況がみられる。このことから、土壙は棺桶を埋葬するための掘り方であり、埋葬には箱棺と桶棺の区別があったことが認められ、箱棺が多く用いられているといえる。

土葬墓の年代は、12 号には元禄頃の陶器茶埦が出土していることから 17 世紀初めに考えられる。３号については中国銭が出土していることで近世の初頭としたが、土壙、塚の形態が類似していることや 18 号から宋銭と寛永通宝が同時に埋葬されていることなどから、寛永年間でも 18 号とほぼ近い年代と考えることができる。11 号からは 18 世紀中頃の染付小形埦が出土していることから、これが最も新しい時期と考えられる。埋葬品のない塚についても、塚の形態や土壙の形態の類似から 17 世紀～18 世紀中頃の年代と考えることができる。

火葬墓と土葬墓の年代についてみると、火葬墓（９号）が土葬墓（23 号）を切って構築されている例がみられることや、火葬墓と土葬墓の出土遺物からみてさほど年代差はないものと思われ、ほぼ同じ時期に２種類の埋葬方法が行なわれたものと思われる。

封土をもたない塚について

周溝のめぐるものは６基確認されているが、削平のため全体の形がわかるものはない。この中で 40 号は残存状況から円形にめぐる可能性がある。年代については 39、40、41、42 号の溝底面や台状部から土師器坏、甕、須恵器甕、赤焼土器などが出土しており、奈良時代～平安時代初頭とすることができる。周溝がめぐる例としては、時代は異なるが古墳時代のものが宮前遺跡、西野田遺跡、鶴ノ丸遺跡で、平安時代のものが岩手県紫波町湯沢Ｂ遺跡で、中世のものが観音沢遺跡で確認されているが、いずれも性格については不明としている。

削り出しのものは２基であり、24 号の壇の肩部から土師器坏が出土しており奈良時代と考えられる。東斜面に構築され、周溝がめぐるものとほぼ近い年代の遺物が 25 号の肩部から出土していることから、さほど時代は変らないと思われる。この時期に丘陵斜面に地山を削り出す円形状の塚を築く例はみられない。

奈良～平安時代にかけては本遺跡の立地する同丘陵上にはやや離れてはいるが、円墳や横穴古墳などの埋葬関係の遺跡、中世～近世に入っても経塚や塚が分布している。このことから古代に属すると考えた周溝や削り出しによる塚もこの埋葬に関係する遺構群の１タイプに入る可能性も考えられる。

土壙について

土壙はいずれも長方形をしたものであり、土壙の底面から棺の木質部や歯、人骨、寛永通宝宋銭、鉄ナベ、刀子などが出土しており墓壙と考えられる。埋葬品、土壙の大きさなどから塚Ａ－２タイプの土壙と共通することや、土壙の堆積土の中央が上から落ち込んでいることなどから本来は土壙の上に盛土（塚）を伴っていたことも考えられる。このことから、塚Ａ－２－ｂタイプの塚が失なわれた可能性がある。このことから埋葬品のない土壙については、形態の類似から 17～18 世紀頃のものと考えられる。

土壙の長さ、深さなどからこれ等の土壙は座棺を埋葬した可能性があり塚Ａ－２－ｂ類の土

壙と同様の土葬墓と考えられる。

このような盛土が削平されたと考えられる近世の墓壙の例には蔵王町塩沢北遺跡・名取市宮下遺跡・高清水町宮ノ脇遺跡・古川市宮沢遺跡（川熊地区）・色麻町上新田遺跡などで報告されており、座棺が多く用いられていたと考えられる。

４．遺跡の性格について

本遺跡に関する文献、伝承はみられないが、遺跡の北側の開田の際にも塚があったといわれており、この地域に塚があったことはすでに知られていたようである。

このように遺跡の北側の削平された丘陵上にも今回調査されたものに類似した塚が築かれていたことが考えられ、もともと、塚の数は多く、遺跡の範囲は広かったものと考えられる。しかし、何の塚であるかの認識はなかったようである。

また、西側の沢をはさんだ丘陵上には観音堂小塚群、東側の谷をはさんだ丘陵上には日光山小塚群がみられることから、周辺にも同様の塚群が分布しているものと考えられる。

これまで、各遺構について年代、性格について考えてみた。この結果、封土をもつ円形塚と土壙は内部に埋葬施設がみられることで江戸時代初～中頃の墓と考えられた。封土をもつ方形塚については塚の形態、施設などの違いから円形塚（墓）と異なり江戸時代以前の塚（修法関係の塚や経塚）と推定された。封土をもたない塚は奈良時代～平安時代の遺構であり、その性格は明確でないが、埋葬関係の遺構の可能性も考えられた。

被葬者については２号塚に埋葬されている火葬骨が男性（成人）のものと推定された。しかし、他の火葬骨については成人であることは判明したが、性別は不明であった。土葬墓については、土壙中に歯が残るだけであり、性別の確認はできなかった。（附参照）土葬墓を含めてこれらの墓は江戸時代中頃までの近在の人々の墓と考えることができる。

このことから、遺構として古代・中世末～江戸中期までのものがみられ、本遺跡の性格は古代には埋葬関係、中世末～近世中期には修法・埋葬（墓）関係の遺跡と考えられる。

㊟
第21図各地区の塚の平面図については下記により転載をした。
想海塚－「宮城町想海塚発掘報告」
清水側－「清水側遺跡」
宮ノ脇－「宮ノ脇遺跡」
勢見ケ森－「宮城県黒川郡大郷町古墳発掘調査報告」
十三菩提塚－「北上市史」第２巻
横倉大久保－「横倉大久保遺跡」
坂本館山経塚－「宮城県の経塚について」
沼崎山経塚「沼崎山遺跡」
堀口修法壇・御丘塚「図録・歴史考古学の基礎知識」

V　まとめ

遺跡は大和町北目大崎の標高40mの丘陵上に立地しており、方形塚、円形塚（火葬墓、土葬墓）、封土をもたない塚、土壙（土葬墓）、などの遺構が検出された。

出土遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、鉄鏃、中国銭（北宋銭、明銭）、寛永通宝、陶器、磁器、鉄ナベ、刀子、キセル、漆器などが出土している。

出土遺物から本遺跡の遺構の年代をみると、封土をもたない塚は奈良～平安時代、方形塚は中世末、円形塚（火葬墓、土葬墓）・土壙は近世初期（1636年）以降のものである。

土葬墓と火葬墓の関係については、遺構の切り合いなどから火葬墓と土葬墓は約150年の間に構築されたことが考えられる。

火葬墓は火葬骨の埋葬状況から、埋葬の際に曲物や布袋などの容器に入れたものと考えられる。盛土や土壙の堆積土中から焼土や木炭片がみられることから、別の場所で火葬を行なった後に、ここに葬った二次埋葬である。被葬者はいずれも成人であり、第２号墓の火葬骨は男子であった。

土葬墓には土壙の上に盛土がみられるものと、塚の失なわれた可能性のあるものがみられ、土壙内をみると堆積土の落ち込み状況や、棺の木質部の残りから桶棺、箱棺の二種類が使用された。

奈良時代から平安時代の封土をもたない塚は東斜面に築かれており、埋葬関係の施設の可能性があると考えられる。中世～近世にかけては北と南の端に、方形塚が構築されており、これらは修法壇や経塚、火葬墓に類するものである。17世紀中頃～18世紀中頃には火葬墓と土葬墓がつくられ、丘陵頂部全体が墓域として利用されている。

引 用 参 考 文 献

阿部博志・加藤道男（1980）：「観音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ『宮城県文化財調査報告書』第67章　宮城県教育委員会

阿部　　恵（1980）：「宇ヶ崎貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第67集　宮城県教育委員会

阿部恵・早坂春一（1980）：「西手取・手取遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会

伊藤　玄三（1950）：「宮城県小山田の火葬墓」『考古学雑誌』45―4日本考古学会

伊東　信雄（1979）：瑞鳳殿・伊達政宗の墓とその遺品・遺物―キセルについて　瑞鳳殿再建期成会

板垣　剛夫（1973）：「古代」『宮崎町史』

板橋源・佐々木博康（1970）：岩手県北上市立花十三菩堤塚『北上市史』第２巻

岩手県教育委員会（1979）：「墳館遺跡」東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

岩手県教育委員会（1979）：「湯沢Ｂ遺跡」東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

氏家　和典（1967）：「陸奥国分寺出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授還暦記念論文集刊行会

大阪文化財センター（1979）：「陶邑Ⅳ」『大阪府文化財調査報告書』第31号

大郷町教育委員会・大郷町古墳調査団（1968）：「宮城県黒川郡大郷町古墳発掘調査報告」

太田　昭夫（1979）：「中平遺跡」宮城県文化財発掘調査略報『宮城県文化財調査報告書』第57集　宮城県教育委員会

大場　盤雄（1971）：「神道－13塚富士塚など」新版考古学講座８

小川　淳一（1980）：「塩沢北遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会

加藤　　孝（1972）：『鳥矢崎古墳群発掘調査概報』温故７．東北学院大学考古学研究部

〃　　（1975）：『鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告書』温故９．東北学院大学考古学研究部

〃　　（1967）：「宮城県黒川郡大和町鳥屋遺跡調査報告」大和町教育委員会

〃　　（1978）：「菅谷道安寺横穴群」『利府町文化財調査報告書』第２集　利府町教育委員会

川崎　利夫（1976）：「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学会』

菊地啓治郎（1970）：「口内町宝積古墳群の調査」『北上市史』第２巻

（1977）：「梅ノ木古墓群」「福田蝦夷塚」『和賀町史』岩手県和賀町

興野義一・遠藤智一（1970）：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』下巻

清水東四郎（1972）：「黒川郡誌」再版　黒川郡教育委員会

黒川　利司（1980）：「持長地遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会

斎藤　　忠（1978）：「墳墓」『日本史小百科』

坂詰　秀一（1980）：「図録歴史考古学の基礎知識」

桜井清彦・菊地啓治郎（1970）：「鬼柳町古墳群調査報告」『北上市史』第２巻

佐々木安彦（1980）：「葉坂戸ノ内遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ『宮城県文化財調査報告書』第65集　宮城県教育委員会

司東　真雄（1970）：「河野通信ヒジリ塚」『北上市史』第２巻

篠村　正雄（1980）：五輪堂遺跡発掘調査報告書　青森県埋蔵文化財調査報告書第60集

志間　泰治（1973）：「宮城町想海塚発掘報告」『宮城町文化財調査報告書』第１集

市立函館博物館（1973）：「函館志海苔古銭」

白石　竹雄（1975）：「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第３篇総括―２「塚」小考　千葉県企業庁

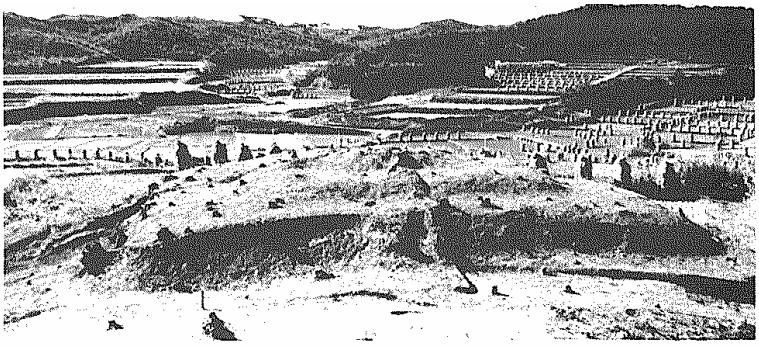
砂塚徳三・小崎浩・森田直（1977）：図鑑「鉄の古民芸」

高橋富雄監修（1975）：『大和町史』上・下

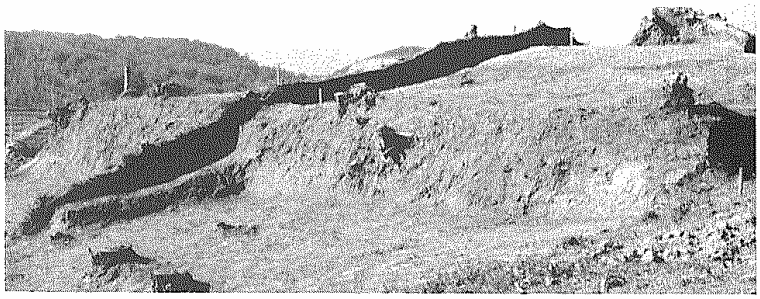
高橋　守克（1977）：「清水側遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第50集　宮城県教育委員会
手塚　　均（1980）：「佐野遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会
土岐山　武（1980）：「宮ノ脇遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会
福島県教育委員会（1980）：「十三塚群」母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅳ
藤沼　邦彦（1975）：「宮城県の経塚について」『東北歴史資料館研究紀要』１巻
堀　　一郎（1980）：「山岳信仰の原初形態」山岳宗教の成立と展開
真山悟・斎藤吉弘（1980）：「宮沢遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ『宮城県文化財調査報告書』第69集宮城県教育委員会
三上　次男（1972）：「有田天狗谷古窯」白川天狗谷古窯址発掘調査報告書
三崎　一夫（1973）：「小迫字高見山七ツ森（十三塚）発掘調査報告」『金成町史』第５篇　資料篇
〃　　（1975）：「岩手県の十三塚」『北上市史』
宮城県企画部土地対策課（1979）：「土地分類基本調査」吉岡　５万分の１
宮城県教育委員会（1976）：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集
〃　　（1973）：東北自動車道関係遺跡発掘調査略報（白石～仙台～大和町地区）『宮城県文化財調査報告書』第31集
〃　　（1977）：「横倉大久保遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第48集
宮城県史編纂室（1960）：「黒川郡北目大崎村風土記御用書出」「黒川郡北目大崎村玉昌寺書出」『宮城県史』24
水村　孝行（1979）：「児沢遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ―児沢・立野・大塚原
宮家　　準（1979）：「修験道―山伏の歴史と思想」『歴史新書』
森　　貢喜（1980）：「谷津川遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ　『宮城県文化財調査報告書』第62集宮城県教育委員会
〃　　（1980）：「権現山遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会
矢島　恭介（1976）：「修験道の用具について」『仏教考古学講座』第５巻　仏具Ⅲ特論
柳田　國男（1980）：「十三塚」定本『柳田國男集』
山口　和雄（1979）：「貨幣の語る日本の歴史」
遊佐　五郎（1979）：「沼崎山遺跡」『豊里町文化財調査報告書』第２集
〃　　（1980）：「宇南遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会
佐藤誠実編（1980）：「古事類苑―泉貨部」吉川弘文館
渡辺泰伸（1980）：「東北古墳時代須恵器の様相と編年」須恵器編年討論『考古学雑誌』65―４

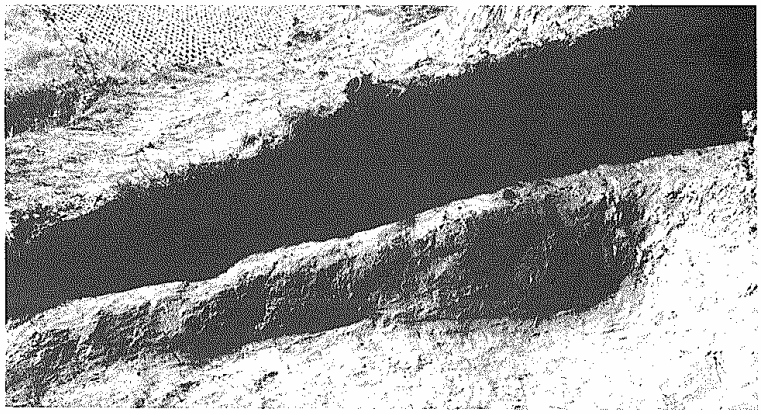
写　真　図　版

1号全景

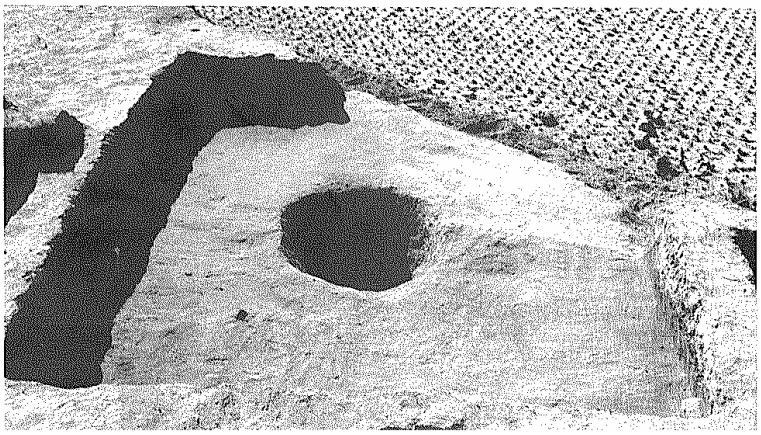


階段

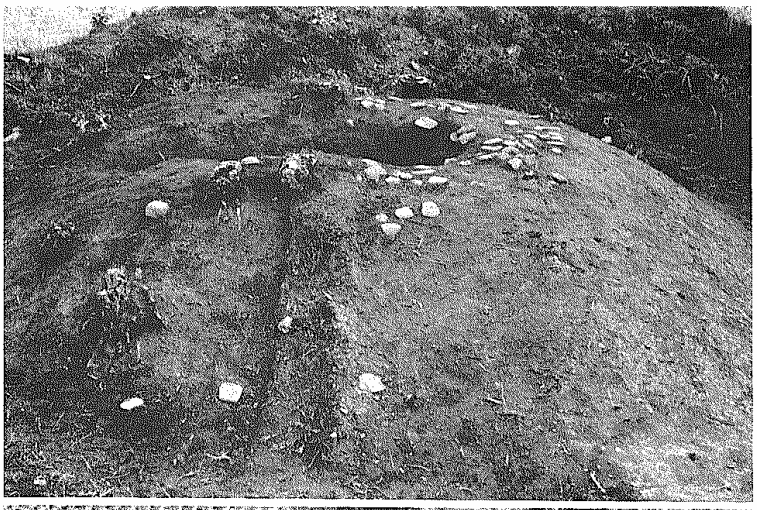




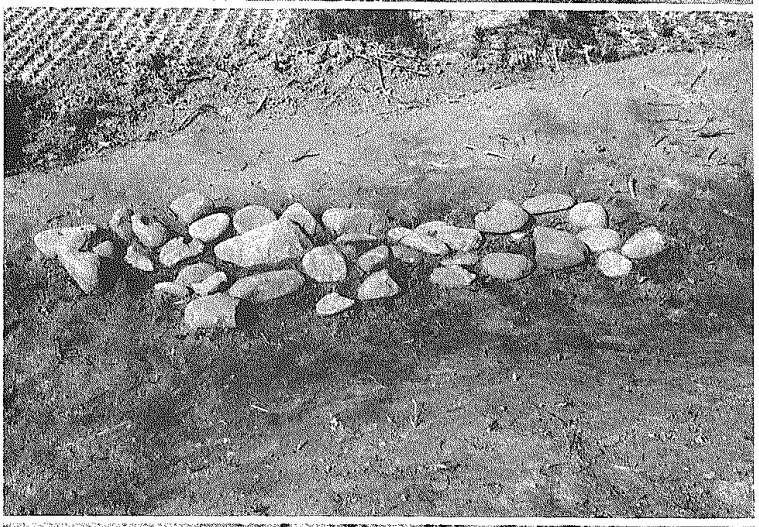
1号土壙



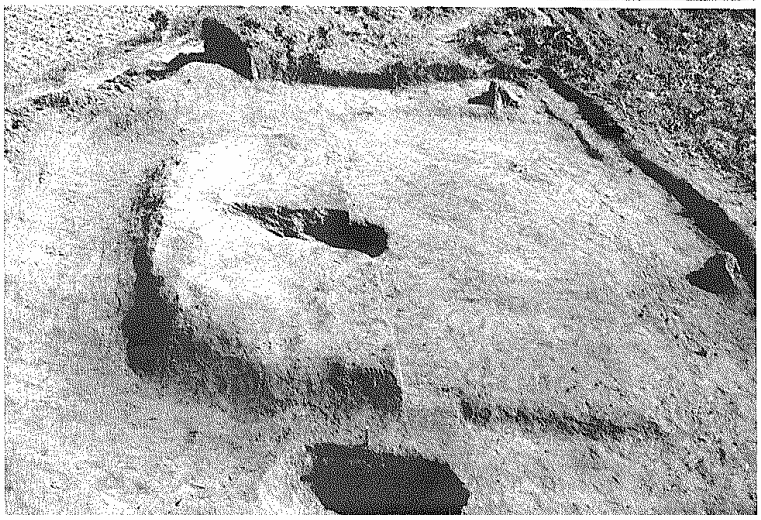
図版1



21号塚



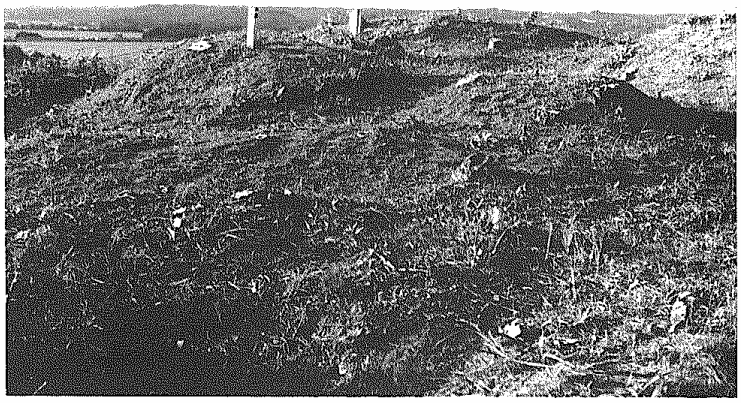
21号集石遺構



21号基底部

図版２

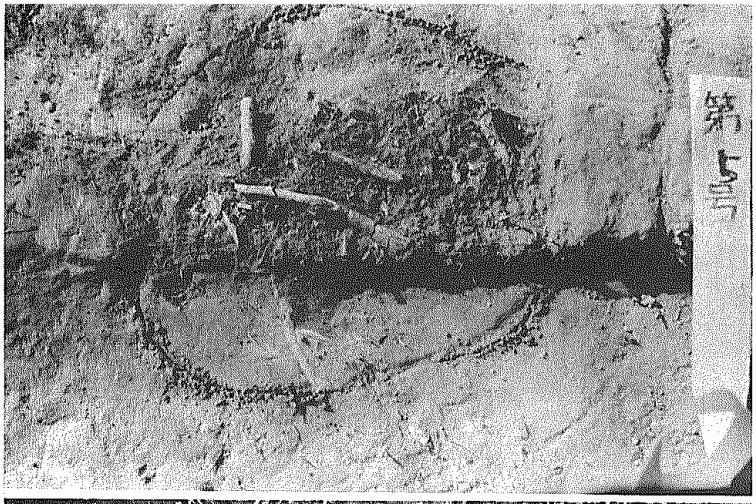
円形塚発掘前



2号火葬墓
(火葬骨埋葬状況)

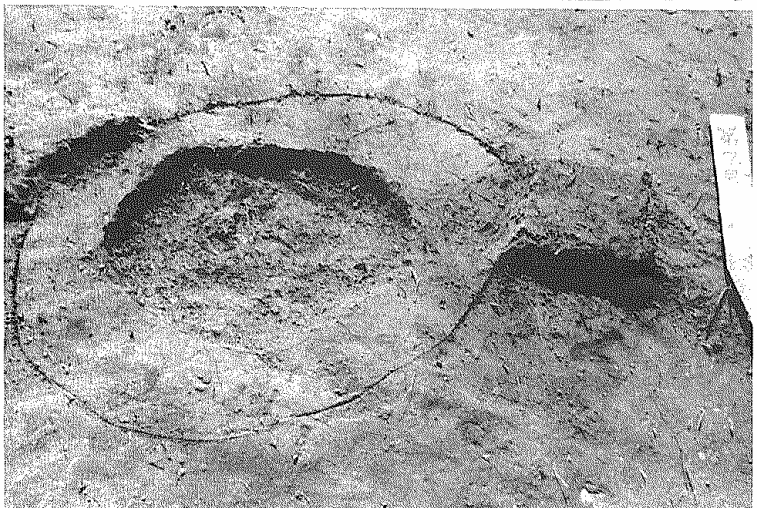
4号火葬墓
(火葬骨埋葬状況)

図版3



5号火葬墓
(火葬骨埋葬状況)

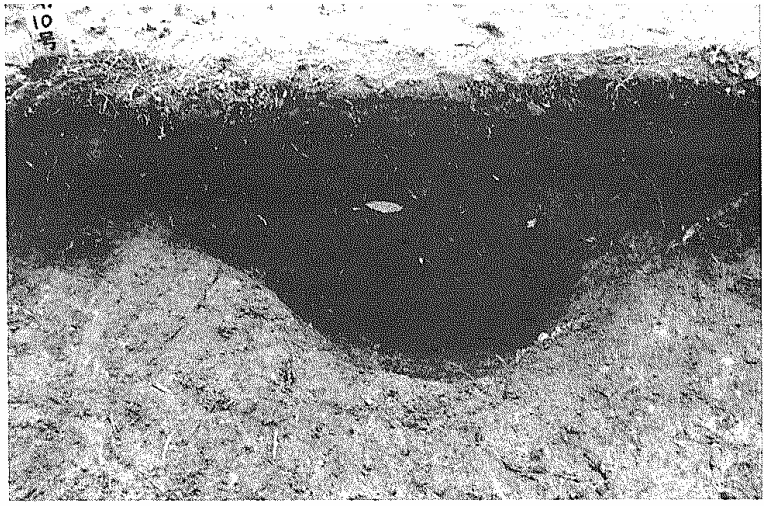
7号火葬墓
(火葬骨埋葬状況)



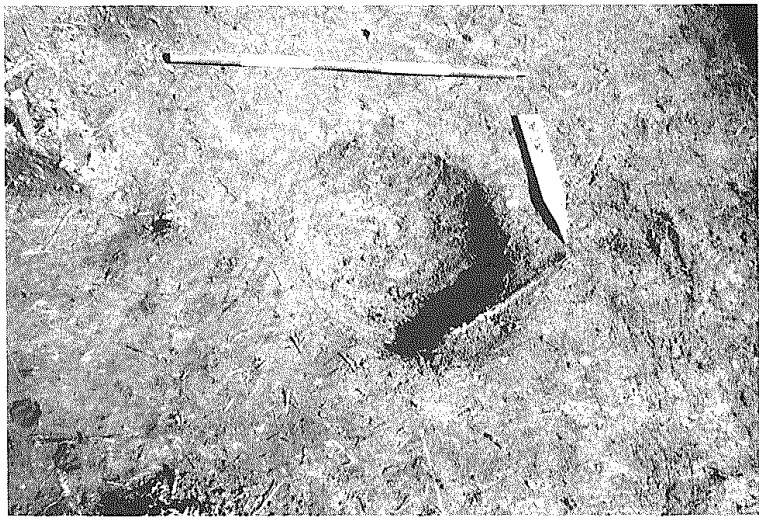
7号火葬墓
(土壙)

図版４

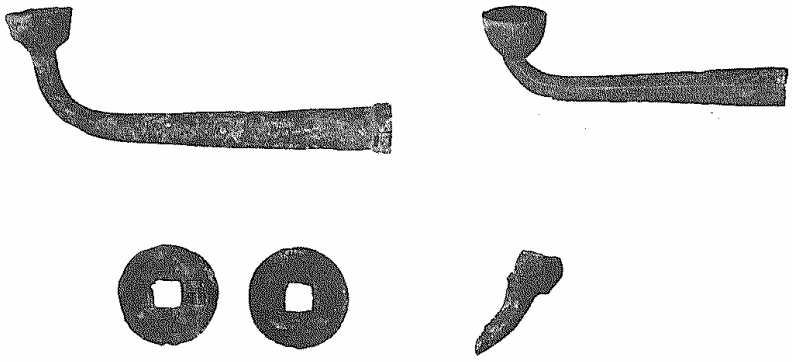
10号火葬墓



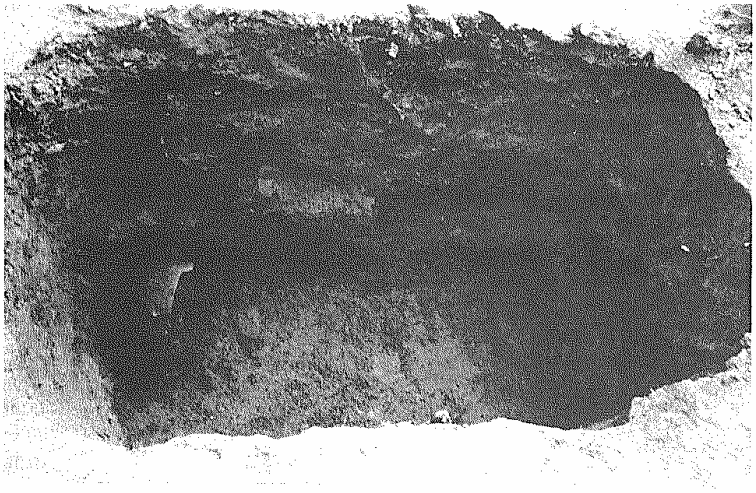
10号火葬墓
(土壙)



火葬墓
埋葬品

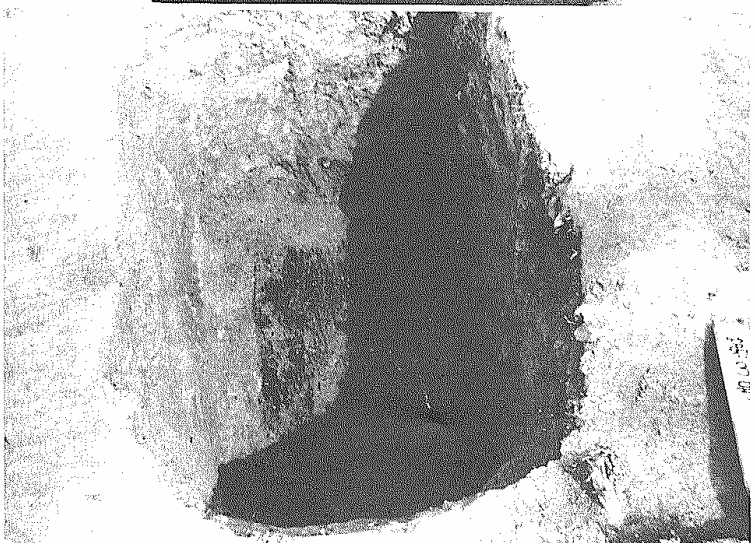


図版５



3号土壙埋葬品
(鉄鍋)

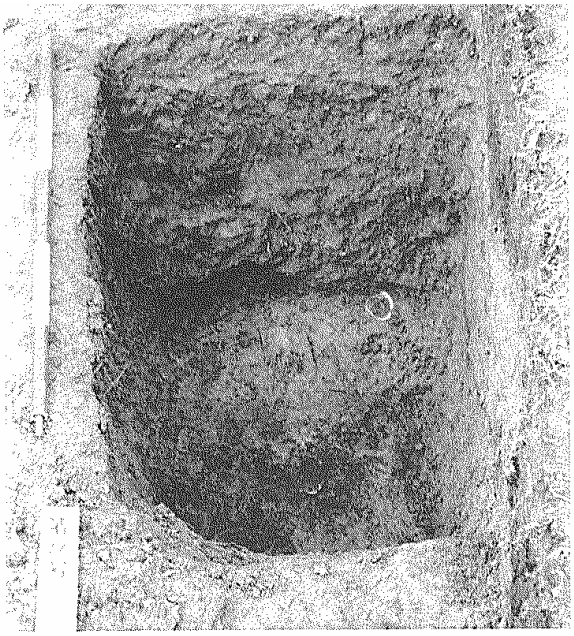
3号床埋葬品



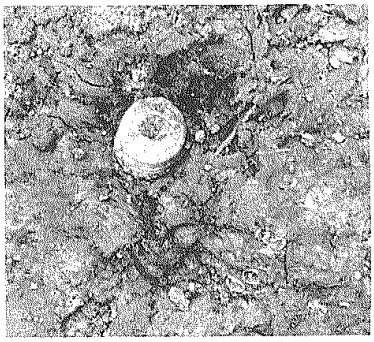
3号床（棺）

図版6

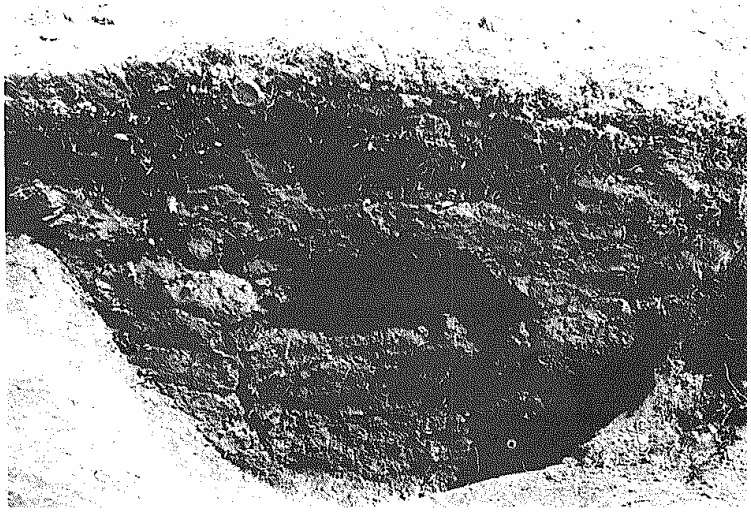
11号土壙



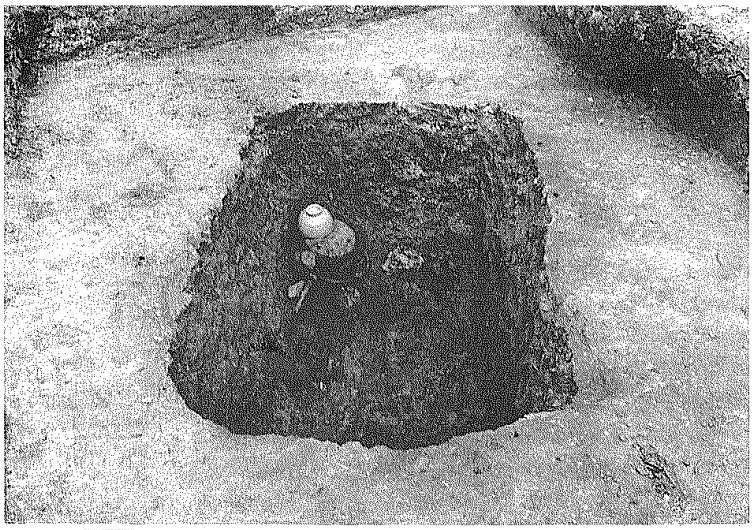
11号土壙埋葬品



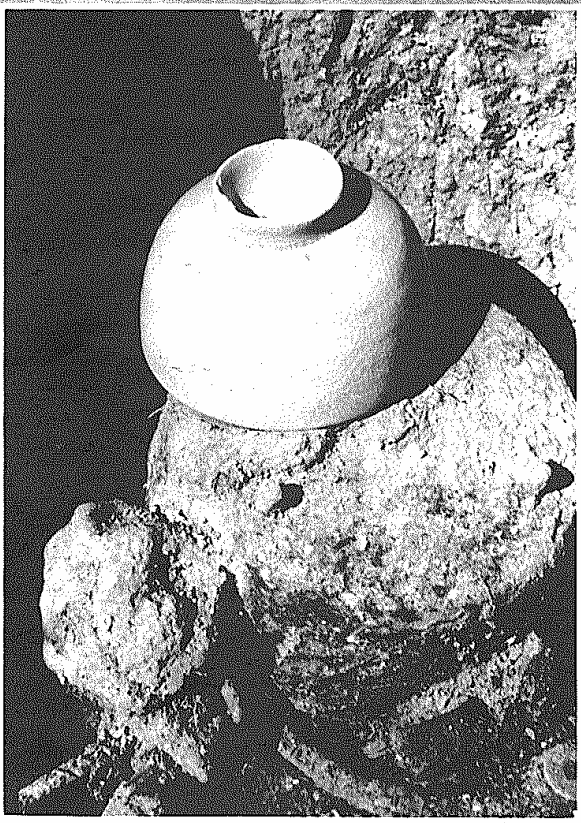
13号土壙断面



図版７



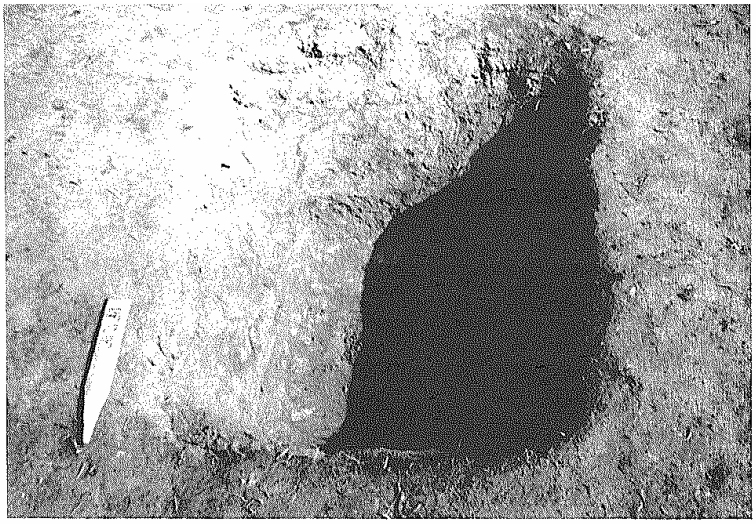
12号土壙



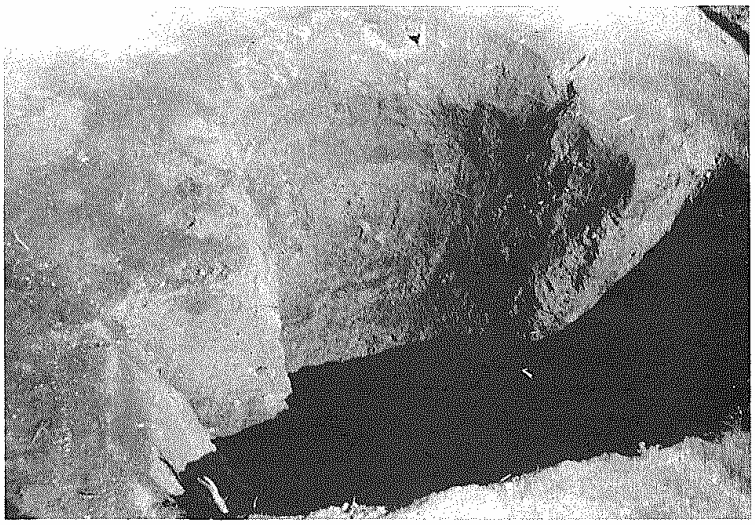
12号土壙埋葬品
(陶器・鉄鍋)

図版８

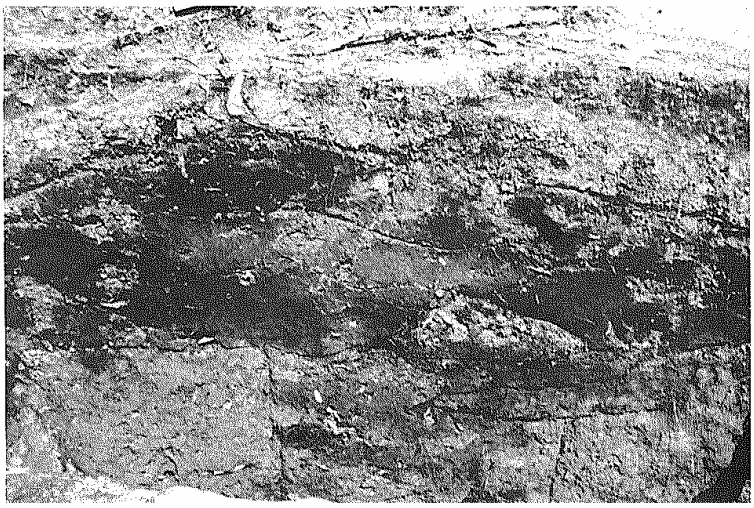
17号土壙



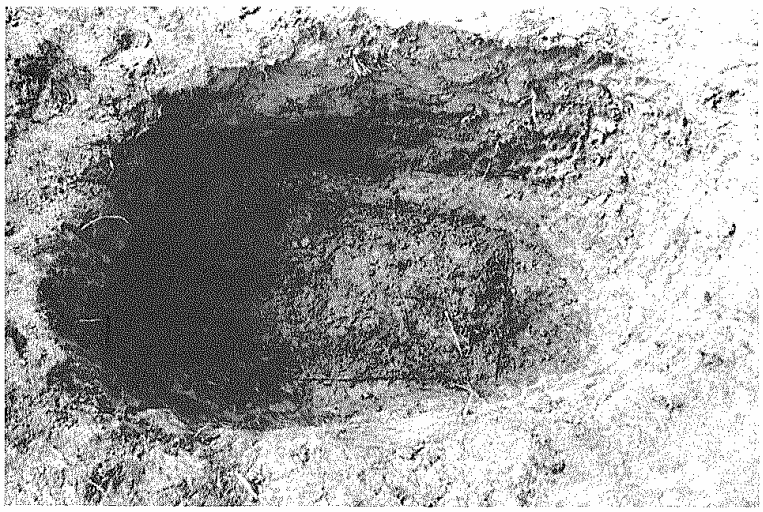
19号土壙



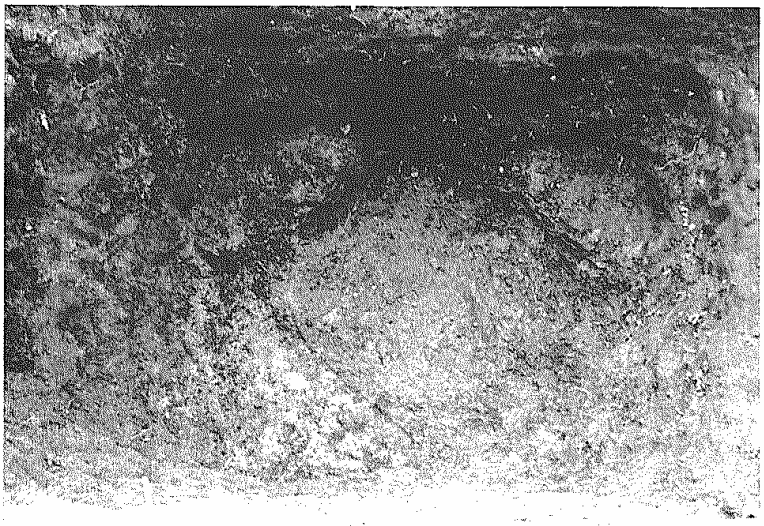
19号土壙埋土断面



図版９



23号土壙



22号土壙

土壙発掘後

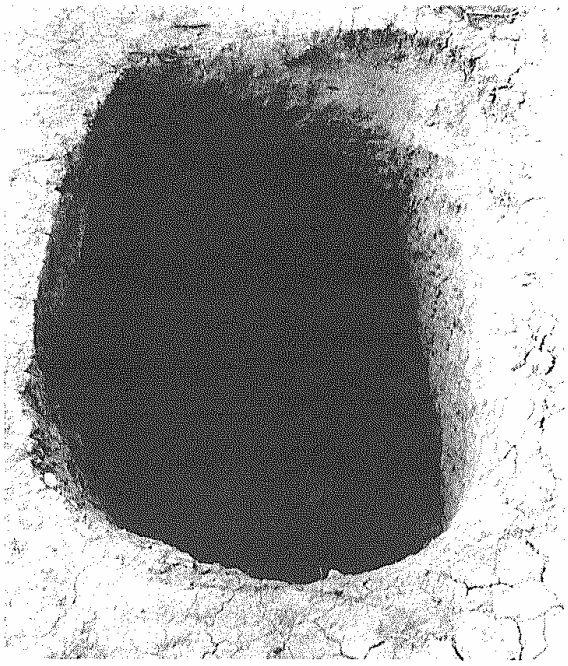
図版10

28号土壙

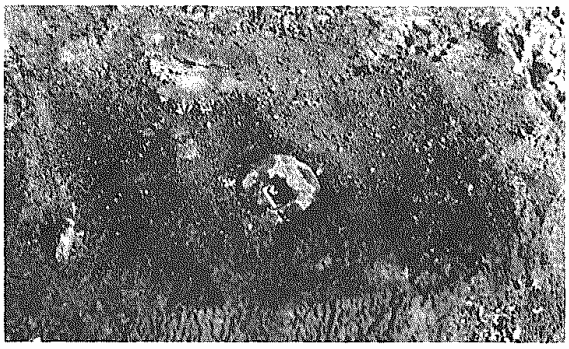
28号土壙副葬品

36号土壙

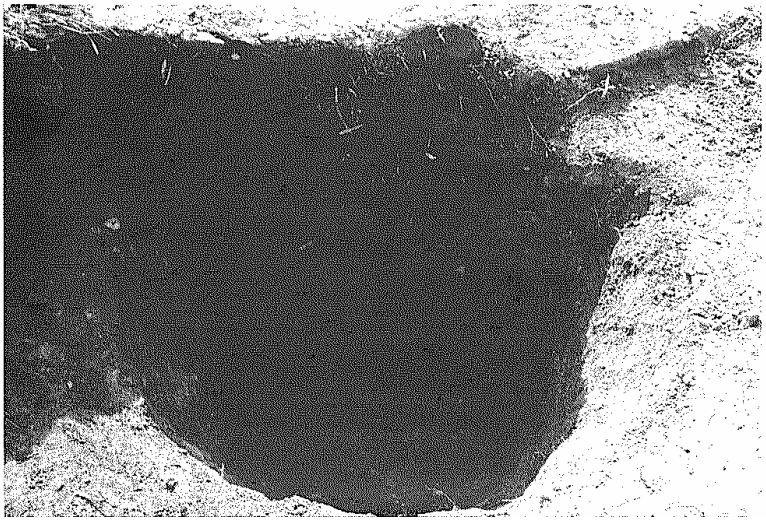
図版11



37号土壙



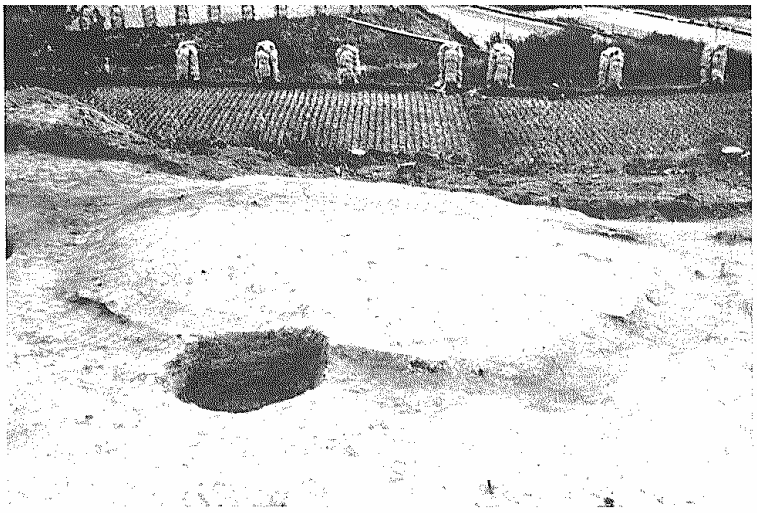
37号土壙
(副葬品)



38号土壙

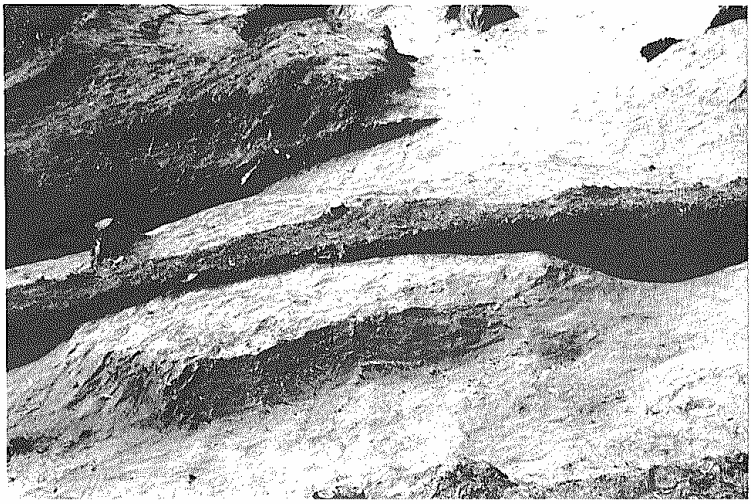
図版12

40号周溝

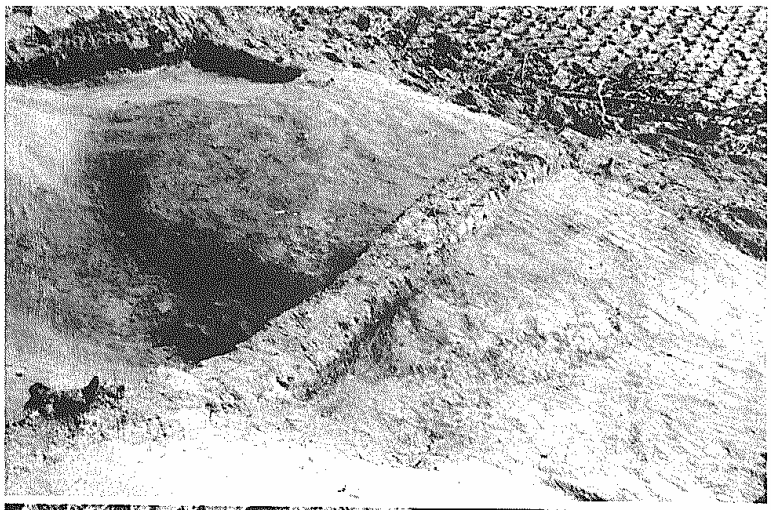


東斜面
（円形周溝・円形壇）

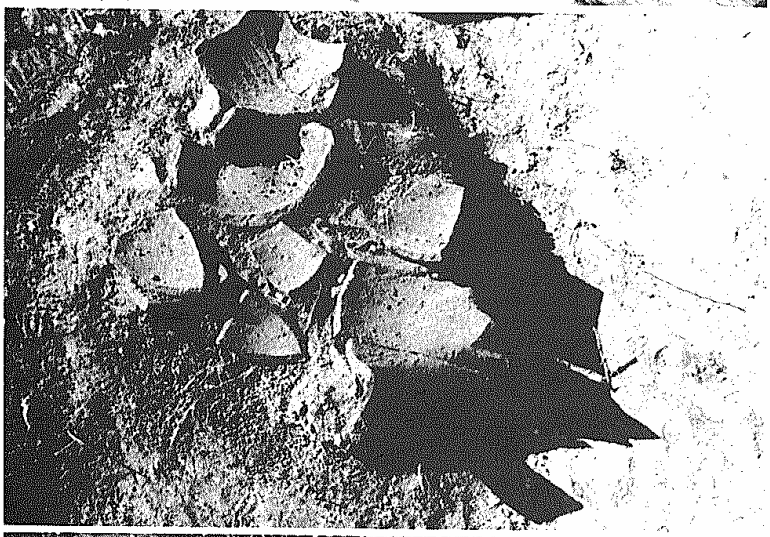
39号円形周溝



図版13



42号周溝

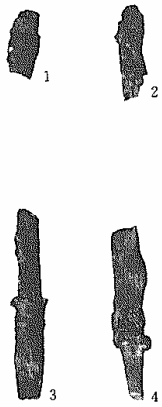


42号周溝
溝底面出土土器
(須恵器)

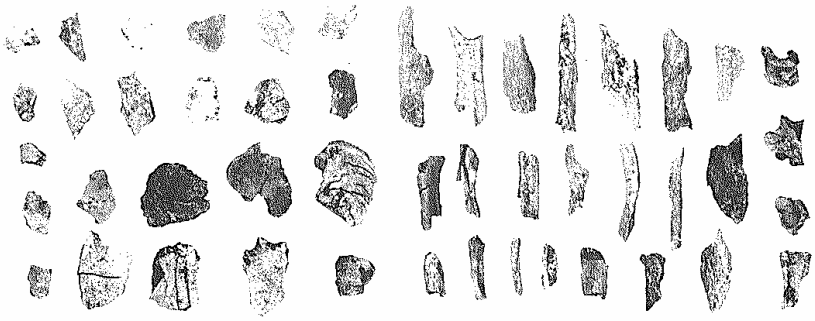
25号土壇

図版14

35号土壙(右)(馬葬墓)
36号土壙(左)

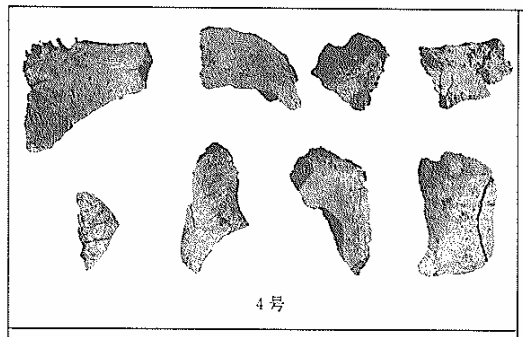


1～4　円形墳(24号)出土
5　円形周溝(42号)出土

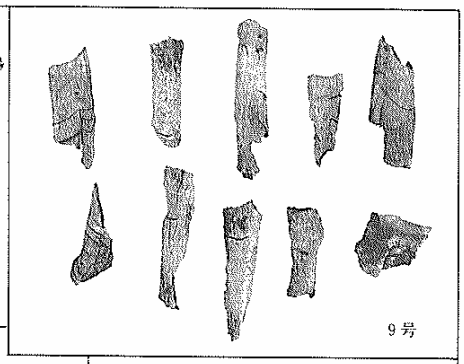


2号塚土壙埋葬火葬骨

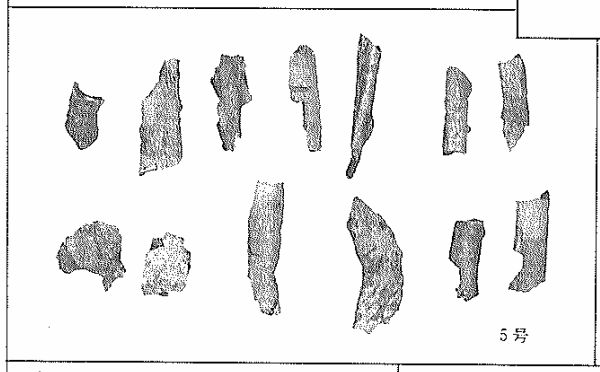
図版15



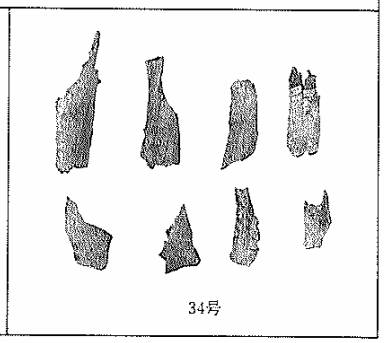
4号



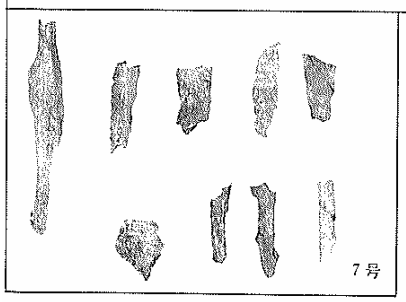
9号



5号

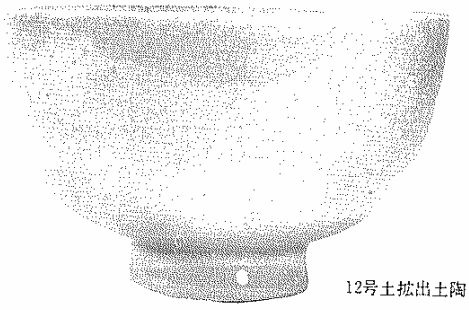


34号



7号

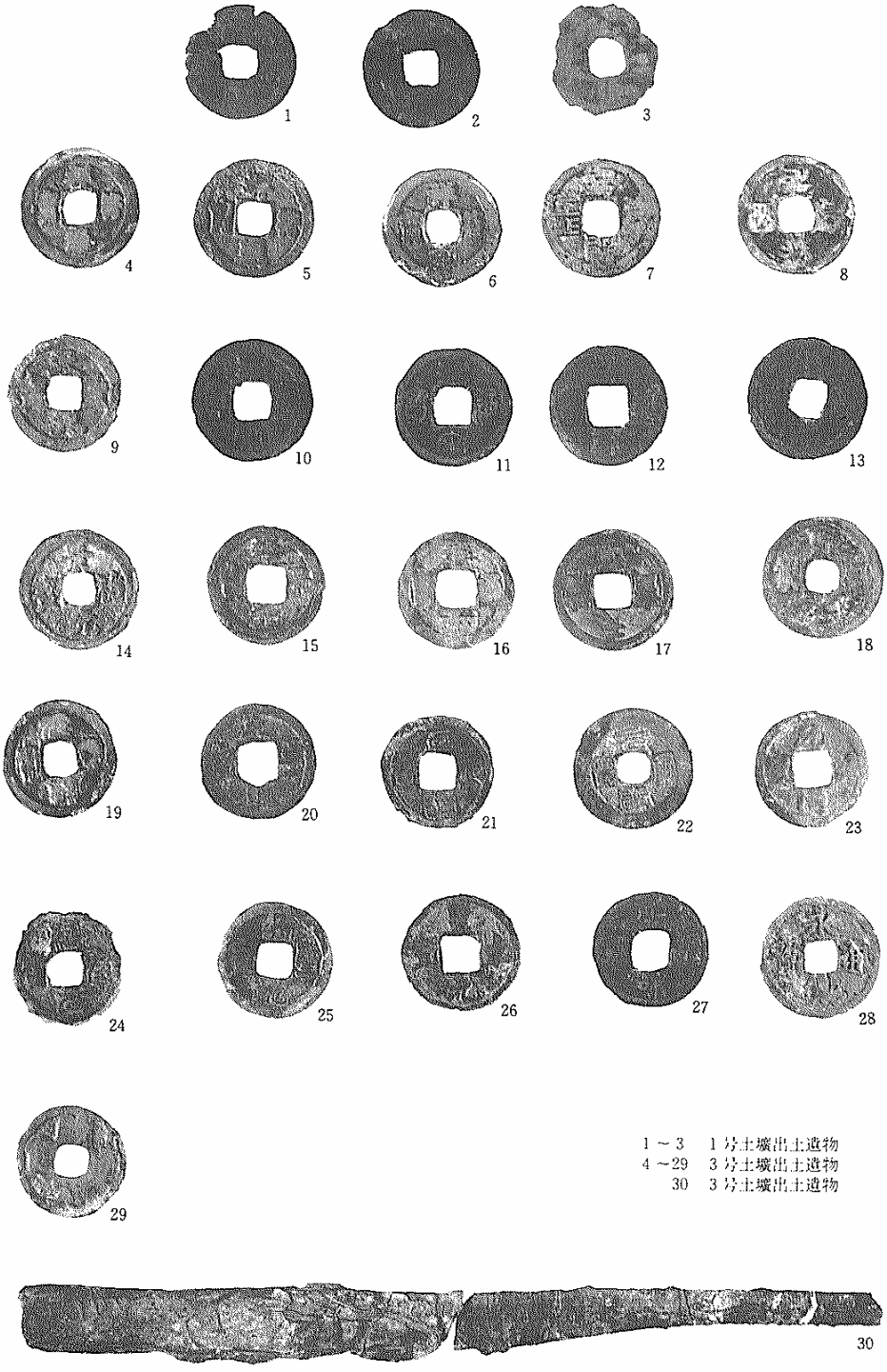
11号土拡出土磁器



12号土拡出土陶器

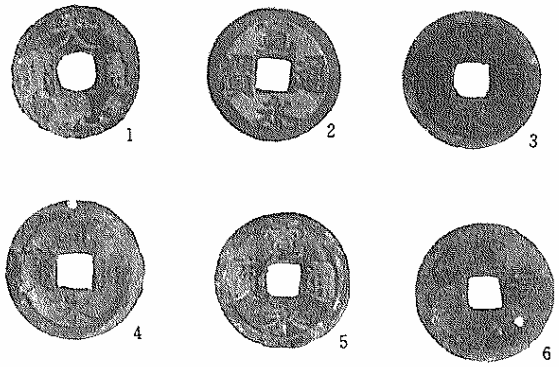
火葬墓・土葬墓の埋蔵品

図版16

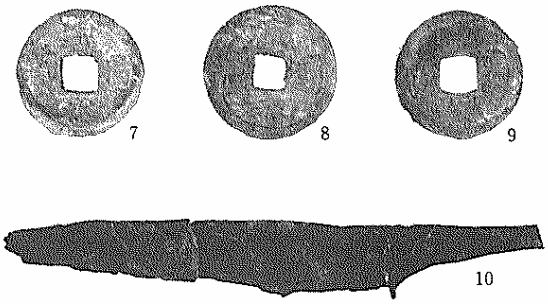


1～3　1号土壙出土遺物
4～29　3号土壙出土遺物
30　3号土壙出土遺物

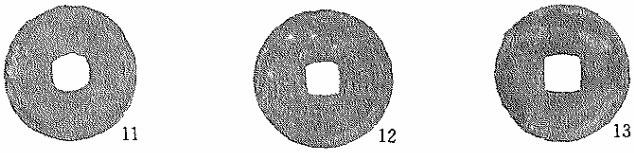
図版17



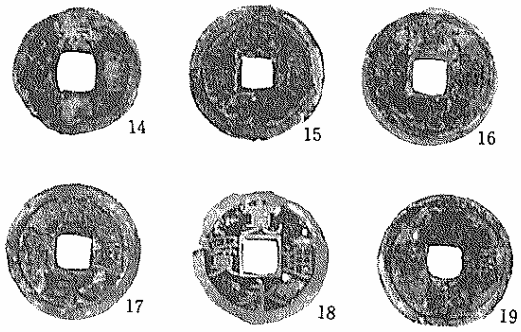
1～6　11号土壙出土遺物



7～10　12号土壙出土遺物

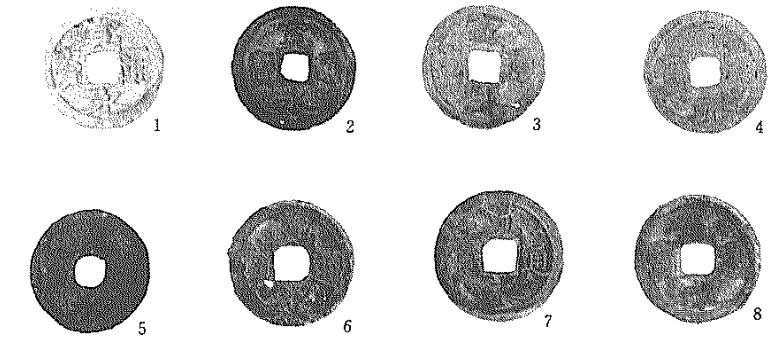


11～13　17号土壙出土遺物

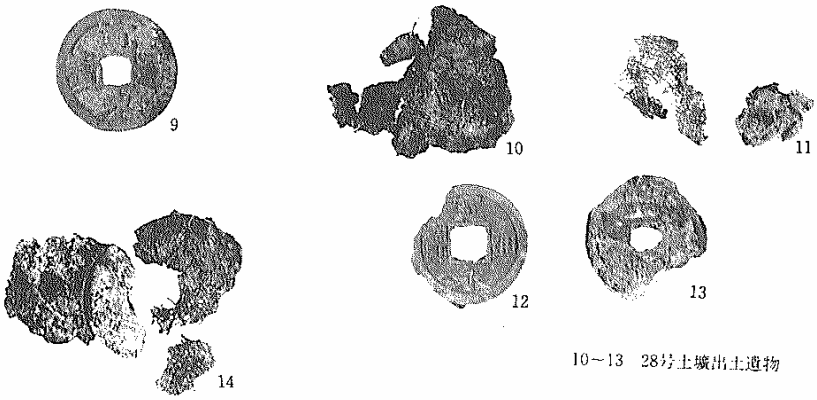


14～19　18号土壙出土遺物

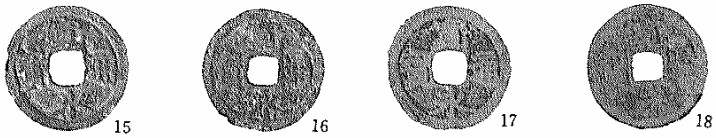
図版1



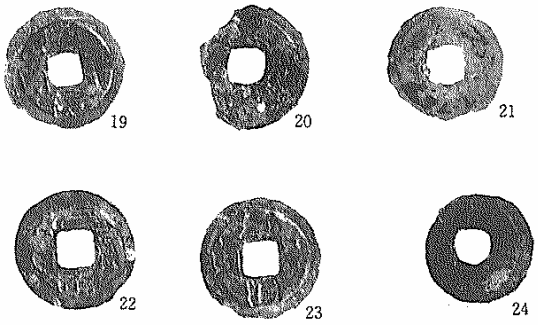
1～9　22号土壙出土遺物



10～13　28号土壙出土遺物



14～18　31号土壙出土遺物



19～24　37号土壙出土遺物

図版19